平成16年度　浪岡町文化財紀要Ⅴ

Ⅰ　浪岡町北中野地区上下水道敷設工事に伴う立ち会い調査報告書

Ⅱ　川原館遺跡発掘調査報告書

Ⅲ　吉内遺跡発掘調査報告書
　―県営本郷地区ふるさと農道緊急整備に係る緊急発掘調査報告―

Ⅳ　国史跡高屋敷館遺跡環境整備に係る発掘調査報告書

Ⅴ　平成16年度浪岡町文化財パトロール概報

Ⅵ　浪岡町指定文化財／浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書一覧

2005. 3. 31

浪岡町教育委員会

平成16年度　浪岡町文化財紀要Ⅴ

Ⅰ　浪岡町北中野地区上下水道敷設工事に伴う立ち会い調査報告書

Ⅱ　川原館遺跡発掘調査報告書

Ⅲ　吉内遺跡発掘調査報告書
　―県営本郷地区ふるさと農道緊急整備に係る緊急発掘調査報告―

Ⅳ　国史跡高屋敷館遺跡環境整備に係る発掘調査報告書

Ⅴ　平成16年度浪岡町文化財パトロール概報

Ⅵ　浪岡町指定文化財／浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書一覧

2005. 3. 31

浪岡町教育委員会

吉内遺跡　SI-03出土　銅製品

発刊にあたって

本年度浪岡町内において浪岡町教育委員会が実施した発掘調査箇所は、川原館遺跡・吉内遺跡・高屋敷館遺跡であり、平成１５年度冬には浪岡町北中野地区において上下水道敷設工事に伴う立ち会い調査を行いました。

本紀要では、これらの調査報告の他、平成８年度に行った高屋敷館遺跡の調査報告書を掲載し、併せて平成１６年度における文化財パトロールと浪岡町指定文化財の一覧及びこれまでの浪岡町教育委員会刊行の発掘調査報告書一覧をまとめ、年度内の成果として公表いたします。

今年度の発掘調査では、吉内遺跡から鐔と思われる銅製品が出土し、話題となりました。この銅製品は、この地域で生産されたものではなく、近畿などの他地域から持ち込まれたものと推測されるようです。当時、浪岡は「日本」にまだ属さない地であり、その中にあった吉内遺跡という平凡と思われる遺跡でも、北や南からの人や文物が盛んに出入りしていたであろうことがうかがえます。私達の住んでいる土地は、現在以上に自由な、中央の政権に左右されない、独自の価値観と地域概念を持った地域であったのかもしれません。

市町村合併に係る全国的な動向の中で、浪岡町も紆余曲折を経て、平成１７年４月１日をもってひとまず県都青森市と合併することになりました。

現代の市町村合併の動きは、生活・気候・文化・経済など数百年に渡って築き上げてきた、地域における総合的なアイデンティティーによる市町村境界の変更ではなく、財政難から近隣の市町村ととりあえず合併し、行政の効率化と財源の確保を図ろうとするものです。

現在の行政サービスや生活水準を維持することを目標とすれば、それらを一概に否定することはできません。しかし、1,000年以上昔の平安時代前葉の遺跡を調査し、スケールの大きな成果に出会うと、現代の行政や生活が即物的なものに見えてしまいます。あたかも子供の遊びである「陣取り」と大差がない、勝ち負けを競うような合併に思われてなりません。せめて、文化財、文化、そして教育に関しては行政区画という縄張りを超えて、もっと広い視野から地域を見つめ、理解することが必要ではないでしょうか。

1,000年前にはなかった「市町村」という小さな縄張りを越えて、人々が協力し、交流することで再びスケールの大きな活気のある地域を新たに築き上げたいものです。

今後も史跡の環境整備や公有化をはじめとし、諸発掘調査、文化財の保護・保存などを進めてまいる所存です。関係各位に於かれましては、旧に倍しての御力添えをお願い申し上げます。

最後に、ご指導・ご協力を賜りました皆様に記して感謝の意を表するものであります。

平成１７年３月３１日

浪岡町教育委員会
教育委員長　鎌　田　慎　也

例　　言

1　本紀要は、平成16年度に浪岡町教育委員会が実施した文化財関係事業に係る報告である。

2　北中野地区上下水道工事事業については、周知の埋蔵文化財包蔵地に含まれない部分のため工事立ち会いとした。

3　本書の構成は下記のとおりであり、それぞれの編集及び主な執筆担当を（　）内に記した。

Ⅰ　浪岡町北中野地区上下水道敷設工事に伴う立ち会い調査報告書（木村浩一・竹ヶ原亜希）

Ⅱ　川原館遺跡発掘調査報告書（木村浩一・竹ヶ原亜希）

Ⅲ　吉内遺跡発掘調査報告書
　—県営本郷地区ふるさと農道緊急整備に係る緊急発掘調査報告—（木村浩一・竹ヶ原亜希）

Ⅳ　国史跡高屋敷館遺跡環境整備に係る発掘調査報告書（木村浩一・竹ヶ原亜希）

Ⅴ　平成16年度浪岡町文化財パトロール概報（竹ヶ原亜希）

Ⅵ　浪岡町指定文化財／浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書一覧（木村浩一・竹ヶ原亜希）

4　図版・写真・表などの番号は、各報告で独立しているため、全体としての統一は図らなかった。

5　遺物番号は図版・写真で個体ごとに同一の番号を付し、文中では（　）内に示した。

6　基本層序及び検出遺構の土層観察表は、各報告ごとに章末に一括して示した。

7　報告書の作成にあたり、次の方々からのご指導を賜わった。（敬称略・順不同）
　村越潔・藤沼邦彦・関根達人・三宅徹也・時枝務・久保智康・工藤竹久・佐々木浩一・畠山昇・笹森一朗・山田雄正・高橋與右衛門・八重樫忠郎・伊藤博幸・山田晃弘・津野仁

8　図版で使用したスクリーントーンの表示は、次のとおりである。

凡　例

（遺跡関係）

焼土範囲　　ローム塊

（遺物関係）

火襷痕　　内面黒色処理　　赤色顔料の付着

ウルシの付着　　（石の）自然面

目　　次

発刊にあたって

例言・目次

Ⅰ　浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書　第12集

平成15年度　浪岡町北中野地区上下水道敷設工事に伴う立ち会い調査報告書

第１章　調査にいたる経緯 …… 2

第２章　調査経過 …… 4

第３章　検出遺構と出土遺物 …… 6

第４章　まとめ（発掘調査抄録） …… 7

Ⅱ　浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書　第13集

平成16年度 川原館遺跡発掘調査報告書

第１章　調査にいたる経緯 …… 12

第２章　調査経過 …… 14

第３章　検出遺構 …… 15

第４章　出土遺物 …… 19

第５章　まとめ（発掘調査抄録） …… 21

Ⅲ　浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書　第14集

平成16年度 吉内遺跡発掘調査報告書

―県営本郷地区ふるさと農道緊急整備に係る緊急発掘調査報告―

第１章　調査にいたる経緯 …… 32

第２章　調査経過 …… 35

第３章　検出遺構 …… 38

第４章　出土遺物 …… 82

第５章　浪岡町吉内遺跡出土銅製品の成分分析調査－蛍光Ｘ線分析－ …… 91

第６章　まとめ（発掘調査抄録） …… 93

Ⅳ　国史跡高屋敷館遺跡環境整備に係る発掘調査報告書

１）平成８年度　調査報告

第１章　調査にいたる経緯 …… 141

第２章　調査経過 …… 142

第３章　検出遺構 …… 143

第４章　出土遺物 …… 146

第５章　まとめ（発掘調査抄録） …… 148

２）平成１６年度　調査報告

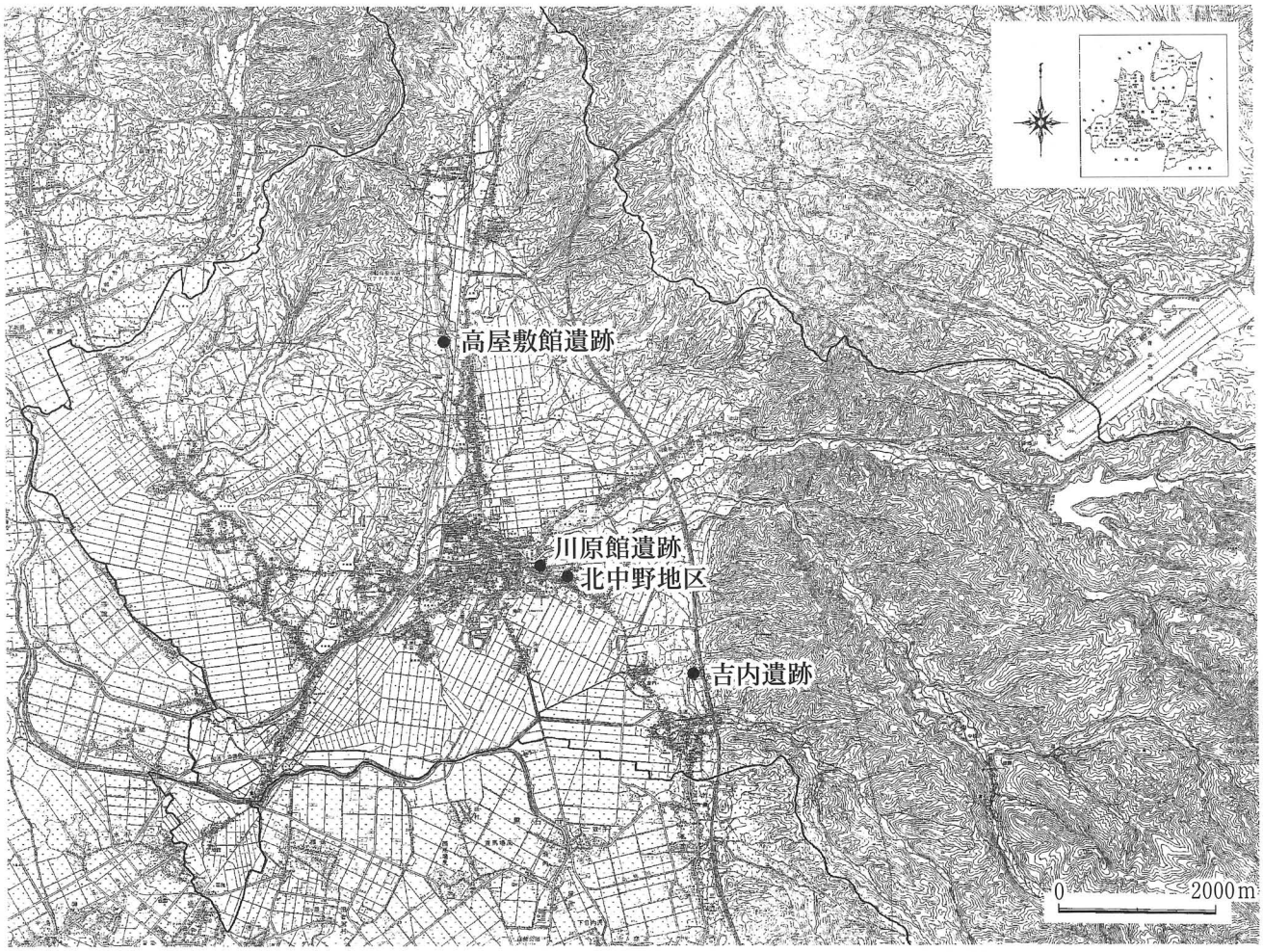
第１章　調査にいたる経緯 …… 155

第２章　調査経過 …… 156
第３章　検出遺構 …… 158
第４章　出土遺物 …… 160
第５章　遺構保護・保存整備 …… 163
第６章　まとめ（発掘調査抄録） …… 164

Ⅴ　平成16年度浪岡町文化財パトロール概報
１）調査経過 …… 174
２）パトロールを行った遺跡 …… 174

Ⅵ　浪岡町指定文化財／浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書一覧
１）今年度指定文化財の登録を受けた文化財 …… 180
２）浪岡町指定文化財一覧 …… 181
３）史跡調査及び環境整備に関わる報告書一覧 …… 184
４）浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書一覧 …… 184

本紀要掲載調査地位置図



Ⅰ　浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書　第12集

平成15年度　浪岡町北中野地区上下水道敷設工事に伴う立ち会い調査報告書

第１章　調査にいたる経緯

近年、浪岡町では下水道及び農村集落排水整備事業により、道路敷きを中心に全町に及ぶ開発の手が入っている。今回、北中野地区で下水道整備事業に着手することとなった。北中野地区は周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されていないが、近世からの町並みであるため立ち会い調査を行うこととした。なお、工事が複数業者による4箇所同時期着工であったため、同地区内を巡回する形として立ち会い調査を行った。このため、工事が行われた全ての箇所を確認することはできなかった。

検出できた遺構は立会い調査全体で4基となった。ただし、全体をとおして狭窄且つ冬季の滑りやすい現場であったこと、雪で掘削状況が見えないため遺構確認がしにくかったこと、と悪条件が重なった中での立ち会い調査となったため、遺構も部分のみの検出となり、正確な位置や規模が把握できなかった。このため、遺構種類については推定の域を出ない。今回報告の遺構名は仮称としての報告であることを付け加えておく。

以下、調査要項参照。

平成15年度　上下水道敷設工事に伴う立ち会い調査要項

浪岡町教育委員会生涯学習課

１．調査の目的及び経緯

北中野地区は、近世初期段階（17世紀）で「四日町」と呼称され、隣接の川原館遺跡（川原御所）とともに、16世紀段階では浪岡城の城下であったことが考慮される地区である。今回は、上下水道整備工事に際してその集落の概要を確認することを目的とする。しかし、工事箇所は当時から道であったと考えられるため、遺構がどの程度検出できるかは不明である。

２．調査地及び所有者

調査地は全て町道であり、浪岡町の管理となっている。調査対象地区は図Ｉ－１参照。

３．調査面積等

工事延長約1500mを対象とする。

４．調査期間等予定

立　会　い　調　査　　平成16年1月16日　～　平成16年2月　2日

整理・報告書作成作業　　平成16年2月　3日　～　平成17年3月31日

５．調査体制

浪岡町教育委員会　　生涯学習課　文化班

課　　長　　常　田　典　昭

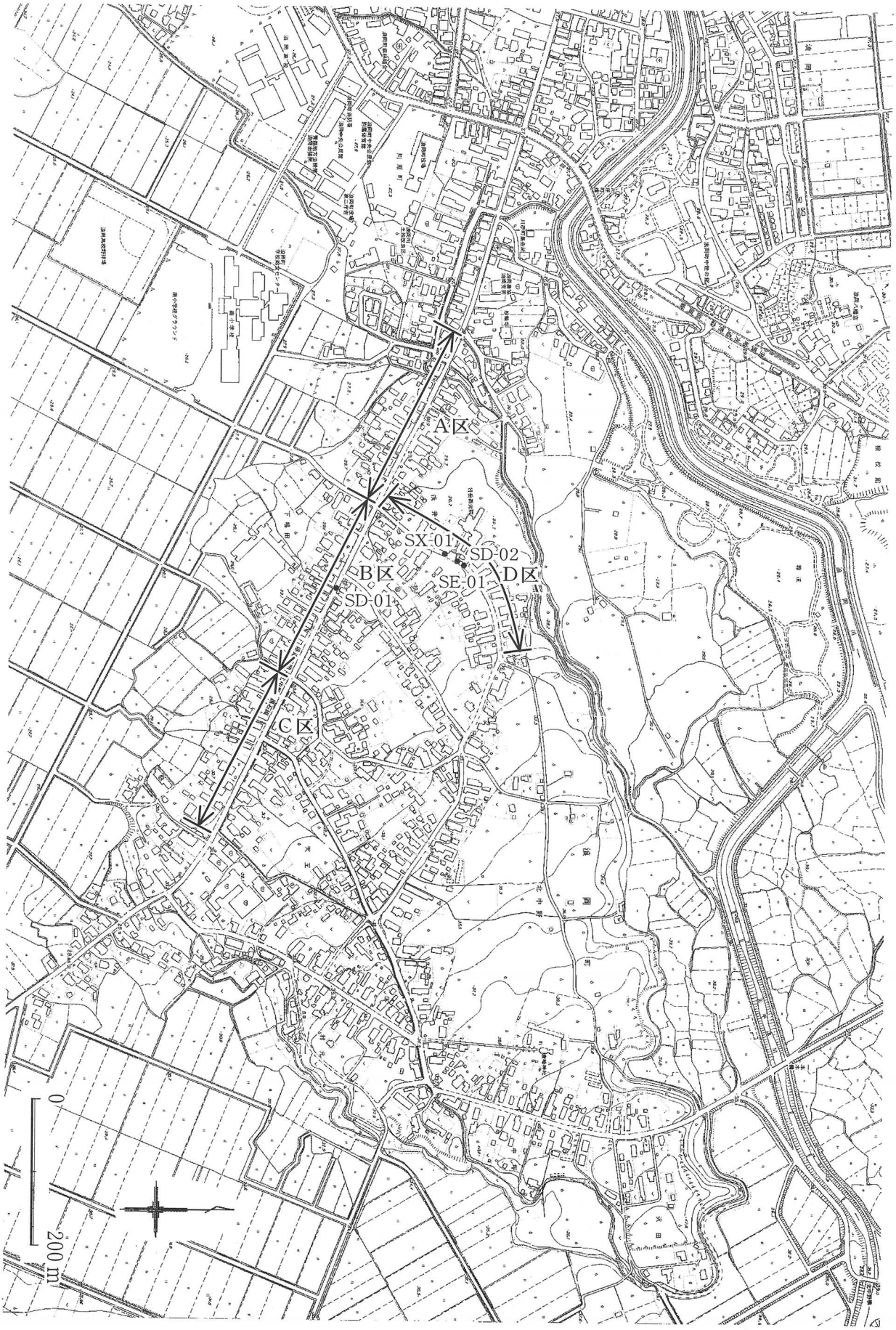
課　長　補　佐　　鎌　田　　廣

文　化　班　長　　工　藤　清　泰（平成16年6月30日迄）

主　任　主　査　　小田桐　勝　昭（平成15年度）

主　任　主　査　　田　澤　哲　郎

図Ⅰ-1　北中野地区立ち会い調査対象地区位置図



主　任　主　査　　木　村　浩　一（立ち会い調査担当）
臨時発掘調査員　　竹ヶ原　亜　希（立ち会い調査担当）
調 査 補 助 員　　斎　藤　とも子

6．調査方法

調査は立会いとし、遺構及び遺物の検出に努める。

1）事故等の危険を防止するために、測量（実測）は可能な範囲とし、写真等による記録や確認を主体とする。

2）遺構略称は、従来までの調査と整合性を持たせるため、独立行政法人国立奈良文化財研究所方式を採用する。

例）　掘立柱建物跡・SB、溝跡・SD

3）遺物略称は、従来までの調査と整合性を持たせるため、浪岡城跡発掘調査方式をとる。

例）　土器・P、鉄製品・F

7．調査報告書の作成

調査結果については、浪岡町文化財紀要Ⅴの中に「平成15年度浪岡町北中野地区上下水道敷設工事に伴う立会い調査報告書」として掲載・刊行することで、成果を公表する。

第2章　調査経過（発掘調査日誌から抜粋。検出遺構位置は図Ⅰ－1、写真図版Ⅰ－1参照。）

1月16日　本日から現場立会いを行う。4現場併行のため、以下、現場ごとにA～D区として報告する。

B区）地表下120cmから湧水。地表下50cmに栗石を使った道路工事の痕跡が見られるが、水が湧くためか作業は遅く遺構が観察できない。

D区）西光院前では舗装・砕石が薄く、砕石下部に栗石が見られるため、栗石下の黒色土の広がり（SX-01）を当初遺構ではないかと期待したが、現代の水道管敷設工事痕跡よりも新しいため、現代の工事痕跡であると判断した。地表下60cm覆土から肥前系陶器片採取、地表下180cmから湧水。崩落もあり、大変危険である。

1月17日

B区）砕石下に黒色粘性土が40～60cmほどの厚さで堆積する。湧水量は減らないため、遺構観察が難しい。栗石はいつの時代のものか判断できない。

D区）湧水が著しく工区の壁が崩れる。B区同様黒色粘性土が見られるが、現代陶器が混入するため、遺構観察は慎重に行う必要があると思われる。

1月19日

C区）試掘。地表下50cmから湧水。腐敗臭が著しい。遺構確認できない。

B区）地表下40~70cmは栗石層、地表70cm以下は灰色粘性土を薄い板状に含む褐色土層が広がり、地表下110cmからは砂質地山層となる。栗石層の下は脆弱で、しまり弱く危険。

1月20日

B区）南東に進むにつれて、砕石、もしくは栗石下の黒色粘性土が薄くなるようだ。

C区）鉄分が強く沈着する層が地表下30cmから広がる。B区で検出した黒色粘性土が地表下60～100cmの厚さで堆積する。この土は波状に堆積する。

1月21日

B区）北中野公民館入り口の道路付近まで掘削。黒色土層が更に薄くなる。

1月22日

C区）黒色土層は厚さ10cmほどと極めて薄くなる。湧水は比較的多量。

B区）起点付近は、地表下70～140cmまで黒色土層が堆積する。本地点から公民館へ曲がる角に至る間に黒色土は地表下60～80cmと薄くなり、そのままC区へ続くようだ。

D区）西光院前から4m東へ進んだ地点から幅7m弱の溝（SD-02）検出。埋土は黒褐色土で地表下70～200cmと比較的規模が大きい。しかし、底面付近から被熱痕跡のある材、廃土から現代陶磁器片を採取。近・現代の工事痕跡であろうか。

1月23日

B区）道路際で栗石が20cmほどの厚さに敷き詰められる。旧道路痕跡の可能性も想定。

C区）砕石下の黒色土は厚さ10～15cmと薄くなる。遺構・遺物ともに確認できない。

1月24日

B区）北中野公民館入り口付近については、黒色土が薄く、遺構・遺物ともに見られない。

C区）黒色土は薄く厚さ10cm前後となる。湧水多くなる。

D区）西光院前で黒色土がやや厚く20～30cm厚となるが、遺構・遺物ともに見られない。黒色土と砕石層の間にビニール紐が見られる。栗石が殆ど見られなくなったため、現代の道路工事時に部分的に栗石層の下まで深く掘削している可能性がある。

1月27日

A区）B区側から作業開始。砕石下には厚さ50cmほどに黒色土が堆積し、その下にはグライ化した砂層が広がる。沢目の可能性を考慮。

B区）工区を横断している沢目を確認。地表下40～140cmまでは確認できた。その直下はグライ化した砂層となる。

D区）西光院前から南東へ34m進んだ地点で井戸跡（SE-01）検出。土師器甕口縁部片などを採取。SEの上部については工事により残存レベルを確認することができなかった。

1月28日

A区）起点から若干進む。地山砂層から湧水。

B区）道路を横断する断面V字の溝（SD-01）を確認。

1月30日

A区）黒色土は60～70cmほどの厚さで堆積する。遺構なし。

B区）南側で地表下150cmから灰白色シルト質細砂層が広がる。湧水量増。

C区）南側で黒色土は厚さ10cmほどと薄くなり、若干の高低差もしくは削平到達レベルの差を持ちつつ堆積する状況がわかる。

D区）現代陶磁器片が黒褐色土中から出土した。黒色粘性土は現代と判断できそうだ。

2月2日　各区とも主だった掘削を終了し、埋め戻し・舗装準備に入る。遺構確認を終了する。

第3章　検出遺構と出土遺物

1）検出遺構　（図Ⅰ－2、写真Ⅰ－2）

SE（井戸跡）1基、SD（溝跡）2条、性格不明遺構（SX）1基を確認した。

SE-01　D区西光院前にて検出した。発見時には既に掘削され、下水管埋設後だった。調査区の南北壁にかかり、直径120～150cmほどと思われる。地表下200cmまでは確認できたが底面は確認できなかった。黒色土に、焼土と直径0.5～3cmほどの炭化物を10％含む。直径2cm程度の小礫を3％含む。遺物は全て土師器片で、地表下180cmほどのレベルから一括して検出された。土師器甕（1・2）を図示した。

SD-01　B区にて検出した。南北幅90cm（工区幅）、東西幅160cm、地表下50~210cmにわたって検出。断面はV字形を呈する。埋土は黒色土主体（工事の関係上、精査不能）であった。

SD-02　D区西光院前にて検出。東西幅700cm、南北幅90cm（工区幅）、地表下70~200cmにわたって検出した。断面台形状を呈し、埋土は黒褐色土主体である。底面付近から被熱痕跡のある新しい材を検出した。また、廃土より現代磁器片を採取した。近・現代の土木事業の痕跡であろうか。

SX-01　D区西光院前にて検出。東西幅90（工区幅）～800cm、地表下40~80cmほどにわたる黒褐色土の広がり。現代の水道工事より新しいため、現代の工事痕跡等に伴う土と認識した。覆土より肥前系陶器壷胴部片（写真Ⅰ－3）を検出した。

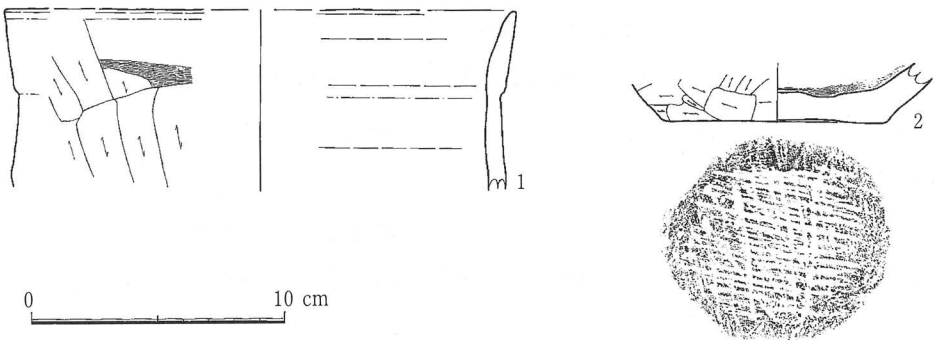
2）出土遺物（図Ⅰ－3、写真Ⅰ－3）

土師器　SE-01から甕の破片を9点取り上げた。図化したものは口縁部・底部破片各1点である。

比較的焼成が良好な土師器が多い。炭化物の付着している破片も出土している。口縁部片（1）は焼成が良く、直立ぎみに立ち上がり、外面に縦方向のヘラ削り痕跡を留めるものである。破片のため口径等は不明であるが、形態からは11世紀に位置する甕と思われる。底部片（2）は網代痕跡が明瞭に観察されるもので、底径8.8cmを測る。外面はヘラ削りによる調整が認められる。

陶磁器　SX-01から出土した肥前系と思われる陶磁器破片（3）は、染付の壷等の胴部片と思われる。呉須により青色の回線が1条巡るものであるが、破片資料であり全体形や法量は判断できない。

図Ⅰ-2　北中野地区立ち会い調査出土遺物



第4章　まとめ

今回の立ち会い調査では、D区内西光院前で井戸跡が1基検出された。その他、溝跡状の遺構が数条観察された。これは、SDとして報告したB区の沢目に沿った断面（SD-01）及びD区の西光院周辺の溝状断面（SD-02）などがあげられる。水利・排水・区画目的かなどの用途及び時期は不明である。各地区での遺構及び層序の時期判断がつかないのは、過去の道路等の工事によるものかは不明であるが、層の堆積関係が地区により全て異なるためである。

また、遺構の検出が殆どできなかった理由として、工事時期及び工事場所の条件が余り良くないため立会時の観察が難航したことと、絵図に残された町並みを示す痕跡が残らないほど過去に削平・造成を繰り返したためと思われる。道路敷設工事等によると思われる栗石や砂の層などが、かなりの深さまで検出されたことからその感を強めた。

平成13年度に試掘調査を行った川原館遺跡も土地利用による削平等が著しく、古代の遺構（溝跡等）が若干残る程度であった。長期間の同一箇所の利用が遺構に及ぼす影響を考えざるを得ない状況であった。

現在の北中野地区で古代から近世にかけてと思われる遺構が確認されるであろうこと。及び同地区に連綿として集落がある可能性が考慮されることは判明したが、明確な時期・規模や分布範囲等については今回の立ち会い調査からはわからなかった。

そのため、遺跡の範囲を特定する要因に乏しく、新しく遺跡を登録するまでには至れない状況である。今後、さらなる調査が行われ、遺跡の規模や性格を特定できるような成果が得られることがあれば、周知の埋蔵文化財包蔵地として遺跡登録を行うこととするが、現段階ではそれらを判断することは難しいと思われる。

発 掘 調 査 抄 録

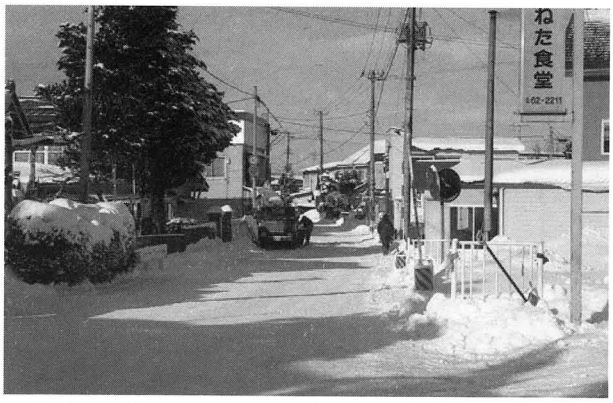
ふりがな	へいせい１６ねんど　なみおかまちぶんかざいきよう　5
書名	平成16年度　浪岡町文化財紀要　V
副書名	北中野地区上下水道敷設工事に伴なう立ち会い調査報告書
巻次	V
シリーズ名	浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書
シリーズ番号	第12集
執筆者名	木村浩一・竹ヶ原亜希
編集機関	浪岡町教育委員会
所在地	038 - 1311　青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稲村101 - 1 TEL　0172 - 62 - 3004
発行年月日	2005年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号					
	浪岡町大字北中野	29		40°42′41″	140°36′08″	約1,500㎡	H16.1.16～H16.2.2	上下水道敷設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
			井戸跡・溝跡	土師器、その他 計　テンバコ約１箱	

写真Ⅰ-1　北中野地区

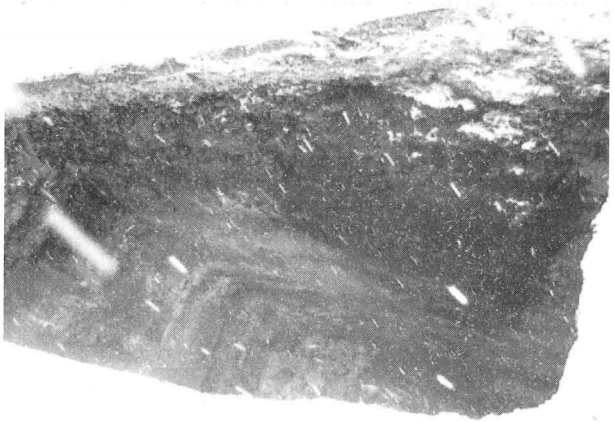
北中野地区航空写真



A区調査前

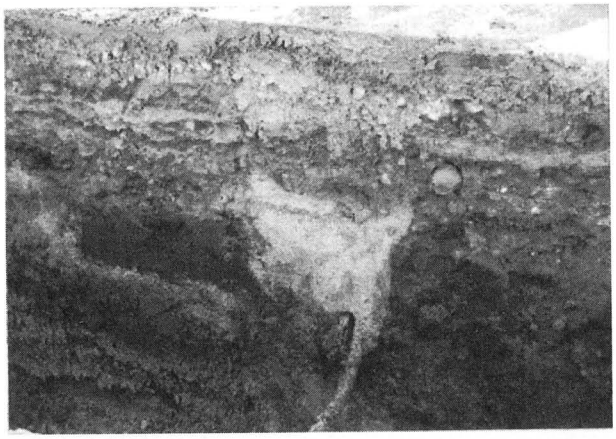
SE-01　確認状況

SD-01　確認状況



SD-02　確認状況

写真Ⅰ-2　北中野地区



SX-03　確認状況

出土遺物　外面

出土遺物　内面

Ⅱ　浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書　第13集

平成16年度 川原館遺跡発掘調査報告書

第1章　調査にいたる経緯

平成16年6月6日、教育委員会生涯学習課に、地域住民から「JA浪岡農協旧浪岡支所敷地内（川原館遺跡）で工事が行われている。」と連絡が入り、教育委員会生涯学習課文化班の担当者が現場に急行した。遺構の一部が露出し、遺物が出土している状況を確認し、工事発注元の町建設課と工事を請け負った渡辺組の両者と協議を行った。その結果、工事を一時中止し、発掘調査を行うこととした。

なお、工事はグランドゴルフ場に行くための道路整備工事であり、町建設課では平成13年度に町教育委員会で行った試掘調査をもって遺跡内の調査が終了したと誤解したため、教育委員会との協議が不必要と判断したようである。町教育委員会では庁内での連絡・協議が疎であった事態を重視し、開発等に際して文化財保護担当課との協議を行うよう強く申し入れた。

届け出等及び調査体制を整え、下記調査要項に基づき調査を実施することとなった。

平成16年度　川原館（川原御所）発掘調査要項

浪岡町教育委員会生涯学習課

1　調査の目的と経緯

周囲の埋蔵文化財包蔵地である川原館遺跡（川原御所）については、国史跡浪岡城跡に関連する遺跡の中でも、浪岡城落城の契機となったとされる「川原御所の乱」に関連する遺跡として最も重要視される遺跡である。その中心となる部分に、浪岡農協旧浪岡支所があるが、今回、同所に道路設置計画がなされた。この場所は、明治時代には郡役所、その後も浪岡尋常小学、浪岡農協支所と、地域の中心として利用されている。

同支所地内については、平成13年度に町教育委員会が試掘調査を行い、平安時代を中心とした遺構・遺物を検出している（『浪岡町文化財紀要Ⅱ』）。

今回の調査区は、『浪岡町文化財紀要Ⅱ』中で報告したE区の西側に相当する部分で（図Ⅱ－4）、川原館遺跡全体から見ると、いわば第２次の発掘調査にあたる。平成13年度の第１次調査では中世城館としての遺構・遺物が確認できず、古代の集落的様相を呈していたことから、遺構の連続性・関連性、遺跡の土地利用経緯を捉え、中世の遺構・遺物の検出に努めることを目的とする。

2　調査地及び所有者（図Ⅱ-1・4）

調査地地番等　　南津軽郡浪岡町大字浪岡字浅井130の１

所　有　者　　浪岡町

3　調査面積　　約120㎡

4　調査期間等予定

準　備　作　業	平成１６年　６月　６日	～	平成１６年9月　６日
調　査　作　業	平成１６年　９月　７日	～	平成１６年９月１４日
整理・報告書作成作業	平成１６年１２月２０日	～	平成１７年３月３１日

図Ⅱ-1　川原館遺跡　位置図

5　調査体制

浪岡町教育委員会　生涯学習課　文化班

課　　長	常田　典昭
課長補佐	鎌田　廣
主任主査	田澤　哲郎
主任主査	木村　浩一（発掘調査担当）
臨時発掘調査員	竹ヶ原　亜希（発掘調査担当）
臨時調査補助員	斎藤　とも子（発掘調査担当）
調査作業員	藤本範子・吉川瑠枝・乗田キヨヱ・長谷川輝子・長谷川サチヱ・鎌田百合子 秋元正子・武田秀美・工藤美香・須藤千代

6　調査協力

株式会社　渡辺組

7　調査方法

・既に遺構が一部露出しているため、そのまま遺構の確認と遺物の検出に努める。

・測量（実測）は平板測量にて行う。

・遺構略称は、従来までの調査と整合性を持たせるため、独立行政法人奈良文化財研究所方式をとる。

例：掘立柱建物跡・SB、溝跡・SD

・遺物略称は、従来までの調査と整合性を持たせるため、浪岡城跡発掘調査方式をとる。

例：土器・P、鉄製品・F

・遺構については全て掘り下げを行い、遺物については全て取り上げるものとする。確認後は、平板実測及び写真撮影を行い記録の保存に努める。

8　調査報告書の作成

調査報告書は『浪岡町文化財紀要Ⅴ』の中に掲載し、成果を公表する。

第2章　調査経過（発掘調査日誌から）

6月6日　地域住民から川原館遺跡で掘削工事が行われ、遺構と遺物が見えている、との連絡があり、現場に急行する。遺構が数基確認され、遺物も平安時代～近代・現代のものまで幅広く採取できた。北東側道路側溝部分の堆積状況からは、道路に沿って見られる溝状の遺構は、古くとも昭和に入ってから造成されたものと確認（埋土よりビニル・ガラス・「浪岡城趾史蹟指定」銘のある小坏採取）。

6月7日　建設会社及び浪岡町庁内各担当と打ち合わせ。工事を中止し、事前に発掘調査を行うことで合議。

9月6日　発掘用具を現場隣接倉庫に移し、図面を揃えるなどして現場発掘に備える。内部での各種調整・現場での作業員の安全確保策を講じる。必要物品搬入。

9月7日　2001年度調査時の水準移動の成果を利用し、BM設定。東西壁精査・ジョレンがけ。遺構確認及び命名（SD-01～03、SX-01～03、Pit-01～18）。平板で遺構検出状況を平面実測し、遺構掘り下げ開始。ピ

ット半截。SD-01・02掘り下げ。SX-01にかかる攪乱除去。SX-02は西壁に沿ってトレンチを設定し、掘り下げ。SD-01遺物検出状況・SX-03層序写真撮影。

9月8日　Pit・SXの層序実測及び土層注記。SD-01・02、SX-02出土遺物はポイントを押さえて取り上げ。SD-02を壁沿いに掘り下げ、底面検出。SD-02内の攪乱土の下で検出した遺構（SX-05とする）から遺物を検出。SD-03をSX-04に名称変更。

9月9日　残りのPit半截。遺物はポイントを押さえて取り上げ、完掘、写真撮影を行う。SX-01完掘、層序図作成、写真撮影。SX-02遺物取り上げ。SX-03完掘・写真撮影・平面実測・レベル測量。SD-01・02完掘・実測。SD-02底面（SX-05）よりPit検出。遺物なし。SX-05内より須恵器甕胴部片検出。SX-05完掘。実測。

9月13日　東西壁層序実測を行う。SX-05掘り方除去。SD-02底面が一段東側に向かって下がることを確認した。

9月14日　現場最終日。東西壁土層注記。遺構完掘及び平面図作成。レベリング。全面精査実施。写真撮影。短期間の集中現場であったが、事故もなく無事に現場終了。

第３章　検出遺構

検出した遺構は、溝跡（SD）2条、性格不明遺構跡（SX）5基、ピット（Pit）18基である。過去の工事等によると思われる削平により確認時にはすでに遺構上部を削り取られていたため、遺構の規模については検出時点でのものとなる。

SD-01（図Ⅱ－2、表Ⅱ－2、写真Ⅱ－1）　中央部付近で検出した東西溝。確認面上端にて幅0.8m、底面幅0.4mであるが、層序の観察によると上端幅は1.3mはあったようだ。検出長1.6m、西側が調査区外に延びる。急激に底面が落ち込む。埋土8層。遺構の断面は箱薬研状を呈する。SD-02よりも新しいことから、SD-02の造り替えの可能性もある。出土遺物は土師器が主体で土師器甕底部（5）等が出土している。

SD-02（図Ⅱ－2、表Ⅱ－3、写真Ⅱ－1）　SD-01の北側に平行して検出した東西溝。断面は箱薬研状を呈し、確認面の上端にて幅1.32m、底面幅0.7m。検出長5.0mを計る。層序の観察によると、確認できた上端幅は2mを超えるものとなる。東西端が調査区外に伸び、底面中央部が一段高くなるが、形態から遺構としての目的は不明である。遺物は土師器・須恵器を中心に鉄製品など種々出土している(図Ⅱ－5)。SD-01、SX-05よりも古い。刀子2点（７・８）、底部に円孔のある土器底部（６）・土師器坏口縁部（３・４）を図に示した。その他、埋土からは内黒坏、縄文土器、土師器などが出土している。

Pit-01（図Ⅱ－5、表Ⅱ－4、写真Ⅱ－2）　西壁にて検出した。西側は調査区外。南北長28㎝、平面円形か。

Pit-02（図Ⅱ－5、表Ⅱ－5、写真Ⅱ－2）　平面形は長軸32㎝、短軸24㎝の長楕円形を呈する。北側に抜き取り痕状の段がつく。

Pit-03（図Ⅱ－5、表Ⅱ－6、写真Ⅱ－2）　平面は隅丸三角形を呈する。一辺18㎝。

Pit-04（図Ⅱ－5、表Ⅱ－7、写真Ⅱ－2）　平面は隅丸方形を呈する。一辺26㎝。

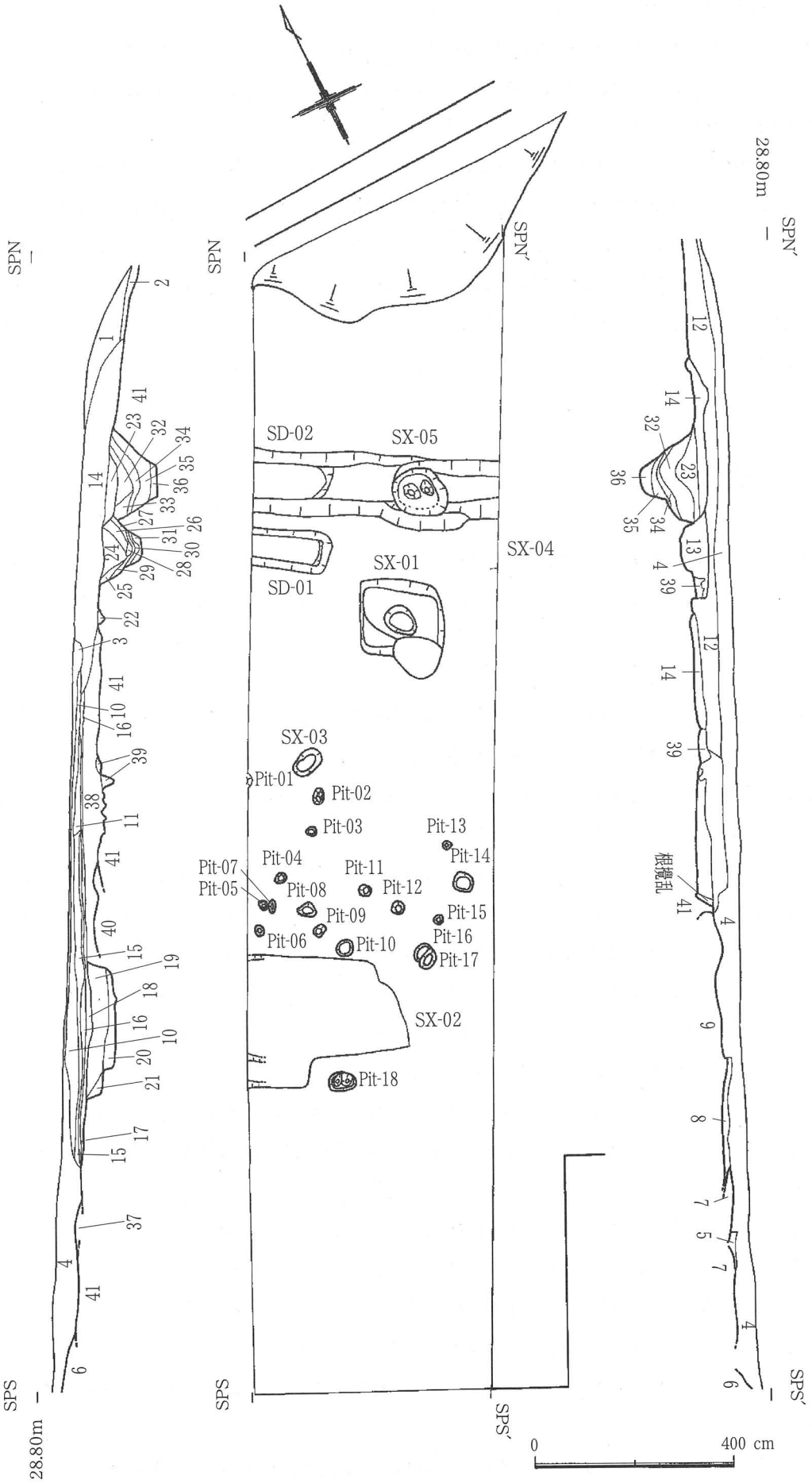
Pit-05（図Ⅱ－5、表Ⅱ－8、写真Ⅱ－3）　平面は楕円形を呈する。長軸26㎝、短軸14㎝。

Pit-06（図Ⅱ－5、表Ⅱ－9、写真Ⅱ－3）　平面は方形を呈する。一辺16㎝。

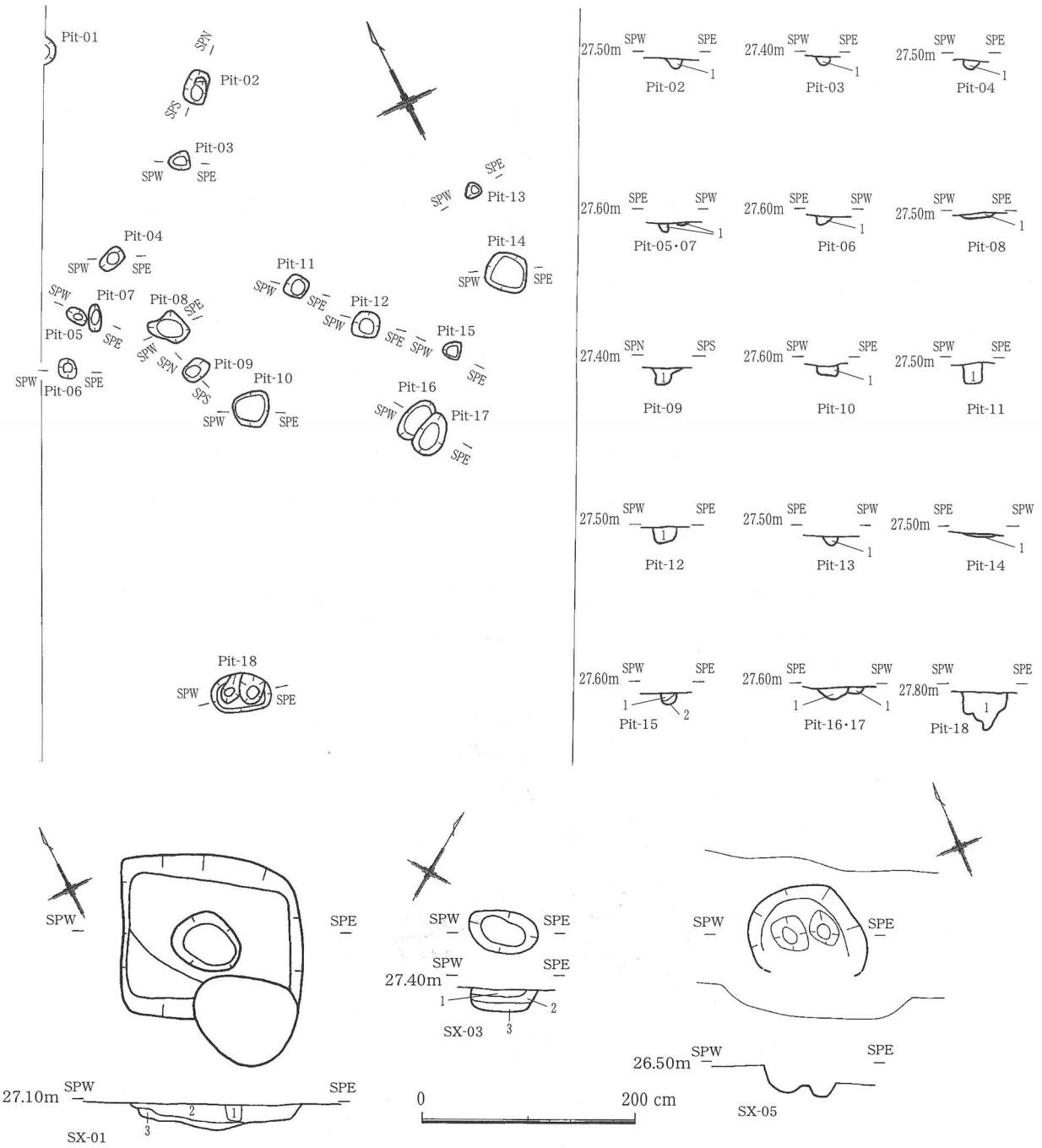
Pit-07（図Ⅱ－5、表Ⅱ－10、写真Ⅱ－3）　平面は長楕円形を呈する。長軸28㎝、短軸14㎝を計る。根攪乱の可能性がある。

Pit-08（図Ⅱ－5、表Ⅱ－11、写真Ⅱ－3）　平面は一辺40㎝、他辺28㎝の不整形を呈する。

図Ⅱ-2　川原館遺跡　調査区平面図



図Ⅱ-3　川原館遺跡　検出遺構平面図



Pit-09（図Ⅱ－5、表Ⅱ－12、写真Ⅱ－3）　平面は一辺26cm、他辺16cmの方形を呈する。

Pit-10（図Ⅱ－5、表Ⅱ－13、写真Ⅱ－3）　一辺34cmの方形を呈する。

Pit-11（図Ⅱ－5、表Ⅱ－14、写真Ⅱ－3）　一辺22cmの正方形を呈する。

Pit-12（図Ⅱ－5、表Ⅱ－15、写真Ⅱ－3）　一辺26cmの正方形を呈する。

Pit-13（図Ⅱ－5、表Ⅱ－16、写真Ⅱ－3）　一辺16cmの隅丸三角形を呈する。

Pit-14（図Ⅱ－5、表Ⅱ－17、写真Ⅱ－4）　一辺36cmの方形を呈する。

Pit-15（図Ⅱ－5、表Ⅱ－18、写真Ⅱ－4）　一辺18cmの隅丸三角形を呈する。

Pit-16（図Ⅱ－5、表Ⅱ－19、写真Ⅱ－4）　長軸42cm、短軸26cmの平面楕円形を呈する。Pit-17より新しい。

Pit-17（図Ⅱ－5、表Ⅱ－20、写真Ⅱ－4）　長軸42cm、短軸26cmの平面楕円形を呈する。Pit-16より古い。

Pit-18（図Ⅱ－5、表Ⅱ－21、写真Ⅱ－4）　平面形ほぼ四角形を呈する。SX-02よりも新しい。

SX-01（図Ⅱ－2・3、表Ⅱ－22、写真Ⅱ－1）　南側に現代の攪乱があり平面形が不整形を呈する。底面も不定であり、遺構そのものが重機による掘削・埋め戻しの痕跡である可能性が高いと思われる。埋土は3層。土師器、須恵器、硯（１０）、鉄製品（釘）を検出した。

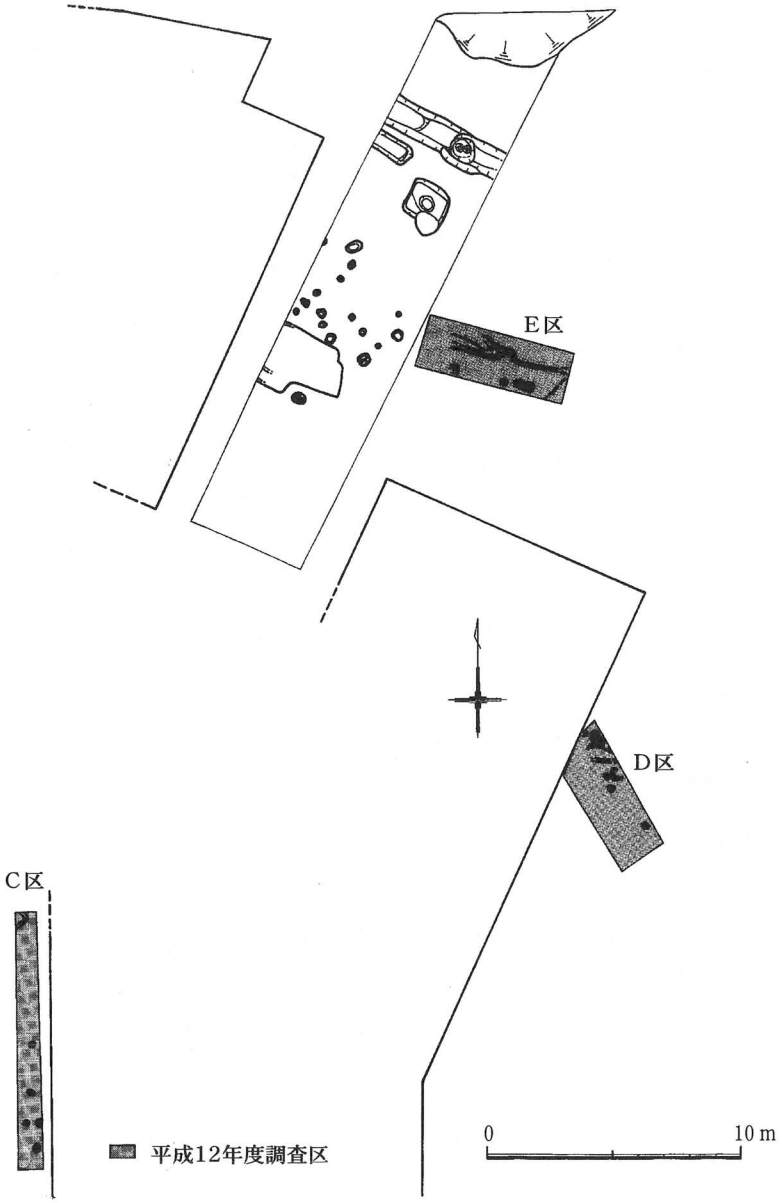
SX-02（図Ⅱ－2、表Ⅱ－23、写真Ⅱ－1）　調査区南側に広がる盛土で上層から現代磁器、土師器、須恵器などを検出した。比較的新しい時代に構築されたと考えられるが性格不明である。

SX-03（図Ⅱ－2・3、表Ⅱ－24、写真Ⅱ－2）　平面形は長軸0.66m、短軸0.44mの楕円状を呈する。埋土3層。土師器片が出土した。時期不明である。

SX-04（図Ⅱ－2、表Ⅱ－25、写真Ⅱ－2）　東壁でのみ断面形を確認した。浅い溝状の断面を有するが、本工事において、着手時に掘削されてしまったものである。平面形不明。ほぼ西側で検出したSD-01の延長であるかもしれないが、底部の水準が異なり一連の溝と判断できないため別遺構とした。埋土1層。SD-02より新しい。

SX-05（図Ⅱ－2・3、写真Ⅱ－2）　SD-02中央部にて検出し、SD-02より新しい。平面形はおおよそ隅丸の三角形を呈する。深さ27㎝、埋土より土師器・須恵器（１１）を検出した。埋土上層は攪乱状を呈し底面は不定形の柱穴状となる。

図Ⅱ-4　川原館遺跡　平成12年度・16年度調査　調査区並びに検出遺構平面図



第4章　出土遺物（図Ⅱ－5、写真Ⅱ－4）

本年の調査では土師器、須恵器、鉄製品を含む古代の遺物と近・現代の陶磁器が出土したが、近・現代の遺物は主に表採であり、遺構には伴わなかった。古代の遺物を中心に報告する。

土師器　坏はほぼ完形、口縁部片、底部片を含む数点が出土している。ほぼ完形を呈するもの（１２）は、過去の工事により削平された後に、現在まで盛土されていた部分の地山面直上で出土した。ロクロを使用せず手捏ねによる成形を行うため、器形はいびつである。底部はヘラにより調整が施され、器面全体にはナデが施される。口縁部片では、器厚が厚めで内湾し、口縁部は横ナデ、その後縦方向のヘラ削りを施すもの（4）や、器厚が薄く、外反する口縁部片（３）がある。坏底部には、SD-01出土の皿状に開く器形を持つと思われるもの（１）がある。甕は底部直径が６㎝弱で坏と大差なく、外面に縦位のヘラ削り調整を施すもの（２）がある。

その他、土師質の土器として、SX-01から出土した甑状の底部片（６）がある。底部を回転糸切り技法により切り離しを行った後、胴部にヘラ削り等の調整を施し、底部及び胴部下半にかけて円孔を開けている。全体形は不明であるが、内面に被熱痕跡を明瞭に留め、器面の剥落が著しいことから、甑状の使用を範疇に入れた何らかの煮沸形態に伴なう器種と考えられる。時代不明であるが近現代の遺物である可能性が高い。

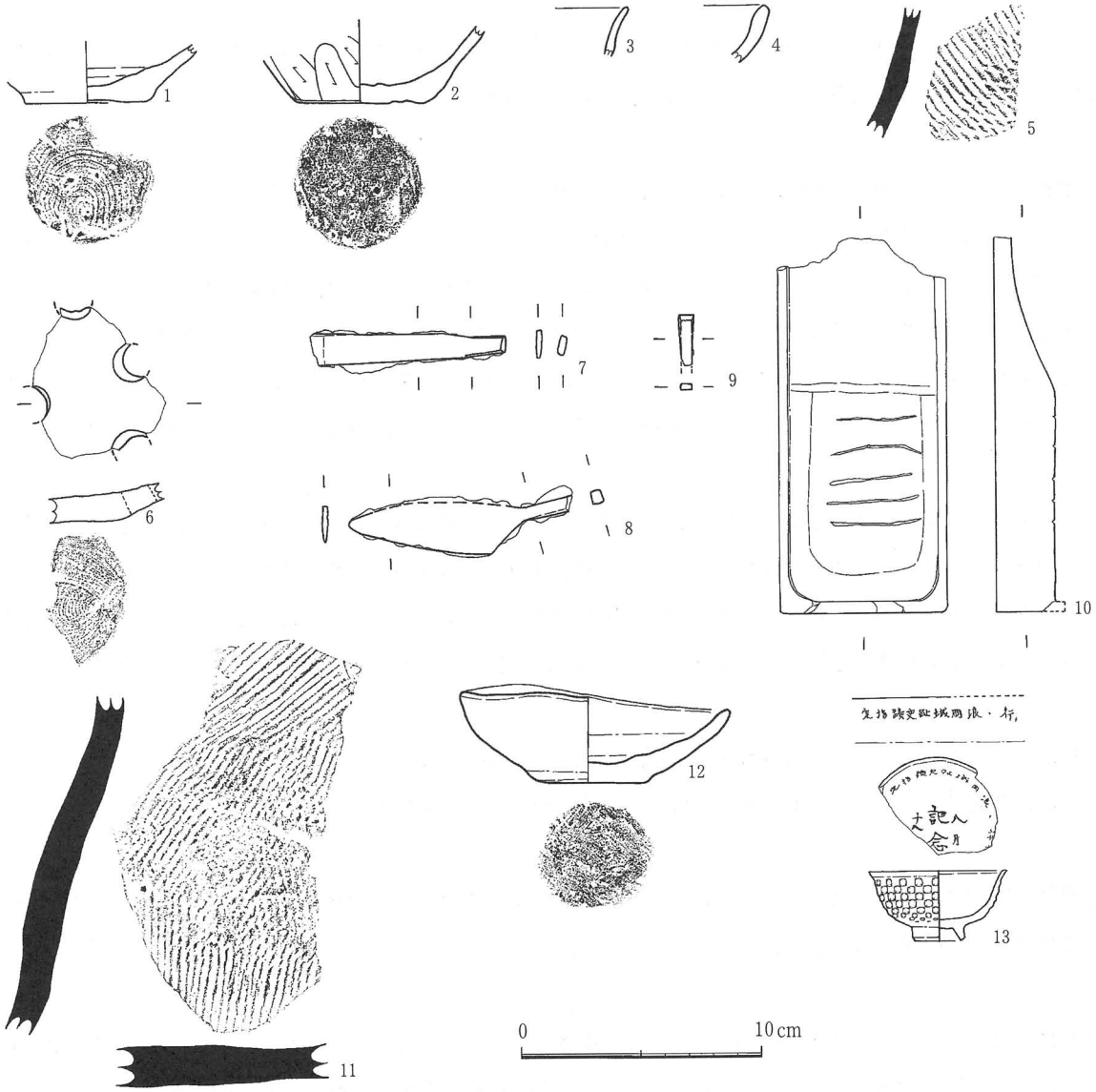
須恵器　甕胴部片が出土した。SD-02から出土した（５）とSX-05より出土した（１１）を図で示した。（１１）は器面外面に焼けハジケの痕跡が見られ、二次焼成を受けた可能性がある。

石製品　SX-01出土の硯（１０）については、時期を特定できないが、遺構及び共伴する遺物からは近現代の遺物である可能性が高いと思われる。

鉄製品　刀子は残存する長さが8.1㎝、幅1.2㎝、厚さ0.2㎝で両端欠損するもの（７）と、同じく長さ9.3㎝、幅2.2㎝、厚さ0.2㎝（刃部）、0.4㎝（茎部）、茎部が欠損する鋏状の破片（８）が出土した。角釘（９）は長さ2.0㎝、断面は0.2㎝、0.4㎝の長方形。両端欠損している。

現代磁器　（１３）は内面に「□行・浪岡城趾史蹟指定」、見込みに「八月」「記念」「十八□」銘を赤絵で描く小坏であり、調査区最北端の攪乱土内から採取した。浪岡城跡が昭和十五年に青森県初の国史跡指定されたことを祝って制作されたものと考えられる。詳細は不明であるが、浪岡町史２巻（浪岡町：平成１６年刊）によると、この時に皇紀２６００年の祝賀とともに記念式典が挙行された旨の記事がある。この際に用いられた小坏であると思われる。

図Ⅱ-5　川原館遺跡　出土遺物



第５章　まとめ

平成１３年度の『紀要Ⅱ』にて報告した試掘調査に続き、川原館遺跡の調査はこれで２回目となるが、平安時代を主体とする遺構・遺物を確認することができた。一方で、前回同様に中世城館である「川原館跡（川原御所跡）」を想定できるような中世（１５・１６世紀）の可能性を有する遺構・遺物を検出することはできなかった。

今回の調査では柱穴群や溝跡等が検出できたが、時期まで確定できるものではなかった。北側端部の溝は、旧来川原館（川原御所）の「堀」と想定されていた箇所付近で検出されたが、近現代に道路を整備する段階か、近代に学校施設を建設する際に掘削された可能性が考えられた。

調査区内全体で溝・ピット共に上半部が現・近代になってから著しく削平されたことがうかがわれるなど、近現代の開発と土地利用に伴ない大規模な削平を伴なう地業が行われたことは推察するに余りある結果を得た。

しかし、中世の城館跡と目された遺跡であるにも係わらず、遺構・遺物が一片も検出できないことに違和感を覚える。中世の遺構部分が削平された可能性と、調査が部分的に過ぎないことを併せて考慮しても不自然であろう。

一方で、近世の町が存在していたことも事実であるのに、近世の陶磁器も遺構も確認できなかったこと自体も、中世の遺構が検出できないこと以上に疑問である。

今後、この調査区がどのような原地形であり、どの程度削平されたのか、そして何よりも中世における「川原御所」の存在について、周囲の調査を徹底する必要があろう。

いずれにせよ、今回の調査及び北中野地区の上下水道工事に伴なう立ち会い調査結果からは、本遺跡及びその周辺が平安時代から継続して集落を構成していたことが理解できた。今回の出土遺物からは、１１世紀に比定できる土師器甕が出土しているが、集落の全体範囲と発生時期については今後も研究・調査が必要である。

発 掘 調 査 抄 録

ふりがな	へいせい１６ねんど　なみおかまちぶんかざいきよう　5
書名	平成16年度　浪岡町文化財紀要　V
副書名	川原館遺跡発掘調査報告書
巻次	V
シリーズ名	浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書
シリーズ番号	第13集
執筆者名	木村浩一・竹ヶ原亜希
編集機関	浪岡町教育委員会
所在地	038-1311　青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稲村101-1　tel.0172－62－3004
発行年月日	2005年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査面積	調査期間	調査原因
川原館遺跡	浪岡町大字浪岡字浅井130番地	市町村	遺跡番号	40°42′41″	140°35′57″	120㎡	H16.9.7～H16.9.14	道路開発
		02364	29050					

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川原館遺跡	集落	平安時代・明治時代以降	溝跡・柱穴	土師器・須恵器・石製品・鉄製品・等テンバコ1箱	

表Ⅱ-1　川原館遺跡調査区東西壁土層注記（図Ⅱ-2対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	暗褐色土（10YR3/3）に、褐色砂質土（10YR4/4）を大塊状に25%、直径20㎜以下の礫を20%、直径5㎜以下の炭化材を7%、赤褐色焼土（5YR4/8）を大粒状に5%含む。しまり弱。調査の契機となった造成に伴う盛土	
2	コンクリート層。三和土？しまり強	
3	黒褐色土（7.5YR3/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を大粒～大塊状に15%含む。表土	
4	直径20mm以下の砂礫層。しまり強い	
5	黄灰色砂礫土（2.5YR6/1）をブロック状に含む。しまり強い	
6	黄灰色砂礫層（2.5YR6/1）。しまり強い。三和土？	
7	にぶい褐色粘性土（7.5YR5/4）の単層。しまり強、粘性あり	
8	黒褐色土（10YR3/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～大粒状及び板状に10%含む	
9	黒褐色土（10YR3/2）に、にぶい黄褐色砂質土（10YR5/4）を極小粒～小塊状に3%、赤褐色焼土（5YR4/6）を極小～大粒状に3%、直径5㎜以下の炭化材を3%、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒状に2%含む。しまり中	
10	黄褐色砂質土の単層（シラス）。しまり強い	
11	暗褐色土（10YR3/4）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～極大粒状に20%、直径10㎜以下の炭化材を15%、直径5㎜以下の砕石を3%含む。しまり強い	
12	灰黄褐色土（10YR5/2）に、直径40㎜以下の砕石、直径20㎜程度の石が50%程度、と多量に混入する。直径100㎜以下の炭化物を5%、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を大塊及び極く厚い板状に7%、ガラス、木片、草が混入する。粘性なし	
13	黒褐色土（10YR2/2）に、褐色砂質土（10YR4/6）を極小粒～小塊状に7%、赤褐色焼土（5YR4/8）を極小～中粒状に5%、直径5㎜以下の炭化材を5%含む。しまり弱い	SX-04埋土
14	暗褐色土（10YR2/3）に、にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4）を大塊状に10%、直径5～200㎜の礫を20%、直径10㎜以下の炭化材を10%、ビニル・現代磁器などを含む。しまりあり、粘性なし	
15	暗褐色土（10YR2/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～大粒状に7%、直径5～100㎜の礫を7%、直径10㎜以下の炭化材を5%、赤褐色焼土（5YR4/8）を小粒状に3%含む。しまり強い	
16	直径20㎜以下の炭化材層（単層）	
17	にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極大粒状に7%、直径30㎜以下の礫を25%含む。しまりあり	
18	黒褐色土（7.5YR3/2）に、灰褐色粘性土（7.5YR4/2）を中粒状に10%、赤褐色焼土（5YR4/8）を極小～中粒状に3%含む。しまり・粘性あり	
19	暗褐色土（10YR3/4）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒～大塊状に25%、赤褐色焼土（5YR4/8）を小粒状に3%、直径10㎜以下の炭化材を2%含む。しまり中	SX-02埋土
20	黒褐色土（7.5YR3/2）に、暗褐色土（10YR3/4）を大粒状に15%、黄褐色砂質土（10YR5/8）を中粒状に2%、赤褐色焼土（5YR4/8）を小粒状に2%含む。しまりなし	SX-02埋土
21	黒褐色土（10YR2/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を小粒～中塊状に7%含む。しまり弱い	SX-02埋土
22	黒褐色土（7.5YR3/2）に、暗褐色土（10YR3/4）を大粒状に15%、黄褐色砂質土（10YR5/8）を中粒状に2%、赤褐色焼土（5YR4/8）を小粒状に2%含む。しまり弱い	
23	暗褐色土（10YR3/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒～小塊状に15%、直径5㎜以下の炭化材を5%、赤褐色焼土（5YR4/8）を極小粒状に2%含む。しまり中	
24	暗褐色土（10YR3/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小～中塊状に30%、明赤褐色焼土（5YR5/8)を極小粒～中塊状に5%、炭化材を小粒状に3%含む。しまり弱	SD-01埋土
25	暗褐色土（10YR3/3）に、にぶい黄褐色砂質土（10YR5/4）を極小～大塊状に20%、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小～中塊状に5%含む。しまり弱	SD-01埋土
26	にぶい黄褐色土（10YR4/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小～中塊状に20%、赤褐色焼土（5YR4/8）を小粒状に2%含む。しまり中。粘性弱	SD-01埋土
27	黒褐色土（7.5YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒状に2%、直径10㎜以下の炭化材を1%含む。しまり弱い	SD-01埋土
28	にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を小塊状に3%含む。しまり弱い	SD-01埋土
29	暗褐色土（10YR3/3）に、にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）を小粒～中塊状に15%、直径5㎜以下の炭化材を2%含む。しまり弱い	SD-01埋土
30	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒～大塊状に10%、にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）を小～大粒状に2%含む。しまり中	SD-01埋土
31	暗褐色砂（10YR3/3）の単層。しまり弱い	SD-01埋土
32	暗褐色土（10YR3/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒～小塊状に15%、直径10㎜以下の炭化材を3%、ガラス片、木材片を含む。しまり強い	
33	褐色土（10YR4/4）に、黒褐色土（10YR2/2）を小粒～中塊状に15%、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒～中塊状に5%、直径10㎜以下の炭化材を3%、灰（N3/0）を小塊状に2%含む。しまり弱い	SD-02埋土
34	黒色土（10YR2/1）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒～中塊状に15%、にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）を極小粒～大塊状に15%、にぶい黄橙色砂（10YR7/4）を小塊状に3%含む。しまり中	SD-02埋土
35	黒褐色土（10YR3/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒～中塊状に7%、黒褐色土（10YR2/3）を大粒～小塊状に5%、にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）を極小～大粒状に3%含む。しまりなし	SD-02埋土
36	褐色砂質土（10YR4/6）に、黒褐色土（10YR2/3）を中塊及び厚い板状に7%、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒～小塊状に10%含む。しまり中	SD-02埋土
37	暗褐色土（10YR3/3）に、にぶい黄褐色砂（10YR4/3）を薄い板状に10%、東壁では薄い板状に7%含む。黄褐色砂質土（10YR5/8)を極小粒～小塊状に3%、直径5～10㎜の炭化材を2%含む	
38	黒褐色土（10YR2/2）に、直径5㎜以下の砂礫を15%含む。しまり強い	
39	暗褐色土（10YR3/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒～小塊状に15%、直径5㎜以下の炭化材を5%、赤褐色焼土（5YR4/8）を極小粒状に2%含む。しまり中	Pit-01埋土
40	漸移層。にぶい黄褐色土（10YR4/3）に、黒褐色土（10YR2/2）を大塊状に25%含む	
41	黄褐色砂質土（10YR5/8）。一部にぶい黄橙色砂（10YR6/3）が薄い層状に入る。地山	

表Ⅱ－2　SD-01土層注記（図Ⅱ－2対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	調査区東西壁土層注記24層に対応	
2	調査区東西壁土層注記25層に対応	
3	調査区東西壁土層注記26層に対応	
4	調査区東西壁土層注記27層に対応	
5	調査区東西壁土層注記28層に対応	
6	調査区東西壁土層注記29層に対応	
7	調査区東西壁土層注記30層に対応	
8	調査区東西壁土層注記31層に対応	

表Ⅱ－3　SD-02土層注記（図Ⅱ－2対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	調査区東西壁土層注記32層に対応	
2	調査区東西壁土層注記33層に対応	
3	調査区東西壁土層注記34層に対応	
4	調査区東西壁土層注記35層に対応	
5	調査区東西壁土層注記36層に対応	

表Ⅱ－4　Pit-01土層注記（図Ⅱ－3対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	調査区東西壁土層注記39層対応	

表Ⅱ－5　Pit-02土層注記（図Ⅱ－3対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR3/1）に、明黄褐色砂（10YR6/8）を大粒～小塊状に3%、炭化物を小～中粒状に2%含む混層。粘性あり。しまり中	

表Ⅱ－6　Pit-03土層注記（図Ⅱ－3対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR4/3）を小粒状に40%含む混層。しまり・粘性なし	

表Ⅱ－7　Pit-04土層注記（図Ⅱ－3対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR4/3）を小粒状に40%含む混層。しまり・粘性なし	

表Ⅱ－8　Pit-05土層注記（図Ⅱ－3対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR4/3）を小粒状に40%含む混層。しまり・粘性なし	

表Ⅱ－9　Pit-06土層注記（図Ⅱ－3対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、にぶい赤褐色焼土（2.5YR5/4）を極小～小粒状に2%、炭化物を小粒状に1%、明黄褐色砂質土（10YR6/6）を極小粒状に1%含む混層。しまりあり。粘性なし	

表Ⅱ－10　Pit-07土層注記（図Ⅱ－3対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR4/3）を小粒状に40%含む混層。しまり・粘性なし	

表Ⅱ－11　Pit-08土層注記（図Ⅱ－3対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	褐色粘性土（10YR4/4）に、黒褐色粘性土（10YR2/3）を小～大粒状に30%、暗赤褐色砂（5YR3/6）を極小粒状に1%含む。しまり中。粘性あり	

表Ⅱ－12　Pit-09土層注記（図Ⅱ－3対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR3/1）に、明黄褐色砂（10YR6/8）と炭化物を小粒状に1%、褐白色粘性土（10YR4/1）を極小～小粒状に1%含む混層。しまり中。粘性あり	

表Ⅱ－13　Pit-10土層注記（図Ⅱ－3対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色粘性土（10YR2/3)に炭化物を中～大塊状に20%、礫を小～中塊状に10%、にぶい赤褐色焼土(10YR5/3)を小粒状に1%含む混層。しまり中。粘性あり	

表Ⅱ－14　Pit-11土層注記（図Ⅱ－3対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒暗褐色土（7.5YR2/3）に、明黄褐色砂（10YR6/8）を極小～小粒状に2%、にぶい赤褐色焼土（2.5YR5/4）を小粒状に1%、炭化物を小～大粒状に1%含む混層。しまり、粘性なし	

表Ⅱ－15　Pit-12土層注記（図Ⅱ－3対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒暗褐色土（7.5YR2/3）に、明黄褐色砂（10YR6/8）を極小～小粒状に2%、にぶい赤褐色焼土（2.5YR5/4）を小粒状に1%、炭化物を小～大粒状に1%含む混層。しまり、粘性なし	

表Ⅱ－16　Pit-13土層注記（図Ⅱ－3対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、にぶい赤褐色焼土（2.5YR5/4）を極小～小粒状に2%、炭化物を小粒状に1%、明黄褐色砂質土（10YR6/6）を極小粒状に1%含む混層。しまりあり。粘性なし	

表Ⅱ－17　Pit-14土層注記（図Ⅱ－3対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR4/3）を小粒状に40%含む混層。しまり・粘性なし	
2	褐色砂質土（10YR4/4）の単層。しまりあり。粘性なし	

表Ⅱ－18　Pit-15土層注記（図Ⅱ－3対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	にぶい黄褐色砂（10YR4/3）に、直径3～5㎜の小礫を1%含む。しまり弱い。粘性あり	

表Ⅱ－19　Pit-16土層注記（図Ⅱ－3対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	暗褐色土（10YR3/3）に、褐色粘性土（10YR4/4）を中粒状に25%、褐色焼土（7.5YR4/6）を小～中粒状に25%含む混層。粘性中、しまりあり	

表Ⅱ－20　Pit-17土層注記（図Ⅱ－3対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒色粘性土（7.5YR2/1）に、にぶい赤褐色焼土（2.5YR5/4）を小粒状に3%、褐灰色粘性土（10YR4/1）を小粒状に1%、炭化物を極小～小粒状に7%含む混層。しまり弱、粘性あり	

表Ⅱ－21　Pit-18土層注記（図Ⅱ－3対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒暗褐色土（7.5YR2/3）に、明黄褐色砂（10YR6/8）を極小～小粒状に2%、にぶい赤褐色焼土（2.5YR5/4）を小粒状に1%、炭化物を小～大粒状に1%含む混層。しまり、粘性なし	

表Ⅱ－22　SX-01土層注記（図Ⅱ－3対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	にぶい黄橙色砂（10YR6/3）に、明黄褐色砂質土（10YR7/6）を30%含む。しまり・粘性なし	
2	明黄褐色砂（10YR6/8）に、黒褐色粘性土（10YR6/8）を30%含む。しまり・粘性なし	
3	黒褐色粘性土（10YR2/2）に、明黄褐色砂（10YR6/8）を小粒状に5%、褐灰色粘性土（10YR4/1）を小～中粒状に10%含む混層。層下部に、直径15㎝以下の礫を20%含む。しまり中、粘性あり	

表Ⅱ－23　SX-02土層注記（図Ⅱ－2対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	調査区東西壁土層注記19層に対応	
2	調査区東西壁土層注記20層に対応	
3	調査区東西壁土層注記21層に対応	

表Ⅱ－24　SX-03土層注記（図Ⅱ－3対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR3/1）に、明黄褐色砂（10YR6/8）を小粒～大塊状に10%、にぶい赤褐色土（2.5YR5/4）を小～中粒状に2%、にぶい黄褐色粘性土（10YR5/3）を中粒状に2%、炭化物を小～中粒状に1%含む混層。粘性あり	
2	黒褐色土（10YR3/1）に、にぶい黄褐色粘性土（10YR5/3）を40%含む混層。しまり、粘性あり	
3	暗褐色砂（10YR3/4）に、明黄褐色砂（10YR6/8）を小粒～大塊状に5%、にぶい黄褐色粘性土（10YR5/3）を中粒状に2%、黒褐色砂（10YR3/1）を底面に薄い板状に含む。しまりあり	

表Ⅱ－25　SX-04土層注記（図Ⅱ－2対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	調査区東西壁土層注記13層に対応	

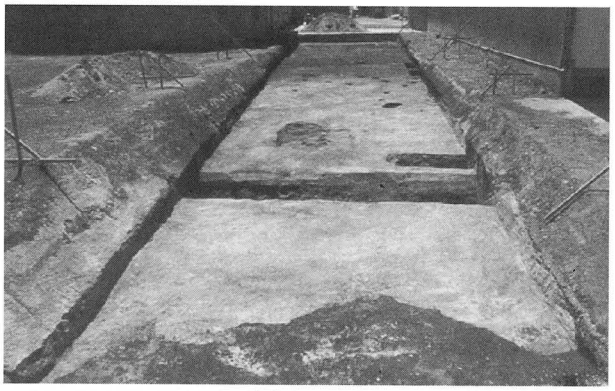
写真Ⅱ-1　川原館遺跡

表土除去状況

作業状況

遺構確認状況

調査区全景



SD-01・02、SX-01　完掘

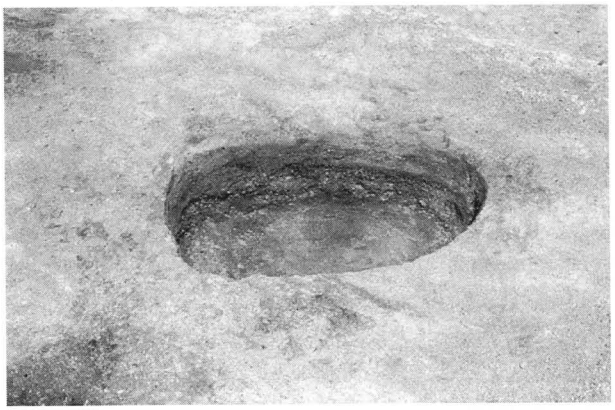
SX-01　精査

SX-01　完掘

SX-02　確認状況

写真Ⅱ-2　川原館遺跡

SX-04(左はSD-02)　検出状況

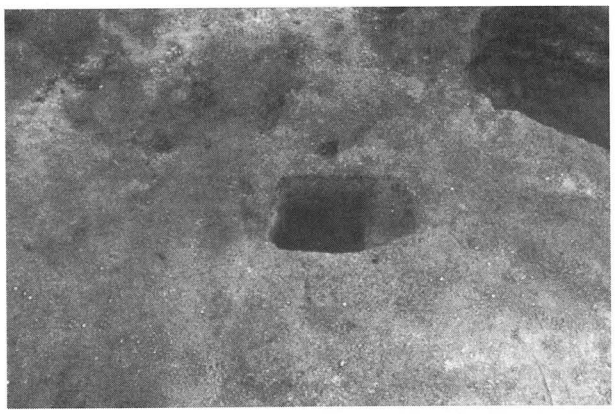


SX-03　完掘

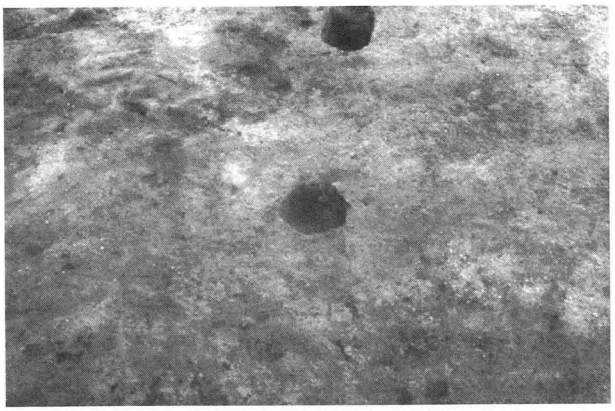
SX-05　調査状況

Pit群　検出状況

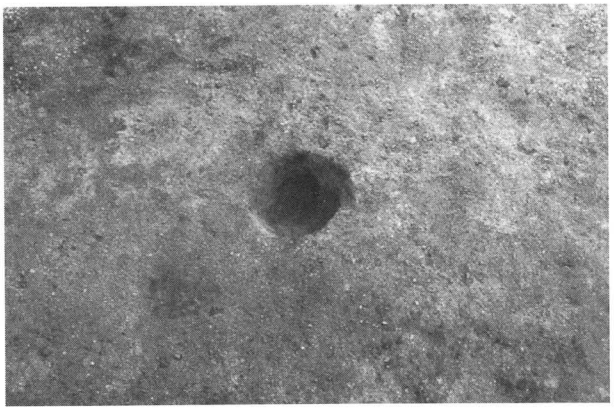
Pit-01　完掘



Pit-02　完掘

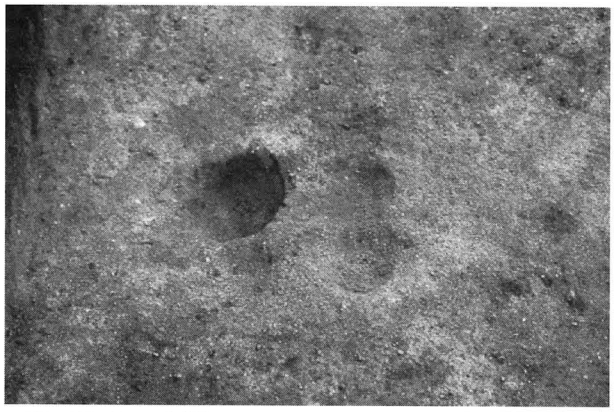


Pit-03　完掘



Pit-04　完掘

写真Ⅱ-3　川原館遺跡



Pit-05・07　完掘

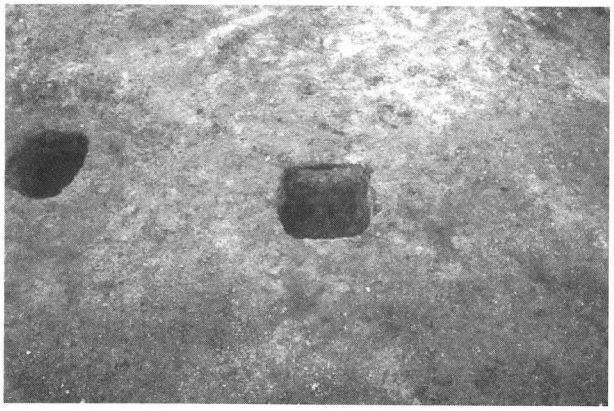
Pit-06　完掘

Pit-08　完掘

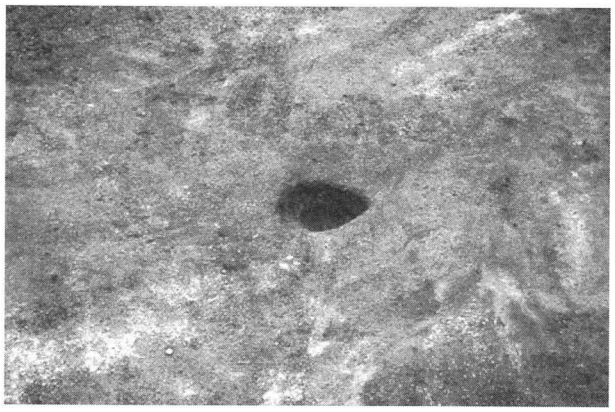
Pit-09　完掘

Pit-10　完掘

Pit-11　完掘



Pit-12　完掘

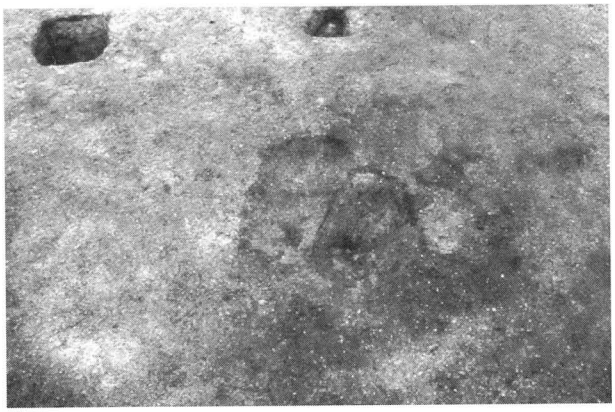


Pit-13　完掘

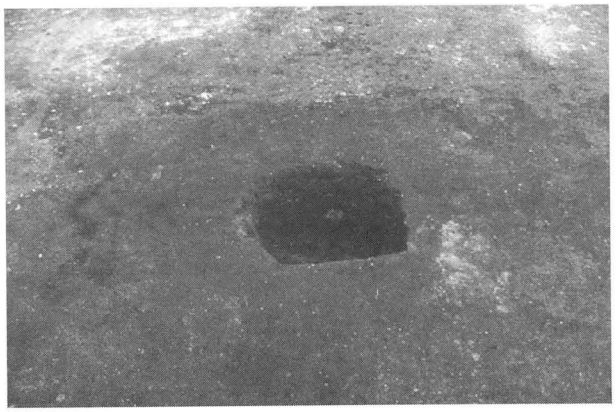
写真Ⅱ-4　川原館遺跡

Pit-14　完掘

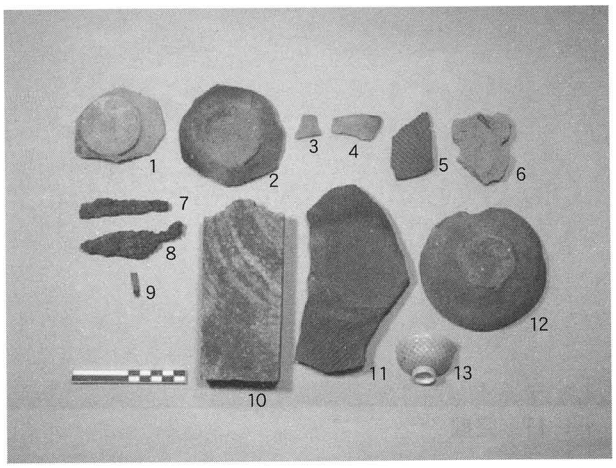
Pit-15　完掘



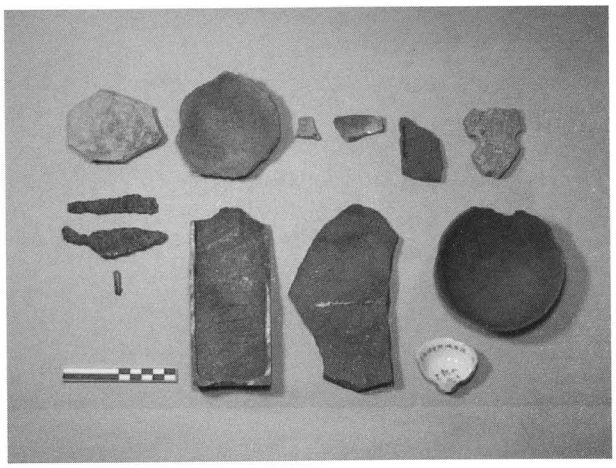
Pit-16・17　完掘



Pit-18　完掘



出土遺物　外面



出土遺物　内面

Ⅲ　浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書　第14集

平成16年度　吉内遺跡発掘調査報告書
－県営本郷地区ふるさと農道整備に係る緊急発掘調査報告－

第１章　調査に至る経緯

平成15年度当初に、浪岡町農政課を介して計画箇所について発掘調査の対象となるか否かの問い合わせを受けた。計画対象地が、吉内遺跡と篠原遺跡にかかるため、8月27日に町農政課と事業主体である中南地方農林水産事務所とともに事業の検討に入った。この席で、15年度内の予定では、補正予算対応となるため10月からの事業執行となることから、調査及び工事に充分な期間が取れないこと、また、10月以降は遺跡周囲すべてのリンゴ園が農繁期に入るために、農道を封鎖しての調査は地域に多大な負担をかけることが予想されたことから、平成15年度内は用地買収に留めることとなった。

以下、下記の「平成16年度吉内遺跡発掘調査要項」参照。

平成16年度吉内遺跡　発掘調査要項

浪岡町教育委員会生涯学習課

１．調査の目的

平成16年度に施工される「県営本郷地区ふるさと農道緊急整備事業」に係り、周知の埋蔵文化財包蔵地について緊急に発掘調査を行い、文化財の記録保存を図ることを目的とする。

２．調査経緯

平成15年度当初に、浪岡町農政課から周知の埋蔵文化財包蔵地についての問い合わせを受けた。農道計画対象地が、吉内遺跡と篠原遺跡にまたがるため、平成15年8月27日に町農政課と事業主体である中南地方農林水産事務所とともに事業の検討に入る。15年度中の調査及び工事は事業着手時期の関係で難しいことから、平成16年度4月から吉内遺跡について発掘調査を行う予定とした。

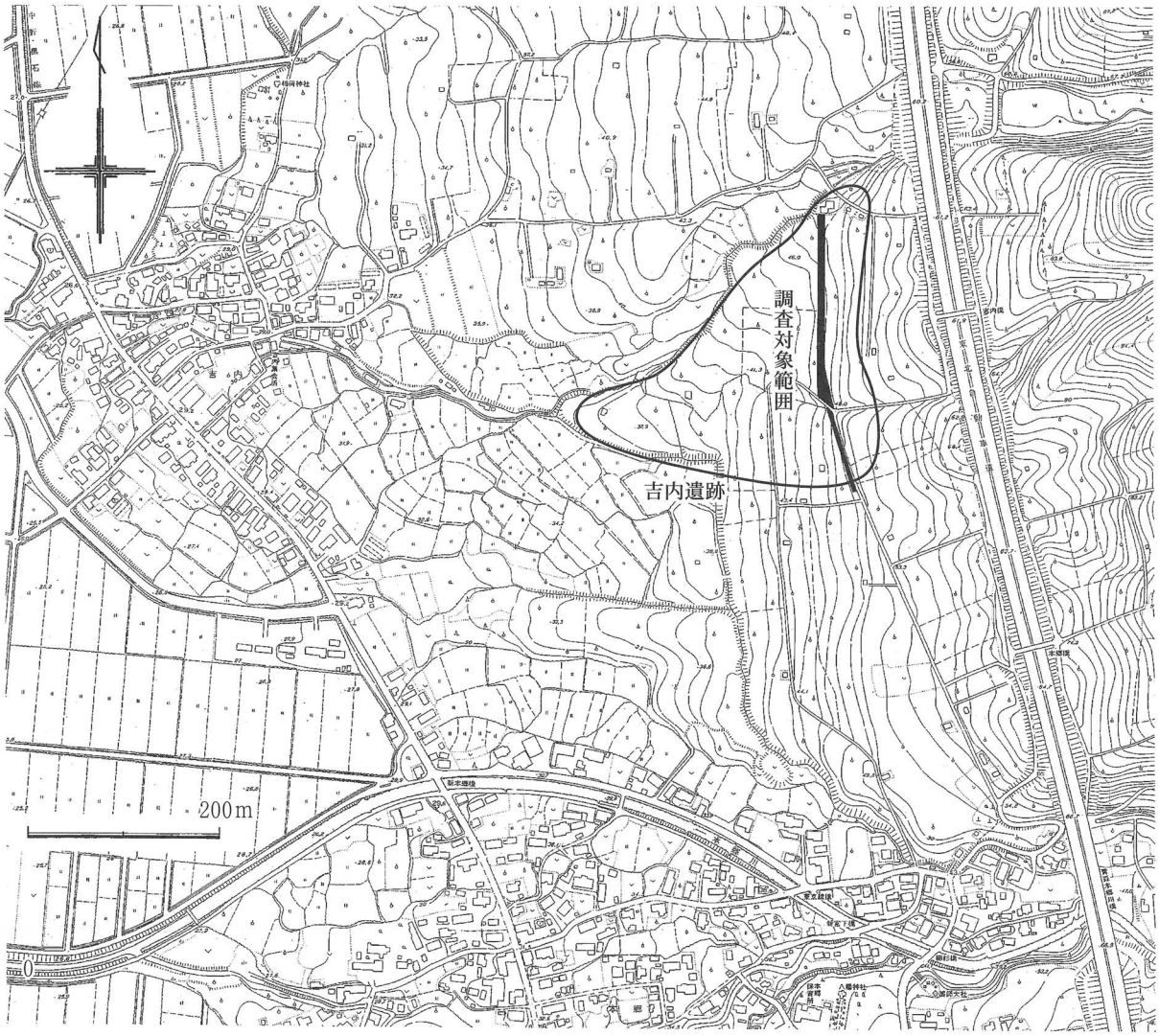
３．遺跡の概要について

吉内遺跡は浪岡町の南東部、奥羽山脈の北端にそびえる八甲田山の西麓が津軽平野へと降りてくる標高40mほどの丘陵に位置する。この一帯は津軽平野の南東部でもあるため、遺跡西方向には岩木山が望まれ、眼前に津軽平野の穀倉地帯が広がっている。更に、交通の面から見ると、東北自動車道の沿線でもあり、黒石ICと浪岡ICの中間付近に位置するが、吉内遺跡に隣接した東側には昭和53年度に東北縦貫道建設に伴う発掘調査を行った際、縄文時代から平安時代にかけての遺構・遺物を検出した「松元遺跡」や「杉の沢遺跡」、更に北側には、古代から中世の遺跡と考えられる「桃里遺跡」や「源常平遺跡」、「羽黒平（1）遺跡」、北西には中世城館と考えられている「北畠館遺跡」、西側斜面低位には平成14年度農道整備に係る発掘調査により縄文時代後期から晩期の良好な資料を得た中屋敷遺跡が位置し、縄文から平安時代の遺跡群が南北に連なっていることが確認されている。

吉内遺跡自体は、昭和42年8月に遺跡登録され、平安時代の遺物である土師器・須恵器片や鉄滓が表採できることが知られている。平成8年刊行の『浪岡町史研究年報Ｉ』「浪岡町遺跡分布調査概報（成田誠治）」の中でも当該遺跡出土の平安時代の土師器について報告されているが、現在まで開発・学術ともに発掘調査が行われたことはない。

今回の調査は「吉内遺跡」を南北に縦断する農道予定地を対象とし、延長300m、対象幅5.5mで、計1,650㎡に及ぶ範囲を予定している。平成15年9月20日、22日に行われた地耐力試験の際の現地立会いからは、場所

図Ⅲ-1　吉内遺跡　調査区位置図



により厚さが異なるが、黒色土層が地山層上に40cmから120cm、平均して60cmほど残る状況が見られたため、遺構の保存状態は概ね良好と考えられた。

4．調査地及び所有者

調査地は、その大部分が新設の農道であるため、現在は果樹園地として利用されている。平成15年度内に買収する予定であることから、調査時には公有地（県有地）となる予定である。調査対象地域は図Ⅲ－1参照。

5．調査面積

吉内遺跡　約1,650㎡

6．調査期間等予定（期間中に所定の日数を行う）

準　備　作　業	平成１６年　４月１日	～	平成１６年　４月下旬
調　査　作　業	平成１６年　５月上旬	～	平成１６年１１月３０日
整理･報告書作成作業	平成１６年１２月１日	～	平成１７年　３月３１日

7．調査体制

吉内遺跡発掘調査指導員　　成　田　誠　治

浪岡町教育委員会 生涯学習課　文化班

課　　長	常　田　典　昭
課 長 補 佐	鎌　田　　廣
文 化 班 長	工　藤　清　泰（平成１６年６月30日迄）
主 任 主 査	田　澤　哲　郎
主 任 主 査	木　村　浩　一（発掘調査担当）
臨時発掘調査員	竹ヶ原　亜　希（発掘調査担当）
調 査 補 助 員	斎　藤　とも子（発掘調査担当）
調 査 作 業 員	藤本　範子・吉川　瑠枝・乗田　キヨヱ・長谷川　輝子・武田　秀美 長谷川　サチヱ・鎌田　百合子・秋元　正子・工藤　美香・須藤　千代

8．調査方法

今回の調査対象地はすべてが農地内であるため、9月以降の農繁期に極力影響を与えないよう、短期間で終了する方向で調査にあたる必要がある。このため、年度の早い段階で調査を開始し、７月中には発掘調査を終了した上で、砕石等での仮舗装を行う必要がある。

作業を迅速に行うため、当初からの表土除去時に遺構等を確認して必要な箇所の調査を行い、確認した遺構を中心に記録保存を図る。更に、遺構の広がりについて検証し、遺構確認と遺物の検出に努める。

1）測量（実測）は、遣り方と平板測量を併用する。

2）遺構略称は、従来までの調査と整合性を持たせるため、独立行政法人奈良文化財研究所方式をとる。

例 掘建柱建物跡・SB、溝跡・SD

例 土器・P、鉄製品・F

遺構については、原則として時代・時期を問わず掘り下げを行う。また、平板実測及び写真撮影等を行い記録の保存に努める。遺物については、可能な限りすべて取り上げるものとする。

調査区については、10mグリッドを基本とし、補助杭として5m間隔でグリッドピンを設定した。

基準となる杭（０設定杭）は、道路工事用のBC3杭とし、任意方向で設定した。この軸をC軸とし、南北軸はアルファベット（東へ昇順）、東西軸を算用数字（南へ昇順）として設定した。各グリッドは北東隅の杭の記号を呼称した。

標高については調査区南側端に設置されていた工事標高（KBM2：48.425m）を用いた。

9．調査報告書の作成

調査結果については、「平成16年度　浪岡町文化財紀要Ⅴ」中に「県営本郷地区ふるさと農道緊急整備事業に係る緊急発掘調査報告書」として掲載・刊行し、成果を公表する。

第２章　　調査経過（調査日誌より抜粋）

5月 7日　現場踏査。主に伐根跡から土師器・須恵器・珠洲系鉢（237）などの遺物を表採する。

6月22日　中南地方農林水産事務所より発掘届を収受する。

7月12日　中南地方農林水産事務所からの発掘依頼文書を収受する。

7月23日　中南地方農林水産事務所と浪岡町で発掘調査の委託契約を交わす。

7月26日　遺跡南端から重機により表土除去開始。土師器甕破片等を散布状に検出。対象地はほぼ全域で過去に天地返しを行っているとのことで、遺構の保存状態が不安。南北溝1条、西壁に焼土を確認。

7月27日　遺構（SI-01・02、SX-08）、焼土（SX-52）を確認。さらに北で遺構・遺物を確認。

7月28日　南北溝（SD-08）と、この溝と重複する東西溝（SD-09～12）を確認。すべて南北溝よりも古い。

7月29日　表土除去と並行して、南端から人力により遺構確認面の検出。北側調査区は重機による表土除去終了。調査区全体に溝が数条重複して見られる。

8月 3日　10m間隔のグリッドにより調査区を設定する。

8月 5日　工事標高を利用し、BM1：48.730m、BM2：48.000m、BM3：46.500m、BM4：47.200m設置。北側調査区覆土除去。東西・南北溝跡数条を確認。C・D-18区以北は攪乱が著しい。

8月10日　SD-03底面からプラスチック櫛出土。Pit-04完掘。SX-02底面に重機の痕跡。SX-01は井戸の可能性が高い。F-34・35区レベリング。

8月12日　SD-02・SD-01・03層序図作成。F-34・35区遺構完掘状況平面図作成。レベリング。

8月13日　SD-03・SX-01層序図作成、土層注記。E-31・32、F-33区の遺構平面図作成。SX-01は、周辺に木枠をめぐらせていた可能性を想定。

8月23日　SX-01完掘。SD-02写真撮影・層序図作成、精査。SD-01・03含め、南側調査区全面精査・完掘写真撮影。Pit-05実測。Pit-08検出。確認撮影。F-35・G-36区平面完掘図作成。

8月24日　Pit-08完掘。SD-04より現代磁器出土。E・F・G-33～37区完掘状況レベリング。

8月25日　D・E-29～31区遺構確認（SX-04～06、Pit-09～19、SD-06、SI-01・02）。確認写真・平面図作成。遺物取り上げ。Pit-06・07半截、層序撮影。

8月26日　南側調査区の調査がほぼ終了。Pit-06・07完掘。SX-08ベルトを設定し掘り下げ、埋土中より縄文石器（118）出土。撮影。

8月28日　D・E-30区精査。SX-09を確認、平面図作成。SD-05はⅠ層上からの新しい遺構である。

9月10日　SD-06・SX-08・SX-10精査、完掘。SX-11を検出し、南北層序図作成、完掘。SD-04・05は現代溝の可能性があるが、SD-06は幅、造作から古代の可能性が考えられる。調査員成田誠治氏来訪。

9月13日　SD-04下から溝（SD-20）検出。埋土より土師器・須恵器出土。SX-08平面実測。SX-11は重機痕跡の可能性がある。C・D-25～27区で遺構確認。

9月15日　C・D-25～27区で遺構確認面を検出。SD-06完掘。SX-10完掘と併せ撮影。SX-09ベルト層序を撮影し、除去。完掘図作成及びレベリング。

9月16日　C-25区以南確認遺構平面図実測（Pit-24～37、SX-12～19、SD-07・08）。東西攪乱溝除去。D・E-30区まで全面的に精査し、完掘状況撮影。SI-01掘り下げ、壁溝・壁（部分）検出。床面直上、カマド焚口部東側より土師器片出土。南側は攪乱で大きく削られ、壁・床共に明瞭ではない。

9月17日　E-31区Pit-38～41設定。SX-14（後にSI-03）、四分法にて掘り下げ、土師器出土。南壁及び北東角を検出。SX-15西側掘り下げ。底面より現代擂鉢片出土。SX-16上に載る東西攪乱溝を除去。SD-07ベル

ト設定し掘り下げ。土師器出土。

9月22日　Pit-21埋土より土師器甕・内面黒色処理土師器坏（102）・焼けた礫など出土。SD-07を掘り下げし、遺物取り上げ。SX-14は、燃焼施設に近い箇所で潰れた土師器甕（40）が出土し、竪穴住居跡と考えられるため、名称をSI-03に変更。北西部で炭化材を検出。壁の腰板か。建物中央には円形のプランが見られ、層序から建物と同時期と思われる。

9月23日　SI-03精査。全体的に貼り床は弱く、北西部に焼土と炭化物の集中が見られる。南北ベルト北西側にて、不明銅製品（43）出土。

9月24日　SX-12（後にSI-04）掘り下げ。東・西側の一部で壁の立ち上がり確認。内面黒色処理の土師器坏が焼土縁辺部より出土。SD-07層序図作成。SX-20埋土から土師器蓋（126）出土。D-23区以北遺構確認。発掘調査指導員、成田誠治氏来訪。

9月27日　D-23区遺構確認平面図作成（SX-21～30、SD-09～14、Pit-42～46）。複数大きなプランが確認され、住居跡の可能性を考慮。SI-03層序図補足。SX-12精査。南・北・東壁確認。西側は調査区外で削平され全容不明。SX-20・Pit-31～35半截し写真撮影。E-30・31区検出Pit・SD精査し完掘。

9月28日　SX-32・33、SD-15、Pit-47～50、確認平面図に加筆。Pit-17完掘。SX-12・20、Pit-31～37、SD-08層序実測。SI-03・SX-12遺物取り上げ、床面検出・精査。SD-10内にSX-31検出し半截。発掘調査指導員、成田誠治氏来訪。

9月29日　SD-09底面検出、断面V字形。SD-10から須恵器片・炭化した堅果類を含む炭化物と焼土、焼け礫多数出土。SX-26東壁掘り方検出。SX-25内にPit-51検出。SD-13ほぼ完掘。

10月5日　SD-07・09、SX-26・31掘り方平面実測。C・D-16・17区遺構確認・撮影、西側は殆ど攪乱か。

10月6日　C・D-16・17区遺構確認平面図、C・D-9・10区平面図作成。レベリング。

10月7日　SX-25（SI-07）・26（SI-08）精査。SD-10掘り下げし、東側で底面検出。遺物取り上げ。炭化物・焼土層から遺物が多量に出土する。SX-25の壁溝を不均一に確認。SX-26は壁溝・床を確認。東壁で腰板を設置したような痕跡を確認。SX-32掘り下げ。2㎝前後の掘り下げで地山面を検出。遺構上面は殆ど削平された可能性を考慮。D-26・27区（SD-07、SX-20）・E-32（SD-05）完掘平面図作成。レベリング。

10月12日　E-30・31区（SD-04・05）の完掘平面図実測。SD-10ほぼ全体を検出。

10月13日　D・E-29区（SX-08・10、SD-06）完掘平面図実測。SD-09～11・18、SX-32・36・37、Pit-52・53層序撮影・実測。Pit-52は柱痕あり。Pit-47～49半截。層序撮影。SD-15、SX-39掘り下げ。SX-26精査。南東隅検出。SX-33検出範囲、SD-08・14を先行し掘り下げる。溝からの遺物が多い。

10月14日　D・E-29～31区完掘。SD-08底面にPit-75検出。SX-45・46設定し半截。SX-32完掘。SD-15埋土より現代陶磁器出土。SX-37北側にPit-55設定、半截。Pit-53完掘。SX-26北側にPit-56設定。

10月15日　SI-01周辺精査。SI-02西側に焼土範囲（SX-50～52）検出。遣り方測量用鋲を設定。

10月18日　SD-09・10完掘。Pit-47～50、SX-37完掘。D-24区の焼土はSD-08より新しいことを確認。SX-29層序図作成後四分法で掘り下げ。D・E-31～33区レベリング。

10月19日　C-23区（SD-09・10）完掘。SX-46完掘。SX-33南西隅を確認し掘り下げ。南壁側に炉のような焼土・粘性土の範囲を検出。SX-29平面実測。SX-37、Pit-53完掘写真。SX-47・48設定。西側半截。

10月22日　SI-03・04平面実測・レベリング、燃焼施設（SIF-03・04）精査。

10月25日　SIF-03袖遺物取り上げ、精査。SIF-04層序設定。層序面トレンチ状に掘り下げ。SX-33床面精査。SX-13掘り下げ、南半にて床面検出。SX-26床除去し掘り方確認、撮影。Pit-31・34柱痕のみ除去。Pit-43・44半截。SIF-03構築材は、SIF-04と同様、灰色砂質土のようだ。SIF-04は2基同時連結の燃焼施設か。

SX-26は掘り方が明瞭であり、建て方が想像できる良好な残存状況。C・D-18区以北について、平面実測レベリング。

10月26日　SX-13（SI-05）掘り下げ、床面検出。床面は軟弱であるが腰板部分が明らかに確認される。SX-21ベルトを設定し、掘り下げ。SX-21下に別遺構（SI-10）を確認。SX-33層序検討。Pit-57・SD-17は攪乱か。C-20区以北をレベリング。柱痕あるPitの柱痕のみ除去。

10月28日　C・D-18区以北平面実測、レベリング。C・D-19区以南、遺構完掘状況平面図作成・レベリング。SX-42～44付近精査。Pit-52・55完掘。SD-08部分的に掘り下げ。埋土より石鏃（167）・小柄（166）出土。SX-13壁溝掘り下げ、西壁付近で焼土範囲を検出。

10月29日　SX-33ベルト層序実測。ベルト沿いに細くトレンチを入れる。SX-29のベルトを再設定し、四分法にて掘り下げ、遺り方実測・遺物取り上げ。断面はフラスコ状に近く、底面付近まで掘り下げる。南東部で貼っているようなローム層確認。

11月2日　SX-26完掘平面図補正。SI-03遺物取り上げ。SX-29遺物取り上げ。掘り下げ。

11月3日　SX-13平面遺り方実測。腰板の立ち上がり痕が確認できる。SX-29層序実測、掘り下げ、遺物取り上げ、層序撮影、実測。湧水が著しい。

11月5日　SX-29遺物取り上げ・掘り下げ。層序図・平面図の補正をし、完掘。撮影・レベリング。

11月10日　SIF-04半截。SX-13床除去。拡張前の住居跡（SI-06）検出。新旧で様相が異なる。西壁の焼土は、旧住居跡に伴うと判断。C・D-19～21区平面実測。SX-33のベルト除去中、石製品（205）出土。

11月11日　SIF-03層序図補足。袖を残した状態で写真・図面作成。袖除去。煙道は壁から1m程北東側へ延びる。煙道方向・建物の軸・袖の方向が異なるため造り替えの可能性を想定。かけ口と思われるプラン検出。焚き口不明瞭。SX-13撮影。旧SX-13貼り床除去。壁溝新旧共に精査。SX-33遺物取り上げ・掘り下げ。SI-01とSD-04間のベルト除去。SI-01と02間にプラン検出。SX-53に対応できるか。旧SI-02→SI-09→SI-01新の順か。C・D-19～21区、平面実測・レベリング。SX-21掘り下げ、土師器坏完形（81）出土。C-17区で、炭化材・貼り床状範囲検出。焼失家屋か？Ⅱ層下の遺物をグリッドごとに取り上げる。

11月13日　SI-03平面実測・レベリング、床除去し床下に炭化物層を検出。SX-13西側の床除去し平面図補正。SIF-04精査。SX-25平面実測。Pit-51完掘。Pit-47～50平面実測。Pit-45の石掘り上げ。先端が三角錐状の礫を打ち込んだような掘り方。SXからSIへ名称変更。SX-13→SI-05（新）・06（旧）、SX-25→SI-07、SX-26→SI-08、SX-53（SI-01・02と重複）。

11月15日　SIF-04層序実測、平面図補正。SI-01・09平面図作成。Pit-45他柱穴注記。

11月16日　SI-07・SD-20層序実測。C・D-24・25区平面実測。SI-01・06平面図補正。

11月18日　SX-33レベリング。Pit-44完掘。SIF-03煙道半截、煙道部層序図作成。東壁を精査し、カマボコ形の天井検出。燃焼部に対して煙道が大きい。SIF-04除去、遺物取り上げ・図面補正・レベリング。東壁に一定間隔で柱穴を確認。SI-05・06レベリング。掘り方まで下げる。SI-01・02ベルトに沿いに掘り方まで下げる。SI-02で楕円形のプラン（→SX-50）検出。SI-01南西側の攪乱除去。南・東壁溝掘り下げ。南東隅にて柱穴検出。

11月19日　SI-03・Pit-44完掘。SX-21・22平面実測。D-25区平面レベリング。SI-04壁溝精査。東壁は内側から角材により押さえている。SIF-04精査。カマドと分類できないため不明燃焼施設とする。

11月20日　SIF-04下の土坑精査。SX-21・22精査。攪乱土除去後、方形のプランを面的に確認。SX-21下の柱穴は、本遺構の南東隅か。南西・北西隅検出。北東隅は、SD-08に切られる。貼り床を部分的に検出。SX-23とした範囲の下に位置するが、確認ラインとは異なるため、別遺構とする。SX-33平面図補正。Pit-73～84

検出。

11月22日　SX-21を精査。図面補正。SX-33最終精査。図面補正。SI-01・02、SD-20精査し層序実測。SI-02の範囲内で検出した遺構をSX-50とする。SX-50から土師器坏(20)・須恵器長頸壷(30)・不明鉄製品(31)出土。本日で、北側調査区の調査終了。SX-21下より検出の遺構をSI-10とする。

11月23日　SX-50の鉄製品(31)取り上げ。SI-01・02・09ベルト層序実測。SI-01平面図に加筆。SD-20北側に検出した遺構をSX-49とする。

11月24日　SIF-01精査。南壁に長さ40㎝の煙道を確認。床を除去し、SX-53の範囲検討。図面補正・遺物取り上げ。SI-02ベルト除去し、遺物取り上げ。SX-50ベルト除去。底面付近からも遺物出土。完掘。平面図補正。SX-50南西で焼土範囲を精査、SX-51を設定し、掘り下げ。

11月25日　SIF-01煙道注記、平面図補正。SX-51注記。SX-52を設定し、掘り下げ。平面図・西壁で層序実測。写真。注記。SI-02遺物取り上げ。本日をもって、吉内遺跡の発掘調査は終了。

第３章　検出遺構

調査は、当初1,650㎡の範囲を想定したが、工事計画や設計の変更等のため実際はやや多くなり、1,700㎡ほどの範囲について実施した。調査にあたり、調査対象区を便宜上南側区(図Ⅲ－2)、中央区(図Ⅲ－3)、北側区(図Ⅲ－4)の3ヶ所に分けて行い、竪穴建物跡(SI)９棟、井戸跡(SE)2基、溝跡(SD)20条、柱穴跡(Pit)91基、性格不明遺構(SX)39基を検出した。

調査対象地が農耕用地(果樹園)であったため、表土とともに地山層も一部削平された痕跡が見られることから、本報告書中の遺構の深さについては、調査時に確認できた数値を用いている。

竪穴住居・建物跡　竪穴建物跡と想定される遺構は９棟検出した。住居内で検出した燃焼施設は、略称をSIFとして住居跡と同一の番号を付し、取り扱うこととする。

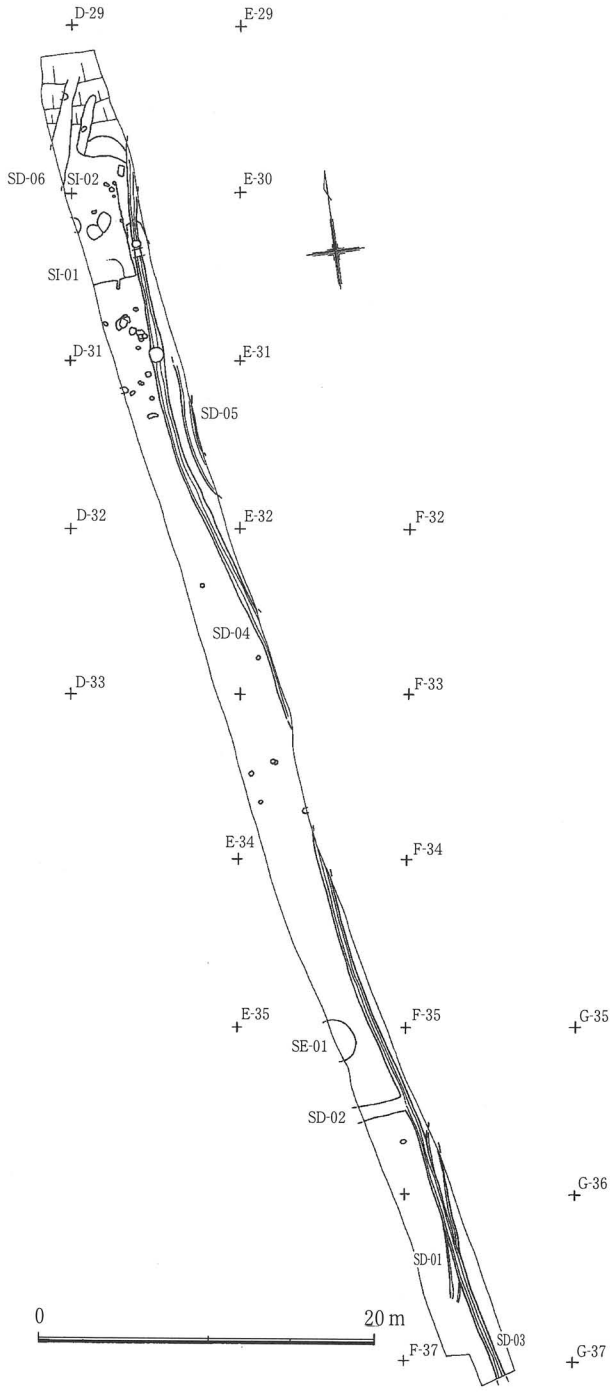
SI-01（図Ⅲ－2・5、表Ⅲ－1、写真Ⅲ－2・21）　E-30区にて検出した。西側は調査区外に延び、北側はSI-02と重複しSI-01が新しい。東側はSX-53と接し、SI-01が新しい。SD-04・SX-06・09より古い。概ね9世紀後半の遺構と思われる。

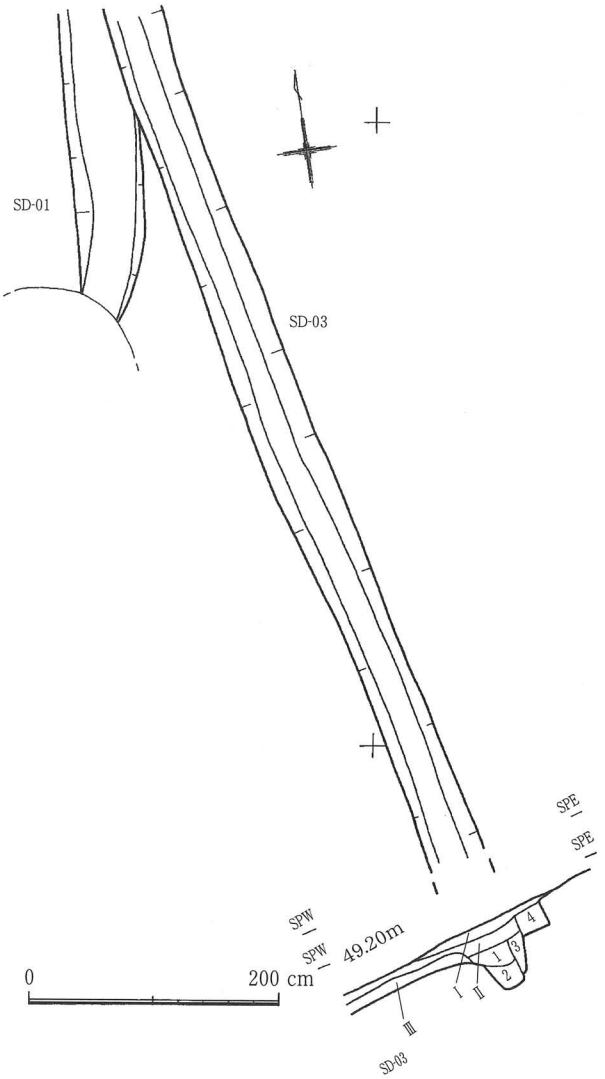
東西265㎝以上、南北270㎝で、南壁と東壁沿いに幅12㎝の壁溝が確認された。南東隅に柱穴1基を検出したが、他に柱穴は確認できなかった。上面を大きく削平され、遺構の残りが芳しくないためと思われる。特に西側では床も殆ど残存せず、掘り方が一部残ったために辛うじて平面プランが確認できた。そのため、貼床は部分的に検出された程度であり、明確な硬化面は検出できなかった。SI-02との重複関係は平面で確認できたが、削平の影響か両遺構の範囲が不明瞭となっている。

更に、遺物の出土状況が散布的で周囲のSXと出土遺物が接合するなど、新旧関係が明確にならない。SI-02との通し層序図ではSI-01が古くなるなど矛盾を生じているが、現場では時間的制約もあり新旧関係を確定できなかった。

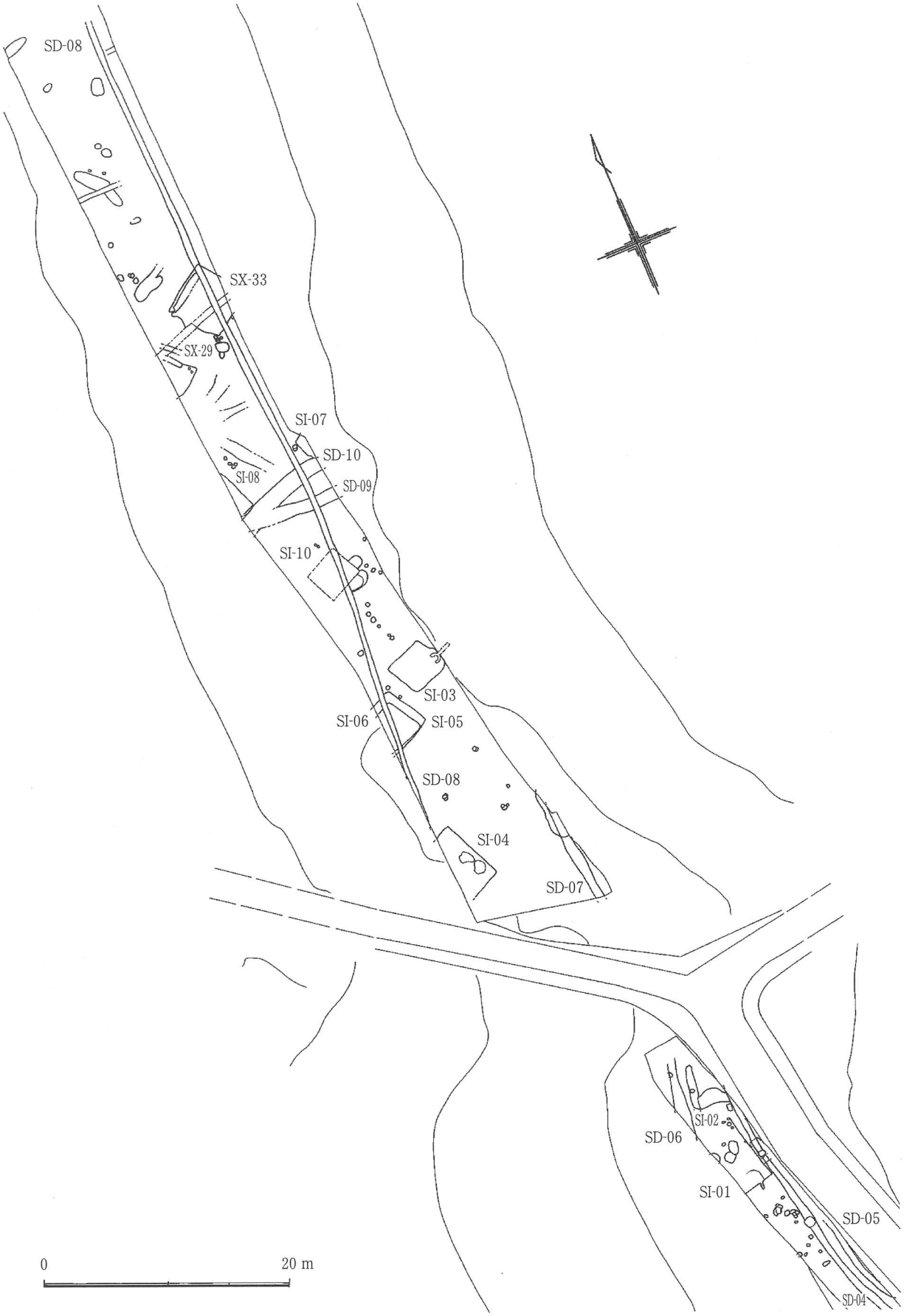
SIF-01（表Ⅲ－2）　カマドは南側壁東寄りに位置する。西袖部・燃焼部・天井崩落土を含む西半部を攪乱にて大きく削りとられ、長さ110㎝を測るカマド東袖東側と煙道のみが残存する。東側袖内から袖材として用いたと思われる大き目の礫を検出した。煙道は延長40㎝であるが、先端部の煙出しPitが確認できた。カマ

図Ⅲ-2　吉内遺跡　南側調査区遺構検出状況

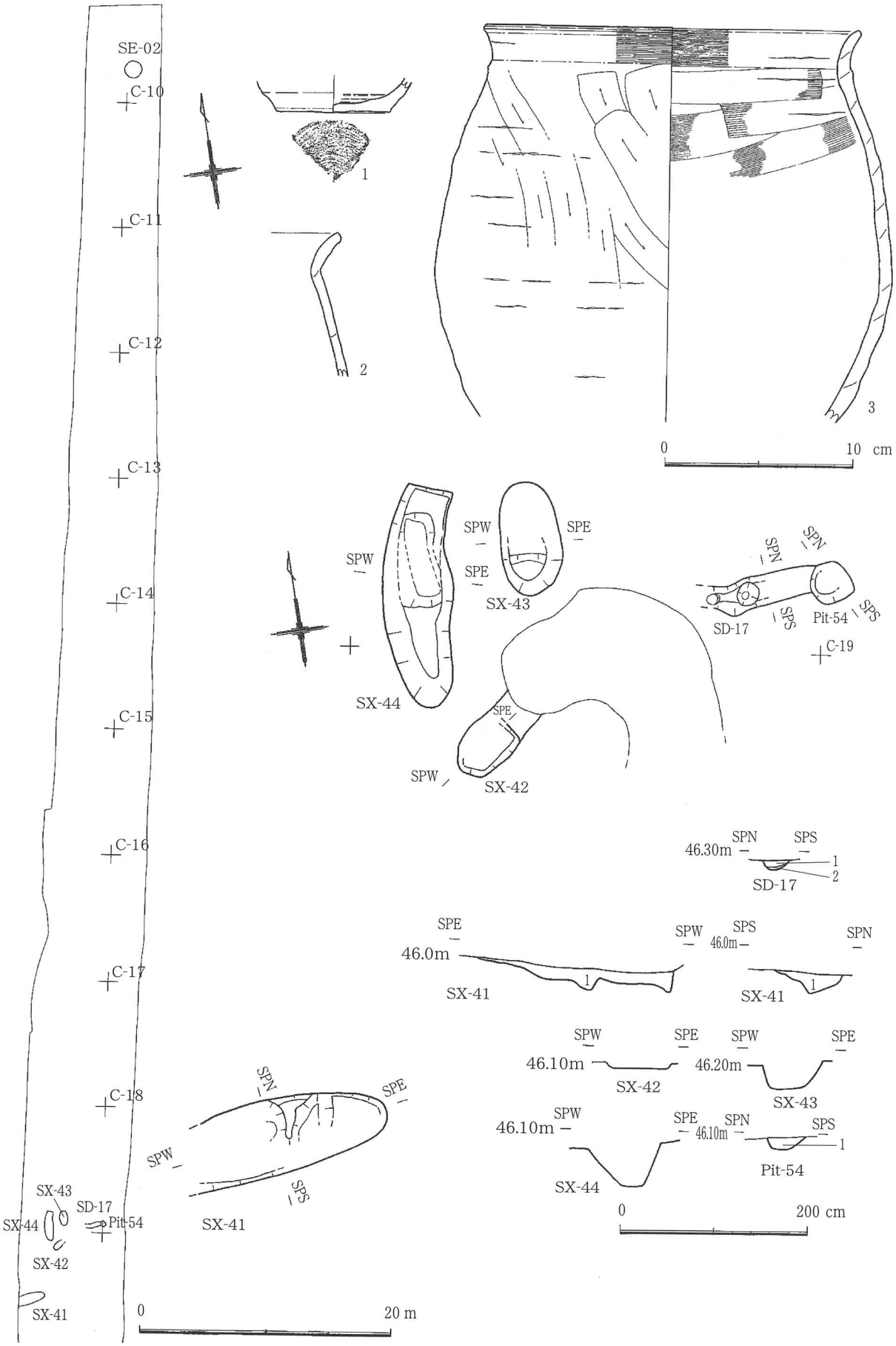




図Ⅲ-3　吉内遺跡　遺構集中箇所における遺構検出状況



図Ⅲ-4　吉内遺跡　北側調査区遺構検出状況及びSD-17・Pit-54・SX-42・43・44平面図及び出土遺物



ド袖除去後、壁溝を検出した。このことから、カマドが造り替えられていると仮定すると、SI-01とSI-02が建て替えや拡張等により重複する可能性を想定できる。ただし、東側の壁ラインについては、SI-02がやや東に張り出すため、同一遺構と断言できない。

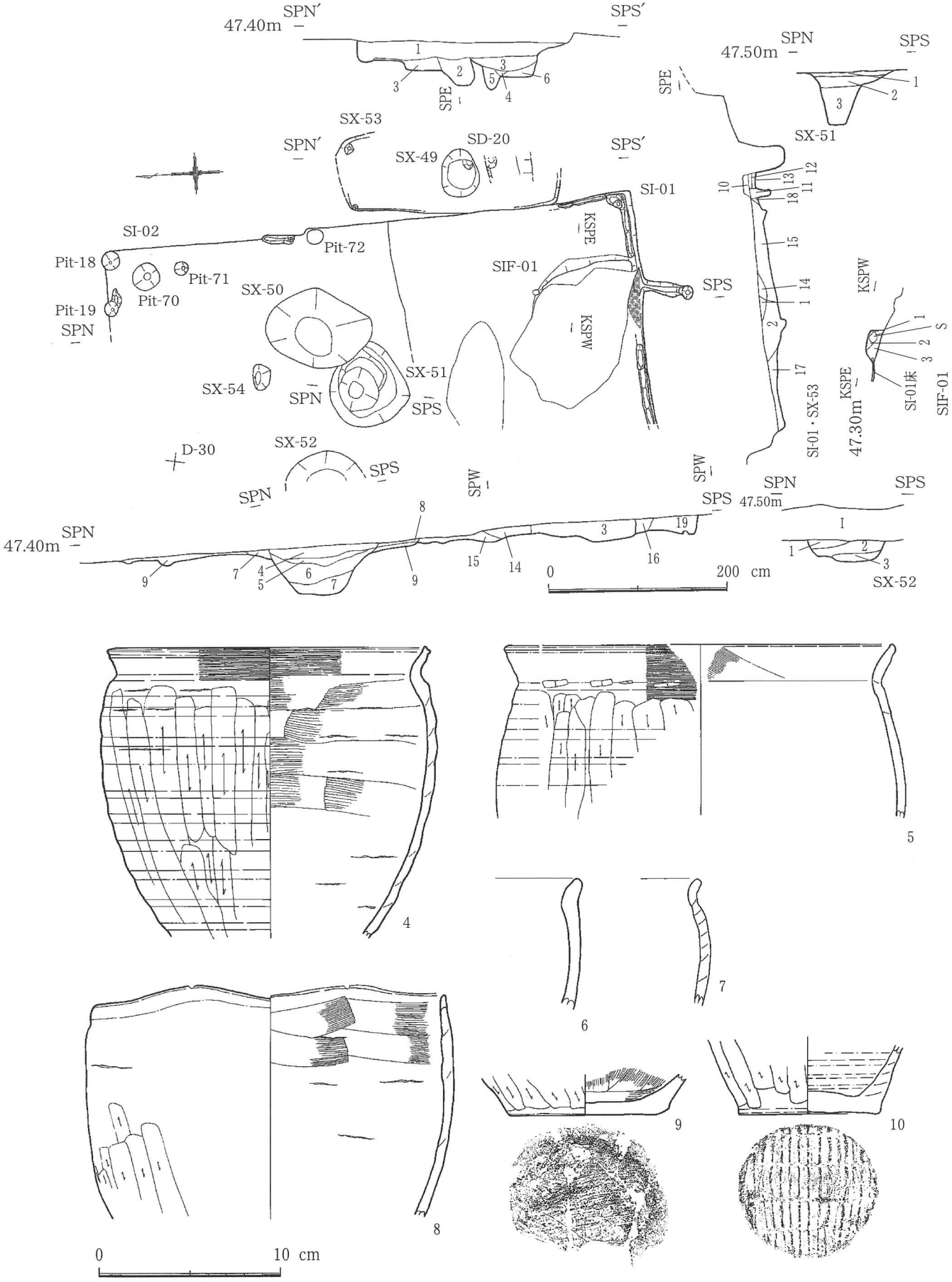
出土遺物　遺物は主に土師器片を中心にカマド周辺(東側)から出土した。土師器甕(4～13)が主体的で、坏が極端に少なかった。SX-49出土の須恵器壷口縁部片(19)と接合した破片が出土している。

SI-02（図Ⅲ－5、表Ⅲ－1、写真Ⅲ－2・21）　E-29・30区にて検出した。南北320㎝以上、東西162㎝以上の方形を呈すると見られる。SI-01と重複すると思われるが、前述の通り新旧関係が不明であり、出土遺物も極端に少ないこと等から、時期を判断できない。北東隅に柱穴が集中するが、削平により床が殆ど残存せず、柱穴と壁周囲の溝で範囲を特定した。

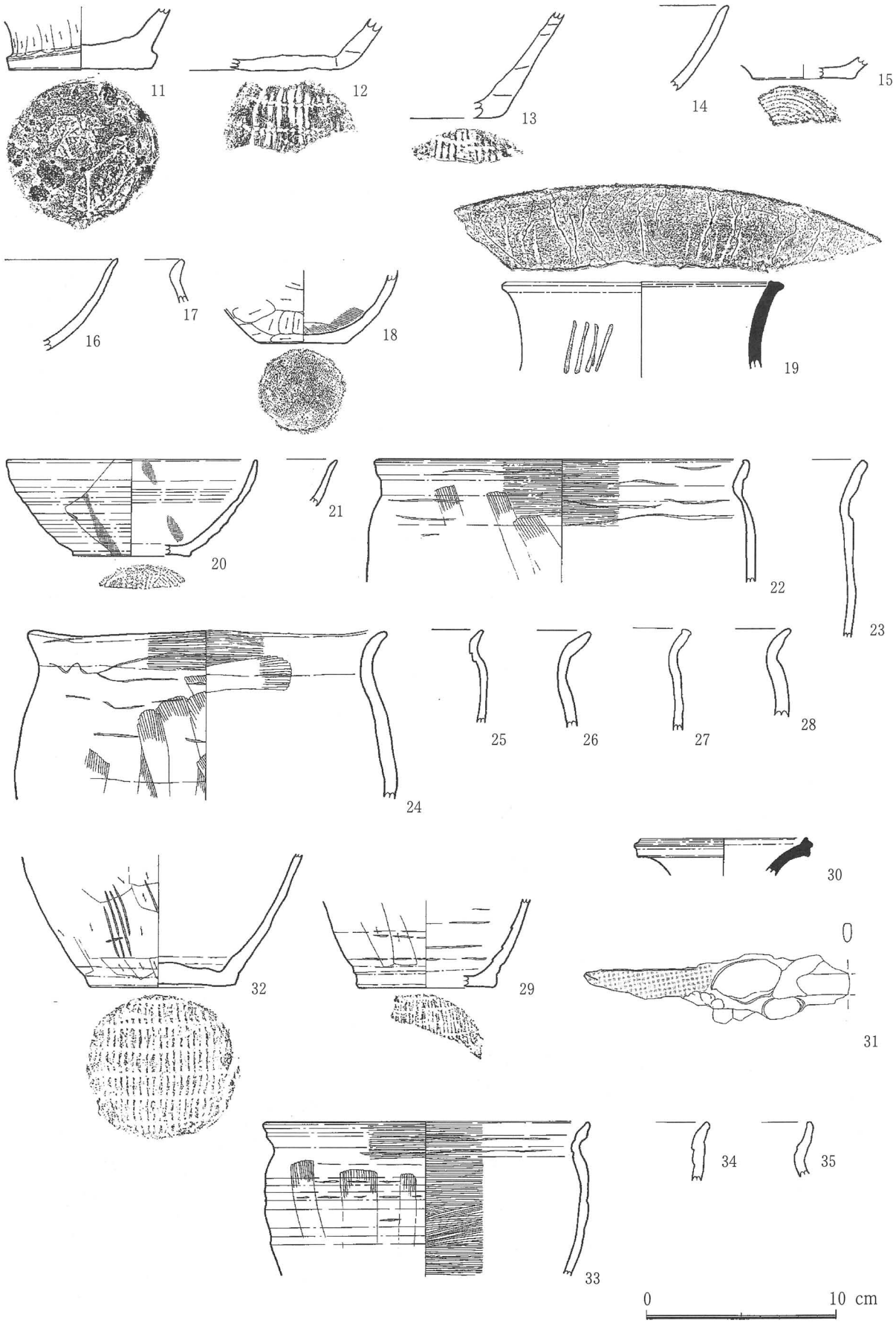
SIF-02　燃焼施設は南側を攪乱によって削平されたカマドとみて調査を進めたが、カマドに伴う焼土と想定した部分は廃棄土坑の可能性が高いSX-50・51と判明した。また、同様に西側で確認した焼土範囲は廃棄土坑の可能性が高いSX-52であったため、SIF-02の存在には疑問をもたざるを得ない。SI-01を構築する際、SIF-02カマドを全体的に壊し、その上に新たに床を貼って南側へ拡張した可能性も考えられるが、SI-01の遺構平面が明確ではないため判断できない。詳細不明であることからSI-01とSI-02は別遺構として扱うこととする。

出土遺物　床直上から取り上げた遺物は、土師器坏(14・15)のみである。

図Ⅲ-5　SI-01・02、SD-20、SX-49・50・51・52・53・54他平面図及びSI-01出土遺物



図Ⅲ-6　SI-01・02、SX-49・50・51出土遺物



SI-03（図Ⅲ－7・8、表Ⅲ－3、写真Ⅲ－3・22・23）　D-25区にて検出した。確認時はSX-14としていたが、竪穴住居跡であることが判明したためSI-03とした。他遺構との重複関係はない。出土遺物からは9世紀後半の遺構と考えられる。カマドの煙道が東側の調査区外になり煙道出口は調査できなかったが、今回の調査でほぼ全体を調査することができた数少ない遺構である。東西320㎝、南北300㎝、深さ確認面から35㎝程度を測る。北西隅からPit-61を検出したがそれ以外に遺構内からは柱穴が検出できなかった。遺構周囲（外側）に柱穴を持つ外柱形態を呈するものと思われるが、周囲にも明確な柱穴は確認できなかったため、上部構造については不明な点が残る。床は全体的に貼床が検出された。若干軟弱で掘り方底面も一定しないため、床との確信は持てなかったが、本調査において検出した建物跡の貼床は全般的に軟弱で、床として長期間使用した痕跡が認められなかった。タタキとして貼り床面をそのまま使用した、もしくは、貼床面上に床板等による施設を施していた可能性も考慮される。

また、貼床の中央部に直径135㎝の円形のプランを検出した。貼床材と異なる黒褐色土が充填された深さ5～10cm程度の掘り込みで、掘り込みの底面はC字形の溝状を呈し、その開口部分に撥形の凸部分がある。この凸部分の中央部から方形の浅い掘り込み(Pit-62)を検出したが、柱穴とするには浅く、用途は不明である。

壁の立ち上がりは一定せず、南壁では比較的緩く、北東部は比較的垂直に立ち上がる。主に西及び北壁に沿って壁溝が確認できた。埋土層序図でも北側・西側では腰板の立ち上がり痕跡が確認できる。また、精査の際に北・東壁側ではロームブロックを確認していることから、SI-08のように、内側から腰板材を固定する構造であった可能性が考慮される。また、北・西壁に沿って、一部焼土と炭化した材を検出した。腰板の一部が焼けたものと思われる。

前述のように壁の立ち上がりが南側で緩く、南壁沿いには殆ど壁溝が検出されないことと、南壁中央部で円形の柱穴が2基連結するような掘り込みが認められたことなどから、この部分に出入り口相当施設があった可能性を想定できる。

SIF-03（表Ⅲ－4）　カマドは東壁で、東側から西側（内側）へ天井が押し倒されたような状態で検出された。天井崩壊土がカマド全体を覆い、遺構内に広がっていた（図Ⅲ－７左上図にて破線で表示）。その中から土師器長胴甕（40）が出土している（図Ⅲ－７左上図に出土状態を示した）。この甕は元来、カマドに掛かっていたものと考えられる。

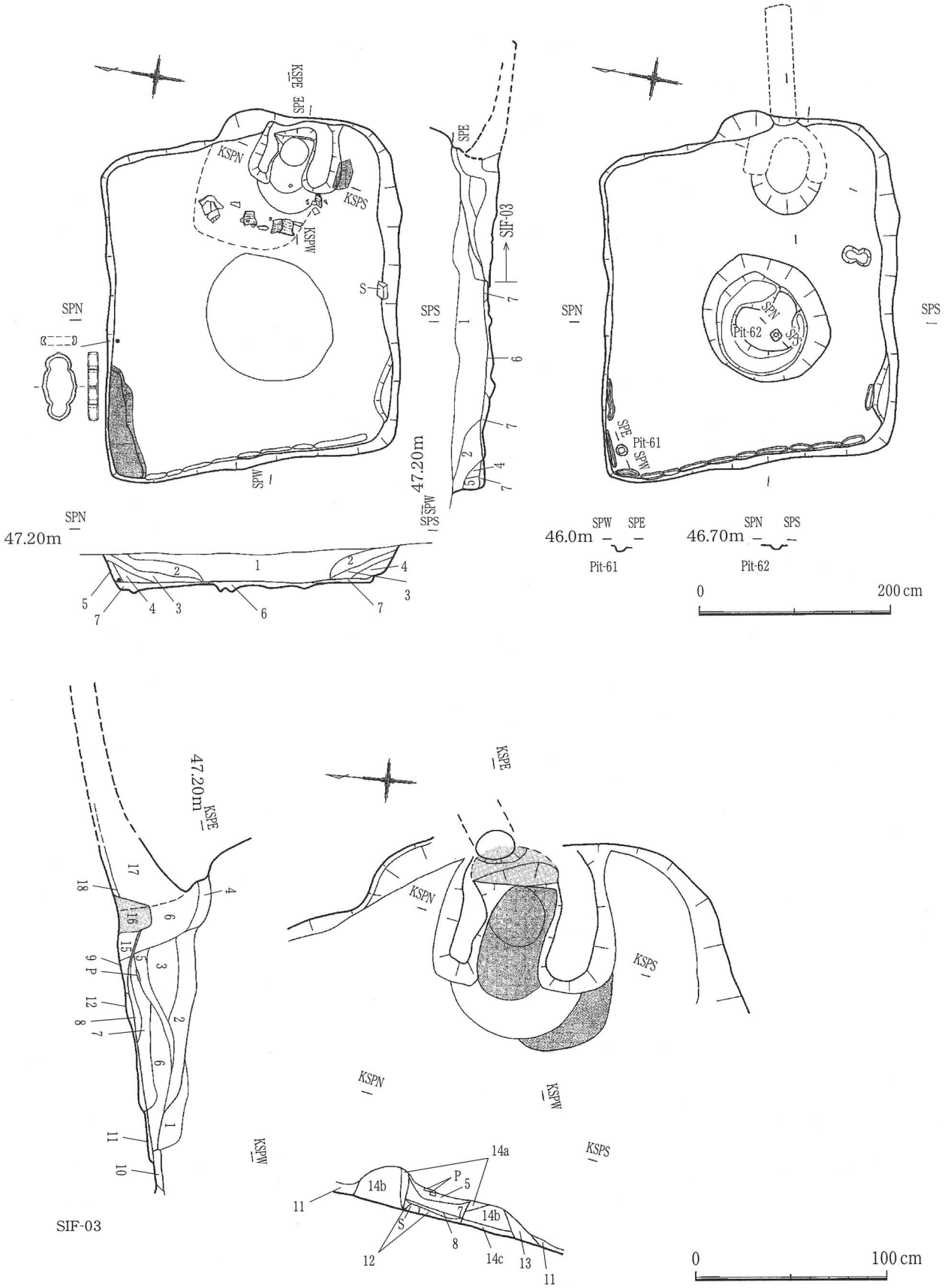
建物の壁（軸）と袖の角度、袖と煙道の角度などから、カマドは造り替えの可能性が考慮される。造り替えに伴ってカマドの軸がやや北方向に変わったものと思われる（図Ⅲ－7右下でスクリーントーンを貼った部分が初期の燃焼部と思われる）。カマドの袖長は60㎝、底面幅は40㎝、上幅は22㎝を測る。袖の材質がきめの粗い軟質な粘性土であり、天井が更に弱いシルト質の砂質土で構築されていることから、長期間の使用には耐えられなかった可能性がある。実際、燃焼部は余り発達しておらず、使用回数（期間）が少なかったと考えられる。

煙道は旧カマドの軸から東方向へ延び、120㎝程度まで延びることを確認している。煙道と燃焼部の境には幅25㎝程度の砂質土のブロックが床に置かれ（図Ⅲ－7左下層序図でスクリーントーン貼りにより表現した）、煙道口の面積を半減させている。開口部を狭めることで熱量が逃げることを調整していたものと思われる。

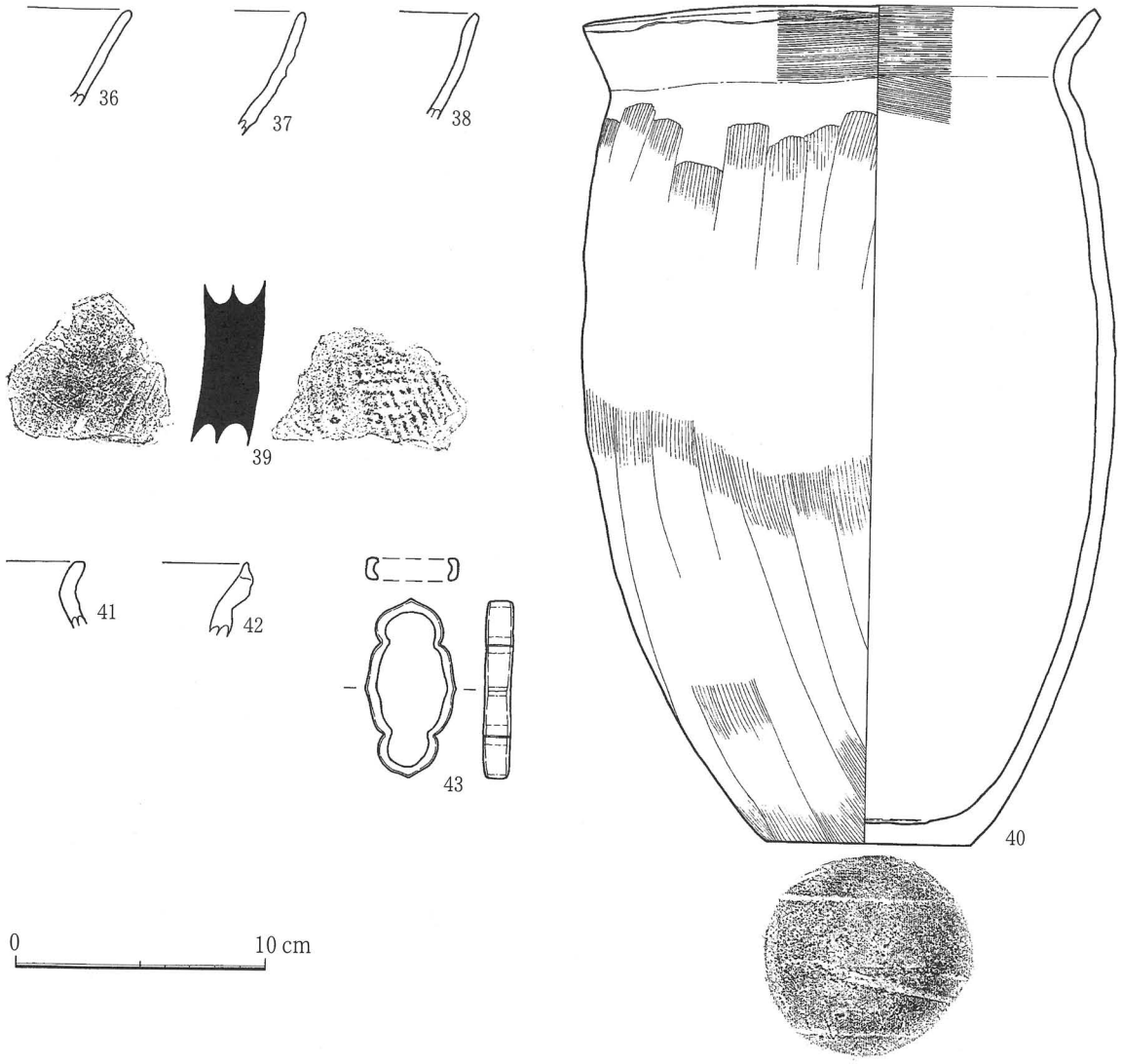
中央部に掛け口と思われる円形のプランが確認できたが、明確な焚き口は確認できなかった。全体を併せ見ると、生活感の希薄なカマドと言える。

出土遺物　北西壁沿いから不明銅製品を出土した(図Ⅲ－７左上図に出土地点を●で示した)。刀剣の鐔である可能性が高い。この遺物については、後で別項を設けて詳しく触れる。埋土からはこの他、土師器坏（36～38）・甕（40～42）、須恵器甕（39）などが出土した。また、埋土から米と思われる炭化した種子を若干取り上げた。

図Ⅲ-7　SI-03平面図


KSPE
SPE
KSPN
KSPS
KSPW
SPN
SPS
SPW
S
SIF-03
47.20m
Pit-61
Pit-62
46.0m
46.70m
0
200 cm
SIF-03
0
100 cm

図Ⅲ-8　SI-03出土遺物

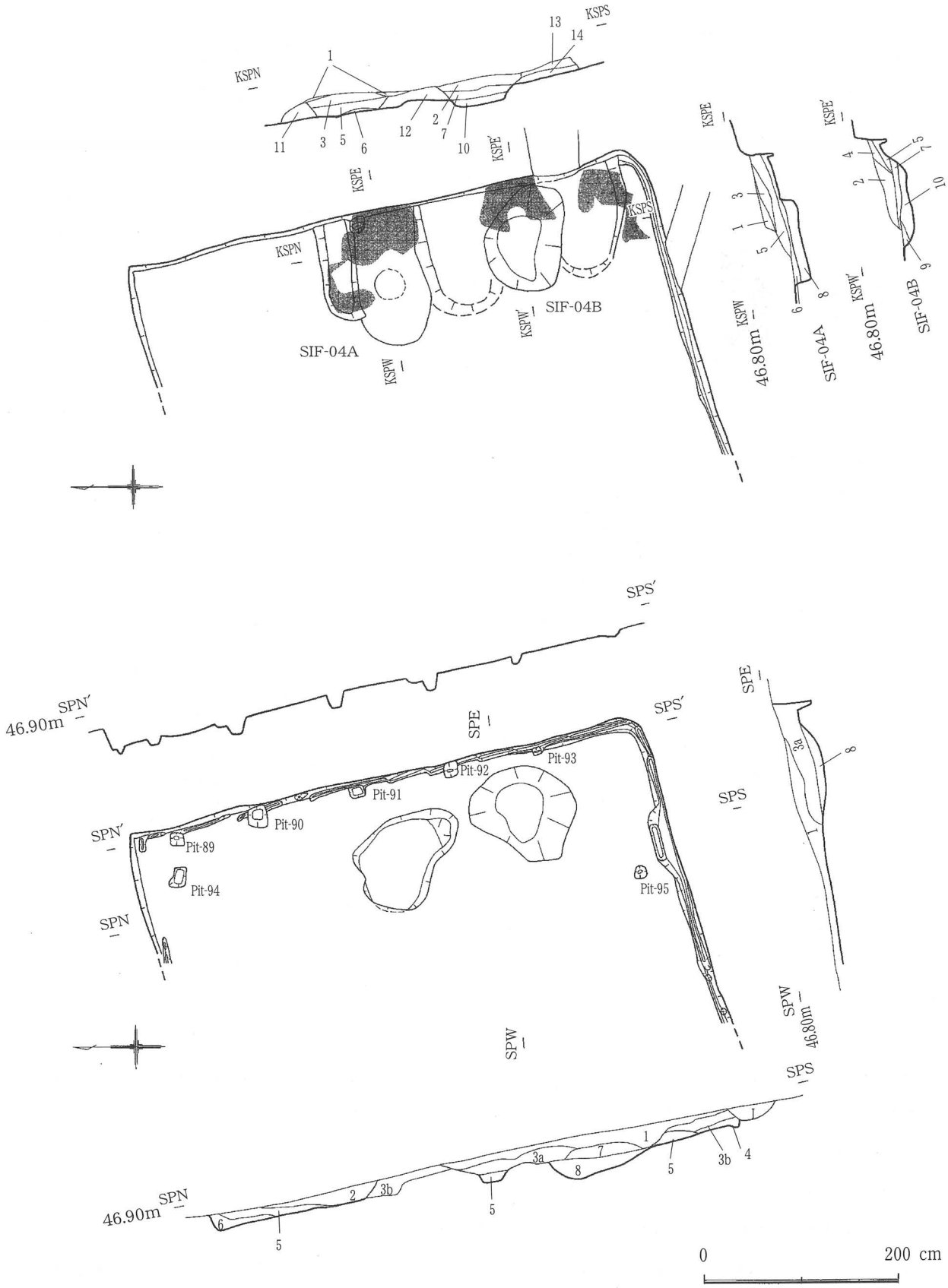


SI-04（図Ⅲ－9、表Ⅲ－5、写真Ⅲ－4・23）　C・D-26・27区にて検出した。当初SX-12として認識していたが、東壁沿いに焼土範囲を確認し、壁も明確に検出することができたためSI-04と変更した。9世紀後半の遺構と思われる。

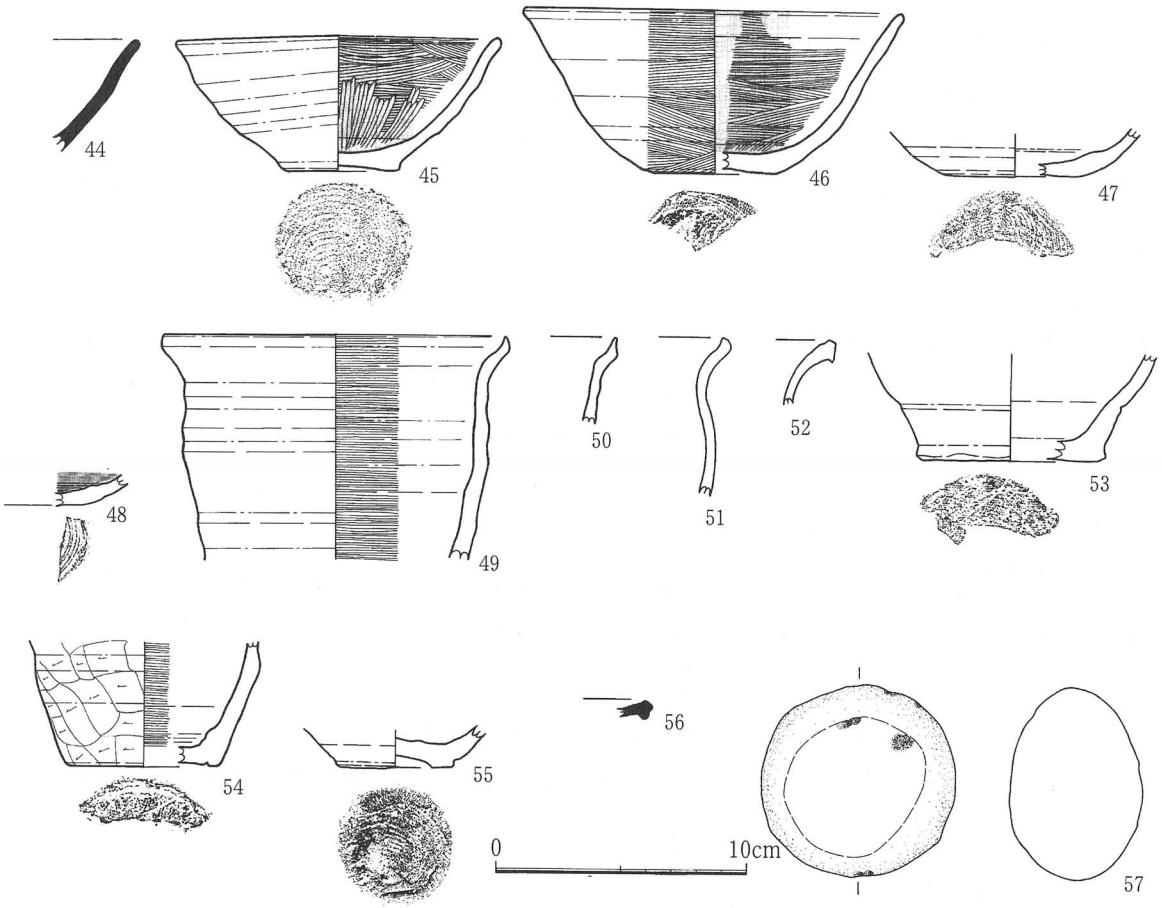
西半部は調査区外に延びるため全体範囲は確認できなかった。更に、上部は大きく削平を受け、特に西側は大部分が削平され貼床の一部が残存するのみだった。調査区内では南北540㎝、東西340㎝以上、東側で深さ35㎝を測る。南壁沿いに幅8㎝の壁溝が巡る。一部北壁沿いにも巡るようである。東壁にも同様の施設があるが、SIF-04により当初は確認できなかった。床は残存状態が余り芳しくないせいもあるが、SI-03と同様に脆弱である。北西隅付近には不整形のPit-94、南壁付近ではPit-95を検出した。

SIF-04によって覆われていた東壁には、SIF-04除去後に壁溝と同時に方形の柱穴が概ね90㎝間隔で5基（Pit-89～93）確認できた。遺構及びSIF-04の埋土堆積状況においては、壁溝及び腰板状の施設と思われ

図Ⅲ-9　SI-04平面図


KSPN
KSPS
KSPE
KSPE′
KSPW
KSPW′
SIF-04A
SIF-04B
46.80m
SPN′
SPN
SPS′
SPS
SPE
SPW
46.90m
Pit-89
Pit-90
Pit-91
Pit-92
Pit-93
Pit-94
Pit-95
0
200 cm

図Ⅲ-10　SI-04出土遺物



る痕跡が見られたが、SI-03やSI-08等で見られたように、板材を粘性土（ローム）により建物内側から固定する方法を取っていないため、SIF-04の付属施設と考えていた。全体を確認した結果、腰板を設置後に内側に角材を打ち込むことで、板を固定したものと考えられる。この方法は、今回の調査ではSI-04のみで確認された。SI-03同様、南壁の東寄り部分で壁の立ち上がりが緩く、段状を形成し、隣接して柱穴（Pit-95）を確認している。出入り口施設に関係する部分であろうか。

SIF-04A・B（表Ⅲ－6）　燃焼施設は住居跡東壁にて検出した。施設の性格が不明であるためカマドではなく「不明燃焼施設」として報告し、北側をSIF-04A・南側をSIF-04Bとする。

施設の構築にあたっては、最初に東壁に沿って何らかの屋内施設（この場合は板壁による土留め施設か）を構築した後で、東壁に平行に2箇所を土坑状に深く掘り込み、その両側と間に袖状にSIF-03で用いたものと同様、きめの粗い軟質な粘性土を盛り上げることで、あたかもカマドの様相を呈するかのような施設を作る。しかし、天井を構築せず、粘性土などを土坑内に積み上げ、結果として通常のカマド2基分に相当する平坦な土壇状の施設を構築している。この上面で燃焼行為を行っているものである。したがって、袖状の周辺部分及びSIF-04A・B埋土からは炭化材や焼土粒は検出できなかった。ただし、SIF-04A下部で検出した土坑内埋土の上部には、あたかも廃棄土坑であるかのようにカマドの廃棄土と思われる焼成痕のある土師器片・焼土・炭化物等が充填されていた。

本施設は、カマドを構成する袖・燃焼部・火床面・煙道の全ての要素が全く検出されず、施設上面で何らかの燃焼行為が行われていることなどから、カマドと同定するのは極めて困難であるとの認識に立ち、「不明燃焼施設」として報告する。なお、堆積状況からは、このSIF-04A・Bは同時に構築され、使用されていたと思われる。

出土遺物　床面直上から凹石（57）、埋土から内黒坏（45・46）を含む土師器坏（47・48）・甕（49～55）、須恵器坏（44）・壷（56）、不明金属塊（写真Ⅲ－23、240）が出土した。内面に赤色顔料を塗布した土師器坏（48）が出土している。

SI-05（図Ⅲ－11、表Ⅲ－7、写真Ⅲ－5・23・24）　C・D-25・26区にて検出した。当初確認段階ではSX-13としていたが、調査を進めるに従いSI-05に変更した。SD-08より古く、9世紀後半の遺構であると思われる。西側は調査区外に延び、南北370㎝、東西360㎝以上、深さ43㎝以上を測る。北・東・南壁に沿って、幅約22㎝、深さ25㎝の壁溝が巡る。床面を精査している段階でSI-05に関連すると思われるPit-87を検出した。また、東・北壁で壁溝と壁柱穴が認められた。

なお、SI-05掘り方東側に2基の柱穴（Pit-29・30）を検出したが、本住居跡に伴うものか判断できなかった。貼床は脆弱で、SI-03・04同様、床面にしまりが見られない。貼床層から、須恵器の技法を模倣したと思われる土師器壷（58）を検出した（検出状況を図Ⅲ－11中央図に示した）。出土状況から、埋納されたと見られる。口縁部から頸部にかけての破片は確認できない。人為的に破砕し、三日月状に広げて貼床中に納めたと思われる。前述のように貼床が薄く、上面が脆弱である。壺破片が埋納された床をそのまま用いることは困難であるため、床板など何らかの屋内施設の存在を考えざるを得ない。

その他、土師器壷以外の埋納遺物や有機質遺物の有無を示す痕跡は確認されなかった。

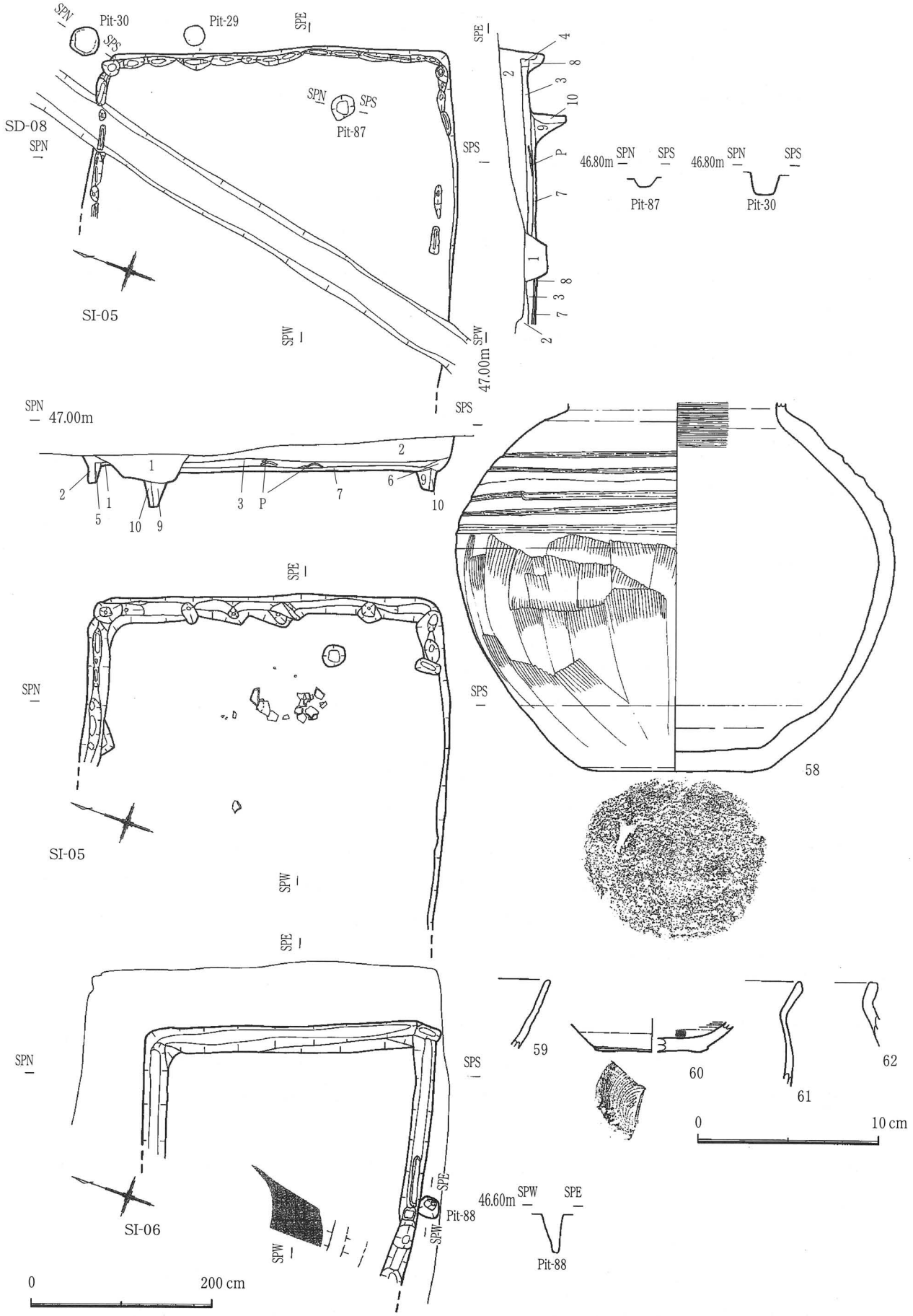
カマド等の燃焼施設と想定される痕跡は検出できなかった。西側に存在した可能性もあるが、調査区外であるため不明である。

SI-05は、SI-06の造り替えの建物である。SI-06の床をそのままに、燃焼施設などを除去した上に改めて床を貼ったと見られる。確認できる範囲では建物の軸方向はそのままに北側と東側に拡張しており、壁押さえの施設は造り替えられている。壁押さえのための板等を設置したと思われる溝（壁溝）は、北側ではほぼ壁と平行となるが、東側では端部が建物内側に入り込むような斜めの造作を呈している。要所を杭で押さえたような痕跡も見られ、SI-04と共通する手法が見られる。南側壁沿いには明確な壁溝が検出できなかった。これは、SI-03・04と共通する特徴でもある。

SI-05西側貼床土から焼土が多量に検出されたが、SI-06から造り替える際に燃焼施設の土が混入したものと思われる。

出土遺物　土師器壷（58）、埋土から土師器坏（59・60）・土師器甕（61・62）、内面に火襷痕跡が見られる土師器坏（60）が出土している。

図Ⅲ-11　SI-05・06平面図及びSI-05出土遺物



SI-06（図Ⅲ－11、表Ⅲ－7、写真Ⅲ－6）　C・D-25・26区にて検出した。確認当初はSX-13としたが、SI-06に変更した。西側は調査区外に延び、SI-05、SD-08より古い。東西280cm以上、南北324cmを測る。南壁が西側ではやや内側に入り込むようである。SI-05の床を除去した後に検出した。SI-05の拡張前と見られる。北・東・南側の壁溝を検出したが、西側については調査区外であるため不明である。壁溝はSI-05と異なり、直線的に整然と掘っている。埋土には壁溝の外側に板を立てていた痕跡が認められる。

一方、明確にSI-06に伴なうと考えられる柱穴を確認できなかったため、建物の上部構造は不明である。唯一、SI-05南東隅と南壁の外側にPit-88を検出したが、検出位置が壁溝の外側に相当するため、住居跡の外柱や出入り口施設など、何らかの奥内外施設に伴う可能性をも考慮できるものである。

燃焼施設は確認されなかったが、SI-05の床を除去後、西側で焼土範囲を検出した（図Ⅲ－11下図に示した）。この焼土は本住居跡の燃焼施設に伴う可能性がある。

遺物は貼床土から土師器が数点出土したが、いずれも細片であり、図示していない。

SI-07（図Ⅲ－12、表Ⅲ－8、写真Ⅲ－6）　D-23区にて検出した。当初確認時はSX-25としたが、調査後SI-07に変更した。竪穴建物跡の北西隅部分のみを検出したもので、東側は調査区外に延びる。東西70cm、南北210cmを確認した。遺物も少なく時期不明であるが、調査区東壁に見られる堆積状況によるとSD-10に切られるため、SD-10よりは古いと考えられる。遺構北西部で、床から掘り込まれる浅い柱穴（Pit-51）を検出したが、建物を構築する柱としてはやや貧弱な感がある。北壁・西壁では壁溝を検出したが、西壁南側では検出できなかった。人為埋め戻しにより一気に埋め戻されているようである。埋土34cm、床厚は8cmあるが他の竪穴建物跡と同様に床面がかなり脆弱である。

燃焼施設は確認されず、埋土中から焼土等を検出していないため、燃焼施設の有無については不明である。

Pit-51埋土内部より土師器胴部片が1点のみ出土したが、細片であり図示していない。

SI-08（図Ⅲ－12、表Ⅲ－9、写真Ⅲ－7・24）　C-23区にて検出した。確認時はSX-26としたが後にSI-08に変更した。出土遺物から9世紀後半主体と考えられるが、10世紀前半までの時代観も考慮すべきであろうか。北側・西側は調査区外に延びるため、竪穴建物跡の南東隅部を検出したことになる。床から掘り方の浅い柱穴を2基（Pit-65・66）検出した。遺構掘り方の東側で内傾するPit-56を検出した。遺構の外側であり、共伴する柱穴であれば外柱の可能性もある。壁溝が東・南壁沿いに幅6～8cm、掘り方幅10cmで巡る状況を確認した。埋土の状態からは、壁を板状のもので押さえ、その板をロームブロックで固定している様を明瞭に観察することができた。埋土は確認できた深さが30cm、4層からなり、貼床は10cm厚であった。床の構造材は他の建物跡と同様脆弱で、タタキ状のしまりは認められなかった。

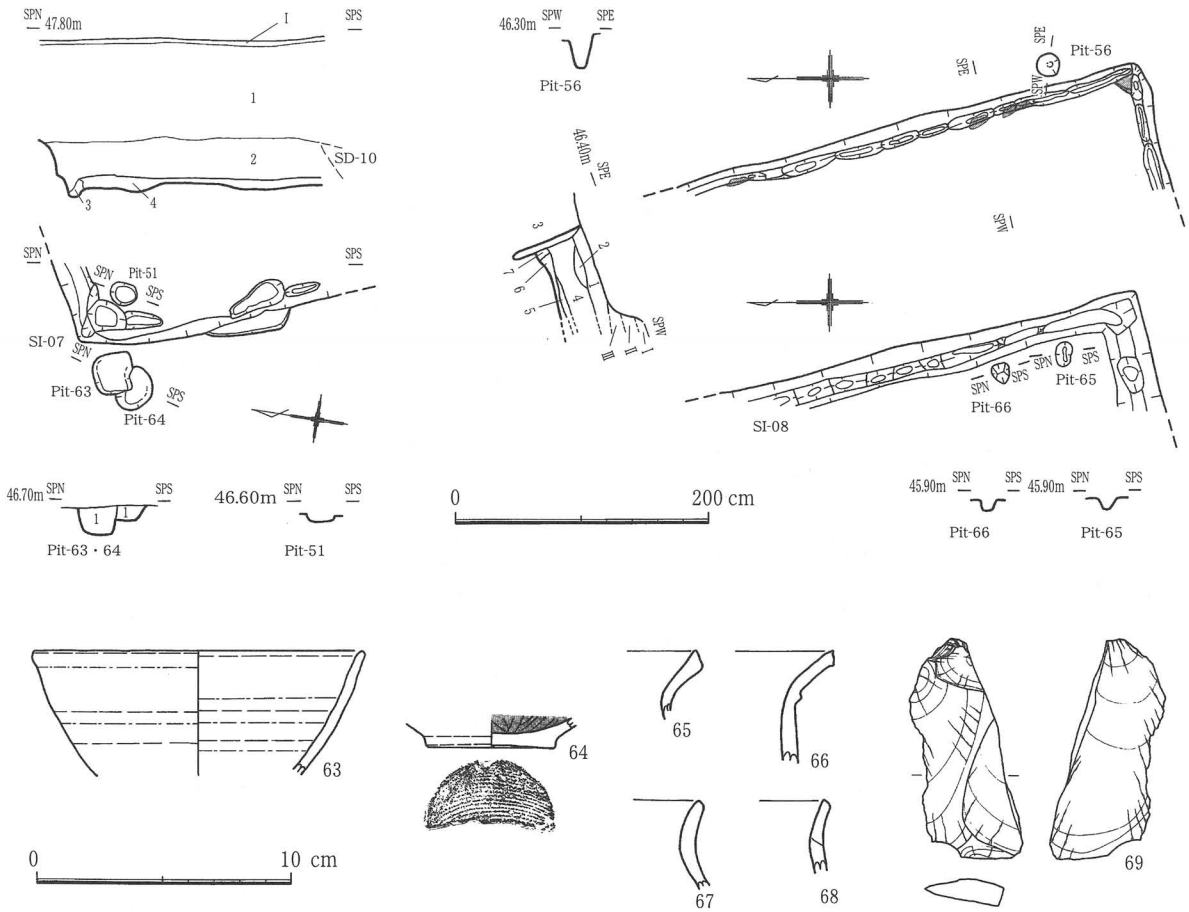
燃焼施設は調査部分では確認できなかったが、部分的な調査のため、有無については不明である。

出土遺物埋土から内黒坏（64）を含む土師器坏（63）・甕（65～68）、縄文剥片石器（69）などが出土している。

SI-09　SI-01東側で検出し、重複する部分を命名したが、SX-49等と区別できないためSX-53とし、SI-09は欠番とする。

SI-10（図Ⅲ－13、表Ⅲ－10、写真Ⅲ－8・25）　C・D-24区にて検出した。SX-21 b・22より新しいがSD-08より古い。9世紀後半から10世紀前半にかけての遺構と思われる。東・南壁に壁溝が巡る。確認が調査終了間際であったため、南西隅・北西隅の平面プランを確認し、東側を掘り下げるに留まった。このため、遺構

図Ⅲ-12　SI-07・08他平面図及び出土遺物

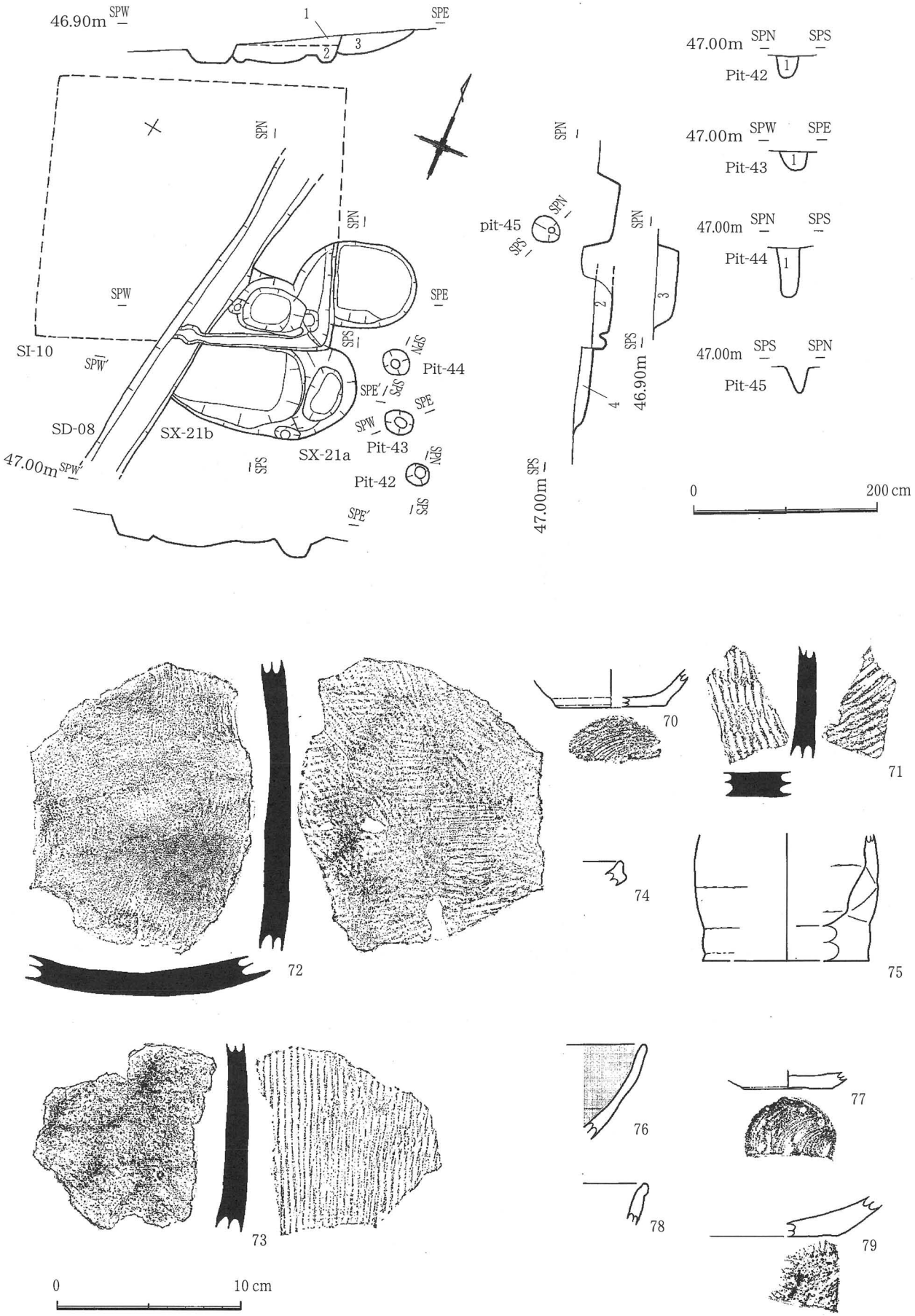


の内容について不明の点が多い。確認時に、SX-22と本遺構を覆って焼土塊が面的に厚く広がっていたため焼土の精査を優先したが、結果としてSD-08より新しいものであり、耕作による地業時に他遺構の燃焼施設に伴う焼土を押し広げたものである可能性が考えられた。

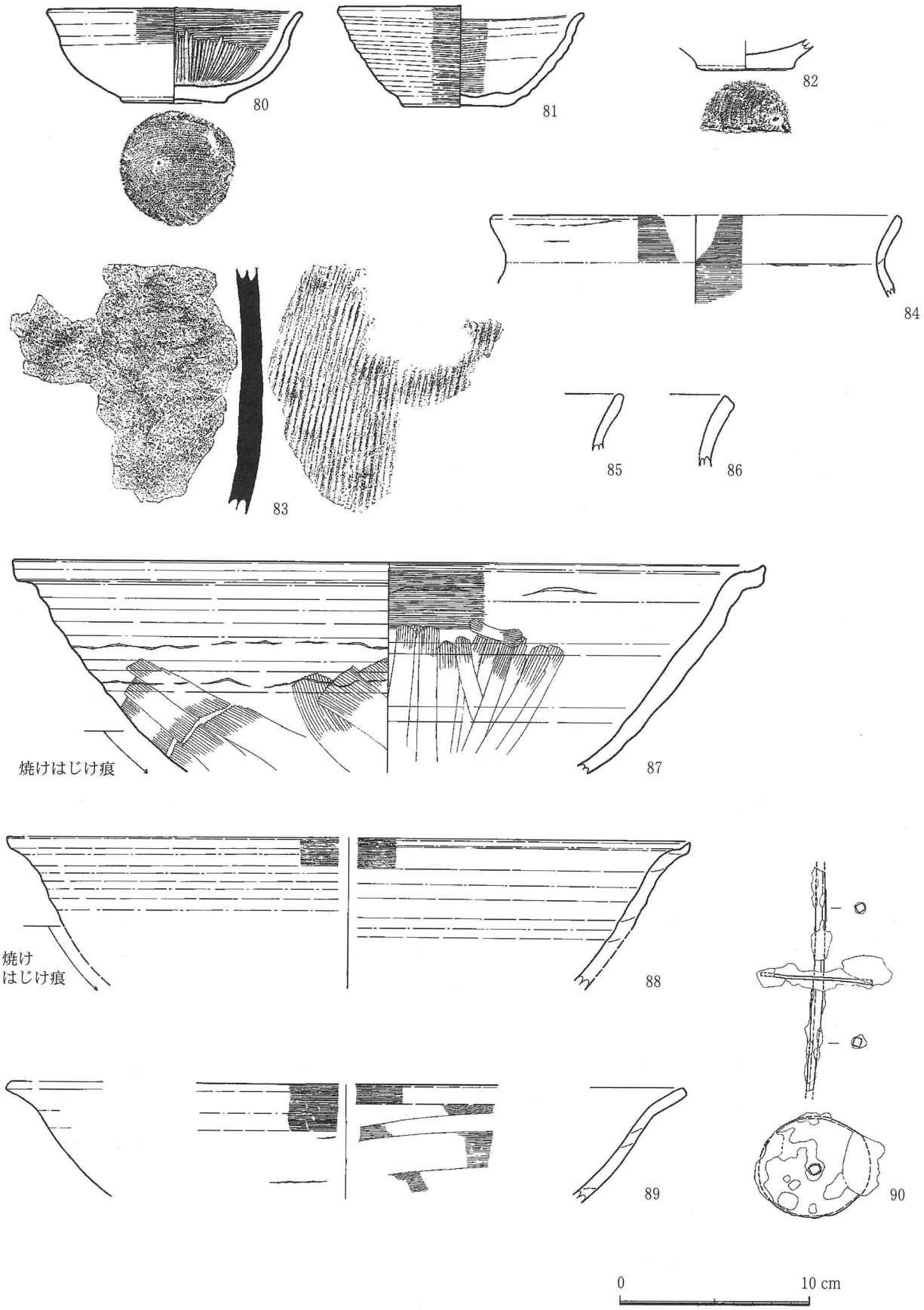
住居跡北東隅と想定される箇所は、SD-08内にあるため確認することができなかった。遺構西側は未掘の部分が多く詳細不明である。一方、南東寄りの遺構内からは長辺65cm、短辺58cmの方形の掘り込みが検出された。部分的に貼り床が確認されるが、全体としては床面を確認できなかった。いずれにせよ、広範囲で確認された焼土は攪乱層であったことが判明している。南東隅に本遺構に係わると思われる、若干内傾する柱穴を検出したが、他の柱穴確認ができる程調査を進められなかった。

カマドは南壁部分からは検出されなかったが、未調査部分に設置されていた可能性は考えられそうである。出土遺物埋土から土師器坏（81・82）・甕（84～86）・内黒坏（80・81）、須恵器（83）が出土したが、床面直上から土師器塝（87～89）、紡錘車（90）が出土した。土師器塝には、9世紀後半から10世紀前半までの明確な形態差が認められるため、遺構周辺の利用期間は長期にわたることが考慮される。

図Ⅲ-13　SI-10、SX-21・22平面図及びSX-21・22出土遺物



図Ⅲ-14　SI-10出土遺物



井戸跡　井戸跡と考えられる遺構は2基検出した。

SE-01（図Ⅲ－15、表Ⅲ－11、写真Ⅲ－8・25）　F-34・35区にて検出した。掘り込みが比較的上層からであり、検出地点の表土も若干陥没気味であることなどから、時代は現・近代までを想定できよう。当初SX-01として掘り下げを始めたが、表土から70cm程度掘り下げた地点で水が沸きはじめたことと、掘り方の形態からSE-01に変更した。

最終的には、検土杖も用いて遺構の底までの深さを推定したところ、地表から1.7mほど下がることが推測できた。SE-01は調査区に遺構の東半分しかかかっておらず、半截するしかないため、埋土が崩落する危険性が高くなる。このため、安全確保を考えそれ以上の掘り下げを断念した。遺構確認面の上面では、円形ではなく、直線をつなげた形状で地山面が掘り込まれているため、木枠状の土留め施設があった可能性が考えられる。

出土遺物　埋土から須恵器（91）、土師器が出土した。

SE-02（図Ⅲ－4、写真Ⅲ－1）　C-9区にて検出し、幅1.5mほどのほぼ円形を呈する。確認面で、土留めとして用いた板材が残存しており、埋土の観察や内容物等から近・現代の遺構と思われるため、掘り下げを行わず平面にての確認のみとした。

溝跡　溝跡と思われる遺構は20条ある。その他、近代以降の農地改良工事に伴い重機等により掘削されたと思われる痕跡も多い。東西方向に並行して検出された小規模の溝跡は、ほぼ近現代の遺構であると思われる。また、南北方向に巡る溝跡で、掘り方が極めて規格性のある逆台形を呈する遺構も、近現代と考えられる。

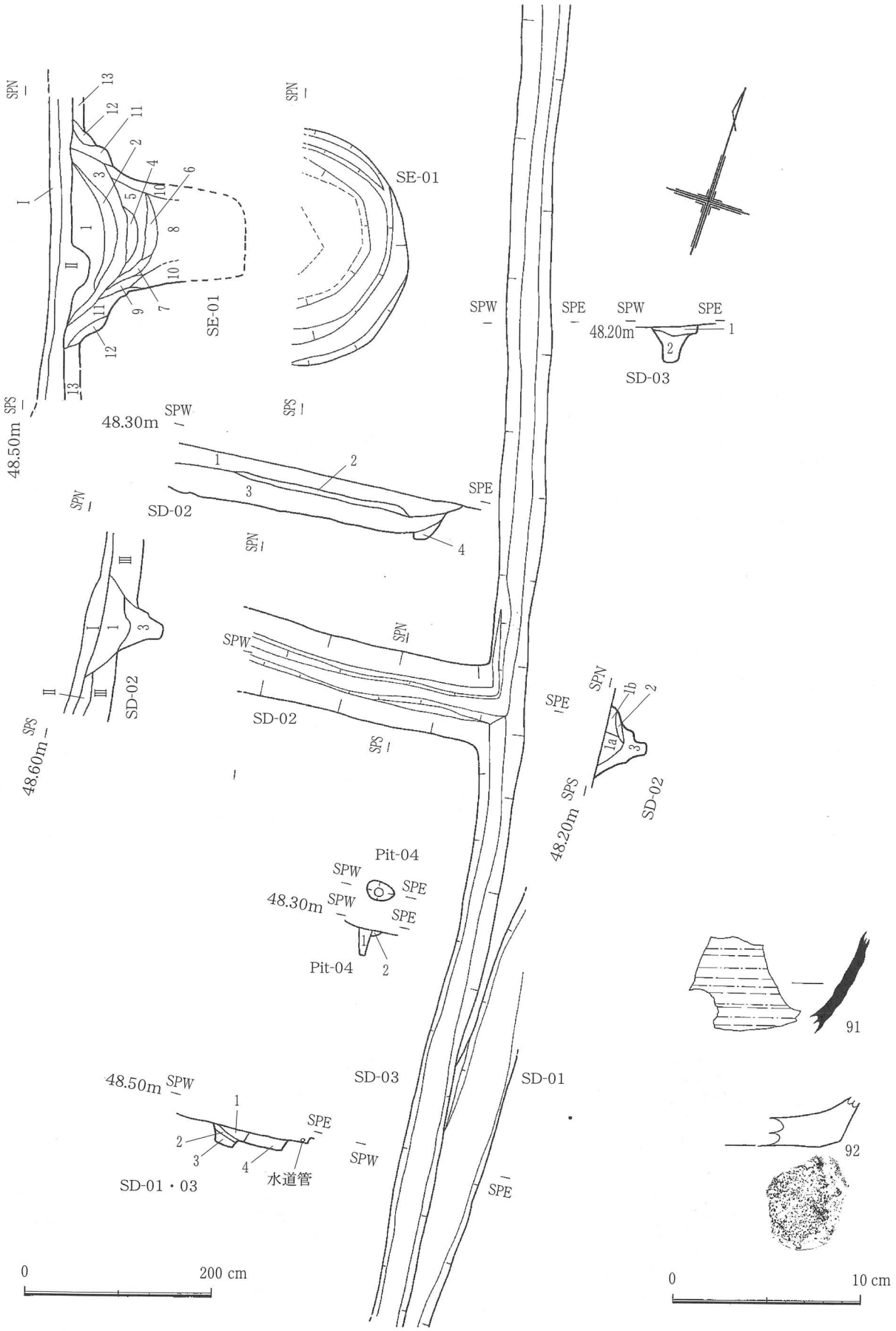
SD-01（図Ⅲ－2・15、表Ⅲ－12、写真Ⅲ－9）　G-35～36区にかけての約10mにわたり検出した南北方向の溝。南側は攪乱に切られ、北側は調査区外に延びている。検出上面幅約50cm、底面幅20cmの断面逆台形状を呈する。SD-03より古い。時代は不明であるが、現代溝である可能性が高い。

SD-02（図Ⅲ－15、表Ⅲ－13、写真Ⅲ－9）　F・G-35区にて検出した。検出上面幅112cm、底面幅13cmの逆台形状を呈する東西溝である。長さ312cm程度を確認したが、西側は調査区外に延びる。東側はSD-03と重複し、SD-02が新しい。現代の遺物を検出したSD-03より新しいことから、現代の溝と考えられる。

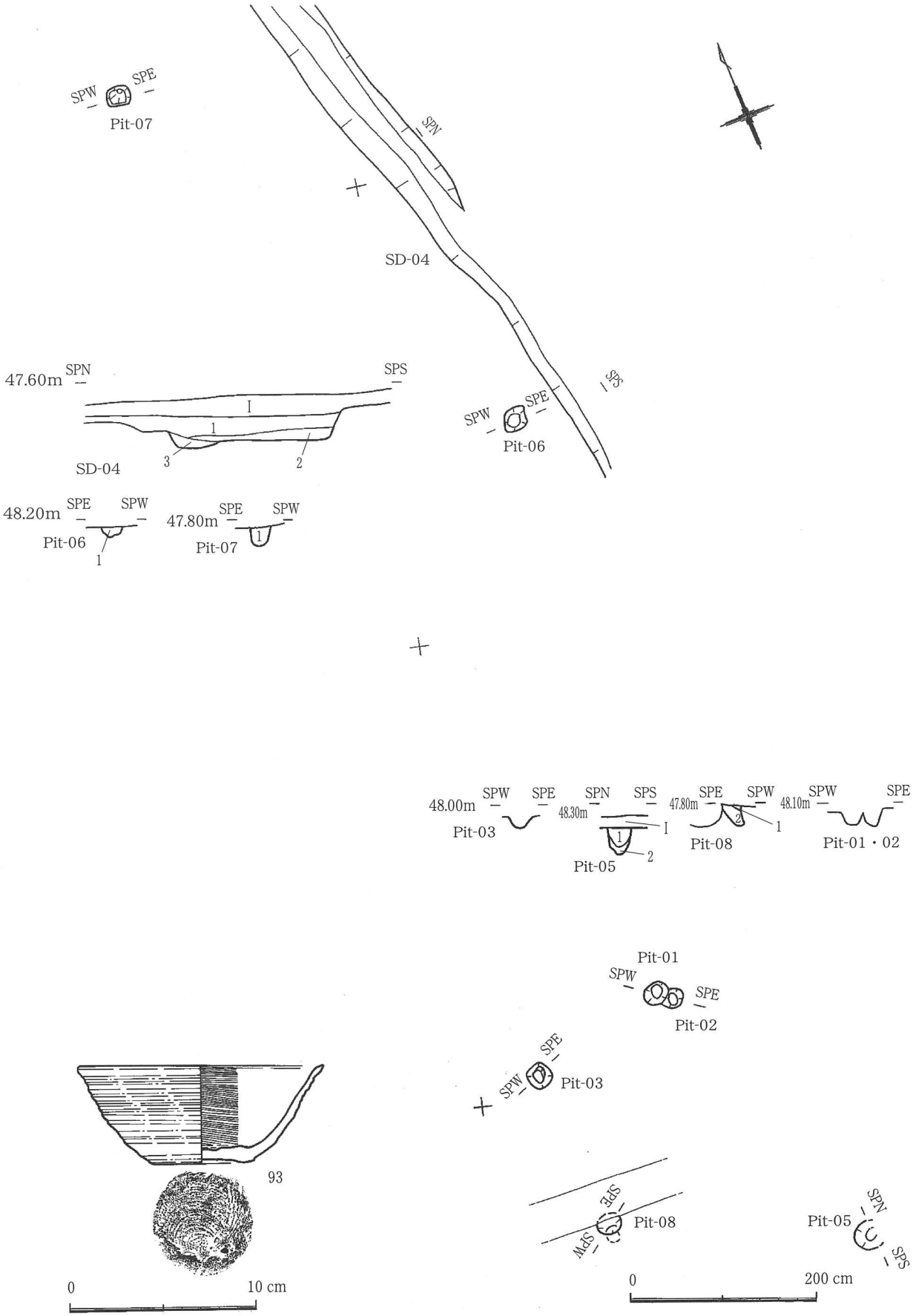
SD-03（図Ⅲ－2・15、表Ⅲ－12・14・15、写真Ⅲ－9・25）　G・F-33～37区にかけての34.5mに渡って検出した南北溝。断面は逆台形状を呈し、検出上面幅約50cm、底面幅20cm、深さ約20cmを測る。SD-01より新しく、底面直上からプラスチックの櫛を検出したため、現代の溝と考えられる。東側に現代の水道管が敷設　され、敷設のための溝に一部削平されている。埋土より土師器甕（92）が出土しており、周辺に古代の遺　跡が広がる可能性が考えられる。

SD-04（図Ⅲ－2・16・17・18・26、表Ⅲ－16～19、写真Ⅲ－9・23・26）　E・F-29～33区にかけての36mに渡って検出した南北溝。南北両端共に調査区外へと伸びる。SX-08・09・49、SD-20より新しく、SX-04より古い。検出上面幅約50cm、底面幅20cm程度、深さ25～30cmの断面逆台形状を呈する。埋土中からガラス等が出土しており、現代溝と考えられる。道路の側溝または畑の境界溝等として設置されたものと思われる。

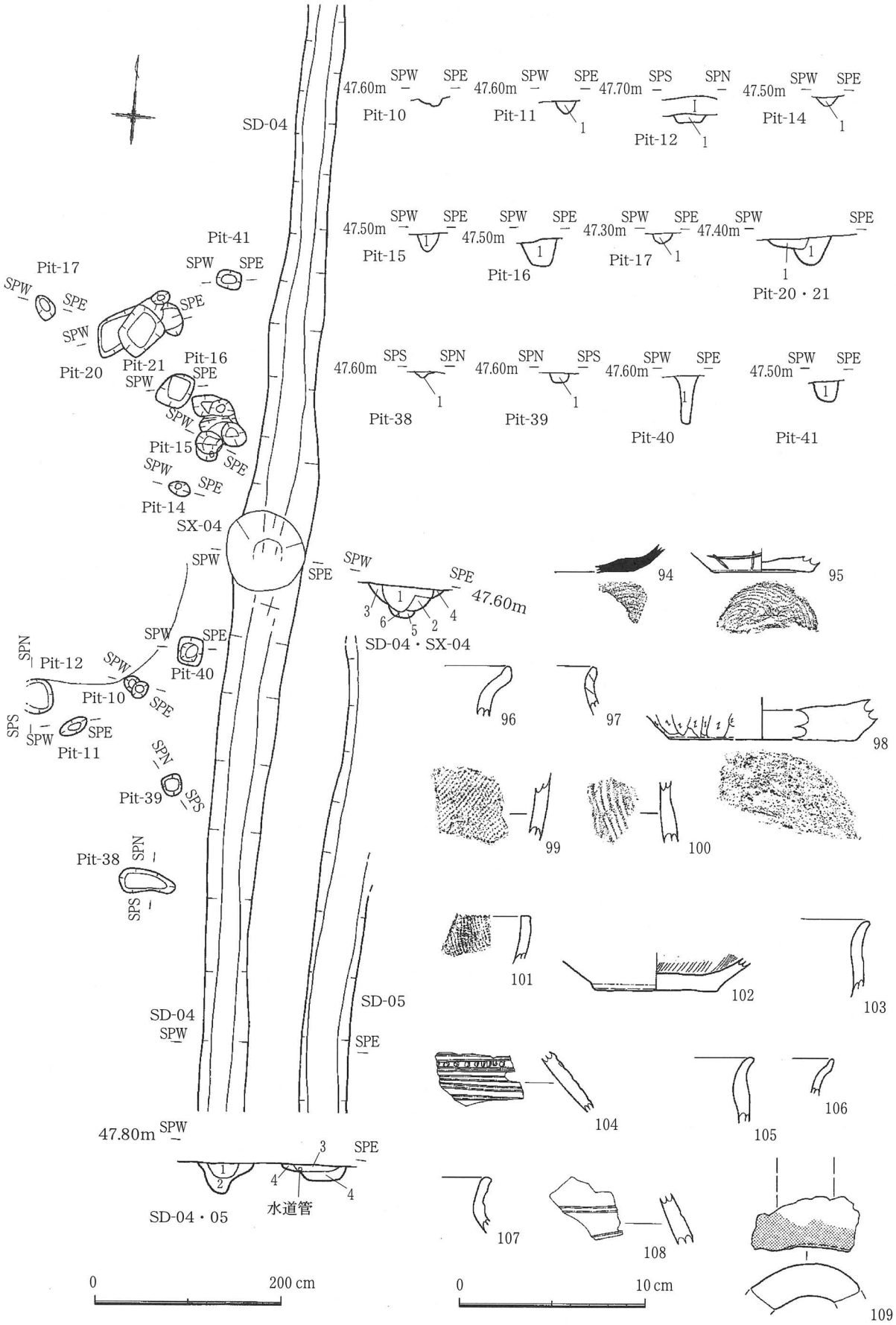
図Ⅲ-15　SE-01、SD-01・02・03、Pit-04平面図及びSE-01出土遺物



図Ⅲ-16　SD-04、Pit-01・02・03・05・06・07・08平面図及び出土遺物



図Ⅲ-17　E-30区周辺Pit群、SD-04・05、SX-04平面図及びグリッド一括遺物



出土遺物　須恵器坏（94）、土師器坏（95）・甕（96～98）、縄文土器深鉢（99・100）や現代磁器・鉄滓（写真Ⅲ－23、242）、ガラス片など幅広い時代の遺物が検出された。南側調査区で検出されたSD-01・03との関連は不明であるが、SD-03とは類似の形態・規模であり、東壁でⅠ層から掘り込まれる、極めて新しい遺構であると確認した。

SD-05（図Ⅲ－2・17、表Ⅲ－17、写真Ⅲ－9・26）　E-31～32区にかけての8.4mに渡って検出した南北溝。南北両端共に調査区外へと延びる。時期は不明であるが、近現代の遺構である可能性が高い。検出上面幅50cm、底面幅30cm、深さ約15cmの逆台形状を呈する。1層は現代の水道管が敷設される、極めて新しい層である。埋土からは縄文土器（101）などが出土した。

SD-06（図Ⅲ－18、表Ⅲ－20、写真Ⅲ－9・26）　D-29区で6.5mに渡って検出した、沢目に流れ込む南北溝。9世紀後半の遺構と思われる。南側は調査区外に延びるが深さ50cmと残りが良く、北側は次第に細く浅くなりながら沢目に落ち込む。検出上面幅は112～65cm、底面幅は45cm、深さ50～10cmの逆台形状を呈する。西側の立ち上がり部分でPit-22と重複し、本遺構が古い。

出土遺物　埋土から須恵器坏（110）、土師器坏（111）、須恵器壷（112）などが出土した。

SD-07（図Ⅲ－19、表Ⅲ－21、写真Ⅲ－10・27）　D-27区にて検出した南北溝。検出上面幅70～100cm、底面幅13～20cm、深さ36cmを測る。断面は緩やかなU字状を呈する。遺構の時期は不明である。南北両側は調査区外に延びる。南側で検出されたSD-04・05とは掘り方が異なることから別遺構であると思われる。SX-20より新しく、東西方向に見られる攪乱現代溝に4箇所切られている。

出土遺物　埋土から土師器甕底部片（123）・赤色顔料の付着した土師器（120・121）、刻線文のある擦文土器（122）が出土した。

SD-08（図Ⅲ－3他、表Ⅲ－7・22、写真Ⅲ－10・11・28）　C・D-12～26区にかけての約144mに渡って検出した南北溝。基本的には北側調査区全体で確認できる。時代不明であるが、逆台形状の掘り方と壁の状態からは、近現代の溝である可能性が高い。検出上面幅50cm、底面幅30cmを測る。北側調査区にて検出した主な遺構と重複するものが多く、それら全てより新しい。このため、旧遺構と接合関係を有する遺物も多数出土した。

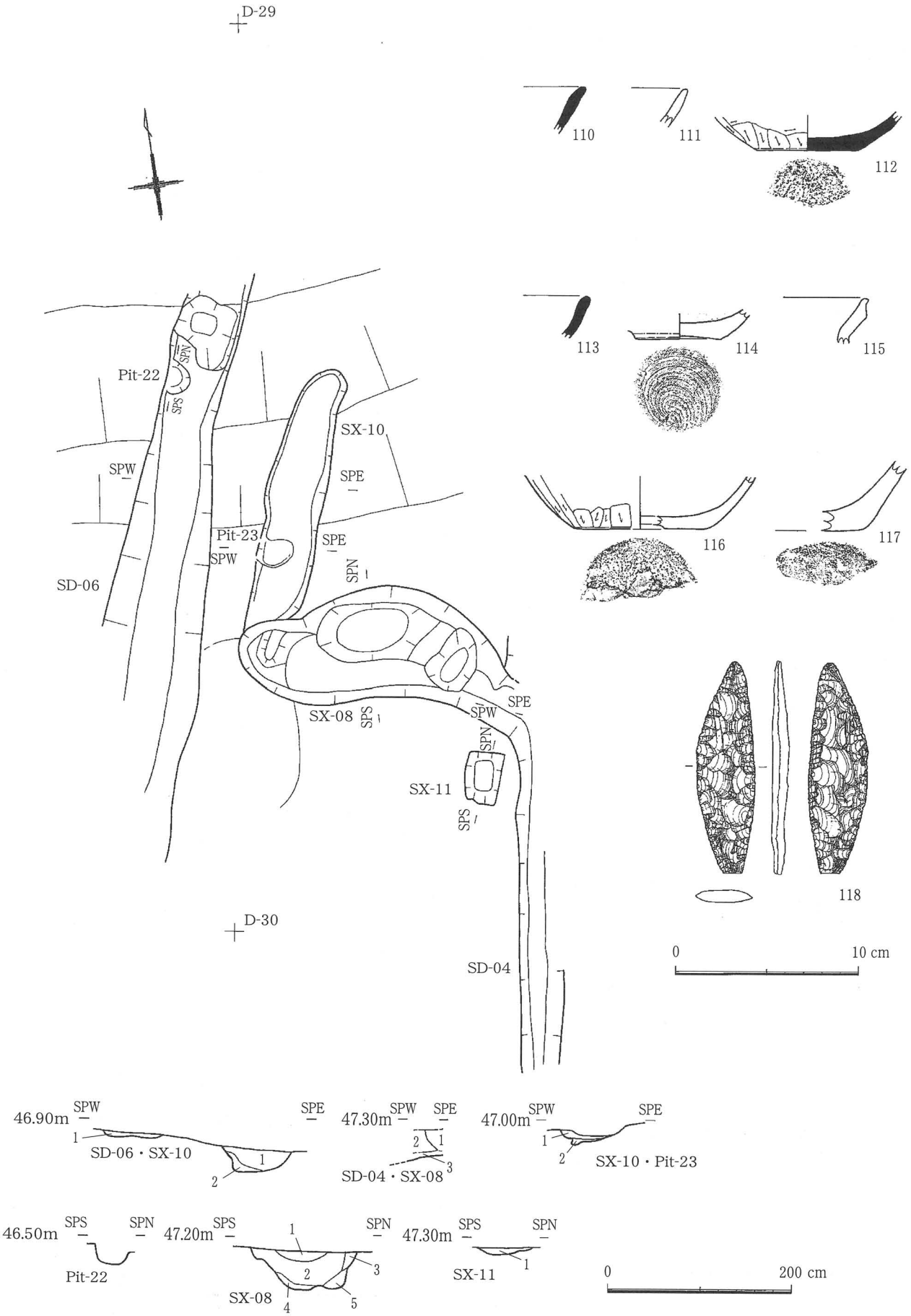
出土遺物　小柄（166）、縄文時代の石鏃（167）の他、土師器片坏（159）・甕（161～165）、須恵器の火襷痕を有する坏口縁部（158）などが出土した。

SD-09（図Ⅲ－20、表Ⅲ－23、写真Ⅲ－10・27）　C・D-23区にて検出した東側から西側に向かって流れる東西溝。SD-10より新しく、SD-08より古い。断面はV字形で、検出上面幅約120cm、底面幅12cmを呈し、深さ52cmを測る。10世紀前半を中心とした平安時代の溝と思われる。埋土からは改修痕が見られることから、少なくとも2時期にわたる長期間の使用が考えられる。南西側の上面は攪乱により削平されている。

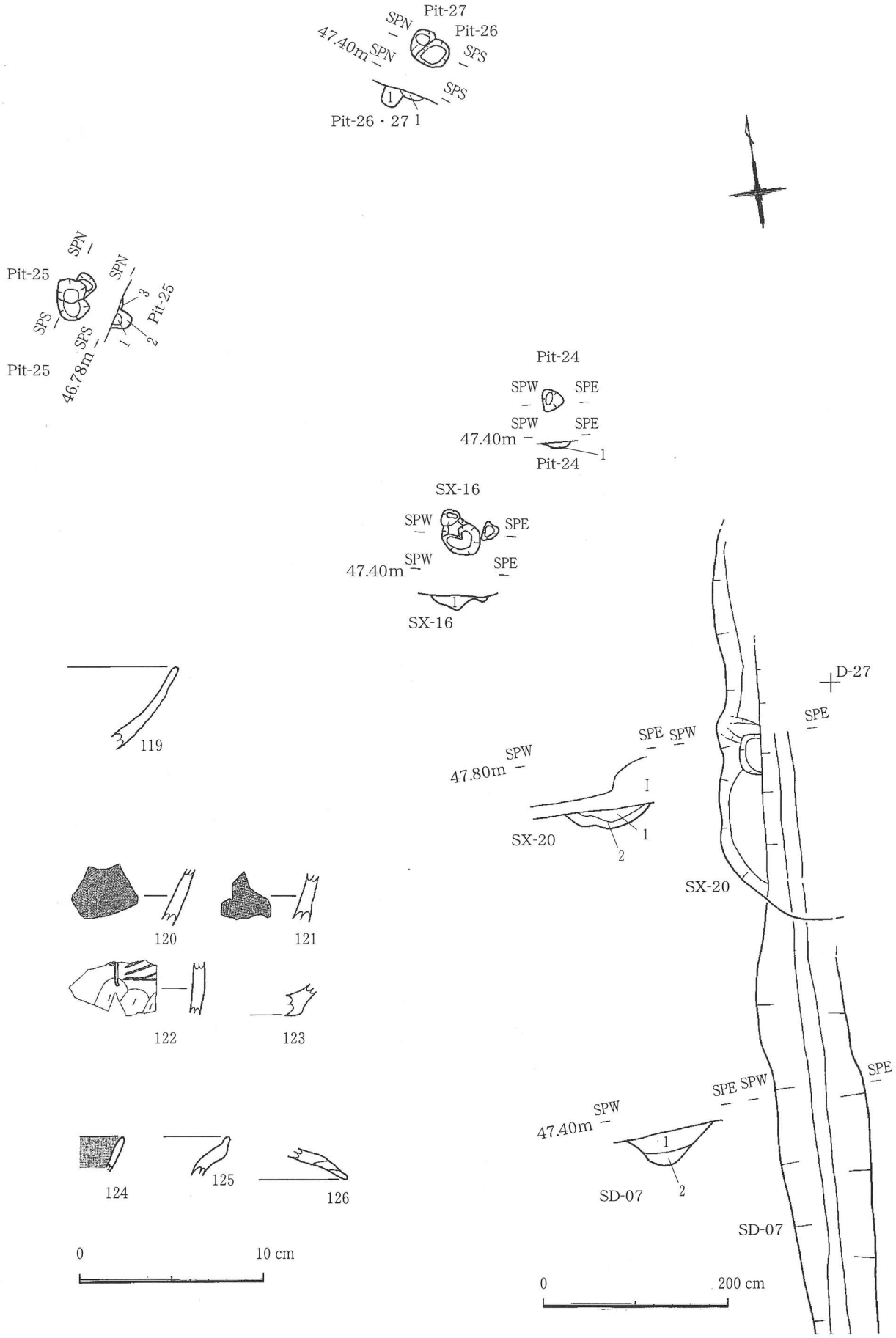
出土遺物　土師器甕口縁部（127・128）、不明鉄製品（129）など、遺物は少量の出土を見た。

SD-10（図Ⅲ－20・21、表Ⅲ－23、写真Ⅲ－10・27・28）　C・D-23区にて検出した東側から西側に向かって流れる東西溝である。SD-08・09・SX-31より古い。埋土から9世紀前半から10世紀前半までの遺物が出土しているため、今回の調査では確認されなかったが、周囲に9世紀前半に比定される集落が広がっていた

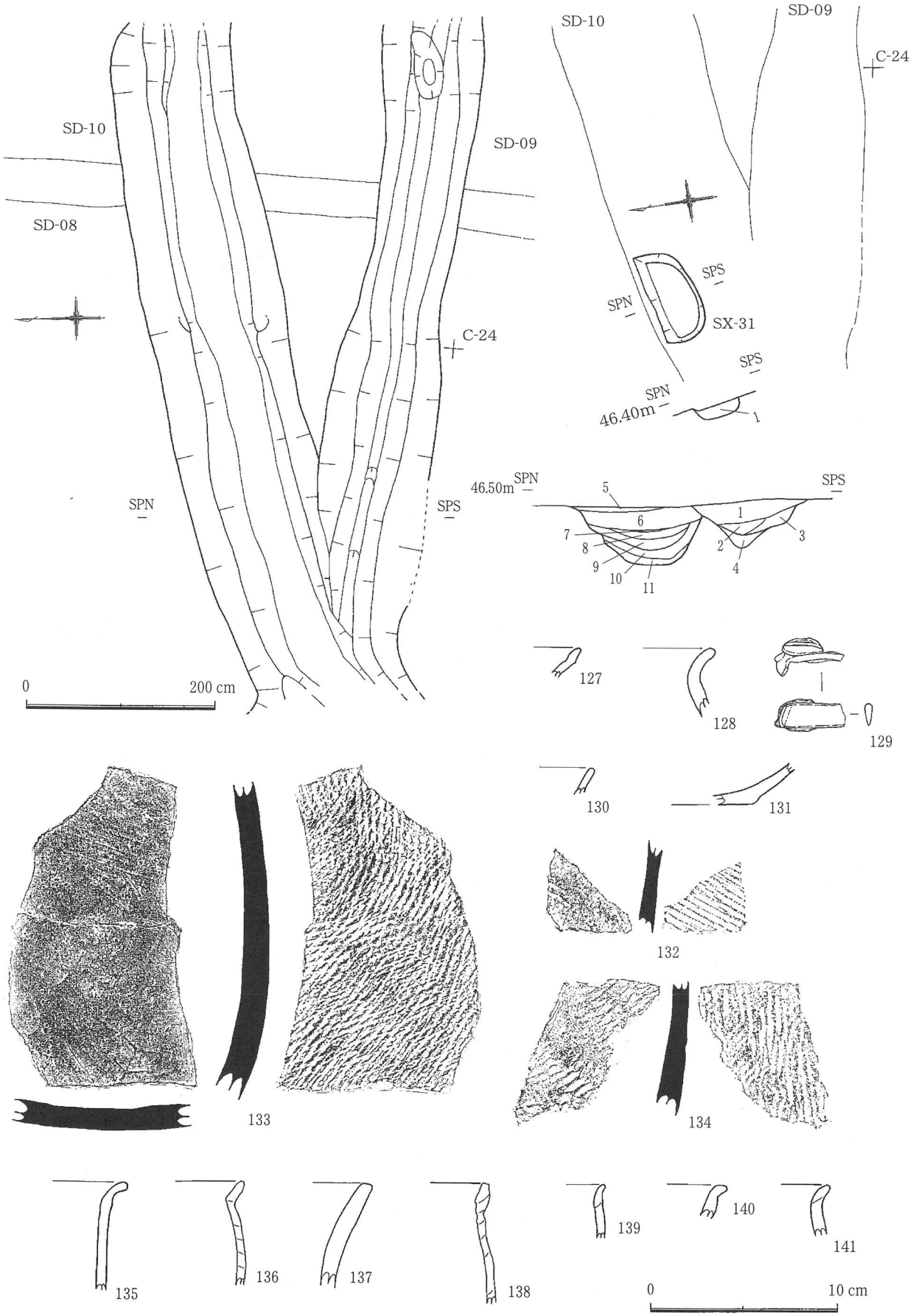
図Ⅲ-18　SD-04・06、Pit-22・23、SX-08・10・11平面図及び出土遺物



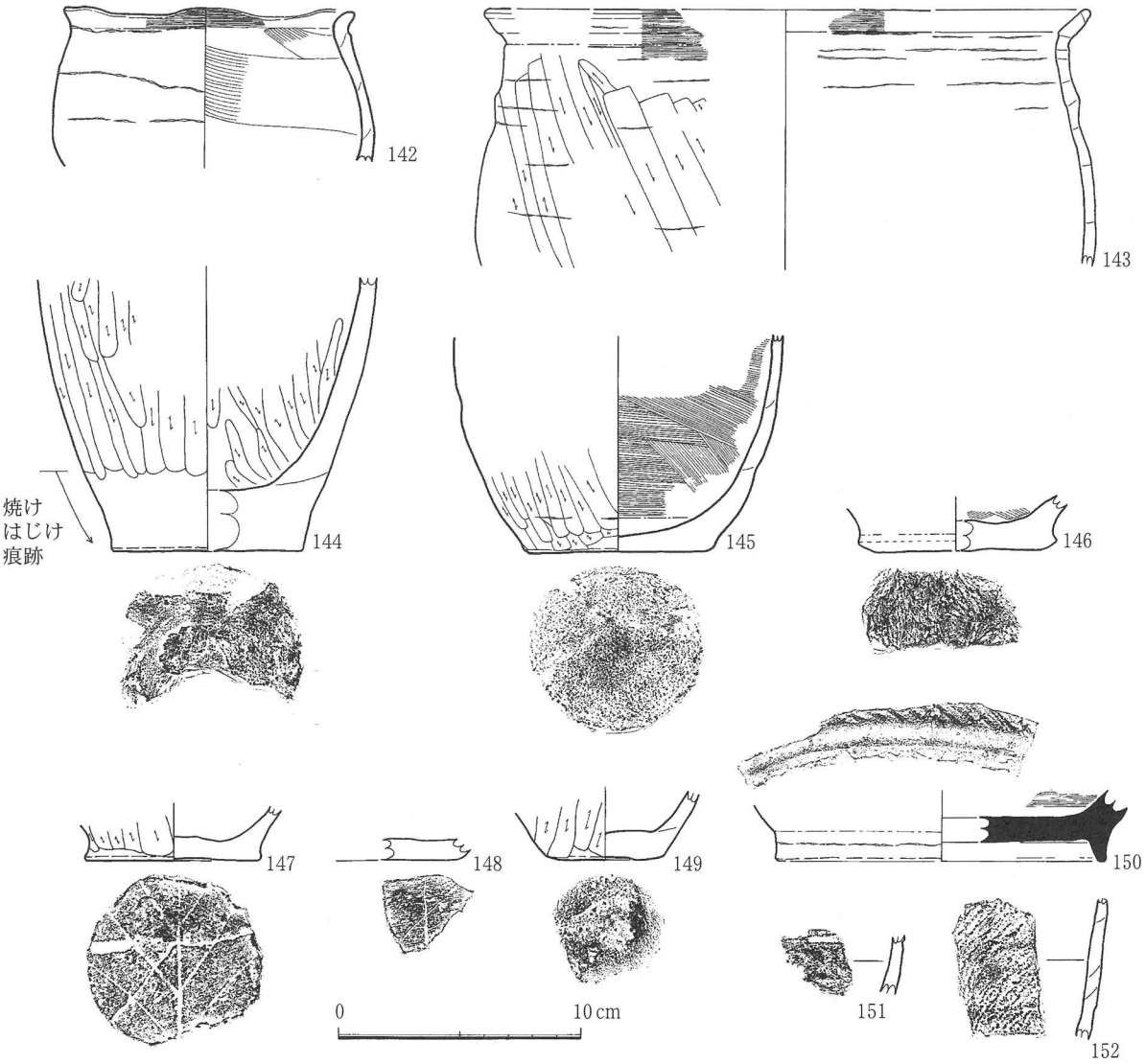
図Ⅲ-19　SD-07、Pit-24・25・26・27、SX-16・20平面図及び出土遺物



図Ⅲ-20　SD-09・10、SX-31平面図及び出土遺物



図Ⅲ-21　SD-10出土遺物



可能性を考慮したい。

断面は逆台形状を呈するが、近現代と思われる溝よりも台形の広がりが顕著で、規模も大きい。検出上面幅140㎝、底面幅40㎝、深さ65㎝を測る。埋土層7枚、2層下面に硬化した面があり、その硬化面の下から、黒色土主体で含水率の高い堆積層に変わる。堆積状況及び出土遺物の年代観から長期間の利用が考えられる。溝跡埋土の2層前後で、遺物とともに礫が多量に検出されている。

出土遺物　土師器甕（135～149）、須恵器甕（132～134）・表面に叩き痕を有する須恵器壷と思われる不明高台部（150）、縄文土器深鉢胴部（152）・沈線のある縄文土器胴部（151）などが出土した。坏の出土はほとんど見られなかった。土師器甕の底部は砂目・木葉痕の別がある。埋土から魚骨などの細片と思われる骨を検出した。

SD-11（図Ⅲ－22、表Ⅲ－24）　**C-22**区にて検出した東西溝。調査区中央の約120㎝ほどの範囲について掘り下げ調査を行った。時期不明である。検出上面幅128㎝、底面幅25㎝、深さ52㎝を測る。西側で攪乱を受けていることから、残りはあまりよくない。南側に一つ段がつく。遺物なし。

SD-12（図Ⅲ－22、表Ⅲ－25、写真Ⅲ－11・28）　**C-22・23**区にて検出した東西溝。調査区中央の約170㎝

ほどの範囲について掘り下げ調査を行った。断面は緩やかなU字形を呈し、検出上面幅66㎝、底面幅32㎝、深さ23㎝を測る。平安時代の遺構と思われる。

出土遺物　埋土から「黒色土器」(153)が出土した。内外面共に黒色を呈する坏で、胎土が緻密で黒色を呈する。内面は丁寧に磨きが施され、外面もナデが全面に施されている。静止糸切り技法にて切り離しが行われている。

SD-13（図Ⅲ－22、表Ⅲ－26、写真Ⅲ－11）　C-23区にて検出した南北溝。断面は緩やかな逆台形状を呈し、検出上面幅90～100㎝、底面幅60～70㎝、全長350cm、深さ33㎝を測る。南北を攪乱により削平される。時期不明である。

SD-14（図Ⅲ－29、表Ⅲ－22、写真Ⅲ－29）　C・D-22区にて検出した東西溝。SX-32・33、SD-18・19より新しいが、SD-08より古い。時期不明である。断面は緩やかなU字形を呈し、検出上面幅60㎝、底面幅30㎝、深さ18㎝を測る。

出土遺物　埋土より土師器坏（183）・甕（185～187）、須恵器甕（184）が出土している。

SD-15（図Ⅲ－23、写真Ⅲ－28）　C-20区にて検出した東西溝。SD-08より古く、SX-39より新しい。断面は逆台形状を呈し、検出上面幅40㎝、底面幅25㎝、深さ24㎝を測る。埋土から土師器片、縄文剥片石器（168）、現代磁器片などが出土したため、現代の遺構と考えられる。

SD-16（図Ⅲ－23）　D-19区にて検出した東西溝。幅38㎝、長さ100㎝ほどを確認した。SD-08より古い。東壁沿いを掘り下げたが掘り方が判然とせず、近現代の攪乱溝の可能性も考えられる。

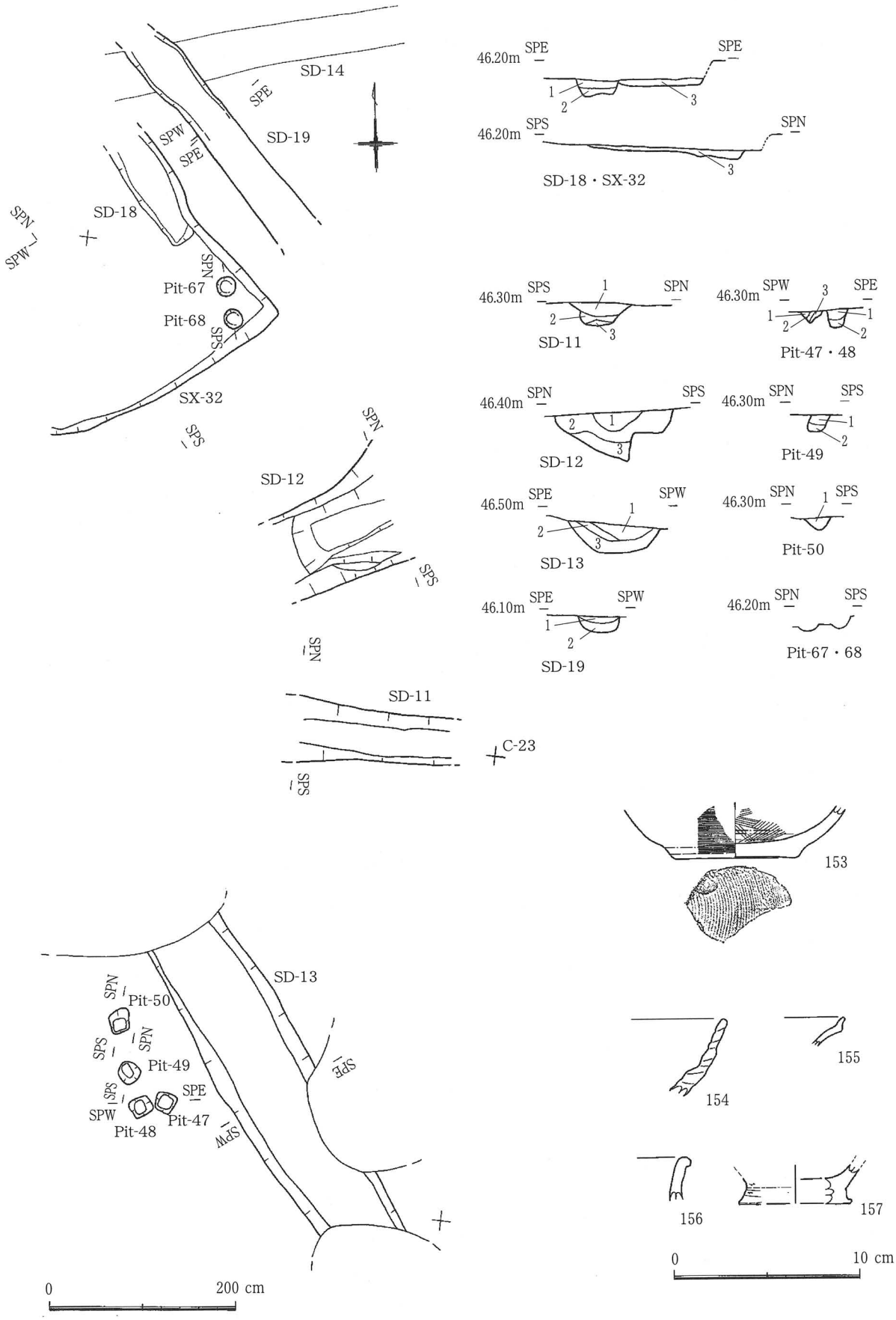
SD-17（図Ⅲ－4、表Ⅲ－27、写真Ⅲ－11）　C-18区にて検出した東西溝。Pit-57より古い。検出上面幅33㎝、長さ1m程度を確認したが、掘り方が判然としない。時期不明である。

SD-18（図Ⅲ－22、表Ⅲ－28、写真Ⅲ－11・18・28）　C-22区のSX-32内の東側にて検出した南北溝。SX-32より新しい。検出上面幅47㎝、底面幅32㎝、深さ15㎝を測る。上部はSX-32同様に削平されているようである。埋土から手づくねの鉢（坏）と思われる、粘土積み上げ痕を明瞭に留め、焼きの甘い口縁部片（154）と土師器甕口縁部片（155）が出土した。時期不明である。

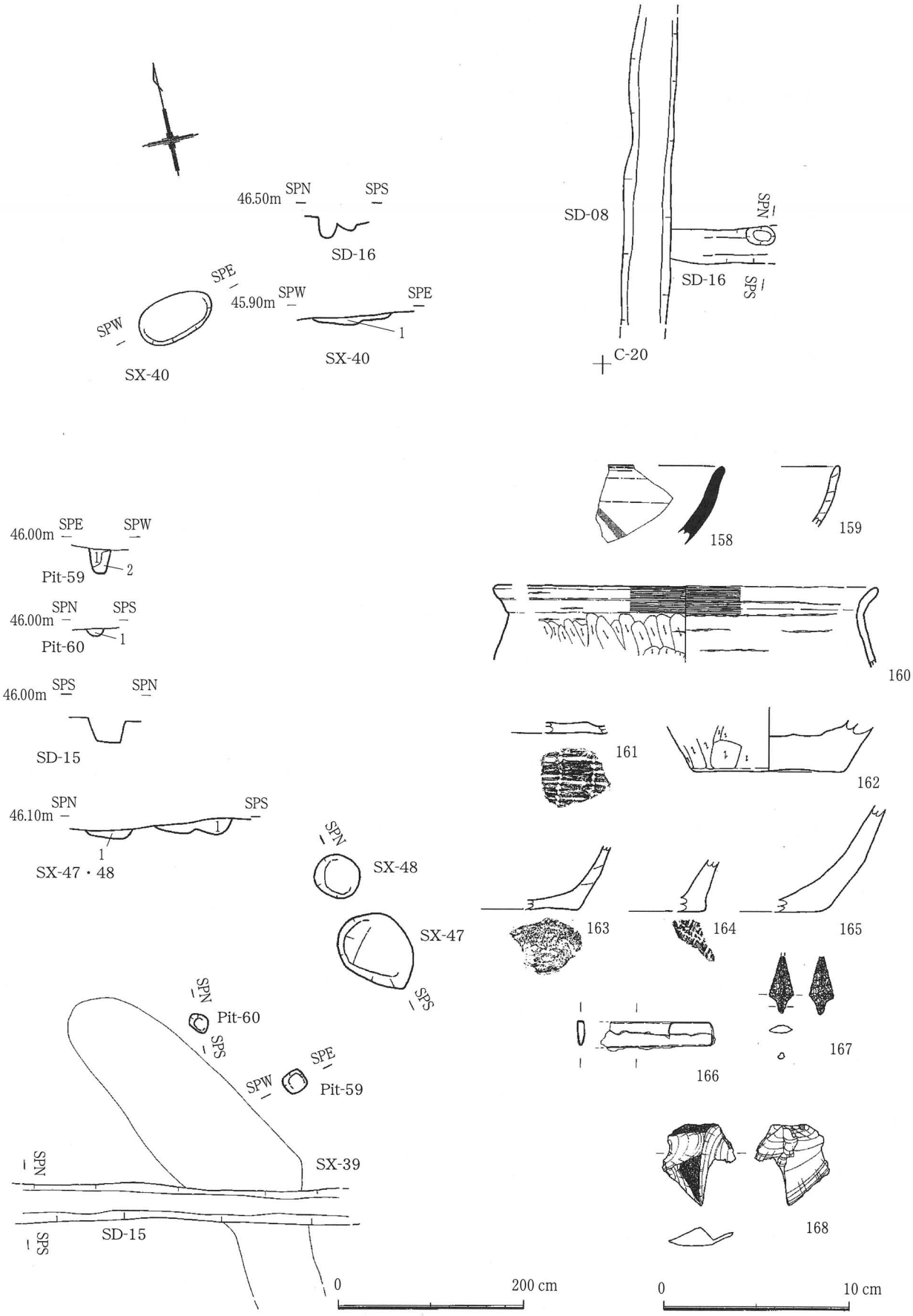
SD-19（図Ⅲ－22、表Ⅲ－29、写真Ⅲ－11）　C-22区にて検出した南北溝。SD-14より古く、北側は調査区外へ延びる。南側は攪乱等のため判然としない。断面は浅いU字形を呈し、検出上面幅約43㎝、底面幅約36㎝、深さ17㎝を測る。SD-18と方向が一致している。SD-18同様上部は削平されているようだ。時期不明である。

SD-20（図Ⅲ－5・21、表Ⅲ－30）　E-30区、SD-04底面にて検出した。東西溝の可能性がある。SI-01より古い。SI-01と重複はしないが、隣接するSD-04から東側には延びそうである。時期不明である。調査の最終段階で確認し、現在使用中の道路の下に伸びることから、SD-04検出範囲内だけを掘り下げて調査を行った。検出上面幅73㎝、底面幅55㎝を測る。掘り方断面は逆台形状を呈するが、堆積状況の観察によると、その後V字形を呈する溝として再利用された可能性が考えられ、2時期以上の使用が考えられる。埋土より土師器坏口縁部片（16）・甕（17・18）が出土した。

図Ⅲ-22　SD-11・12・13・18・19、Pit-47・48・49・50・68、SX-32平面図及び出土遺物



図Ⅲ-23　C-20・21区周辺　SD-08・15・16、SX-40・47・48、Pit-59・60平面図及び出土遺物



柱穴跡　柱穴跡は95基以上検出したが、番号をつけて精査した確実なもののみ報告する。なお、ほとんどの柱穴が時期不明であるため、時期についての記載は省略する。

Pit-01（図Ⅲ－16、写真Ⅲ－12）　F-33区にて検出した。東西28cm、南北23cmの円形を呈する。深さ13cmを測る。Pit-02より新しい。出土遺物はない。

Pit-02（図Ⅲ－16、写真Ⅲ－12）　F-33区にて検出した。西側をPit-01に切られるが、平面は20cm以上の円形を呈すると思われる。深さは17cmを測る。出土遺物はない。

Pit-03（図Ⅲ－16、写真Ⅲ－12・26）　F-33区にて検出した。26cmの隅丸方形を呈し、深さは13cmを測る。埋土より土師器坏（93）が出土している。

Pit-04（図Ⅲ－15、表Ⅲ－31、写真Ⅲ－12）　F-35区にて検出した。長軸30cm、短軸20cmの楕円形を呈し、深さは30cmを測る。出土遺物はない。

Pit-05（図Ⅲ－16、表Ⅲ－32、写真Ⅲ－12）　F-33区にて検出した。東側は調査区外であるが、南北32cmの円形を呈する。深さは32cmを測る。埋土から須恵器坏片が出土したが、細片であり図示できなかった。

Pit-06（図Ⅲ－16、表Ⅲ－33、写真Ⅲ－12）　F-32区にて検出した。25cmの方形を呈する。深さは6cmを測る。出土遺物はない。

Pit-07（図Ⅲ－16、表Ⅲ－34、写真Ⅲ－12）　E-32区にて検出した。南北18cm、東西22cmの方形を呈する。深さは11cmを測る。出土遺物はない。

Pit-08（図Ⅲ－16、表Ⅲ－35、写真Ⅲ－12）　F-33区にて検出した。北側を攪乱溝によって削平されているが、東西27cmの円形を呈すると思われる。掘り方が内傾し埋土から新しい植物の腐食質遺体が検出されたことから、近年りんごの支柱穴として機能した可能性も考えられる。出土遺物はない。

Pit-09　欠番とする。

Pit-10（図Ⅲ－17、表Ⅲ－36）　E-31区にて検出した。長軸20cm、短軸15cm、深さ10cm程度の楕円形を呈するが、北西側に根攪乱を受けていた。出土遺物はない。

Pit-11（図Ⅲ－17、表Ⅲ－37）　E-31区にて検出した。長軸32cm、短軸15cmの楕円形を呈する。深さ14cm。出土遺物はない。

Pit-12（図Ⅲ－17、表Ⅲ－38）　E-31区にて検出した。西半部は調査区外である。南北34cm、東西30cm以上の方形を呈すると見られ、深さ11cmを測る。出土遺物はない。

Pit-13　欠番とする。

Pit-14（図Ⅲ－17、表Ⅲ－39）　E-30区にて検出した。長軸24cm、短軸14cmの楕円形を呈し、深さは11cmを測る。出土遺物はない。

Pit-15（図Ⅲ－17、表Ⅲ－40）　E-30区にて検出した。検出時は通常の柱穴として確認したが、精査すると根攪乱が著しく入り込んでおり、柱穴としての範囲を特定できなかった。ここでは、当初確認した最も南の平面のみをPit-15として報告する。

Pit-16（図Ⅲ－17、表Ⅲ－41）　E-30区にて検出した。南北38cm、東西34cmの方形を呈する。深さ27cm。出土遺物はない。

Pit-17（図Ⅲ－17、表Ⅲ－42、写真Ⅲ－12）　E-30区にて検出した。長軸28cm、短軸20cmの隅丸三角形を呈する。深さ12cm。出土遺物はない。

Pit-18（図Ⅲ－5、表Ⅲ－43）　E-29区、SI-02北側にて検出した。直径20cmの円形を呈する。範囲のみ確認。SI-02との関係が考えられるが、詳細は不明である。

Pit-19（図Ⅲ－5、表Ⅲ－44）　E-29区、SI-02北側にて検出した。直径18cmの円形を呈する。範囲のみを確認した。Pit-18同様、SI-02との関連を確認できなかった。

Pit-20（図Ⅲ－17、表Ⅲ－45、写真Ⅲ－13）　E-30区にて検出した。南北40cm、東西48cm以上、深さ11cmを測る方形を呈すると思われる。東側をPit-21に切られる。埋土から土師器片を検出したが、細片であり図化できるものはない。

Pit-21（図Ⅲ－17、表Ⅲ－46、写真Ⅲ－13・26）　E-30区にて検出した。Pit-20より新しい。南北50cm、東西40cmの方形を呈し、深さ30cmを測る。埋土には焼土と炭化物が多量に含まれ、焼礫と共に火を受けた痕跡のある土器片が検出されたことから、何らかの廃棄行為に伴う遺構であると思われる。土師器内黒坏（102）を図化した。

Pit-22（図Ⅲ－18、表Ⅲ－47）　D-29区にて検出した。南北38cm、東西30cm以上のほぼ円形と思われる。深さ24cm。SD-06より新しい。SD-06範囲内だけを掘り下げたため、西側は範囲のみを確認した。

Pit-23（図Ⅲ－18、表Ⅲ－48）　E-29区にて検出した。南北32cm、東西40cm以上の不整形と思われる。深さ6cm。SX-10底面にて検出したが、SX-10範囲内だけを掘り下げたため、西側は範囲のみの確認に留まった。柱穴の可能性は低いと考えられる。出土遺物はない。

Pit-24（図Ⅲ－19、表Ⅲ－49）　D-26区にて検出した。1辺が22cmの隅丸三角形を呈し、深さ6cmを測る。出土遺物はない。

Pit-25（図Ⅲ－19・27、表Ⅲ－50）　D-26区にて検出した。長軸50cm、短軸20cm程度で、柱穴が3基連なるような不整形を呈し、深さ18cmを測る。埋土より土師器坏（119）が出土した。

Pit-26（図Ⅲ－19、表Ⅲ－51）　D-26区にて検出した、直径26cm程度の円形を呈し、深さ7cmを測る。Pit-27より新しい。遺物出土はない。

Pit-27（図Ⅲ－19、表Ⅲ－52）　D-26区にて検出した。南北34cm、東西20cm以上の楕円形を呈し、深さは22cmを測る。東側でPit-26と重複し、Pit-26より古い。遺物出土はない。

Pit-28　欠番とする。

Pit-29（図Ⅲ－11）　D-25区にて検出した。直径23cmの円形を呈する。最終段階で確認したため、調査中途になってしまった。平面での確認として報告する。遺物出土はない。

Pit-30（図Ⅲ－11）　D-25区にて検出した。直径33cmの円形を呈し、深さ25cmを測る。至近で検出したSI-05との関連は不明である。位置からは、当初SI-05の外柱となる可能性も考慮したが、他の柱穴が確認できなかったため、SIの項では報告しない。遺物出土はない。

Pit-31（図Ⅲ－24、表Ⅲ－53、写真Ⅲ－13）　D-25区にて検出した。直径34cmの円形を呈し、深さ65cmを測る。柱痕跡を確認できた。遺物出土はない。

Pit-32（図Ⅲ－24、表Ⅲ－54）　D-25区にて検出した。直径24cmの円形を呈し、深さ23cmを測る。出土遺物はない。

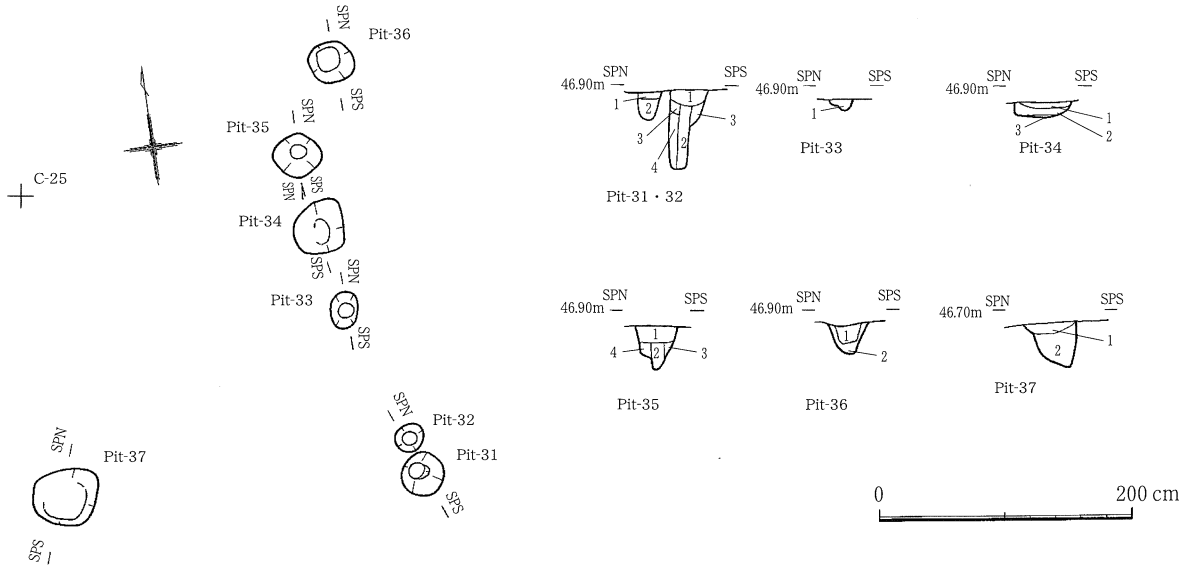
Pit-33（図Ⅲ－24、表Ⅲ－55）　D-25区にて検出した。長軸31cm、短軸25cmの楕円形を呈し、深さ11cmを測る。出土遺物はない。

Pit-34（図Ⅲ－24、表Ⅲ－56）　D-25区にて検出した。1辺が40cm、35cmの不整形を呈し、深さ12cmを測る。完掘できなかった。出土遺物はない。

Pit-35（図Ⅲ－24、表Ⅲ－57、写真Ⅲ－13）　D-24区にて検出した。1辺34cmの隅丸正方形を呈する。柱痕跡を確認した。深さ34cmを測る。出土遺物はない。

Pit-36（図Ⅲ－24、表Ⅲ－58）　D-24区にて検出した。１辺32cmの隅丸正方形を呈し、深さ27cmを測る。

図Ⅲ-24　Pit-32・33・34・35・36・37平面図



Pit-37（図Ⅲ－24、表Ⅲ－59）　D-25区にて検出した。1辺が42cm、34cmの不整形を呈し、深さ38cmを測る。完掘できなかった。出土遺物はない。

Pit-38（図Ⅲ－17、表Ⅲ－60）　E-31区にて検出した。長軸62cm、短軸22cmの不整形を呈する。深さ7cm。出土遺物はない。

Pit-39（図Ⅲ－17、表Ⅲ－61）　E-31区にて検出した。22cmの隅丸方形を呈する。深さ10cm。出土遺物はない。

Pit-40（図Ⅲ－17、表Ⅲ－62）　E-31区にて検出した。南北30cm、東西27cmの方形を呈する。深さ51cm。組み合う可能性のある柱穴は、調査区内からは検出されなかった。出土遺物はない。

Pit-41（図Ⅲ－17、表Ⅲ－63）　E-30区にて検出した。南北20cm、東西28cmの方形を呈し、深さは22cmを測る。出土遺物はない。

Pit-42（図Ⅲ－13、表Ⅲ－64、写真Ⅲ－13）　D-24区にて検出した。直径25cmの円形を呈し、深さ27cmを測る。出土遺物はない。

Pit-43（図Ⅲ－13、表Ⅲ－65、写真Ⅲ－13）　D-24区にて検出した。長辺31cm、短辺25cmの隅丸方形を呈し、深さ20cmを測る。出土遺物はない。

Pit-44（図Ⅲ－13、表Ⅲ－66、写真Ⅲ－13）　D-24区にて検出した。直径28cmの円形を呈し、深さ54cmを測る。出土遺物はない。

Pit-45（図Ⅲ－13、表Ⅲ－67）　D-24区にて検出した。直径31cmの円形を呈し、深さ30cmを測る。上が平坦で平滑、下が三角錐状の石がつまっていた。出土遺物はない。礎石（根石）としての用途も考えられるが、詳細は不明である。

Pit-46　D-24区にて検出したが、攪乱範囲内であったため欠番とする。

Pit-47（図Ⅲ－22、表Ⅲ－68、写真Ⅲ－13）　C-23区にて検出した。１辺17cm程度の方形を呈し、深さは22cmを測る。出土遺物はない。

Pit-48（図Ⅲ－22、表Ⅲ－69、写真Ⅲ－13）　C-23区にて検出した。1辺20cm、15cmの長方形を呈し、深さは14cmを測る。出土遺物はない。

Pit-49（図Ⅲ－22、表Ⅲ－70）　C-23区にて検出した。１辺23cmの隅丸方形を呈し、深さは18cmを測る。出土遺物はない。

Pit-50（図Ⅲ－22、表Ⅲ－71）　C-23区にて検出した。長軸25cm、短軸17cmの不整形を呈し、深さ15cmを測る。出土遺物はない。

Pit-51（図Ⅲ－12、表Ⅲ－72）　D-23区、SI-07床面にて検出した。直径22cmの円形を呈し、深さ6cmを測る。埋土より土師器が出土したが、細片であり、図化できなかった。

Pit-52（図Ⅲ－25、表Ⅲ－73、写真Ⅲ－13・14）　C-21区にて検出した。直径約45cmの円形を呈し、深さ70cmを測る。柱痕跡が確認されたが、抜き取り痕は確認されなかった。出土遺物はない。

Pit-53（図Ⅲ－25、表Ⅲ－74、写真Ⅲ－14）　C-21区にて検出した。長軸35cm、短軸25cmの楕円形を呈し、深さ22cmを測る柱穴と、長軸45cm、短軸15cmの不整形を呈し、深さ5cmを測る掘り方が切りあう状態となる。出土遺物はない。

Pit-54（図Ⅲ－4、表Ⅲ－75）　C・D-18区にて検出した。直径45cmの円形を呈し、深さ14cmを測る。SD-17より新しい。西側のみ掘り下げ調査を行った。出土遺物はない。

Pit-55（図Ⅲ－25、表Ⅲ－76、写真Ⅲ－14）　C-21区にて検出した。直径38cmの隅丸方形を呈し、深さ44cmを測る。柱痕跡が確認された。抜き取り痕は確認されない。Pit-52と類似の規模であるが、その他に組み合う可能性のある柱穴は確認できない。Pit-52と芯々で380cm離れる。出土遺物はない。

Pit-56（図Ⅲ－12、表Ⅲ－77）　C-23区にて検出した。直径20cmの円形を呈する。南側のみ掘り下げ調査を行った。SI-08の外柱の可能性も考えられる。出土遺物はない。

Pit-57（図Ⅲ－29、表Ⅲ－78）　C-22区にて検出した。長軸28cm、短軸22cmの楕円形を呈し、深さ37cmを測る。検出位置からは、北側で検出したSX-33との関連も考えられる。出土遺物はない。

Pit-58（図Ⅲ－29、表Ⅲ－79）　C-22区にて検出した。直径18cmの円形を呈し、深さは8cmを測る。出土遺物はない。

Pit-59（図Ⅲ－23、表Ⅲ－80）　C-20区にて検出した。１辺が22cmの正方形を呈し、深さ25cmを測る。北側のみ掘り下げて調査した。出土遺物はない。

Pit-60（図Ⅲ－23、表Ⅲ－81）　C-20区にて検出した。1辺が15cmの隅丸方形を呈し、深さ8cmを測る。西側のみ掘り下げて調査した。出土遺物はない。

Pit-61（図Ⅲ－7、表Ⅲ－82）　D-25区、SI-03の北西隅で検出した。直径12cmの円形を呈し、深さ6cmを測る。出土遺物はない。柱痕跡も見られず、性格は不明である。

Pit-62（図Ⅲ－7、表Ⅲ－83）　D-25区、SI-03中央部の円形プランの南西部で検出した。1辺12cmの方形を呈し、深さ7cmを測る。角材を打ち込んだかのような底面形状を呈する。出土遺物はない。

Pit-63（図Ⅲ－12、表Ⅲ－84）　D-23区にて検出した。Pit-64より新しい。１辺が35cmの不整形を呈し、深さは23cmを測る。西半部のみ掘り下げ調査を行った。出土遺物はない。

Pit-64（図Ⅲ－12、表Ⅲ－85）　D-23区にて検出した。Pit-63より古く、北側を削平されるが、直径約35cmの円形を呈するようである。深さは12cmを測る。出土遺物はない。

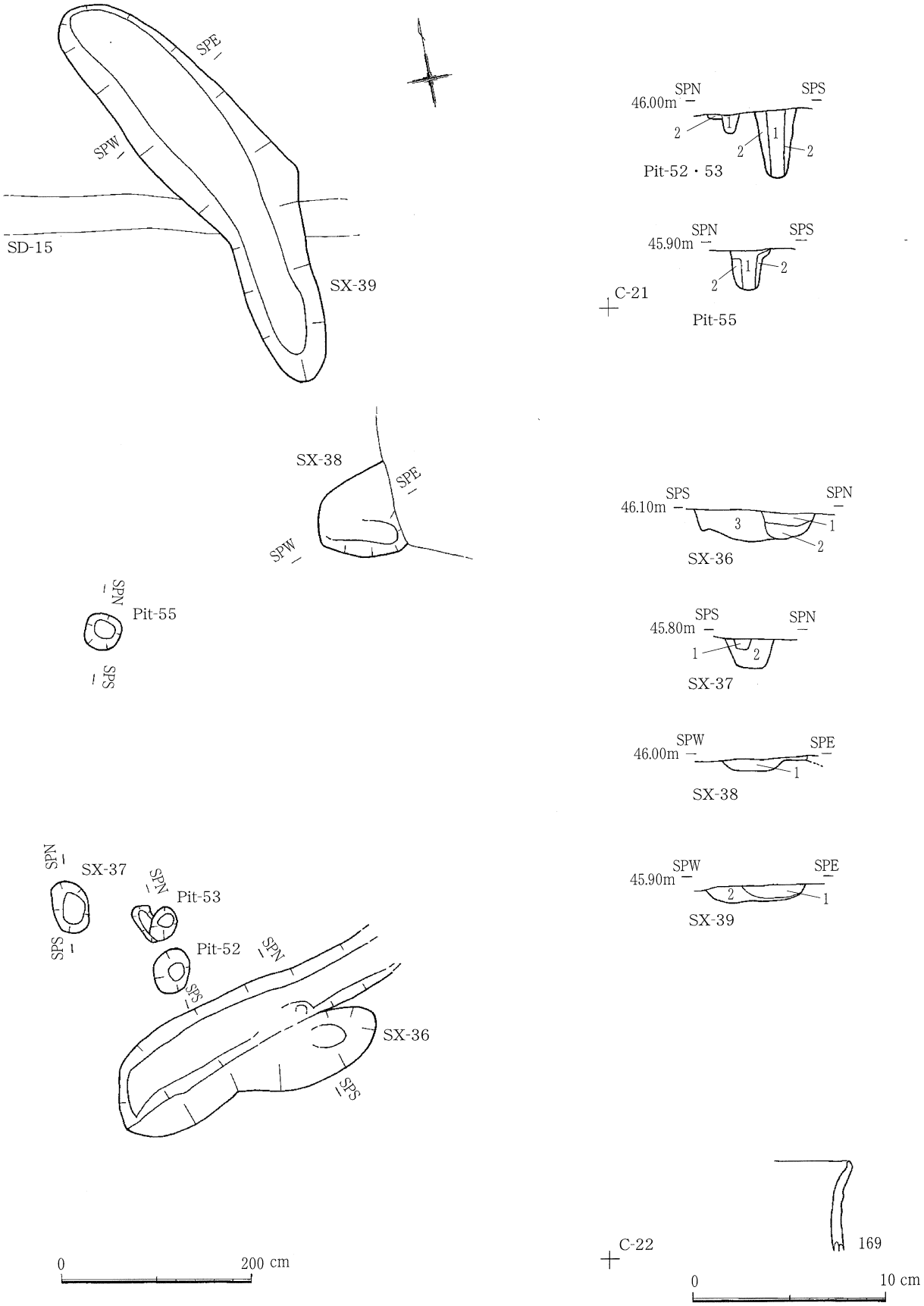
Pit-65（図Ⅲ－12、表Ⅲ－86）　C-23区、SI-08床から検出した。長軸20cm、短軸13cmの不整形を呈し、深さ8cmを測る。出土遺物はない。

Pit-66（図Ⅲ－12、表Ⅲ－87）　C-23区、SI-08床から検出した。1辺15cmの隅丸三角形を呈し、深さ7cmを測る。出土遺物はない。

Pit-67（図Ⅲ－22、表Ⅲ－88）　C-22区、SX-32の南東隅にて検出した。直径22cmの円形を呈し、深さ7cmを測る。出土遺物はない。

Pit-68（図Ⅲ－22、表Ⅲ－89）　C-22区、SX-32の南東隅にて検出した。直径22cmの円形を呈し、深さは10

図Ⅲ-25　SX-36・37・38・39、Pit-52・53・55平面図及びSX-36出土遺物



cmを測る。出土遺物はない。

Pit-69　欠番とする。

Pit-70（図Ⅲ－5、表Ⅲ－90）　E-29区、SI-02内にて検出した。直径32cmの円形を呈するが、深さ未測定である。出土遺物はない。

Pit-71（図Ⅲ－5、表Ⅲ－91）　E-29区、SI-02内にて検出した。直径17cmの円形を呈するが、深さ未測定である。出土遺物はない。

Pit-72（図Ⅲ－5）　E-30区、SI-02内にて検出した。直径16cmの円形を呈するが、調査期間内で掘り下げることができず、プランの確認のみ行った。出土遺物はない。

Pit-73（図Ⅲ－29）　C-22区、SX-33内にて検出した。長軸38cm、短軸33cmの隅丸方形を呈し、深さ24cmを測る。Pit-73と並んで、SX-33の溝の北西隅に相当する。出土遺物はない。

Pit-74（図Ⅲ－29）　C-22区、SX-33内にて検出した。長軸50cm、短軸27cmの楕円形を呈し、深さ23cmを測る。SX-33の北西隅に相当する。出土遺物はない。

Pit-75（図Ⅲ－29、表Ⅲ－92）　D-21区、SD-08底面にて検出した。1辺20cmの方形を呈する。SX-33との関連は不明。出土遺物はない。

Pit-76（図Ⅲ－29）　C-21区、SX-33の内側溝と外側溝の間で検出した。1辺25cmの隅丸方形を呈し、深さ22cmを測る。出土遺物はない。

Pit-77（図Ⅲ－29）　D-22区、SX-33内にて検出した。西側をSD-08に削平されるが、一辺が約20cmの方形を呈すると見られる。深さは30cmを測る。出土遺物はない。

Pit-78（図Ⅲ－29）　D-22区、SX-33内にて検出した。西側をSD-08に削平されるため、全体の形は不明であるが、東西35cm以上、南北50cm以上の方形であり、深さは32cmを測る。出土遺物はない。

Pit-79（図Ⅲ－29）　D-21区、SX-33内にて検出した。西側をSD-08に削平されるが、長軸45cm、短軸15cm以上の不整形を呈すると見られる。深さは15cmを測る。出土遺物はない。

Pit-80（図Ⅲ－29）　D-22区、SX-33内にて検出した。直径46cmの円形を呈し、深さ27cmを測る。出土遺物はない。

Pit-81（図Ⅲ－29）　D-21区、SX-33内にて検出した。長軸60cm、短軸40cmの楕円形を呈し、深さ15cmを測る。出土遺物はない。

Pit-82（図Ⅲ－29）　D-21区、SX-33内側の溝より新しい。1辺が15cmほどの方形を呈し、深さ25cmを測る。出土遺物はない。

Pit-83（図Ⅲ－29）　D-21区、SX-33内側の溝より新しい。SD-08より古く、西半部を削平される。長軸25cm、短軸20cmの楕円形を呈し、深さ35cmを測る。出土遺物はない。

Pit-84（図Ⅲ－29）　C-22区、SX-33内側溝底面にて検出した。直径約24cmの円形を呈し、深さは22cmを測る。出土遺物はない。

Pit-85（図Ⅲ－29）　C-22区、SX-33内側部の長方形のプラン東側にて検出した。1辺が16cmの方形を呈し、深さ5cmを測る。出土遺物はない。

Pit-86（図Ⅲ－29）　C-22区、SX-33内側部の長方形のプラン北側にて検出した。短軸16cm、長軸20cmの長方形を呈し、深さ８cmを測る。出土遺物はない。

Pit-87（図Ⅲ－11）　D-26区、SI-05の床で検出した。1辺が15cm、他方が20cmの不整形を呈し、深さは12cmを測る。出土遺物はない。

Pit-88（図Ⅲ－11）　D-26区、SI-06の南側で検出した。1辺15cmの隅丸方形を呈し、深さ40cmを測る。出土

遺物はない。

Pit-89（図Ⅲ－9）　D-26区SI-04東壁沿いにて検出した。１辺が12cmの正方形を呈し、深さ8cmを測る。出土遺物はない。

Pit-90（図Ⅲ－9）　D-26区SI-04東壁沿いにて検出した。長辺が25cm、短辺が16cmの方形を呈し、深さ16cmを測る。Pit-89と芯々で88cm離れる。出土遺物はない。

Pit-91（図Ⅲ－9）　D-27区SI-04東壁沿いにて検出した。長辺が15cm、短辺が12cmの方形を呈し、深さ16cmを測る。Pit-90と芯々で105cm離れる。出土遺物はない。

Pit-92（図Ⅲ－9）　D-27区SI-04東壁沿いにて検出した。1辺が12cmの正方形を呈し、深さ16cmを測る。Pit-91と芯々で100cm離れる。出土遺物はない。

Pit-93（図Ⅲ－9）　D-27区SI-04東壁沿いにて検出した。1辺が８cmの正方形を呈し、深さ9cmを測る。Pit-92と芯々で92cm離れる。出土遺物はない。

Pit-94（図Ⅲ－9）　D-26区SI-04北東隅付近の床にて検出した。長軸25cm、短軸12cmの不整形を呈する。出土遺物はない。

Pit-95（図Ⅲ－9）　D-27区SI-04南壁沿いの床にて検出した。1辺が11cmの隅丸方形を呈する。遺物出土はない。

性格不明遺構　性格不明遺構は55基を確認した。しかし、一部をSIまたはSE等に変更したため、最終的には性格不明遺構数は39基となっている。なお、この中には、耕作により上部を大きく削平されたりなどして実態が不明となった遺構や、極めて新しい近・現代の遺構、本来であればSK（土坑）・Pitとして報告すべき遺構であるが、確認時にSX番号を付され、その名称のまま、という遺構も含まれている。

SX-01　SE-01に変更。

SX-02　近現代の地業痕跡と思われる。欠番とする。

SX-03　実体不明につき欠番とする。

SX-04（図Ⅲ－17・26、表Ⅲ－18）　E-30区にて検出。直径85cmのほぼ円形を呈する。深さ35cm。 埋土より現代の遺物が出土するSD-04より新しいことから、現代の掘り方と判断した。土師器甕（103）を図化した。

SX-05　欠番とする。

SX-06（図Ⅲ－26、表Ⅲ－93、写真Ⅲ－15）　E-30区にて検出した。長軸170cm、短軸53cmの不整形を呈する。SI-01・02より新しいが、深さ6cmと極めて薄い。上部を削平されたためか、それとも重機による削平の痕跡そのものなのか、判断できない。出土遺物はない。

SX-07　欠番とする。

SX-08（図Ⅲ－18、表Ⅲ－19、写真Ⅲ－15・27）　E-29区にて検出した。長軸320cm以上、短軸126cmの不整形を呈する。東側をSD-04に切られている。当初SI-01かSI-02の外周溝と考え調査にあたったが南側で対応する部分が検出できなかったため外周溝として認定できなかった。遺物は土師器片主体であるが、縄文時代早期以前の両面加工石器もあるため、周囲の遺跡、特に吉内遺跡の山側斜面上方からの流れ込みが考えられる。須恵器坏（113）、土師器内黒坏（114）・甕（115～117）、縄文石器（118）などが出土している。

SX-09（図Ⅲ－26、表Ⅲ－95、写真Ⅲ－15・29）　E-30区にて検出した。SI-01東側にかかる南北174㎝の半円形を呈する。SD-04より古く、SI-01より新しい。残存深が12㎝と薄く、実態が良く分からなかった。土師器坏(170)が出土した。

SX-10（図Ⅲ－18、表Ⅲ－48、写真Ⅲ－16）　E-29区にて検出した。東西56㎝、南北300cm以上の長楕円形を呈する。北側は沢目に落ち込み、南側はSX-08と攪乱によって確認できないが、SX-08の南壁の観察によると、SX-08よりも更に南側へ延びている可能性がある。

SX-11（図Ⅲ－18、表Ⅲ－96、写真Ⅲ－16）　E-29区にて検出した。長軸57㎝、短軸39㎝のほぼ長方形を呈する。当初は楕円形のプランを確認し掘り下げを行ったが、結果、現代の攪乱であり、重機による掘削の痕跡と思われる。遺物はない。

SX-12　SI-04に変更。

SX-13　SI-05・06に変更。

SX-14　SI-03に変更。

SX-15　D-26区にて検出した南北に長い不整形のプランであるが、重機による掘削痕跡の可能性が高いと思われるため、欠番とする。

SX-16（図Ⅲ－19、表Ⅲ－97）　D-26区にて検出した、確認時は１遺構として扱ったが、精査した結果、柱穴3基が切り合うような不整形を呈する遺構となった。南側は現代と思われる東西攪乱溝によって削平されているため、詳細が不明である。遺物の出土は見られない。

SX-17　D-26区にて検出した東西に長い不整形のプランであるが、重機による掘削痕跡の可能性が高いため欠番とする。

SX-18　D-25区にて検出したSI-03南側に半円形に広がる黒色のプラン。当初遺構確認できたが、精査時には断面にても確認不能となった。欠番とする。

SX-19　D-25区にて検出し、SI-03北側に半円形に広がる黒色のプラン。当初遺構確認できたが、精査時には断面にても確認不能となった。欠番とする。

SX-20（図Ⅲ－19、表Ⅲ－98、写真Ⅲ－16・27）　D-26・27区にて検出した。SD-07と重複し、SD-07より古い。南北4.3m、東西1m以上の不整形を呈し、東側・北側は調査区外に伸びる。SD-07による攪乱を受けたため不整形となっているが、断面からは竪穴住居跡の可能性も考えられる。埋土より土師器蓋片（126）・内黒坏口縁部（124）・甕（125）が出土した。

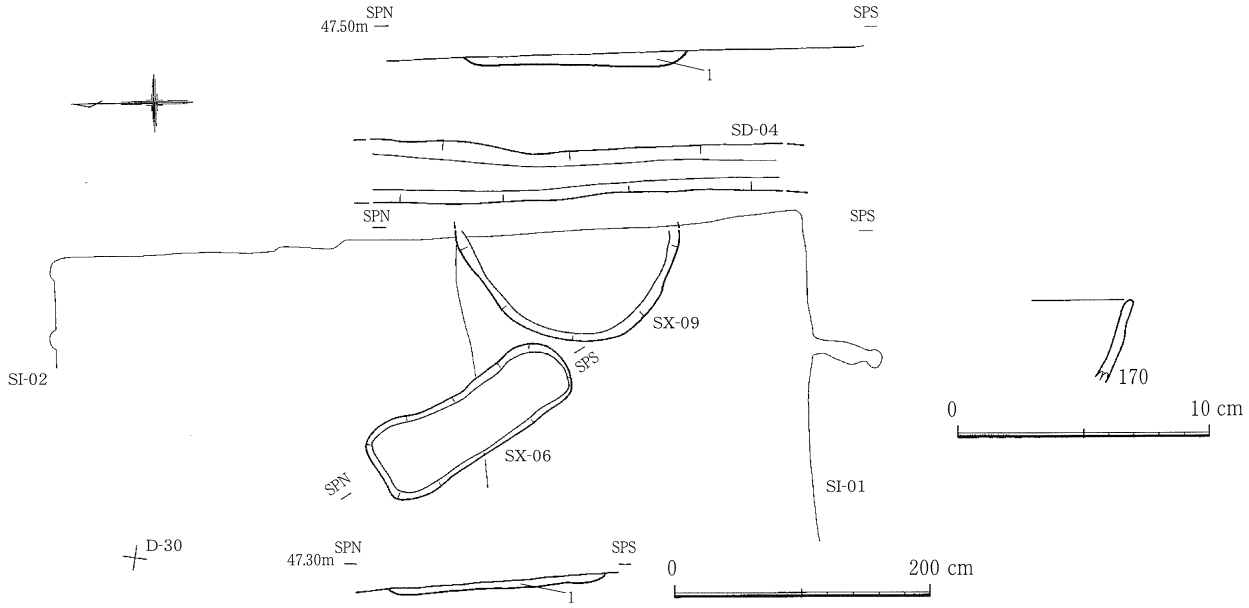
SX-21（図Ⅲ－13、表Ⅲ－10、写真Ⅲ－8・24）D-24区にて検出した。SI-10・SD-08より古い。掘り方は2基の土坑（もしくは、方形の掘り方（SX-21b）と円形の掘り方（SX-21a）が重複するようである。遺物は主に西側の新しい掘り方（SX-21b）から出土した。

SX-21a　東西60㎝以上、南北68㎝の楕円形を呈し、深さ30㎝を測る。北側をSI-10に、西側をSX-21ｂに削平される。埋土から土師器片が出土した。細片のため、図示しなかった。

SX-21b　SX-21aより新しい。東西135㎝、南北85㎝以上の楕円形を呈すると見られ、深さ20㎝を測る。西側をSD-08に、北側をSI-10に削平される。埋土は焼土・炭化物を多量に含む。住居跡の可能性も考えられたが、調査期間内に手がつけられなかった。埋土から須恵器甕胴部（71～73）、土師器坏底部（70）・二次焼成が顕著で、支脚の可能性も考えられる土師器甕（75）が出土している。

SX-22（図Ⅲ－13、表Ⅲ－10、写真Ⅲ－8・24）　D-24区にて検出した。東西88㎝、南北93㎝の楕円形を呈し、

図Ⅲ-26　SD-04、SX-06・09平面図及び出土遺物



深さ18cmを測る。検出面で多量の焼土塊を検出したが、堆積状況等から周辺部で広く検出した焼土塊自体は新しい時期（近現代）のものと考えられる。西側でSI-10と重複する（SX-22旧）。埋土は炭化物と土師器片を多量に含む。内黒坏（76）・土師器坏（77）・甕（78・79）が出土している。

SX-23　D-24区にて確認した。焼土を広範囲で検出している。SI-10の上半部に相当する可能性も考えられるが、西側の大部分が削平され攪乱を受けているため、実体は良くわからない。また、焼土塊が近現代に移動していることから、遺構として認定できるか否かも不明である。よって欠番とする。

SX-24　確認・精査を続けたが、結果として攪乱であると判明し、欠番とする。

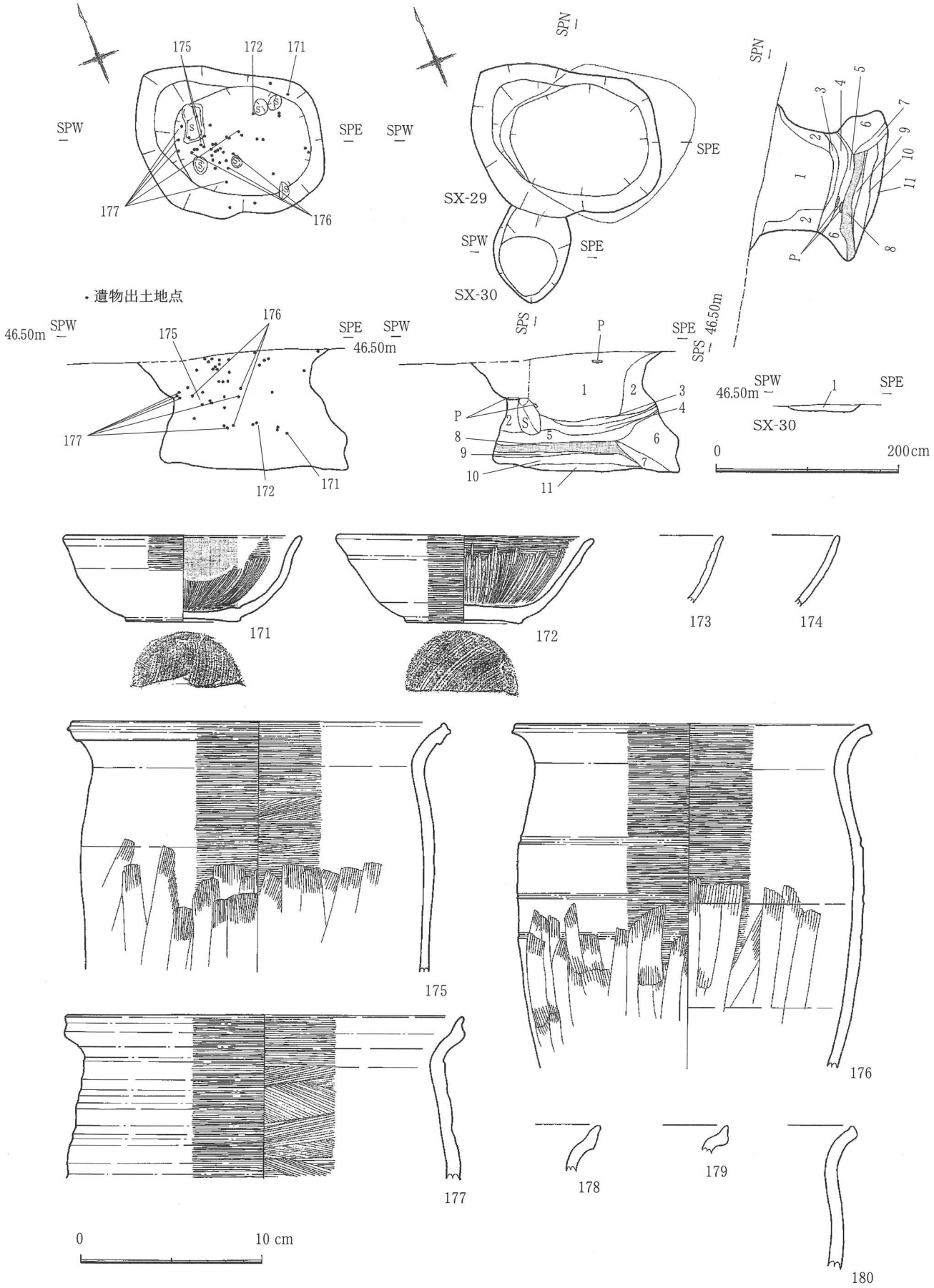
SX-25　SI-07に変更。

SX-26　SI-08に変更。

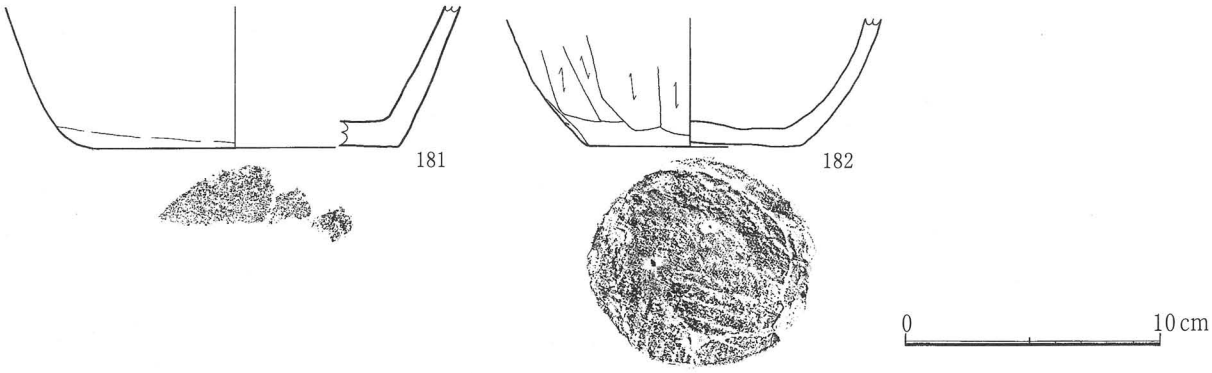
SX-27　確認・精査を続けたが、結果として攪乱であると判明し、欠番とする。

SX-28　確認・精査を続けたが、結果として攪乱であると判明し、欠番とする。

図Ⅲ-27　SX-29平面図・遺物出土状況及び出土遺物・SX-30平面図



図Ⅲ-28　SX-29出土遺物



SX-29（図Ⅲ－27、表Ⅲ－99、写真Ⅲ－17・23・29）　C・D-22区にて検出した。形状からは土壙に分類すべきかもしれないが、明確な根拠に乏しいためここではSXとして扱う。出土遺物からは9世紀後半の遺構と思われる。遺構の規模は、検出面において長軸105cm、短軸78cmの不定形を呈し、深さ67cmを測る。断面は、検出面から20cmほど下がったところで一旦括れ、底面は長軸107cm、短軸88cmの不整形に開くフラスコ状を呈する。東壁底面付近には3箇所、幅15cm、厚さ2cm程の板状のものを打ち込んだような窪みが見られる。底面付近は湧水が著しい。

埋土は検出面から37cmほど下がるところまでが単一層であり、その下に、粘性土が薄く積み重ねられている。大まかには、上層から順に、黒色土・焼土・黒色の強い粘性土層・焼土の強い層・ローム土主体の層・褐色砂質土の層・粘性土となる。8層（図Ⅲ－27右上図スクリーントーンにて表示）は黄褐色ローム土主体の層で、褐色砂質土の上面に均質に貼ったかのように検出された。堆積状況から見ると、有機質遺物（例えば、遺体）を納めた可能性もあるが、その上に薄く層を積み重ね、平均に均すような地業を行った後、石や甕の口縁部片を重ねる（置く）などの行為を経て、一定の時間が経過した後、一気に崩落・埋没したような印象を受ける。

遺物の出土状況を図Ⅲ－27左上に示した。遺物は主として遺構の西側、埋土中層以上から多く出土し、7層より下からは検出されない。遺物は内黒坏（171・172）・土師器坏（173・174）・甕（175・182）などが出土した。また、埋土上層では金属塊（写真Ⅲ－23、241）も検出された。埋土の堆積状況等から単なる廃棄遺構とは考えにくいが、骨を含む有機物の残存等が検出できなかったため、遺構の性格については不明である。

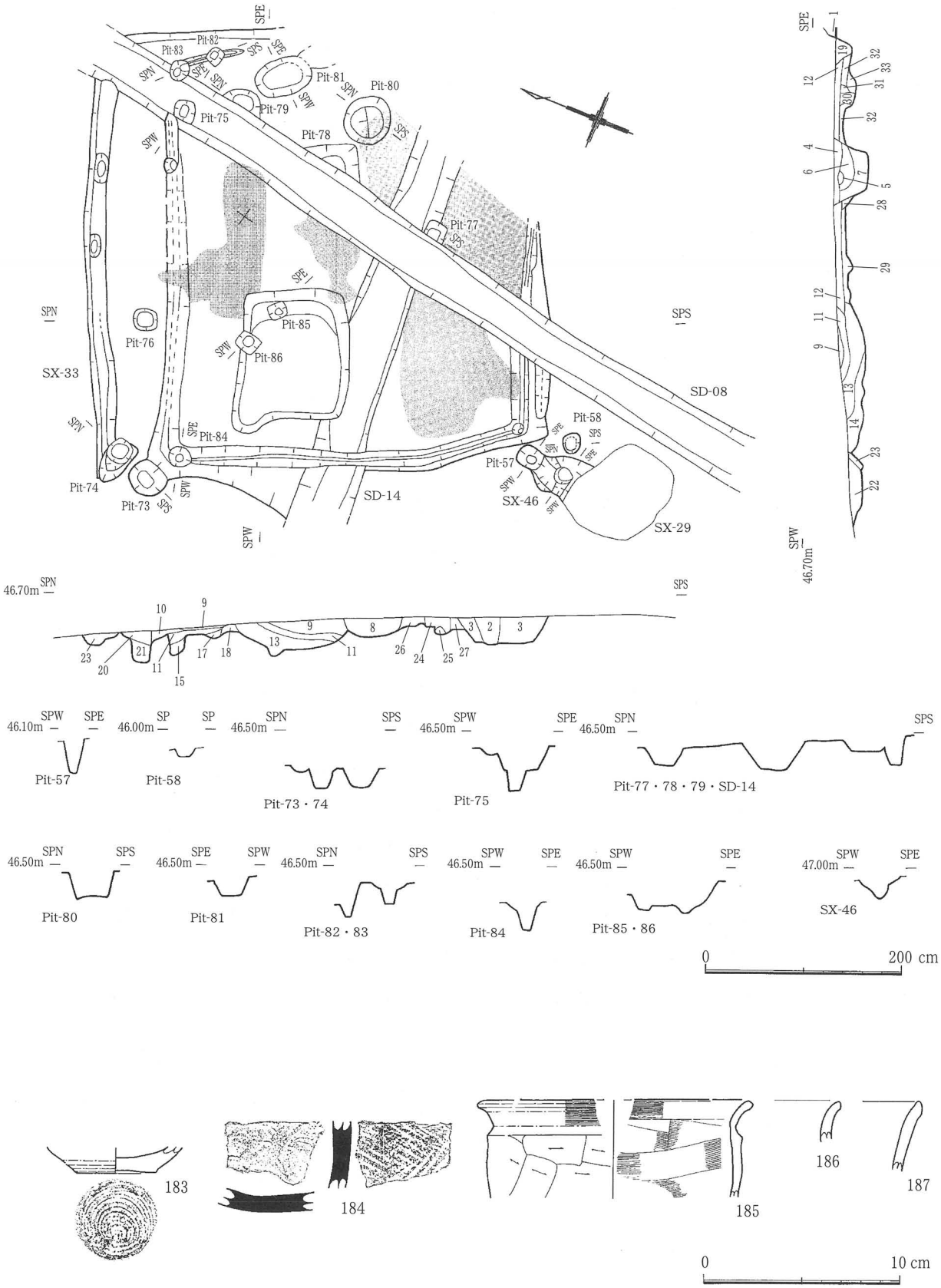
SX-30（図Ⅲ－27、表Ⅲ－100）　C-22区にて検出した。SX-29より古く、北側を切られている。平面形は楕円形を呈し、長軸60cm以上、短軸40cm、深さ6cmを測る。埋土から土師器片が出土したが、細片であり図示できなかった。

SX-31（図Ⅲ－20）　C-23区、SD-10内にて検出した。長軸100cm、短軸50cmの楕円形を呈し、深さ15cmを呈する。性格は不明である。出土遺物はない。

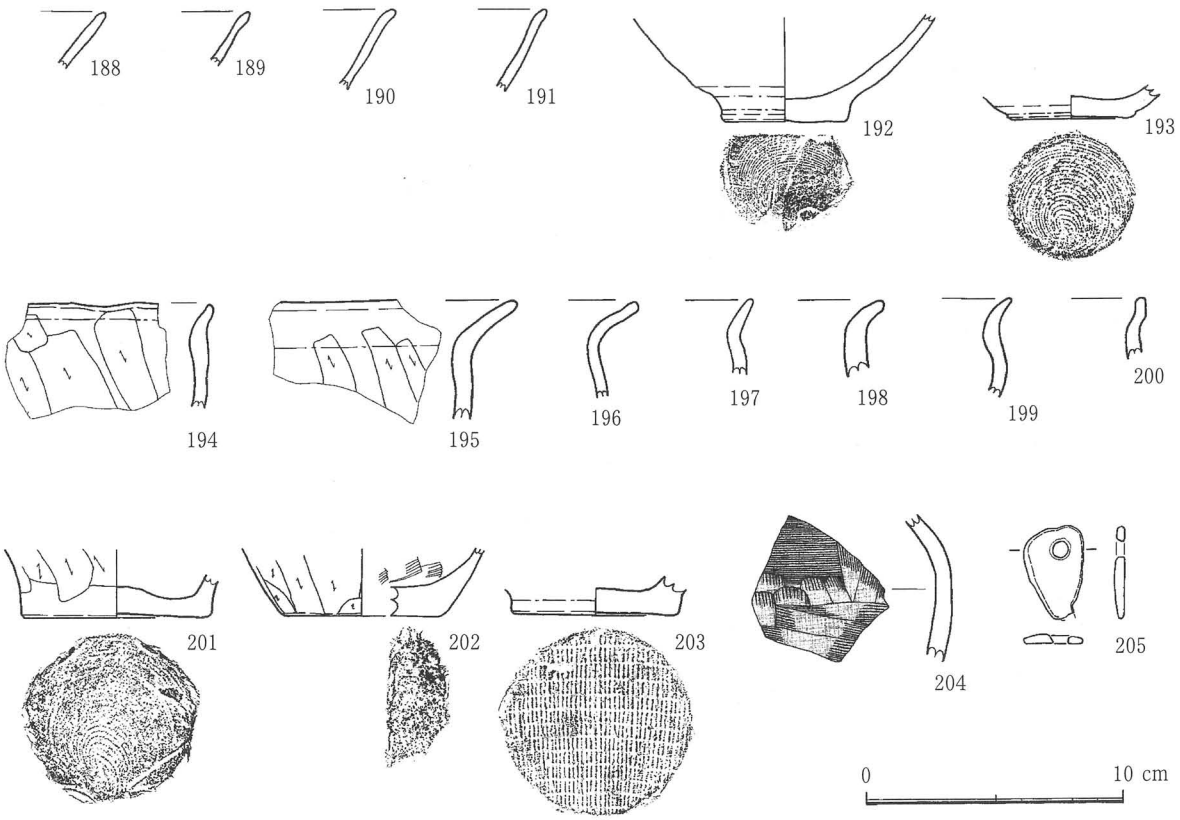
SX-32（図Ⅲ－22、表Ⅲ－28、写真Ⅲ－18・28）　C-22区にて検出した。SD-14・18より古い。南北250cm以上、東西270cm以上を測り、北側・西側は調査区外に延びる。上部全体を削平されているためか残りが悪く、深さ10cm程度である。確認状態からは竪穴建物跡の可能性も考えられた。南東隅より柱穴2基（Pit-67・68）を検出した。埋土から土師器甕（156・157）が出土した。

SX-33（図Ⅲ－29・30、表Ⅲ－22、写真Ⅲ－18・30）　C・D-21・22区にて検出した。南北溝SD-08と東西溝SD-14より古く、未調査の遺構SX-34・35より新しい。東側は調査区外である。確認面で5箇所焼土範囲の広がりがあったが（スクリーントーンにて示した）、本遺構に伴なうカマドなどの燃焼施設に由来するもの

図Ⅲ-29　SX-33及び周辺検出遺構平面図及びSD-14出土遺物



図Ⅲ-30　SX-33出土遺物



とは考え難い。しかし、焼土は堆積状況の観察から近現代の攪乱であるとも考えられないため、近現代以前の燃焼施設に伴うものと考えられる。四方を長さ約460㎝の溝が巡る構造となっており、北側及び東側の一部では、平行する溝が内側に更に1条巡る。溝幅は25㎝、深さ33㎝程度を測る。遺構全体に柱穴が見られるが、それぞれのSX-33における相関関係は不明である。ただし、西隅の柱穴（Pit-73・74・84）、南側のPit-57については、本遺構との関連を想定できそうである。東側では比較的大き目のPitが4基（Pit-78・79・80・81）検出された。更に、部分的に薄く数層にわたって焼土を含む土を繰り返し積み重ねた痕跡も確認されたが、範囲・性格等については不明のままであった。遺構中央部から西側では、長辺135㎝、他方が約113㎝の方形の掘り込みが見られた。SX-33は全体的にローム混じりの褐色土によって覆われ、SD-08東側でも同様の褐色土を検出しているが、この方形の掘り込みについても、前述の褐色土によって覆われている。全面的ではないが、南側・東側に床状の硬化面を確認した。

検出遺物は土師器坏（188～193）・甕（194～203）を主体とするが、糸切り痕・網代痕が明瞭に見られる底部片や内黒壷（204）と思われる胴部片が出土した。石製品玉（205）他、鉄滓等、総じて11世紀に比定される遺物が主体となる。その他に、南側にて検出したSX-29埋土出土遺物と接合する内黒坏片が出土しているが覆土上層であり、攪乱によるものと思われる。また、南北ベルト北側からは炭化した植物遺存体（穀類・種子）を検出した。

SX-34　D-21区にて範囲確認のみ行った。東側は調査区外である。SD-08より古い。調査未了であり、詳細不明であることから図示していない。

SX-35　D-21区にて範囲確認のみ行った。東側は調査区外である。SD-08より古い。調査未了であり、詳細不明であることから図示していない。

SX-36（図Ⅲ－25、表Ⅲ－102、写真Ⅲ－29）　C-21区にて検出した。西半部を掘り下げ調査を行った。幅60cm、長さ300cm以上の溝と、長軸280cm、短軸80cm以上の不整形を呈する土坑が切りあう状態を呈する。深さ約35cmを測る。埋土から土師器甕口縁部が出土した。攪乱に伴う遺構である可能性も考えられる。

SX-37（図Ⅲ－25、表Ⅲ－103、写真Ⅲ－19）　C-21区にて検出した。長軸55cm、短軸38cmの楕円形を呈し、深さ32cmを測る。出土遺物はない。

SX-38（図Ⅲ－25、表Ⅲ－104）　C-21区にて検出した。東側を攪乱に切られており、攪乱に伴う遺構の可能性があるため、南側だけ掘り下げ調査を行った。長軸100cm、短軸80cmの不整形を呈し、深さ13cmを測る。出土遺物はない。

SX-39（図Ⅲ－25、表Ⅲ－105、写真Ⅲ－19）　C-20・21区にて検出した。長軸460cm、短軸110cmの不整形を呈し、深さ18cmを測る。西側にローム主体の層がある。出土遺物はない。

SX-40（図Ⅲ－23、表Ⅲ－106、写真Ⅲ－19）　C-19区にて検出した。長軸82cm、短軸47cmの楕円形を呈し、深さは10cmを測る。底面が定かではなく、現近代の掘削に伴う遺構である可能性がある。遺物なし。

SX-41（図Ⅲ－4、表Ⅲ－107）　C-19区にて検出した。東西200cm、南北80cmの楕円形を呈し、深さ22cmを測る。西側は調査区外に延びる。底面が一定せず攪乱の可能性が考えられる。

SX-42（図Ⅲ－4、写真Ⅲ－19）　C-19区にて検出した。長軸70cm、短軸50cmの不整形を呈し、深さ10cmを測る。東側を攪乱によって削平される。

SX-43（図Ⅲ－4、写真Ⅲ－19）　C-18区にて検出した。長軸125cm、短軸60cmの楕円形を呈し、深さ26cmを測る。

SX-44（図Ⅲ－4、写真Ⅲ－19）　C-18・19区にて検出した。長軸235cm、短軸75cmの不整形を呈する。底面中央が方形に落ち込んでいる。深さ45cmを測る。

SX-45　C・D-22区にて検出した。SX-33、Pit-57・58より新しい。SD-08より古く、東側を削平される。長軸130cm、短軸90cmの楕円形を呈するが、SX-33に関わる上部遺構ではなく、現代の攪乱によるものである可能性が高いため、図示していない。

SX-46（図Ⅲ－29、表Ⅲ－108）　C-22区にて検出した。上半部は根攪乱の影響もあり掘り方が判然としない。東西38cm、北側はPit-57に、南側はSX-29に切られ平面形は不明である。深さ24cmを測る。

SX-47（図Ⅲ－23、表Ⅲ－109、写真Ⅲ－19）　C-20区にて検出した。西側のみ掘り下げ、調査を行った。長軸90cm、短軸70cmの楕円形を呈し、深さ18cmを測る。底面・掘り方共に判然としない。攪乱の可能性が高い。

SX-48（図Ⅲ－23、表Ⅲ－110、写真Ⅲ－19）　C-20区にて検出した。西側のみ掘り下げ、調査を行った。直径45cmの円形を呈し、深さは10cmを測る。攪乱の可能性が高い。

SX-49（図Ⅲ－5・21、表Ⅲ－30）　E-39区、SD-04底面にて検出したSD-04より古い遺構である。東西57cm、南北42cmの楕円形を呈し、SD-04底面からの深さは35cmを測る。東側に一段深くなる。当初はSD-20として一括して扱っていたが、精査の結果、SD-20とSX-49を分離した。SX-49はSX-51と近接した時期の土坑と思われる。埋土より須恵器甕口縁部片（19）が出土した。これは、SI-01出土破片と接合している。SI-01に関連する廃棄土坑である可能性も考慮されるが、詳細は不明である。

SX-50（図Ⅲ－5、表Ⅲ－1、写真Ⅲ－20・22）　E-30区、SI-02内で検出した。SX-51より新しいが、SI-02よりは古いと考えられる。長軸120cm、短軸76cmの不整形を呈し、深さ76cmを測る。廃棄土坑の可能性が高い。

埋土から木質の残存する鉄製品（31）を検出した他、土師器片が出土し、火襷痕と刻文のある土師器坏（20）・内黒坏（21）をはじめ、土師器甕（22～29）・須恵器壷（30）を図化した。（20）については、SI-01出土遺物と接合していることから、SI-01に関連する廃棄土坑である可能性も考えられる。

SX-51（図Ⅲ－5、表Ⅲ－111、写真Ⅲ－20・22）　E-30区、SI-02内で検出した。南北90㎝、東西96㎝の楕円形を呈し、深さ60㎝を測る。北側はSX-50と重複する（SX-51旧）。SI-02床を除去し、SX-50を掘り下げたところ、SX-50壁南東側側面からSX-51の掘り方が確認できた。当初は、SX-50・51一帯を焼土の広がりとして認識していたため、SIF-02と考えていたが、精査の結果、別々の土坑が重複しているものと判明した。SX-50同様に廃棄土坑の可能性が高い。埋土は上層部に特に焼土が多い。埋土から土師器甕（33～35）等が出土している。

SX-52（図Ⅲ－5、表Ⅲ－112、写真Ⅲ－20）　D-30区で検出した。西側は調査区外である。南北82㎝、東西30㎝以上の円形もしくは楕円形を呈すると見られ、深さは14㎝を測る。当初SIF-02である可能性も考慮して精査したが、構築材等は検出できず、埋土に炭化物と焼土を多量に含むなど、廃棄土坑の可能性が高い。SI-02との関連はSX-50・51と同様に、ごく近接する時代か、もしくは同時期と思われる。

SX-53（図Ⅲ－5、表Ⅲ－1、写真Ⅲ－2）　E-30区にて検出した。SI-01・02・SD-04と重複し、SI-02より新しいが、その他の遺構より古い。西側範囲に攪乱等も入り、全体形が曖昧になっている。長方形のプランと思われるが、性格等一切不明である。規模は概ね南北255㎝、東西約95㎝程度と思われ、北東隅・北西隅に柱穴が各1基（未命名）認められた。北東隅が顕著に現れていたためSI-09と命名したが、その後、SXに変更した。

SX-54（図Ⅲ－5）　E-30区、SI-02内にて検出した。SX-51の北側、SI-02の東西ベルト沿いに位置している。出土遺物はない。短軸23㎝、長軸30㎝の不整形を呈する。SX-50・51との関連は不明である。

第４章　出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、縄文石器、弥生土器、土師器、須恵器、擦文土器、肥前染付、珠洲系陶器、銅製品、鉄製品、鉄滓、溶解物など、縄文時代の早期頃から中近世までの幅広い時代にわたった。

しかし、主たる遺物は9世紀後半から10世紀前半にかけての須恵器、土師器であり今回検出した遺構群（集落）もほぼ同時期のものと思われる。以下、出土遺物についてその概要を述べてゆく。

土師器

土師器は、坏・甕・壷・堝・蓋等の器形が確認された。

坏　坏は、幾つかのタイプに分類することができる。内面黒色処理の坏（以下「内黒坏」とする）、ロクロ痕を明瞭に残す坏を中心に、胎土及び調整の良好・不良なものなど、多種にわたる。

ロクロ痕を顕著に残す坏（81、93、230、232）は比較的薄手で、直線的に外反しロクロの成形痕を明瞭に残している。口縁部は直立するか、やや内湾気味に立ち上がるが、顕著ではない。同様の器形で火襷痕を明瞭

に残し、刻線の痕跡が認められる坏（20）も見られる。いずれも底部は回転糸切による切離しとなる。いずれもロクロの痕跡は回転が細かく器面に残り、改めて調整を行った様子はない。

内黒坏は大別して２種類となる。まず、ロクロ痕が残り、胎土が比較的粗く内面の研磨も不十分なもの（45、46）は、回転糸切による切り離しで、器厚は薄く、緩やかに外反する。内面を黒色処理しておらず、ロクロ痕を顕著に残す坏と比較すると、大きな単位でロクロの調整痕跡が見られる。一方、表面のロクロ痕を丁寧なナデ調整で消し、内面の磨きも極めて良好な坏（80、171、172）は、外面口縁部のナデも磨きに近いほど丁寧に行っている良好なもので、胴部との間にナデ調整に由縁すると思われるわずかな段を形成する。底部は全て静止糸切技法による切り離しであり、口縁部は緩く外反する。胎土は他の坏よりも均一で砂粒の混入が少ない。（102）もこの分類にはいると思われる坏である。下記に別分類した黒色土器もこの類に分類できる可能性があるが、胎土、焼成及び黒色処理の観点から別記載とした。

黒色土器（153）はSD-12から出土した。黒色土器としたが、通常呼称される黒色土器とは異なり、内面の磨きに比較して、表面の磨きが不十分な感は否めない。しかし、胎土が均一で瓦器状の焼成となり他の土師器坏と比較しても硬質な印象がある点で一線を画すものである。底部は静止糸切による切り離しとなり、器面外面はナデによる調整が施されるなど、上記の内黒坏と技法上は相似する部分もあるが、胎土、焼成において同一視はしがたい。

その他、「廾」状の刻線が見られる坏（95）や、漆と思われる樹脂を内面で拭ったシゴキ痕跡が認められる破片が2個体（216・217）ある。また、赤色顔料が内面に付着している坏（48）もあるが、赤色顔料を意図的に塗布したものか、赤色顔料を溶くための容器に用いたものかは不明である。（192）は、高台部がやや高くなり、胴部の立ち上がり方もやや急角度になる坏であるが、いわゆる柱状高台を呈するほど発達はしていない。

甕　甕は、口縁部が外反するものが主であり、内湾する個体（8）は極めて少数である。外反する口縁部にはいくつかのタイプと成形・調整の特徴が見られる。

口縁外縁部に段を形成し須恵器の口縁部を写したようなもの（42、51、175、176、177、179、220、223）は、胴部上半に積み上げ痕を消し去るほど丁寧な横位のナデが施される。同部下半は縦位の丁寧なヘラナデにより、やはり積み上げ痕跡を留めていない。器形は、胴の張りが小さく、頸部で弱く絞り大きく外反している。

口唇部内側を摘み上げるように成形するもの（4、33、49、50）は、胴部上半、肩に張りを持たせ、一度弱く絞ってから小さく外反させる器形で、積み上げ痕が明瞭に残る。口縁部には横位のナデが丁寧に施され、胴部以下はヘラナデにより調整されるが積み上げの成形痕を消すほど強くは施されていない。

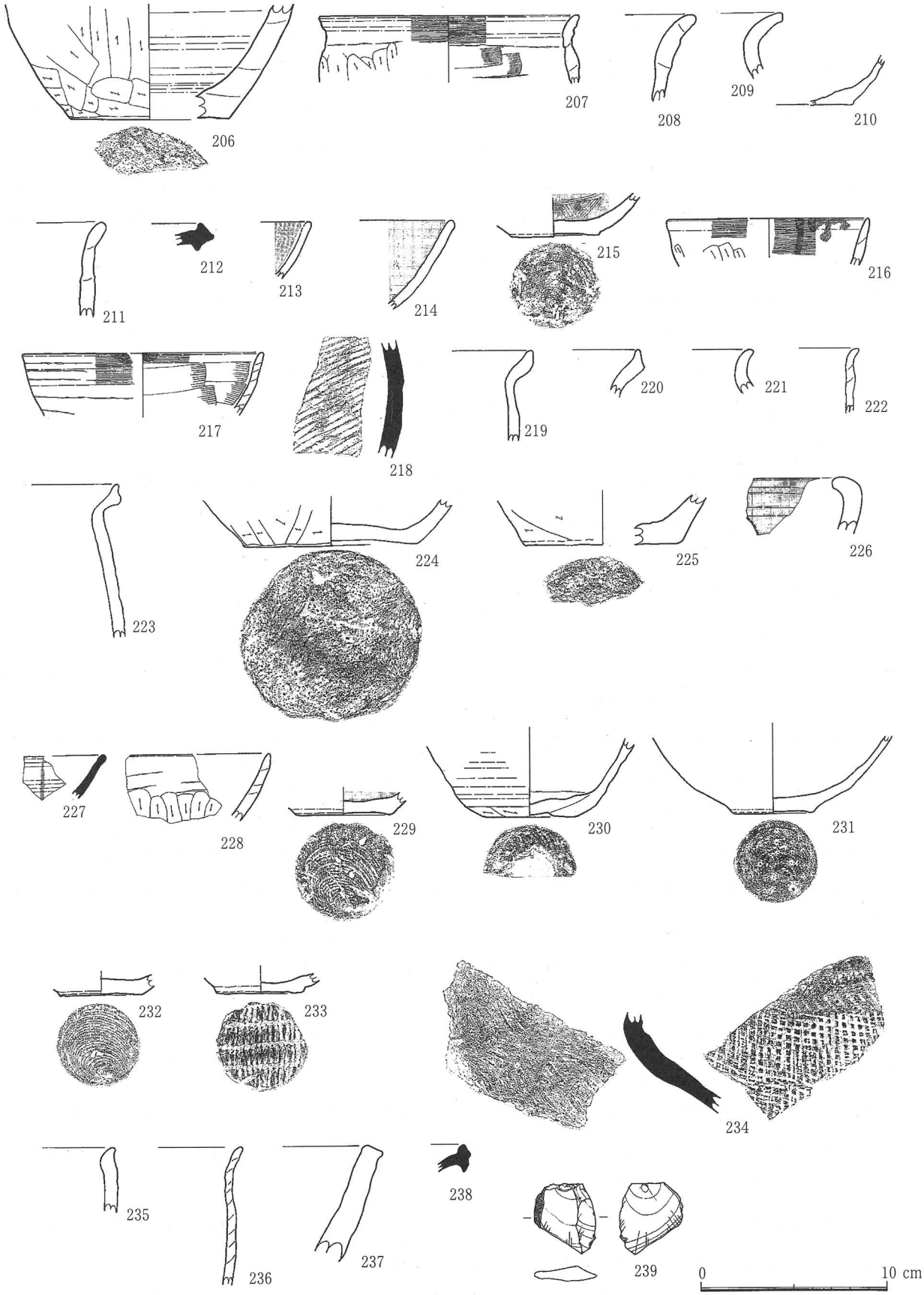
胴の張りが少なく、頸部で一度絞り、口縁部が外反する長胴甕（5、40、84等）は、成型の積み上げ痕がやや残るものの、口縁部から胴上部にかけて横ナデによる調整が行われ、胴部に縦位のヘラナデが丁寧に施される。（40）は今回の調査で唯一全形のわかる土師器甕である。底部はヘラケズリを施している。この類の口縁部はナデにより断面が緩やかに丸みを帯びるものと、稜をもつように口縁を整形する２種類が認められる。

胴部中央付近が張り、最大径となる甕（3）は外反する口縁部の内外面だけに丁寧な横ナデ調整が施される。胴部は全体に縦位のヘラナデが施されるがさほど丁寧ではなく、外面の積み上げ痕は若干残る。内面も横位のヘラナデにより外面よりは丁寧に調整される。

外反する口縁部までヘラナデが施されるもの（194、195、197）は口縁部に横ナデの調整を施した後に口縁部にかかる位置から縦位のヘラナデが施される。胎土・成形・調整ともにあらい。

底部片には、木葉痕（11、147、148）、網代痕（10、12、13、29、32、203）、砂目（98、112、116、145、146、181、202、224、225）など圧痕が認められるものや、ヘラケズリ調整（9、18、40、54）、ヘ

図Ⅲ-31　吉内遺跡　グリッド一括・表採遺物



ラ切り（144）、回転糸切（201）による切り離しが認められるものがある。総じて、砂目や網代痕等の圧痕が残り、調整をかけていないものが多い。

堝　堝の３点は全てSI-10からの出土である。口径40㎝、器高11.3㎝ほどが残存する堝（87）は口縁部が急激に折れて外反し、口唇部内面をつまみ出すように立ち上げている。積み上げ痕は一部残るが、口縁部から胴部上半までは内外面ともに丁寧な横ナデが施され、胴部下半は概ね縦方向にヘラナデが施される。更に、外面に焼けハジケ痕が明瞭に残るなど、使用状態がうかがえる。胎土は比較的砂粒が少なめで均質な印象を受ける。（88）は残存部が少なく口径は推定できなかった。（87）同様に外反する口縁部の内面（上面）をつまみ上げているが、全体に薄手で、口縁部の造作も（87）ほど顕著な特徴はもたない。また、（87）と同様に外面の胴部下半は器面の調整が確認できな程焼けハジケ痕跡が認められる。（89）は薄手の堝で他の２点と比較すると浅く開く状態となる。口縁部の内外面は横ナデにより調整され、胴部内面も横位のヘラナデによって調整される。胴部外面については器面が荒れ、調整を確認できなかった。

壷　土師器壷（58）はSI-05床下から出土したもので、肩からやや下に最大の張りを持ち、この最大径部分を境に胴部上半は横位のナデによる調整が、胴部下半には縦位のヘラナデ調整が施されている。胴部上半にはロクロを用いたような調整が施された結果、良好なナデと沈線状の数条のくぼみが巡るものである。内面の調整は良好であり、底部はヘラナデにより平滑に調整されるが、全体に焼きが甘く実用には不向きであると考えられる。出土状況も通常の廃棄というよりも呪術的な要素を考慮する必要があるかもしれない。口頸部から上がなく、全体の器形は不明であるが、成形や調整方法から須恵器写しである可能性が高いと思われる。

また、SX-33出土の内面を黒色処理した壷（204）は胴部の最大径部分と思われ、破片上部が横ナデ、下部には縦横にヘラナデを行い、内面は横位の磨きがかかった黒色処理が施されている。破片１片のみであり遺物の全容は不明である。

蓋　蓋（126）はSX-20から出土した。内面はナデ調整が施されるがさほど丁寧ではない。周囲端部でのみ横ナデが丁寧に行われるが、全体に成形段階が不良と思われ器厚が一定しない。胎土、焼成ともに一般の土師器と同様であり日常雑器としての蓋である可能性が高い。

須恵器

坏は数点（94、110、113、158、227）の出土を見た。（94）はSD-04から出土した底部片であり、周囲の遺構埋土からの流れ込みと思われる。（110）はSD-06から、（113）はSX-08から出土した口縁部片である。（158）はSD-08から出土した口縁部片で胴部外側には火襷の痕跡が認められる。（227）は表採品である。

大甕（39、71、72、73、83、132、133、134、184、218、234）は大部分が表採品であるが、（234）のみが肩部片で、他は胴部片である。

壷は、長頸壷の口縁部と思われる破片（30、212、238）と、刻書のある短頸壷口縁部片（19）が出土している。刻書のある口縁部片は、SX-49から出土したもので、4条の刻線が縦に並び1単位を形成し、2単位までを確認できた。出土破片が二分の一程度であることから、4箇所に刻線が施されていた可能性が高い。SD-10から出土した高台部（150）は、外面の高台際までタタキ目が施され、底径約13.5㎝ほどを測る。壷の底部の可能性が高いと思われるが、たたき成形を行っていることから、器形不明としておく。

その他、SE-01出土の胴部片（91）も器種不明であるが、鉢の可能性が考えられる。

縄文土器

縄文土器は深鉢の口縁部片（101）、胴部片（100、151、152）等があるが、いずれも細片であり溝（SD-05・10）の埋土からの出土であることから、周囲からの流れ込みを想定している。出土遺物全体における縄文土器の破片量は少ないが、遺跡の斜面上方に杉の沢遺跡、南西方向には中屋敷遺跡が位置し、縄文時代早期から晩期まで各時代の遺物が出土した経緯から、周辺が平安時代の集落のみではなく、縄文時代から連綿と利用され続けてきた場所であることが改めて理解できた。（101、152）は、縄文時代後期～晩期の粗製深鉢片と思われる。

弥生土器

D-29区南側区西壁埋土より出土した胴部片（104）は沈線間列点文を施すものであるが、器形が同定できない。台付鉢の台部である可能性も考慮したい。E-32区から出土した胴部片（108）は、沈線を1条施すが、文様・器形の同定ができない。

擦文土器

SD-07より鉢胴部破片（122）1点が出土している。

銅製品

鐔の可能性の高い銅製品（43）の詳細については別項を設け報告する。他にSD-08出土の小柄の柄（166）などがあるが、時期については不明である。

鉄製品・鉄滓・溶解物

木質の残る鉄製品（31）がSX-50より出土した。検出時は遺物周辺が方形に変色しており、有機質の構造体（木箱等）に納められていた可能性が考えられた。腐食が著しいが、刀子の可能性が高いと思われる。紡錘車（90）はSI-10より出土したもので、直径5.3㎝、厚さ0.2㎝程度。軸は11.5㎝ほどが残存するが、両端は欠損している。

不明鉄がSX-29（241）、SI-04（240）、SD-04（242）埋土から出土しているが、いずれも分析等を行っておらず素材、用途等も不明である。その他、溶解物を数点、遺構不明のまま欠番となったSX-03・05想定範囲の覆土から検出した。

土製品

羽口（109）は欠番となったE-31区SX-05範囲内にて検出した。溶解物が付着するなど、使用の痕跡が伺える。付近からは流動滓と思われる遺物も検出されていることから、今回調査した範囲外の遺跡内に、何らかの金属を精製する施設の存在を想定できそうである。その他、支脚と考えられる遺物としてSX-21から出土した（75）の他、SX-33やSD-08から数点が検出された。これらは、器面に顕著な被熱痕跡が認められる。なお、今回の調査では、燃焼施設に伴なう検出例はなかった。

石製品・石器

剥片石器として、自然面を留めるフレイクが、SI-08（69）と、SD-15（168）から出土している。いずれも二次加工痕はない。表採した剥片（239）も一部自然面が残存している。

両面加工石器（118）はSX-08の埋土から出土した。縄文時代草創期の石器である可能性を県立郷土館の三宅徹也氏、東北歴史博物館の山田晃弘氏からご教示いただいた。

玉（205）はSX-33から出土したもので、長さ3.6cm、幅2.3cm、厚さ0.4cmで角の丸い三角形状を呈する堆積岩製である。直径1cm大の円孔があり、紐ずれの痕跡が2箇所に認められるため、垂飾品などの用途が考えられる。円孔に対する先端部分が欠損している。弘前大学の藤沼邦彦教授に垂飾品である可能性についてご教示いただいた。

その他、SD-08から石鏃（167）が出土している。また、SI-04床面より検出された（57）は表面に数箇敲打によると見られるくぼみが見られ、凹石状を呈するが、用途等については不明である。

瓦質土器

表採破片として（226）がある。風炉状を呈する土器の胴部と思われる細片で、円窓が1ヶ所確認される。

珠洲甕

表採破片として、鉢の口縁部片（237）が1点出土している。

肥前系磁器

SX-08西側の覆土、SD-08埋土から染付破片が出土している。いずれも図化していない。

その他

SD-09・10の埋土より骨片（骨粉）が検出された。魚骨等の砕片であると思われ、取り上げ等は不可能であった。その他、炭化した穀類がSI-03、SX-33及びC-17区にて検出された。

吉内遺跡出土の銅製品について（図Ⅲ-7・8、写真・巻頭カラー・Ⅲ-3・23）

銅製品の概要

純銅（分析結果第5章参照）の製品で、長径7.3cm、短径3.7cm、高さ1cm、厚さ4mm程度の輪状を呈する。重さ27.83g。楕円形を両端で絞り、くびれを持たせたような製品で、張り出した弧状の外側には稜をもつため、いわゆる葵鐔の形状となる。

出土経緯

銅製品は、平成16年9月23日にSI-03と呼称した竪穴住居跡の北側壁沿い床面から検出した（写真Ⅲ－3、右側中央参照）。遺構は攪乱を受けた痕跡がなく、保存状態良く残されていた。出土位置は、確認面から30cm下がった床面に接しており、遺構の廃棄とともに残されたことが推定される。周囲に小規模な焼土が検出されたが、これは壁沿いの腰板の一角が焼失したものと思われる。

不明銅製品として取り上げた遺物は、腐食や錆による埋土の付着も少なく出土遺物としては良好な状態にあった。クリーニングは、筆による土の除去を中心として行った。クリーニング時の表面観察では、鍍金等の痕跡は確認できなかった。また、一部白色化している部分については、ブロンズ病が懸念されたためベンゾトリアゾルのアルコール溶液を塗布し、表面にパラロイドB72で薄く塗膜を施し、仮処置を行った。現在、保存処理を行い、腐食防止を施している。

銅製品について

発掘調査調査員の成田氏から、中世の遺物である可能性について指摘されたが、遺構が全く攪乱を受けていないことや、建物のカマドから出土した土師器甕が9世紀後半の特徴をもつことから、平安時代の中頃の遺構であり、中世まで下ることはないであろうとの見解を持っていた。また、製品の形態等から、出土当初から遺物が何かの一部を構成する部品と考え、刀剣又は仏具の一部である可能性も考慮したが、該当する事例もないため判断に窮していた。しかし断面を含めた形状から最も近いのは平安後期に残されている皮鐔の覆輪ではないかと考えた。発掘調査での出土遺物類例を青森県内・岩手・秋田各県の調査担当者に照会したが、該当する遺物はないとの答えであった。

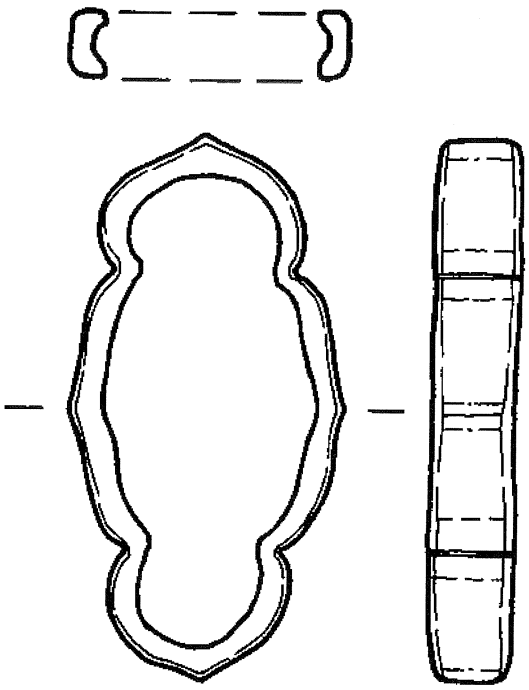
研究者への照会も同時に行った。弘前大学名誉教授の村越潔氏からは、「類する遺物の出土例は県内ではない。近県でも出土例はないのではないか。出土遺物を照会するよりも伝世品等から類例を調査したほうが良いかもしれない。」とご指導いただいた。

また、弘前大学人文学部文化財論講座の関根達人助教授から、「刀剣の鐔であろう。太刀鐔の祖形である可能性も考慮したい。」とご教示をいただくとともに、弘前大学人文学部の藤沼邦彦教授が東北の刀装具を多数実見・研究されていることから、同教授の意見を伺うよう助言を受けた。

藤沼教授からは「古代の鐔のいわば縁金具でよいのではないか。中世まで下ることはないと思う。粂形の変形であろうか。蕨手刀から毛抜形太刀への移行期にあたる可能があるが、どの時期かは不明。」という見解であった。

ほぼ同時期に調査員の成田氏から東京国立博物館列品課列品室の時枝務主任研究員を紹介いただいた。遺物の写真を先行して送付し、後日、遺物を持参し指導を受けた。時枝主任によると、「現存する例から同定ができない。刀装具および現在まで知られている仏具（宗教具）の中には同定するための酷似した例は見当たらないため、それらの可能性は少ないかもしれない。飾り金具として扱うべきかもしれないが、全体形がわからない

銅製品実測図（等倍）



ため何のどの部分に入るのかも不明である。輪の中には、木・金属を含め、何らかの板状のものが入っていたと思う。ただし、鐔だとしても皮鐔のようなものは考えにくい。飾り金具とすると、時期的には格狭間に用いた意匠から木瓜へと意匠が変化する過渡期の遺物であろうか。時期的には10世紀の初めでも良いかもしれない。同時期の工芸品等は多くが国宝・重要文化財に指定されるか、または、ほとんどが周知されている。他の時代と比較すると、平安時代の前半は伝世品・出土例ともに作例が少なく全国的に不明な時期である。しかし、意匠の変遷から見ると、8～9世紀で意匠が変化し、11世紀には毛彫りなどの技巧が盛んに施されて、金具も薄く優美な作りになってくる。本遺物は、その間を埋め、空白となっている意匠の変遷を補完する資料であろう。木瓜形の派生初期・原型として位置付けられるかもしれない。ただし、現在のところは発掘調査や伝世品の新発見などの類例待ちであり資料不足は否めない。

いずれにせよ、全国初の発見であり、平安時代の前半の意匠変遷上貴重な遺物である。どこで製造されたかは当然不明であるが、東北一円（主に南東北か？）での鋳造を考えても良いかもしれない。

今後発掘調査により類例が出土することを望んでいる。9世紀から10世紀にかけて、律令国家体制に組み込まれていないとはいえ、東北独自の文化とともに中央からの人間・文物がかなり入り込んでいることを暗示しているのではないか。」との所見をいただいた。

この席で、古代の金工（飾り金具）であれば、京都国立博物館工芸室長の久保智康氏が詳しいとの紹介を受け、電話及び写真にてコメントをうかがった。

久保室長は、「大刀の鐔でよいと思う。透かし鐔の一種で葵形の鐔の早い時期のものではないか。中には同じく青銅か銅の鐔の部品が入る。いわゆる覆輪の一種であろう。おそらく大刀（直刀）の鐔であると思われ、製作地は不明であるが近畿色も感じられるものである。

大刀（太刀）鐔の変遷を見ると、（遺跡・古墳等からの出土遺物は別にして）最も古い例が正倉院の大刀である。これらの大刀の鐔は唐鐔（粢鐔）と呼ばれる様式のものである。時代的に次に位置する9世紀の例として、重要文化財の京都鞍馬寺の黒漆塗大刀（伝田村麻呂佩刀）などがあるが、この鐔が今回の鐔と類似している。鞍馬寺の鐔は、吉内遺跡出土の鐔と同様の透かし鐔で一見長方形（長楕円形）に見えるがくびれと微妙な稜を持つ鉄鐔である。ただ、鞍馬寺のものは横幅が狭く、今回の出土遺物よりは古く位置付けられると思う。10世紀代の大刀及び鐔は残されておらず、重要文化財の伊勢神宮所蔵の藤原秀郷（俵藤太）所用とされる毛抜太刀が（10世紀末から）11世紀の太刀の典型とされている。この鐔は葵形と称されるもので、四方に葵の葉を模したような鐔である。鐔の変遷上は、9世紀の鐔から11世紀の鐔へと直接結び付けられないが、今回の出土遺物は、両者の特徴を併せ持つような遺物であり、その観点からは、9世紀から10世紀の形態であると思われる。現在までに伝世品・出土品ともに類例がないため、刀装具の変遷上貴重な位置にあるものと思う。なお、形態がいびつに思えるが、縦に見て円の大きなほうに刀の棟部分が、小さな円のほうに刃部分が位置するもので、

上下で大きさが異なることは奇異ではない。内部には金属の鐔が入り込む（挟み込まれる）と思われる。皮鐔等は残存例がほとんど無く、時代的に後世のものになると思われることから無理であろう。」とのコメントをいただいた。

さらに、財団法人栃木県埋蔵文化財センターの津野仁氏からも「二方透しの鍔で良いと思う。同様の例では、有名な京都鞍馬寺や北海道カンカン２、北海道豊里遺跡で見られたものがある。今回の鐔は、中心部と外枠との連接部が外れたもので、徳島県の樋殿谷蔵骨器関係資料として出土している大刀の鍔が、10世紀前葉のものであり、類似品であろう。交易品とみる方が妥当と思う。」という見解を頂戴した。

現在までに見ていただいた研究者の遺物についての見解や解釈には差異もある。加えて、全国的に出土例・類例の報告が極めて少なく、全体の形・使用状態を含めて全容が不明であることからも統一した見解をとることは難しい。以下に、各氏から共通して指摘された事項と調査により判明した事項とをまとめ、本報告書の見解とする。

1　この銅製品と共伴する遺物としては、同一竪穴住居跡の床（カマドの天井が崩落したと思われる土層）から出土した、9世紀後半に青森県の西部（津軽地方）で使われていた土師器がある。
2　研究者各氏ともに、この銅製品の特徴から9世紀から10世紀にかけてという時代観を示された。この年代観は、発掘調査成果と整合性がとれており、時期を決定付けられるものである。
3　この銅製品は製品を構成する部品であり、刀装具や飾り金具など幾つかの用途が考えられる。確定はできないが、形態の特徴からは、近畿・畿内の影響を受けて製作された刀装具（鐔）の可能性が高いと思われる。国内でも極めて珍しい発見であり、刀装具の歴史や意匠（デザイン）の変遷など、美術・工芸史ををたどる上で、貴重な資料である。大きな変化が見られながらも資料の少なかった平安時代前半期における、文化史の空白を埋める資料ともなる。
4　上記から、古代の浪岡（津軽）の在り様を考える際に、重要な鍵となる貴重な資料であると考えられる。当時の津軽には東北北半の文化だけではなく近畿・畿内からの文化が時間差なく入り込み、その文化を受け入れることのできる人々が住んでいたことが考慮されるであろう。

なお、この銅製品は今回鐔として報告するが、付属していたであろう部品を発見することができなかったことから、不明な点が多い。今後の発見例や類例の増加と研究の進展に期待したい。

最後に、下記の方々からご指導を賜わった。（平成17年3月現在）

弘前大学名誉教授	村越　潔　氏
八戸市教育委員会	工藤竹久　氏
同　上	佐々木浩一　氏
弘前大学人文学部日本考古学講座	藤沼邦彦　氏
弘前大学人文学部文化財論講座	関根達人　氏
東京国立博物館　列品課列品室	時枝　務　氏
京都国立博物館　工芸室長	久保康則　氏
栃木県埋蔵文化財センター	津野　仁　氏

第５章　浪岡町吉内遺跡出土銅製品の成分分析調査――蛍光X線分析――

株式会社　吉田生物研究所

１．はじめに

青森県浪岡町に所在する吉内遺跡から出土した銅製品について、以下の通り成分分析を行ったのでその結果を報告する。

２．資料

調査した試料は表１に示す銅製品1点である。

表1　調査試料

No.	保存処理No.	遺物名	概　　要
1	1	銅製品	円環状の製品を屈曲して花菱形に成形した銅製品。

３．分析方法

理学電機工業㈱製の全自動蛍光X線分析装置3270E（検出元素範囲B～U）により、錆を取った後本体に直接蛍光X線を照射して分析した。

４．結果

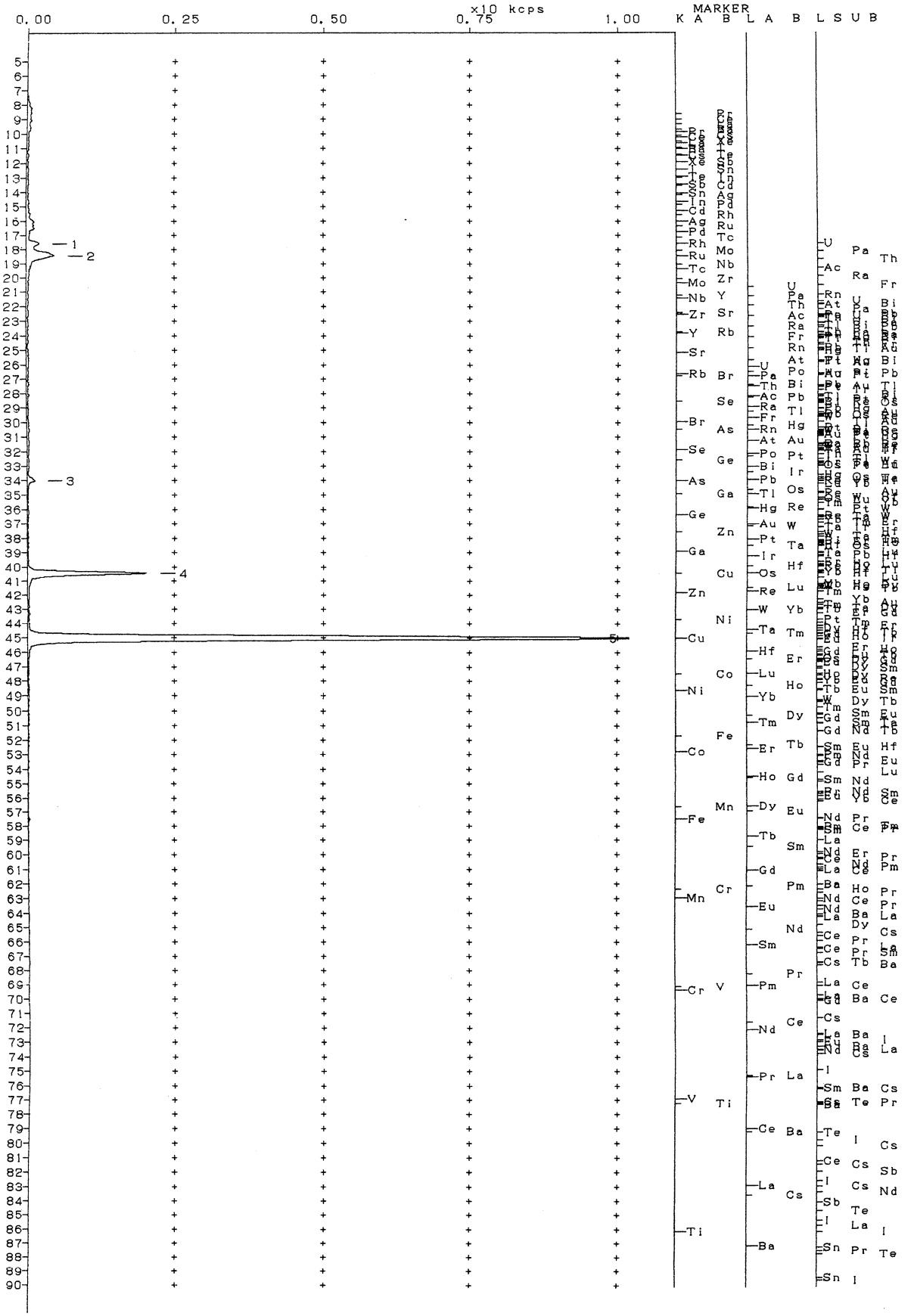
蛍光X線分析結果を別紙に付す（別紙参照のこと）。また、表2に成分分析の結果を示す。成分分析の結果、Cuのみが検出された。よってこの製品は純銅製品と判断する。

表２　成分分析結果表（参考資料）

元素名	含有率（%）
Cu	100

*** 分析 ***　　元素サイクル

T#	ジョブコード	試料名	B#	元素コード
1	STP	テイセイ ヨシダーナミオカ1	40	Hv00



第６章　まとめ

吉内遺跡は、これまで発掘調査の手が入ったことのない遺跡である。隣接する遺跡からは、縄文時代から弥生、平安時代の集落や遺物が検出されており、津軽平野の南東斜面である本遺跡周辺が、現代まで長期間利用され続けてきたことを物語っている。

今回の調査では、調査区の中央付近で住居跡が密集して検出された。周囲の遺跡群の過去における調査と照らし合わせると、南側と北側については農耕により掘削された可能性も考えられる。結果として広大な遺跡範囲について小分割することなく保護・保存（記録保存も含めて）を行い、開発等に際してきめこまやかに対応することが重要なことになろう。

浪岡町は、国道7号（バイパス）の西側斜面に相当する延長数ｋｍにわたる部分と、本遺跡を含む東北自動車道沿線である東側の斜面に縄文時代及び9世紀から10世紀の遺跡群が発見されている。近年「中世の里」を標榜する当町であるが、中世の浪岡を築く基は平安時代以前の集落の発達にあったといえよう。

今回の調査で特に注目すべき点は、９世紀末と思われる竪穴住居跡（SI-03）から大刀の鐔と思われる銅製品が出土したことである。葵形の透かし鐔である可能性が高いとされ、近畿圏の影響を多大に受けた遺物であろうとの評価をいただいている。この一点の遺物をもって吉内遺跡の性格を述べることはできないが、古代の津軽という律令国家の支配下外として位置づけられている地域においても、律令国家の影響を受けた人および文物の交流が行われていたことが推察できた。さらに、この遺物が大刀の鐔であることから、一般の農民ではない、官吏のような人間の入り込みを想定できるのではないだろうか。また、この銅製品が特別な性格・構造を有する遺跡ではない、一般的な集落である吉内遺跡から出土したことは、多数の人々が国という枠をを超えて出入りする状態を考察できるものとして、官衙での出土以上に意義があるのではないだろうか。

遺物を多数検出できたこと、更には、遺構の残存状況が比較的良好であったことから、建物構造の一部が推定できる遺構も数棟あった。「壁溝」と通称される遺構内の周囲に巡らされた溝には、土留めのための板材が埋設され、壁の崩れを防止するように立てられていたと思われる痕跡が認められる。それらの痕跡から、板材の幅や厚さを推察することができた。また、今回確認した建物の床が脆弱でそのまま利用したとは考えにくいことから、例えば、床板を張るなど、建物の建て方を再考する必要に迫られている。

更に、調査区が道路予定地ということで面的な調査を行うことはできなかったため、可能性を指摘するに留めるが、竪穴住居跡間には軸方向等の点で規則性が見出せるかもしれない。

しかし、カマドについては、構造と位置に統一性を見出すことができなかった。更に、SI-04では、カマドと明らかに異なる燃焼施設を検出するなど、燃焼施設も遺構により多様な変化が見られた。この変化は、単に時代的特性を反映した結果とも考えられる。しかし、遺構出土遺物からさほどの時間差を認めることができなかったため、同一集落内で建物（住居）間に役割分担上の差異がある可能性も考慮できよう。

建物の柱については、遺構内で明瞭に検出できるものに乏しく、周囲に外柱穴と想定される痕跡が薄いこともあり、建物の上部構造は不明なままであった。

本年度調査における遺構と遺物の両者を併せ見た場合、吉内遺跡からは、従来他の遺跡でも出土を見ている9世紀から10世紀（一部11世紀）の土師器、須恵器とともに、SD-12出土の黒色土器のように、土師器の範疇から外れる遺物の出土や、いわゆる北陸型と称される土師器甕・内黒坏で内外面のナデ調整が他の遺物と比較して良好であるものなどが出土している。それらの遺物と、遺構の構造（地下の構造）などを合わせて考察すると、集落や生活のあり方だけではなく、そこに暮らした人々の出自の問題など、多様な問題について推測で

きる貴重な資料を得た調査であった。

農道工事の遅れを危惧した一部周囲からは、調査中に調査の簡略・迅速化を提言されたこともあった。しかし、制約の多い中でも調査の簡略化を行わなかったことにより、前述の特筆すべき調査結果を得ることができた。担当として調査が不十分であることを自覚しながらも、この地域、ひいては日本の歴史の中でも極めて稀な成果を公表することができたことに、心から安堵している。

最後に、純銅製の大刀鐔という扱ったことのない遺物を検出したことで、諸先生・諸氏に丁寧な御指導をいただいた。重ねてお礼を申し上げる。

参　考　文　献

辻本　直男　『伊勢神宮宝刀図譜』大塚巧芸社　1974

『日本の武器武具』　東京国立博物館　1976

『正倉院の大刀外装』　小学館　1977

『青森県埋蔵文化財調査報告書第39集　源常平遺跡発掘調査報告書』青森県教育委員会　1978

『青森県埋蔵文化財調査報告書第44集　羽黒平遺跡発掘調査報告書』青森県教育委員会　1979

『青森県埋蔵文化財調査報告書第45集　浪岡町杉の沢遺跡発掘調査報告書』青森県教育委員会　1979

『青森県埋蔵文化財調査報告書第46集　松元遺跡発掘調査報告書』青森県教育委員会　1979

『特別展　日本の金工』　東京国立博物館　1983

小笠原　信夫　『日本の美術１　No.332　日本刀の拵』　1994

成田　誠治　「浪岡町遺跡分布調査概報（平成7年度）」『浪岡町史研究年報Ｉ』　1996

『東京国立博物館図版目録・刀装篇　ほか』　1997

『透かし鐔』　佐野美術館・町田市博物館　1999

広井　雄一　『日本の美術4　No.431　日本刀　藤澤乙安コレクション』2002

津野　仁　「唐様大刀の展開」『研究紀要』11　2003

発 掘 調 査 抄 録

ふりがな	へいせい１６ねんど　なみおかまちぶんかざいきよう　5
書名	平成16年度　浪岡町文化財紀要　V
副書名	吉内遺跡発掘調査報告書－県営本郷地区ふるさと農道緊急整備事業に係る緊急発掘調査報告－
巻次	V
シリーズ名	浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書
シリーズ番号	第14集
執筆者名	木村浩一・竹ヶ原亜希
編集機関	浪岡町教育委員会
所在地	038-1311　青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稲村101-1　tel.0172－62－3004
発行年月日	2005年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査面積	調査期間	調査原因
吉内遺跡	浪岡町大字吉内字山下	市町村	遺跡番号	40°42′0″	140°37′15″	1,700㎡	H16.7.26～H16.11.25	農道整備事業
		02364	29039					

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉内遺跡	集落	平安時代	竪穴建物跡・溝跡・井戸跡ほか	土師器・須恵器・石製品・鉄製品・銅製品などテンバコ15箱	

表Ⅲ-1　SI-01・02・SX-50・53土層注記（図Ⅲ-5対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/3）に、黒色土（10YR2/1）を極小粒状に10%、明黄褐色ローム土（10YR6/6）を極小粒状に5%、明赤褐色焼土（5YR5/8）を極小粒状に1%含む。ビニル混	
2	暗褐色土（10YR3/4）に、褐色土（10YR4/6）を極小粒状に40%、明赤褐色焼土（5YR5/8）を極小～中粒状に2%含む	
3	撹乱土。ビニルなどが混入する	
4	暗褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色粘性土（10YR6/6）を極小～大塊状に20%、黒色土（10YR2/1）を極小～小粒状に5%、明赤褐色焼土（5YR5/6）を小～中粒状に2%、炭化物を極小粒状に1%含む。しまり強	SX-50
5	黒色土（7.5YR2/1）に、明黄褐色粘性土（10YR6/8）を小～中粒状に2%、赤褐色焼土（10YR6/6）を極小～中粒状に2%、炭化物を極小～小粒状に5%含む。しまり弱	SX-50
6	暗褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色粘性土（10YR6/6)を極小～大塊状に30%、褐灰色灰（10YR4/1）を極小粒状に2%、炭化物を極小粒状に5%、明赤褐色焼土（5YR5/6）を小～中粒状に5%、黒色土（10YR2/1）を極小～小粒状に5%含む。しまり強い	SX-50
7	暗褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色粘性土（10YR6/6）を極小～小塊状に10%、明赤褐色焼土（5YR5/6）を小粒～大粒状に10%、炭化物を極小～大粒状に3%含む。しまり強	SX-50
8	暗褐色土（10YR3/3）に、明褐色土（7.5YR5/6）を極小粒～中塊状に20%、明赤褐色焼土（2.5YR5/8）を小塊状に7%含む	SI-02
9	暗褐色土（10YR3/3）に、明褐色土（7.5YR5/6）を極小粒状に2%含む。しまりやや強い	SI-02床
10	黒褐色土（10YR2/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を小～中粒状に2%、炭化物を極小～小粒状に1%、赤褐色焼土（5YR4/8）を極小粒状に1%含む	SX-53
11	黒褐色土（10YR3/1)に、明黄褐色土（10YR6/8）を極小～小粒状に3%含む	
12	黒色土（10YR2/1）に、にぶい黄褐色土（10YR4/3）を極小～小粒状に5%、にぶい黄橙色土（10YR4/4）を極小～小粒状に3%、褐色焼土（7.5YR4/4）を極小粒状に2%、橙色焼土（7.5YR6/6）を極小粒状に1%、炭化材を小粒状に1%含む	
13	黒褐色土（10YR2/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を小～中粒状に2%、炭化物を極小～小粒状に1%、赤褐色焼土（5YR4/8）を極小粒状に1%含む	
14	黒褐色土（7.5YR3/2）に明褐色土（7.5YR5/6）を小～大塊状に3%含む	SI-01
15	黒褐色土（10YR2/2）に、明褐色土（7.5YR5/6）を極小粒～中塊状に15%、赤褐色焼土（5YR4/8）を小塊状に7%含む	SI-01床
16	褐色焼土（7.5YR4/4）に、明赤褐色焼土（7.5YR5/8）を極小～小粒状に5%、黒色土（7.5YR2/1）を小粒状に10%含む	SIF-01天井崩壊土
17	暗褐色土（10YR3/4)に、黄褐色粘性土（10YR5/6）を極小～大粒状に30%、黒色土（10YR2/1）を極小～小粒状に5%、明褐色土（7.5YR5/8）を極小粒状に1%含む	
18	黄褐色砂質土（10YR6/8）のブロック	
19	黒褐色土（10YR3/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8)を極小粒状に10%、暗褐色砂質土（10YR3/4）を極小粒状に1%炭化物を極小～小粒状に5%含む	SIF-01煙道埋土

表Ⅲ-2　SIF-01土層注記（図Ⅲ-5対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	赤褐色焼土（5YR4/2）に、褐灰色粘性土（5YR4/1）を極小粒状に5%、にぶい黄橙色焼土（10YR7/3）を極小粒状に3%含む	
2	褐色粘性土（10YR4/5）に、黒褐色土（10YR3/2）を極小粒状に20%、明赤褐色焼土（5YR5/8）を極小～中粒状に1%、炭化物を極小～小粒状に含む。しまり中	
3	黄褐色粘性土（10YR2/2）に、明褐色砂質土（7.5YR5/8）を極小～小粒状に5%、炭化物を極小～極大粒状に5%、灰白色粘性土（7.5YR8/2）を極小粒状に3%含む	

表Ⅲ-3　SI-03土層注記（図Ⅲ-7対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色土（10YR5/6）を極小～極大粒状に7%、炭化材を極小～大粒状に3%含む。しまりやや弱い	
2	黒色土（10YR1.7/1）に黒褐色土（10YR2/2）を小塊状に25%、黄褐色土（10YR5/6）を極小～中粒状に3%、炭化物を極小粒状に1%含む	
3	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色土（10YR5/6）を極小粒～中塊状に20%、炭化物を極小粒状に1%含む	
4	黒褐色土（10YR2/2）に、黒色土（10YR1.7/1）を小塊状に3%、黄褐色土（10YR5/6）を極小粒状に3%含む	
5	黒色土（10YR1.7/1）に黒褐色土（10YR2/2）を小塊状に25%、炭化物を極小粒状に1%含む	
6	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色土（10YR5/6)を極小粒～大塊状に10%含む。しまりあり	
7	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色土（10YR5/6）を極小～極大粒状に30%、褐色粘性土（10YR4/4）を小～大粒状に3%、明黄褐色焼土（5YR5/8）を小～中粒状に1%、炭化材を極小～大粒状に1%含む。しまり強い	

表Ⅲ-4　SIF-03土層注記（図Ⅲ-7対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2)に、黄褐色粘性土（10YR5/6）を中～大粒状に7%、灰白色粘性土（10YR8/2）を極小～中粒状に5%含む。しまり弱い	
2	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色粘性土（10YR5/6）を中粒～中塊状に15%含む。しまり弱い	
3	黒色土（10YR2/1）に、黄橙色粘性土（10YR5/6）を極小～小粒状に3%含む。しまり弱い	
4	黒色土（10YR2/1）に、黄橙色粘性土（10YR8/6）を極小粒～大塊状に10%、黒褐色土（7.5YR3/2）を極小粒状に5%含む。しまり強い	
5	暗褐色土（10YR3/3）に黄褐色粘性土（10YR8/6）を極小～大粒状に2%含む	
6	暗褐色土（10YR3/3）に黄橙色粘性土（10YR5/6）を小～大粒状に5%、明黄褐色粘性土（10YR7/6）を薄い板状に10%含む。しまりあり	
7	暗褐色土（10YR3/3）に、明黄褐色粘性土（10YR7/6）をブロック状に30%含む	
8	赤褐色焼土（5YR4/8）に、暗褐色土（7.5YR3/3）を極小粒状に20%、炭化物を極小粒状に2%含む	
9	黒褐色土（10YR2/3）に、黒褐色焼土（7.5YR3/2）を極小～中粒状に15%、炭化材を極小～小塊状に7%、赤褐色焼土（5YR4/8）を小～中粒状に10%含む	SI-03床

10	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色土（10YR5/6）を極小～極大粒状に30%、褐色粘性土（10YR4/4）を小～大粒状に3%、明黄褐色焼土（5YR5/8）を小～中粒状に1%、炭化材を極小～大粒状に1%含む。しまり強い	
11	黒褐色土（10YR2/3）に、炭化物を極小～中粒状に3%、黄橙色粘性土（10YR5/8）を極小～中粒状に2%含む。しまり中	
12	暗褐色土（7.5YR3/3）に、赤褐色焼土（5YR4/8）を極小～中粒状に3%、炭化物を極小～大粒状に1%含む。しまり強い	
13	褐色粘性土（10YR4/6）に、灰白色粘土（10YR8/2）を極小～中粒状に5%、黄褐色粘性土（5YR4/8）を極小～中粒状に2%含む	
14a	暗褐色土（10YR3/2）に、橙色焼土（7.5YR6/8）を極小～中粒状に2%、黒色土（7.5YR2/1）を極小～中粒状に1%、にぶい黄褐色土（10YR7/4）を極小粒状に20%含む。しまり中	
14b	褐色粘性土（10YR4/6）に、直径5㎜大の白色粒子を2%含む。しまり強い	
14c	褐色粘性土（10YR4/6）に、黒褐色土（10YR2/2）を極小～小粒状に5%、明黄褐色粘性土（10YR6/8）を小～大粒状に3%、直径5㎜大の白色粒子を2%含む。しまり強い	
15	黒色土（7.5YR2/1）に、赤褐色焼土（5YR4/8）を極小粒状に10%、炭化材を極小～極大粒状に5%含む。しまり弱い	
16	黒色土（10YR2/1）に、褐色砂質土（10YR4/6）を極小～小粒状に30%、褐色粘性土（10YR4/6）を極小粒状に5%、にぶい黄橙色粘性土（10YR6/4）を極小粒状に1%、炭化材を小粒～中塊状に1%含む。しまり強い	煙道構築材
17	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒状に10%、炭化材を極小粒状に5%、褐灰白色灰（10YR6/1）を極小粒状に1%含む。しまりなし	煙道内埋土
18	褐色砂質土（10YR4/6）。しまり強い	煙道床面

表Ⅲ-5　SI-04土層注記（図Ⅲ-9対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/3）に黄褐色土（10YR5/6）を極小～小粒状に3%、にぶい黄橙色土（10YR6/3）を極小～小粒状に1%、暗赤褐色土（5YR3/4）を極小粒状に1%、炭化材を極小粒状に1%含む	
2	暗褐色土（10YR3/3）に、黄褐色土（10YR5/6）を極小粒～大塊状に30%、黒色土（10YR2/1）を小塊状に1%含む	
3a	黒褐色土（10YR2/3）に、暗褐色土（10YR3/3）を小～大塊状に20%、黄褐色土（10YR5/6）を極小～大粒状に5%含む	
3b	暗褐色土（10YR3/3）に、黒褐色土（10YR2/3）を小～大塊状に40%、黄褐色土（10YR5/6）を極小粒状に7%含む	
4	黒褐色土（10YR2/3）に、にぶい黄橙色土（10YR6/3）極小粒状に3%含む	
5	にぶい黄褐色土（10YR4/3）に、黄褐色土（10YR5/6）を極小粒状に1%含む	
6	黒褐色土（10YR2/3）に、黄褐色土（10YR5/6）を極小粒～中塊状に20%含む	
7	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色土（10YR5/6）を極小粒状に5%、暗赤褐色土（5YR3/4）を極小粒状に1%、炭化材を極小粒状に1%含む	
8	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒～大塊状に2%、炭化物を極小～小粒状に1%含む	SIF-04　10層対応

表Ⅲ-6　SIF-04土層注記（図Ⅲ-9対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に1%、炭化物を極小粒状に1%含む	
2	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒～中塊状に5%、炭化物を極小粒～小塊状に2%、褐色土（7.5YR4/6）を小塊状に1%含む	
3	明黄褐色焼土（5YR5/8）に、黒褐色土（10YR2/2）を小塊～厚い板状に15%、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に1%、炭化物を極小粒状に1%含む	
4	赤褐色焼土（5YR4/8）に、黒褐色土（10YR2/2）を極小塊状に10%、炭化物を極小粒状に5%含む	
5	にぶい黄褐色土（10YR5/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を小塊状に3%含む。炭化物を極小粒状に1%含む	
6	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を小塊状に7%、しまり強い。上面が硬化している	
7	にぶい黄褐色土（10YR5/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を小塊状に5%、炭化物を極小粒状に1%含む	
8	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に10%、暗赤褐色焼土（5YR3/6）を小～中塊状に5%、炭化物を極小粒～小塊状に3%含む。しまりあり	
9	赤褐色焼土（5YR5/8）に、黒褐色土（10YR2/2）を小塊状に3%含む	
10	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒～大塊状に2%、炭化物を極小～小粒状に1%含む	
11	黒褐色土（10YR3/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に2%含む。ソデ？	
12	黒褐色土（10YR3/2）に、にぶい黄褐色土（10YR4/3）を小～中塊状に7%、炭化物を極小粒状に1%含む	
13	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を小～大塊状に10%、炭化物を極小粒状に1%含む	
14	黒褐色土（10YR3/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に1%含む	

表Ⅲ-7　SI-05・06、SD - 08土層注記（図Ⅲ-11対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（7.5YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小～小粒状に3%、にぶい黄橙色砂質土（10YR7/4）を極小粒状に1%、炭化物を極小粒状に1%含む	SD-08
2	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒～中塊状に20%、にぶい黄橙色砂質土（10YR7/4）を極小粒状に1%、炭化材を極小粒状に1%含む	
3	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～小粒状に3%含む	
4	黄褐色砂質土（10YR5/6）のブロック	
5	黄褐色砂質土（10YR5/6）に、黒褐色土（10YR2/2）を極小粒～極小塊状に2%含む	
6	黄褐色砂質土（10YR5/6）に、暗褐色土（10YR3/3）を極小粒～極小塊状に3%含む	
7	黒褐色土（10YR3/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒～中塊状に40%、にぶい黄橙色砂質土（10YR7/4）を極小粒～小塊状に3%、炭化材を極小粒状に1%含む。しまり強い	SI-06床
8	黒褐色土（10YR2/2）の単層	
9	黄褐色砂質土（10YR5/6）に、黒褐色土（10YR2/3）を小～中塊状に5%含む	
10	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒～中塊状に20%、炭化材を極小粒状に5%含む	

表Ⅲ-8　SI-07土層注記（図Ⅲ-12対応）

No.	土　層　注　記	備考
Ⅰ	表土（耕作土）	
1	盛土。黒色土（5YR1.7/1）に、明黄褐色土（10YR6/8）を極小粒状に2%、炭化物を極小粒状に1%含む	
2	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒～大塊状に10%、炭化物を極小粒状に1%含む	
3	暗褐色土（10YR3/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒～小塊状に40%、にぶい黄橙色粘性土（10YR6/4）を小～大塊状に5%含む	
4	暗褐色土（10YR3/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒～極小塊状に30%含む	

表Ⅲ-9　SI-08土層注記（図Ⅲ-12対応）

No.	土　層　注　記	備考
Ⅰ	表土（耕作土）	
Ⅱ	暗褐色土（10YR3/3）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒状に1%、明赤褐色土（5YR5/8）を極小粒状に1%含む	耕作土
Ⅲ	黒褐色土（10YR3/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒状に3%、浅黄橙色シルト（10YR8/4）を極小粒状に1%含む	耕作土
1	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒状に1%含む	
2	黒褐色土（10YR2/3）の単層	
3	黒褐色土（10YR2/3）に、明褐色土（7.5YR5/8）を極小粒状に25%含む	
4	黒褐色土（10YR2/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒～小塊状に10%、明赤褐色焼土（5YR5/8）を極小粒～中塊状に1%、炭化材を極小粒状に1%含む	
5	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）と明赤褐色焼土（5YR5/8）をそれぞれ極小粒状に1%含む	
6	黒褐色土（10YR2/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒～大塊状に1%、明赤褐色焼土（5YR5/8）を極小粒状に1%含む。上層各層よりもしまるが、通常の貼り床ほどしまりは認められない	
7	黄褐色砂質土（10YR5/8）のブロック	

表Ⅲ-10　SI-10、SX-21・22土層注記（図Ⅲ-13対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒色土（7.5YR1.7/1）に、小粒～大粒状の炭化物を10%、赤褐色焼土（5YR4/8）を極小粒状に3%含む	
2	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色粘性土（10YR6/8）、焼土塊（5YR4/8）、灰白色灰、炭化物を極小粒～中塊状に5%ずつ含む。しまり極めて強い	SI-10床
3	黒色土（10YR1.7/1）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を小粒～小塊状に5%、赤褐色焼土（5YR4/8）を極小粒状に3%、炭化物を小粒～大粒状に7%含む。しまり弱い	SX-22
4	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を小粒～小塊状に15%、炭化物を極小～小粒状に2%含む	SX-21

表Ⅲ-11　SE-01土層注記（図Ⅲ-15対応）

No.	土　層　注　記	備考
Ⅰ	草根層	
Ⅱ	表土	
1	黒褐色土（10YR2/2）に、明褐色土（7.5YR5/6）を極小粒状に1%含む	
2	黒色土（10YR1.7/1）に、黒色粘性土（10YR2/1）を中塊状に2%、明褐色土（7.5YR5/6）を極小粒状に1%含む。しまりなく、軟らかい	
3	黒褐色土（10YR2/2）に、明褐色土（7.5YR5/6）を極小粒状に1%、灰白色パミス（10YR8/2）を極小粒状に1%、暗褐色灰（10YR3/4）を薄い板状に2%含む	
4	黒褐色土（10YR3/2）に、明褐色土（7.5YR5/6）を極小～小粒状に3%、炭化物を極小粒状に1%含む。しまりやや強い	
5	黒色土（10YR2/1）に、明褐色土（7.5YR5/6）を極小粒状に1%含む。しまり弱く、軟らかい	
6	黒色土（7.5YR2/1）に、黒褐色土（7.5YR3/1）が厚い層状に堆積する。しまり弱く、粘性高い	
7	黒褐色土（10YR2/2）に、明褐色土（7.5YR5/6）を極小粒状に20%含む	
8	黒色土（10YR1.7/1）に、植物遺存体由来の炭化物が泥炭状に混入する。しまりなく湧水が著しい	
9	黒色土（10YR2/1）に、明褐色土（7.5YR5/6）を極小粒状に1%含む。しまり弱く、軟らかい	
10	黒褐色土（10YR2/3)に、明褐色土（7.5YR5/6）を極小粒状に1%含む	
11	黒褐色土（10YR2/3)に、明褐色土（7.5YR5/6）を極小粒状に3%含む	
12	黒褐色土（10YR3/2)に、明褐色土（7.5YR5/6）を極小粒～中塊状に25%含む	
13	黒褐色土（10YR3/2）	

表Ⅲ-12　SD-01・03土層注記（図Ⅲ-15対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色土（10YR6/8）を極小粒状に1%含む。しまりやや弱い	SD-03
2	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色土（10YR6/8）を極小～小粒状に7%含む。しまり弱い	
3	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色土（10YR6/8）を極小粒状に1%含む。しまりやや弱い	
4	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/6）を大粒～中塊状に40%含む。しまり強い	SD-01

表Ⅲ-13　SD-02・03土層注記（図Ⅲ-15対応）

No.	土　層　注　記	備考
Ⅰ	草根層	
Ⅱ	表土	
Ⅲ	黒褐色土（10YR3/2）	
1a	黒褐色土（10YR3/2）に、明黄褐色土（10YR6/8）を極小粒状に1%含む	SD-02
1b	黒褐色土（10YR2/3）に、明黄褐色土（10YR6/8）を極小～小粒状に3%、炭化材を小～大粒状に2%含む。しまりやや弱く、乾燥時にヒ	

	ビが入り崩れやすい	SD-02
2	黒褐色土（10YR2/2）に、橙色ローム（7.5YR6/8）を極小～極大粒状に25%含む。しまりは1層よりやや強く、やや粘性が感じられる	DS-02
3	黒褐色土（10YR2/3）に、黒褐色土（10YR2/2）と暗褐色土（10YR3/4）が中～厚い板状に互層に堆積する。しまりは2層より強い	SD-02
4	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色土（10YR6/8）を極小粒状に1%含む。しまりやや強い	SD-03

表Ⅲ-14　SD-03土層注記（図Ⅲ-15対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～小粒状に１%含む	
2	黒褐色土（10YR2/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒～中塊状に15%含む	

表Ⅲ-15　SD-03土層注記（図Ⅲ-2対応）

No.	土　層　注　記	備考
Ⅰ	草根層	
Ⅱ	表土	
Ⅲ	黒褐色土（10YR3/2）	
1	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色土（10YR7/6）を極小粒～小粒状に2%含む。しまり中	
2	黒褐色土（10YR3/2）に、橙色砂質土（7.5YR6/8）を小粒状に5%含む	
3	黒褐色土（10YR2/2）に、橙色砂質土（7.5YR6/8）を極小～極大粒状に15%含む	
4	黒褐色土（10YR2/3）に、橙色砂質土（7.5YR6/8）を極小粒～小塊状に7%、黒色土（10YR1.7/1）を薄い板状に5%含む。しまり強い	

表Ⅲ-16　SD-04土層注記（図Ⅲ-16対応）

No.	土　層　注　記	備考
Ⅰ	表土	
1	黒褐色土（10YR2/3）に、にぶい黄褐色土（10YR5/4）を極小～小粒状に2%、炭化材を極小粒状に1%含む	
2	黒褐色土（10YR2/3）に、明褐色土（7.5YR5/6）を極小～小粒状に10%、黄橙色土（7.5YR7/8）を極小粒状に2%含む	
3	黒褐色土（7.5YR3/2）に、明褐色土（7.5YR5/8）を極小～大粒状に3%、黒褐色土（7.5YR2/2）を小～中塊状に3%、明褐色土（7.5YR5/8）を極小粒状に1%含む	

表Ⅲ-17　SD-04・05土層注記（図Ⅲ-17対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/3）に、にぶい黄褐色土（10YR5/4）を極小～小粒状に2%、炭化材を極小粒状に1%含む	SD-04
2	黒褐色土（10YR2/2）に、褐色土（7.5YR4/4）を極小～極大粒状に7%含む	SD-04
3	黒褐色土（10YR3/2）に、明褐色土（7.5YR5/6）を極小粒状に2%含む。粘性強	SD-05
4	黒色土（7.5YR2/1）に、明褐色土（7.5YR5/6）を極小粒～小塊状に2%含む	SD-05

表Ⅲ-18　SD-04、SX-04土層注記（図Ⅲ-17対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（7.5YR3/2）に、橙色砂質土（7.5YR6/8）を極小粒～小塊状に5%含む	SX-04
2	黒褐色土（10YR3/2）に、橙色砂質土（7.5YR6/8）を極小粒～小粒状に3%、炭化物を極小粒状に1%含む。しまりなし	SX-04
3	黒褐色土（10YR3/2）に、橙色砂質土（7.5YR6/8）を極小粒～極大粒状に10%含む	SX-04
4	黒褐色土（10YR2/2）に、褐色土（10YR4/6）を極小粒状に3%含む	SD-04
5	黒褐色土（10YR2/2）に、褐色土（10YR4/6）を極小粒状に3%含む	SD-04
6	暗褐色土（10YR3/3）に、明褐色土（7.5YR5/6）を極小粒～小塊状に25%含む	SD-04

表Ⅲ-19　SD-04、SX-08土層注記（図Ⅲ-18対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/3）に、褐色土（7.5YR4/6）を極小～大粒状に3%、褐色土（7.5YR4/4）を小粒状に1%含む	SD-04
2	黒褐色土（10YR2/3）に、褐色土（7.5YR4/6）を極小粒状に1%含む	SX-08
3	黒褐色土（7.5YR3/2）に、明褐色土（7.5YR5/8）を極小～大粒状に3%、黒褐色土（7.5YR2/2）を小塊～中塊状に3%、明褐色土（7.5YR5/8）を極小粒状に1%含む	SX-08

表Ⅲ-20　SD-06・SX-10土層注記（図Ⅲ-18対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色土（10YR6/6）を極小～小粒状に3%含む。しまり強い	SX-10
1	黒色土（7.5YR1.7/1）に、明褐色砂質土（7.5YR5/6）を極小粒状に1%、しまり中。炭化材を極小～大粒状に1%含む	SD-06
2	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色土（10YR6/6）を極小～小粒状に3%含む。しまり強い	SD-06

表Ⅲ-21　SD-07土層注記（図Ⅲ-19対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	暗褐色土（10YR3/3）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～大粒状に2%、黄褐色土（10YR7/8）を極小粒状に1%含む。しまり強	
2	極暗褐色土（7.5YR2/3）に、黄橙色土（10YR7/8）を小～中粒状に3%含む。湿性高く、粘性弱い	

表Ⅲ-22　SD-08・14、SX-33土層注記（図Ⅲ-29対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に2%含む	
2	褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に2%含む	

3	黒色土（10YR2/1）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～小粒状に3%、赤褐色焼土（5YR4/8）を極小～中粒状に2%、炭化材を極小粒～小粒状に2%含む	SD-08
4	黒褐色土（10YR3/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～小粒状に5%、暗赤褐色焼土（5YR3/6）を極小粒状に1%、炭化材を極小粒状に1%、にぶい黄橙色パミス（10YR6/4）を極小粒状に1%含む	SD-08
5	暗褐色土（10YR3/3)に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に5%、炭化材を極小粒状に1%含む	SD-08
6	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～小粒状に3%、炭化材を極小粒状に1%含む	SD-08
7	暗褐色土（10YR3/3)に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～中粒状に10%、赤褐色焼土（5YR4/8）を極小～中粒状に2%含む	SD-08
8	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に1%、にぶい黄橙色パミス（10YR6/4）を極小粒状に1%、赤褐色焼土（5YR5/8）を極小粒状に1%含む	SD-14
9	黒褐色土（10YR2/2)に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に7%、赤褐色焼土（5YR4/8）を極小粒状に3%、炭化材を極小～中粒状に3%、にぶい黄褐色粘性土（10YR5/4）を極小粒～中塊状に5%含む	
10	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～中粒状に5%含む	
11	黒色土（10YR2/1)に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～小粒状に7%、赤褐色焼土（5YR4/8）を極小～小粒状に2%含む。しまり弱い	
12	黒褐色土（10YR2/2）に、黒色土（10YR2/1）を中塊状に30%、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～大粒状に5%、赤褐色焼土（5YR4/8）を極小～中粒状に5%含む。しまり強い。貼り床？	
13	黒褐色土（7.5YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～大粒状に5%、赤褐色焼土（5YR4/8）を極小～中粒状に5%。炭化材を極小粒状に1%含む	
14	黒褐色土（7.5YR2/2)に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に3%、赤褐色焼土（5YR4/8）を極小粒状に2%含む	
15	暗褐色土（10YR3/3)に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～中粒状に3%、にぶい黄褐色粘性土（10YR5/4）を極小粒～小塊状に7%含む	
16	暗褐色土（10YR3/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に3%含む	
17	黒色土（10YR2/1）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～大粒状に7%、炭化材を極小粒状に1%含む	
18	黄褐色砂質土（10YR5/6）に、黒色土（10YR2/1）を極小塊状に15%含む	
19	黒褐色土（10YR2/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～大粒状に5%、赤褐色焼土（5YR4/8）を極小粒状に1%含む	
20	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～中粒状に10%、黒色土（10YR2/1)を小塊状に7%含む	Pit-76
21	暗褐色土（10YR3/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に3%含む	Pit-76
22	黒褐色土（10YR2/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～中粒状に5%、赤褐色焼土（5YR4/8）を極小粒状に1%含む	
23	暗褐色土（10YR3/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に1%含む	
24	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒状に2%、明赤褐色焼土（5YR5/8）を極小～大粒状に3%、灰白色パミス（10YR8/2)を極小粒状に1%含む	
25	橙色粘性土（5YR6/8）の単層。焼けているため、白色の粘性土が赤変している	
26	黒褐色土（10YR2/2）に、明赤褐色焼土（5YR5/8）を薄い板状に5%、灰白色パミス（10YR8/2）を極小粒状に1%含む	
27	暗褐色土（10YR3/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小～小粒状に2%、明赤褐色焼土（5YR5/8）を極小粒状に1%含む	
28	暗褐色土（10YR3/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小～中粒状に3%、明赤褐色焼土（5YR5/8）を極小粒状に1%含む	
29	黒褐色土（10YR2/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小～大粒状に15%、黒色土（10YR1.7/1）を小塊状に5%含む	
30	極暗褐色土（7.5YR2/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小～小粒状に7%、炭化材を極小粒状に1%含む	
31	極暗褐色土（7.5YR2/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小～小粒状に15%、炭化物を極小粒状に1%含む	
32	暗褐色土（10YR3/4）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小～中粒状に10%、炭化材を極小粒状に1%、にぶい橙色粘性土（10YR5/4）を極小～小粒状に1%含む	
33	黒褐色土（7.5YR3/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小～極大粒状に15%含む	

表Ⅲ-23　SD-09・10土層注記（図Ⅲ-20対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小～小粒状に5%、灰白色パミス（10YR8/2）を極小粒状に1%、炭化物を極小～小粒状に1%含む	SD-09
2	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小～中粒状に15%、灰白色パミス（10YR8/2）を極小粒状に1%含む	SD-09
3	黒色土（7.5YR1.7/1）に、黄橙色砂質土（10YR5/8）を極小粒状に2%、灰白色パミス（10YR8/2）を極小粒状に1%含む	SD-09
4	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒～大塊状に20%、灰白色パミス（10YR8/2）を極小粒状に1%含む	SD-09
5	黒褐色土（10YR2/3）に、褐色土（10YR4/6）を極小粒～中塊状に20%含む	SD-10
6	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～小粒状に5%、炭化物を極小粒状に3%、にぶい黄橙色パミス（10YR6/4）を極小粒状に1%含む。遺物を多く含む	SD-10
7	黒褐色土（10YR2/2）に、炭化物を極小～小粒状に15%、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～小粒状に2%含む	SD-10
8	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒～中塊状に20%、炭化物を極小粒状に10%、赤褐色焼土（2.5YR4/6）を極小粒状に1%、灰白色パミス（10YR8/2）を極小粒状に2%含む。しまり強く硬い（9層よりもかなり硬い）	SD-10
9	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～大塊状に20%、炭化物を極小粒状に1%、赤褐色焼土（2.5YR4/6）と灰白色パミスをそれぞれ極小粒状に1%含む	SD-10
10	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～大粒状に5%、灰白色パミス（10YR8/2）を極小粒状に1%含む	SD-10
11	黒褐色土（10YR2/2）と明黄褐色砂質土（10YR6/8）の、極小粒～大塊状に50%ずつの混層。しまり強く、貼床状を呈する	SD-10

表Ⅲ-24　SD-11土層注記（図Ⅲ-22対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/3）に、明黄褐色土（10YR6/8）を極小～中粒状に5%、炭化物を極小～小粒状に1%含む。しまり強	
2	黒褐色土（10YR2/3）に、明黄褐色土（10YR6/8）を極小粒～大塊状に40%含む。しまり強い	
3	明黄褐色（10YR6/8）に、黒褐色土（10YR2/3）を小粒状に5%含む。しまり中	

表Ⅲ-25　SD-12土層注記（図Ⅲ-22対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/3）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒～大塊状に10%、明赤褐色焼土（5YR5/8）を極小～中粒状に2%、炭化物を小粒状に1%含む。しまり中	
2	黒褐色土（10YR2/3）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～大塊状に30%含む	
3	明黄褐色砂質土（10YR6/8）に、黒褐色土（10YR2/3）を極小～小粒状に40%含む	

表Ⅲ-26　SD-13土層注記（図Ⅲ-22対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色砂質土（7.5YR5/6）を極小～小粒状に3%含む	
2	黒色土（10YR2/1）に、明褐色砂質土（7.5YR5/6）を極小粒状に1%含む	
3	黒褐色土（10YR2/2）と極小粒～中塊状の明黄褐色砂質土（10YR5/8）の50%の混層	

表Ⅲ-27　SD-17土層注記（図Ⅲ-4対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒色土（10YR2/1）に、明赤褐色焼土（5YR5/8）を極小～小粒状に1%含む	
2	黒色土（10YR2/1）に、明黄褐色土（10YR7/6）を極大～小塊状に30%含む。しまり強い	

表Ⅲ-28　SD-18・SX-32土層注記（図Ⅲ-22対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒色土（10YR2/1）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～大粒状に10%、赤褐色土（10YR4/8）を極小～中粒状に1%、炭化物を小粒状に1%含む。しまり強い	SD-18
2	黒色土（10YR2/1）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8)を小～大塊状に15%、赤褐色土（10YR4/8）を極小～小粒状に2%、炭化物を極小粒状に1%含む。しまり強い	SD-18
3	黒褐色土（10YR2/3）に、褐色土（10YR4/6）を極小粒状に30%、黒褐色土（10YR2/2）を極小粒状に2%含む。しまり中	SX-32

表Ⅲ-29　SD-19土層注記（図Ⅲ-22対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）の単層。しまり中	
2	黒褐色土（10YR2/3）に、黄橙色砂質土（10YR7/6）を極小粒～大塊状に40%含む。しまり中	

表Ⅲ-30　SD-20・SX-49・53土層注記（図Ⅲ-5対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を小～中粒状に2%、炭化物を極小～小粒状に1%、赤褐色焼土（5YR4/8）を極小粒状に1%含む	SX-53
2	黒褐色土（10YR3/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を小～中粒状に2%、炭化物を極小～小粒状に1%含む	
3	黒褐色土（10YR3/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒～大塊状に40%、黒色土（10YR2/1）を極小～小粒状に2%、赤褐色焼土（5YR4/8）を小粒状に1%、炭化物を小粒状に3%含む。しまり強	
4	黒色土（10YR2/1）に、炭化物を極小～小粒状に1%含む。しまり弱	
5	黒褐色土（10YR3/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒～大塊状に40%、黒色土（10YR2/1）を極小～小粒状に2%、赤褐色焼土（5YR4/8）を小粒状に1%、炭化物を小粒状に3%含む。しまり強	
6	黒褐色土（10YR3/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小～中粒状に10%、赤褐色焼土（5YR4/8）を小粒状に2%、炭化物を極小～小粒状に1%含む。しまり強	

表Ⅲ-31　Pit-04土層注記（図Ⅲ-15対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、黄橙色砂質土（10YR7/8）を小粒状に7%含む。しまりなし。粘性ややあり	
2	黒褐色土（10YR2/3）に、にぶい黄橙色シルト（10YR5/4）を極小～小粒状に15%含む。しまり強い	

表Ⅲ-32　Pit-05土層注記（図Ⅲ-16対応）

No.	土　層　注　記	備考
Ⅰ	耕作土。黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色土（10YR6/8）を極小～小粒状に5%含む。しまり強く、クラックが入りやすい	
1	黒色土（7.5YR2/1）の単層。しまり弱い	
2	黒褐色土（10YR3/2）に、明黄褐色土（10YR6/6）を極小粒～大粒状に40%含む。粘性強い	

表Ⅲ-33　Pit-06土層注記（図Ⅲ-16対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR3/2）に、明黄褐色土（10YR6/6）を極小～中粒状に30%含む。しまりあり	

表Ⅲ-34　Pit-07土層注記（図Ⅲ-16対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR3/2）に、明黄褐色土（10YR6/6）を極小～小粒状に15%含む。しまりあり	

表Ⅲ-35　Pit-08土層注記（図Ⅲ-16対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR3/2）に、明黄褐色土（10YR6/6）を極小～小粒状に50%含む。しまりあり	
2	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色土（10YR6/6）を3%含む。しまりあり	

表Ⅲ-36　Pit-10土層注記（図Ⅲ-17対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	暗褐色土（10YR3/3）に、褐色土（10YR4/6）を極小粒状に2%含む	

表Ⅲ-37　Pit-11土層注記（図Ⅲ-17対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	暗褐色土（10YR3/3）に、褐色土（10YR4/6）を極小～大粒状に40%含む	

表Ⅲ-38　Pit-12土層注記（図Ⅲ-17対応）

No.	土　層　注　記	備考
Ⅰ	草根層	
1	黒色土（10YR3/2）に、明黄褐色土（10YR6/8）を極小粒状に10%含む	

表Ⅲ-39　Pit-14土層注記（図Ⅲ-17対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、褐色土（10YR4/6）を極小～大粒状に30%含む	

表Ⅲ-40　Pit-15土層注記（図Ⅲ-17対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	暗褐色土（10YR3/4）に、黄褐色土（10YR4/6）を極小粒～大塊状に30%含む	

表Ⅲ-41　Pit-16土層注記（図Ⅲ-17対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/3）に、黄褐色土（10YR4/6）を極小～大粒状に10% 含む	

表Ⅲ-42　Pit-17土層注記（図Ⅲ-17対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/3）に、褐色砂質土（10YR4/4）を中粒状に2%、明黄褐色土（10YR6/8）を極小～小粒状に1%含む。しまり中	

表Ⅲ-43　Pit-18土層注記（図Ⅲ-5対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	暗褐色土（10YR3/3）に、褐色土（10YR4/6）を極小粒状に1%含む	

表Ⅲ-44　Pit-19土層注記（図Ⅲ-5対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒色土（10YR2/1）の単層	

表Ⅲ-45　Pit-20土層注記（図Ⅲ-17対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/3）に、褐色土（10YR4/6）を極小～中粒状に10%、炭化材を中粒状に5%、明赤褐色焼土（5YR5/6）を小粒状に3%含む	

表Ⅲ-46　Pit-21土層注記（図Ⅲ-17対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/3）に、明褐色土（7.5YR5/8）を極小粒～小塊状に5%、炭化材を中粒状に1%含む	

表Ⅲ-47　Pit-22土層注記（図Ⅲ-18対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色土（10YR6/6）を極小～小粒状に3%含む。しまり強い	

表Ⅲ-48　Pit-23・SX-10土層注記（図Ⅲ-18対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒色土（7.5YR1.7/1）に、黄褐色土（10YR5/6）を極小～小粒状に1%含む	SX-10
2	黒色土（10YR1.7/1）に、黄褐色土（10YR5/6）を極小粒状に1%含む	Pit-23

表Ⅲ-49　Pit-24土層注記（図Ⅲ-19対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（7.5YR3/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～小塊状に20%含む。しまり中	

表Ⅲ-50　Pit-25土層注記（図Ⅲ-19対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/3）に、明黄褐色土（10YR6/8）を極小～中塊状に15%含む	
2	黒褐色土（10YR2/3）の単層	
3	褐色砂質土（10YR4/4）に、黒褐色土（10YR3/1）を極小～小粒状に20%、黄橙色土（10YR7/8）を中塊状に10%含む	

表Ⅲ-51　Pit-26土層注記（図Ⅲ-19対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/3）に、にぶい黄褐色土（10YR4/3）を薄い板状に30%含む。しまり強	

表Ⅲ-52　Pit-27土層注記（図Ⅲ-19対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	暗褐色土（10YR3/4）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒～中塊状に20%含む。しまり中	

表Ⅲ-53　Pit-31土層注記（図Ⅲ-24対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/3）に、明黄褐色土（10YR6/8）を小～中粒状に2%含む。しまり弱い	
2	黒褐色土（10YR2/2）に、暗褐色土（10YR3/2）を極小～小粒状に10%、明黄褐色土（10YR6/8）を中粒～小塊状に5%含む	
3	黒色土（10YR2/1）に、黒褐色土（10YR3/2）を極小～小粒状に10%含む。しまり弱	
4	柱痕。黒褐色土（10YR3/1）に、明黄褐色土（10YR6/8）を極小～小粒状に2%含む	

表Ⅲ-54　Pit-32土層注記（図Ⅲ-24対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/3）に、黄褐色土（10YR5/2）を小～大粒状に2%含む	
2	黒褐色土（10YR2/3）に、灰黄褐色土（10YR4/2）を極小～小粒状に20%、明黄褐色土（10YR6/8）を極小～小粒状に5%含む	

表Ⅲ-55　Pit-33土層注記（図Ⅲ-24対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、暗褐色土（10YR3/2）を極小～小粒状に20%、黄橙色土（10YR7/8）を極小～中粒状に3%含む	

表Ⅲ-56　Pit-34土層注記（図Ⅲ-24対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒色土（10YR2/1）に、にぶい黄褐色土（10YR4/3）を30%含む	
2	黒色土（10YR2/1）に、黒色土（10YR1.7/1）を極小～極大粒状に10%、黄橙色土（10YR7/8）と黄褐色土（10YR5/6）を極小～小粒状にそれぞれ3%含む	
3	黒色土（10YR2/1）に、黄褐色土（10YR5/6）を極小～中粒状に2%含む	

表Ⅲ-57　Pit-35土層注記（図Ⅲ-24対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/3）に、明黄褐色土（10YR6/8）を極小～中粒状に5%、炭化物を小粒状に1%含む	
2	黒色土（10YR2/2）に、黒褐色土（10YR3/2）を極小～小粒状に30%含む	
3	黒色土（10YR2/2）に、明黄褐色土（10YR6/8）を極小粒～小塊状に5%、炭化物を小粒状に5%含む	
4	黒色土（10YR2/2）に、炭化物を小粒状に5%含む	

表Ⅲ-58　Pit-36土層注記（図Ⅲ-24対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（7.5YR2/2）に、明褐色土（7.5YR5/8）を極小～小粒状に2%、明黄褐色土（10YR6/8）を小～大粒状に2%、炭化物を小粒状に1%含む	
2	黒褐色土（10YR2/2）に、褐色土（10YR4/4）を極小～小粒状に1%含む。しまり中	

表Ⅲ-59　Pit-37土層注記（図Ⅲ-24対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、黒褐色砂質土（10YR2/3）を20%含む。直径0.5～1cm大の小礫を7%含む。しまり強い	

表Ⅲ-60　Pit-38土層注記（図Ⅲ-17対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR3/2）に、褐色土（10YR4/6）を極小粒～小粒状に5%含む	

表Ⅲ-61　Pit-39土層注記（図Ⅲ-17対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（7.5YR2/2）の単層。しまり強い	

表Ⅲ-62　Pit-40土層注記（図Ⅲ-17対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	暗褐色土（10YR3/4）に、褐色土（10YR4/6）を極小粒～大塊状に10%含む	

表Ⅲ-63　Pit-41土層注記（図Ⅲ-17対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（7.5YR2/3）に、黄褐色土（10YR4/6）を極小粒状に、炭化物を極小粒状に3%ずつ含む	

表Ⅲ-64　Pit-42土層注記（図Ⅲ-13対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒色土（10YR2/1）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～小粒状に5%含む	

表Ⅲ-65　Pit-43土層注記（図Ⅲ-13対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒色土（10YR2/1）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～小粒状に5%含む	

表Ⅲ-66　Pit-44土層注記（図Ⅲ-13対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR3/1）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を小塊～中塊状に20%含む。しまり中	

表Ⅲ-67　Pit-45土層注記（図Ⅲ-13対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～小粒状に20%含む。しまり弱	

表Ⅲ-68　Pit-47土層注記（図Ⅲ-22対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒色土（10YR1.7/1）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に3%含む	
2	暗褐色土（10YR3/4）に黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～大粒状に20%含む	

表Ⅲ-69　Pit-48土層注記（図Ⅲ-22対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒色土（10YR1.7/1）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に3%、炭化物を極小粒状に1%含む	
2	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に20%含む	
3	黒色土（10YR1.7/1）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に3%、炭化物を極小粒状に1%含む	

表Ⅲ-70　Pit-49土層注記（図Ⅲ-22対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒色土（7.5YR1.7/1）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に3%、褐色土（10YR4/6）を極小粒状に1%含む	
2	暗褐色土（10YR3/3）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に25%含む	

表Ⅲ-71　Pit-50土層注記（図Ⅲ-22対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒色土（10YR2/1）に、褐色土（10YR4/6）を極小粒状に5%含む	

表Ⅲ-72　Pit-51土層注記（図Ⅲ-12対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	明黄褐色土（10YR6/8）に、黒色土（10YR2/1）を極小～小粒状に5%、にぶい黄褐色土（10YR4/3）を極小粒状に3%含む。しまり弱い	

表Ⅲ-73　Pit-52土層注記（図Ⅲ-25対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/3）に、明黄褐色土（10YR6/8）を極小粒状に2%含む。しまり弱い	
2	黒褐色土（10YR2/3）に、明黄褐色土（10YR7/6）を極小粒～中粒状に15%、明黄褐色土（10YR6/8）を極小粒～小塊状に15%、灰白色粘性土（10YR7/1）を中～大粒状に1%含む。しまり強い	

表Ⅲ-74　Pit-53土層注記（図Ⅲ-25対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/3）に、明黄褐色土（10YR6/8）を極大粒状に1%含む	
2	暗褐色土（10YR3/3）に、明黄褐色土（10YR6/8）を極小粒状に1%含む	

表Ⅲ-75　Pit-54土層注記（図Ⅲ-4対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色砂質土（10YR7/6）を極小粒～中塊状に7%含む。しまり強	

表Ⅲ-76　Pit-55土層注記（図Ⅲ-25対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/3）に、明黄褐色土（10YR6/8）を極小粒状に2%含む。しまり弱い	
2	黒褐色土（10YR2/3）に、明黄褐色土（10YR7/6）を極小～中粒状に15%、明黄褐色土（10YR6/8）を極小粒～小塊状に15%、灰白色粘性土（10YR7/1）を中～大粒状に1%含む。しまり強い	

表Ⅲ-77　Pit-56土層注記（図Ⅲ-12対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒色土（10YR2/1）に、明黄褐色土（10YR6/8）を極小粒～小塊状に１%、炭化物を極小～中粒状に5%含む。しまり中	

表Ⅲ-78　Pit-57土層注記（図Ⅲ-29対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/3）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒～大塊状に20%、炭化物を小粒状に2%含む	

表Ⅲ-79　Pit-58土層注記（図Ⅲ-29対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	暗褐色土（10YR3/3）に、明黄褐色砂質土（10YR7/6）を極小～小粒状に１%、明赤褐色焼土（2.5YR5/6）を極小粒状に1%、炭化材を極小～小粒状に2%含む	

表Ⅲ-80　Pit-59土層注記（図Ⅲ-23対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、黄橙色砂質土（10YR7/8）を極小～小粒状に1%含む。しまり中。粘性あり	
2	黒褐色土（10YR2/3）に、黄橙色砂質土（10YR7/8）を極小粒～小塊状に20%含む	

表Ⅲ-81　Pit-60土層注記（図Ⅲ-23対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR3/1）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～中粒状に5%、炭化物を小粒状に1%含む	

表Ⅲ-82　Pit-61土層注記（図Ⅲ-7対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒色土（10YR2/1）に、橙色焼土（5YR7/8）を極小粒状に5%、炭化物を極小粒状に2%含む。しまり中	SI-03内

表Ⅲ-83　Pit-62土層注記（図Ⅲ-7対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒状に5%、炭化物を極小粒状に5%、にぶい赤褐色焼土（5YR5/4）を極小粒状に1%含む	SI-03内

表Ⅲ-84　Pit-63土層注記（図Ⅲ-12対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒～大塊状に10%、黒色土（10YR2/1）を極小～小粒状に5%、炭化物を極小粒状に1%含む。層の上部は明黄褐色土が多く、明るめ	

表Ⅲ-85　Pit-64土層注記（図Ⅲ-12対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～大粒状に2%、炭化物を小粒状に1%含む	

表Ⅲ-86　Pit-65土層注記（図Ⅲ-12対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR3/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒～小塊状に10%含む。炭化物を小粒状に5%含む	

表Ⅲ-87　Pit-66土層注記（図Ⅲ-12対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR3/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒～小塊状に15%、炭化物を小粒状に3%含む	

表Ⅲ-88　Pit-67土層注記（図Ⅲ-22対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	暗褐色土（10YR3/3）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒～中塊状に40%、炭化物を1%、小粒状に含む	

表Ⅲ-89　Pit-68土層注記（図Ⅲ-22対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	暗褐色土（10YR3/3）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒～大塊状に10%含む	

表Ⅲ-90　Pit-70土層注記（図Ⅲ-5対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR3/2）に、褐色土（10YR4/6）を極小粒状に15%、炭化物を極小粒状に1%含む。しまり強い	

表Ⅲ-91　Pit-71土層注記（図Ⅲ-5対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色土（10YR5/8）を極小粒状に5%含む	

表Ⅲ-92　Pit-75土層注記（図Ⅲ-29対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒色土（10YR2/1）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小～中粒状に15%、炭化物を小～中粒状に3%、灰黄褐色土（10YR6/2）と橙色焼土（5YR6/8）を極小～小粒状に1%含む。しまり強い	SD-08内

表Ⅲ-93　SX-06土層注記（図Ⅲ-26対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/3）に、明黄褐色土（10YR6/6）を小粒～中塊状に7%、暗褐色土（10YR3/3）を極小～小粒状に10%、明赤褐色焼土（5YR5/8）を極小～小粒状に1%、炭化物を小粒状に2%含む。しまりあり	

表Ⅲ-94　SX-08土層注記（図Ⅲ-18対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/3）に、橙色土（7.5YR6/8）を極小～小粒状に2%、明褐色土（7.5YR5/6）を極小粒～小粒状に3%、炭化材を小粒状に1%含む	
2	黒褐色土（10YR2/3）に、橙色土（7.5YR6/8）を極小～中粒状に2%、炭化材を小～大粒状に3%含む	
3	暗褐色土（10YR3/3）に、明褐色土（7.5YR5/8）を極小粒状に1%含む	
4	黒褐色土（10YR2/3）に、明褐色土（7.5YR5/6）を極小粒～中塊状に20%、赤褐色砂質土（5YR4/8）を薄い層状に5%含む	
5	黒褐色土（10YR2/3）に、褐色土（7.5YR4/4）を小～大粒状に15%、黒褐色土（10YR2/2）を小塊状に2%含む	

表Ⅲ-95　SX-09土層注記（図Ⅲ-26対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	暗褐色土（10YR3/3）に、にぶい黄褐色土（10YR4/6）を極小～大粒状に20%、炭化物を小粒状に1%、橙色焼土（7.5YR6/8）を小～中粒状に１%含む。しまりあり	

表Ⅲ-96　SX-11土層注記（図Ⅲ-18対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/3）に、明黄褐色土（10YR6/6）を極小～中粒状に20%含む	

表Ⅲ-97　SX-16土層注記（図Ⅲ-19対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR3/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～中塊状に10%、黄橙色土（10YR7/8）を極小～小粒状に10%含む。しまり弱い	

表Ⅲ-98　SX-20土層注記（図Ⅲ-19対応）

No.	土　層　注　記	備考
I	黒色土（10YR1.7/1）に、暗褐色土（10YR3/3）を中塊～大塊状に10%、橙色砂質土（7.5YR6/8）を極小～極大粒状に3%含む	
1	黒色土（10YR2/1）に、橙色砂質土（7.5YR6/8）を極小粒状に1%含む	
2	黒色土（10YR2/1）に、橙色砂質土（7.5YR6/8）を極小粒状に10%含む	

表Ⅲ-99　SX-29土層注記（図Ⅲ-27対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/6）を極小粒状に3%、明赤褐色焼土（2.5YR5/8）を極小粒状に3%、にぶい黄橙色パミス（7.5YR7/4）を極小粒状に2%、炭化物を極小粒状に2%含む	
2	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/6）を極小粒状に25%.炭化物を極小～小粒状に3%含む。しまり弱い	
3	明赤褐色焼土（5YR5/8）に、黒褐色土（5YR2/2）を極小粒状に10%含む	
4	黒色土（7.5YR2/1）に、炭化物を小～大粒状に15%、明赤褐色砂質土（10YR6/8）を小粒状に2%含む。粘性中	
5	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒～大塊状に30%含む。粘性大	
6	黒褐色土（10YR2/2)に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～小粒状に10%含む。湿性大	
7	明黄褐色土（10YR6/8）の単層。しまり弱い	
8	明黄褐色土（10YR6/8）に、にぶい黄橙色粘性土（10YR6/3）を薄い板状に10%、明赤褐色焼土（5YR5/8）を中～大粒状に5%、炭化材を小～大粒状に2%、黒褐色土（7.5YR3/2）を極小～大粒状に10%含む。しまり強い。貼りつけているような印象	
9	黒褐色粘性土（7.5YR2/1）の単層	
10	褐色砂質土（7.5YR4/3）に、にぶい黄橙色粘性土（10YR6/3）を極小～中粒状に2%、橙色焼土（5YR6/8）を極小～小粒状に15%、炭化物を極小～小粒状に4%含む	
11	にぶい黄橙色粘性土（10YR6/3）に、明黄褐色粘性土（10YR6/8）を極小粒状に10%含む。しまり強	

表Ⅲ-100　SX-30土層注記（図Ⅲ-27対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR3/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/6）を極小粒状に3%含む	

表Ⅲ-101　SX-31土層注記（図Ⅲ-20対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を小粒状～大塊状に3%、3～5㎝の炭化材を含む	

表Ⅲ-102　SX-36土層注記（図Ⅲ-25対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、橙色砂質土（7.5YR6/8）を極小～小粒状に1%、灰色パミス（10YR8/2）を極小粒状に1%含む	
2	黒褐色土（10YR2/2）に、橙色砂質土（7.5YR6/8）を極小粒～大塊状に20%、炭化物を極小粒状に1%含む	
3	黒色土（10YR1.7/1）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小～小粒状に1%含む	

表Ⅲ-103　SX-37土層注記（図Ⅲ-25対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒色土（10YR2/1）に、にぶい黄褐色土（10YR5/3）を極小～小粒状に20%、明黄褐色土（10YR6/8）を極小～小粒状に3%含む	
2	黒色土（10YR2/１）に、明黄褐色土（10YR6/8）を極小～小粒状に2%含む	

表Ⅲ-104　SX-38土層注記（図Ⅲ-25対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/2）に、黄橙色砂質土（10YR7/8）を極小粒状に1%含む。しまり強	

表Ⅲ-105　SX-39土層注記（図Ⅲ-25対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒色土（10YR1.7/1）に、明黄褐色土（10YR6/8）を極小～中粒状に5%含む。しまり強	
2	黒色土（10YR2/1）に、明黄褐色土（10YR6/8）を極小粒～大塊状に40%含む。しまり強	

表Ⅲ-106　SX-40土層注記（図Ⅲ-23対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒色土（10YR1.7/1）に、灰黄褐色土（10YR6/2）を極小粒状に40%、明黄褐色土（10YR6/8）を極小粒状に10%含む。しまり弱	

表Ⅲ-107　SX-41土層注記（図Ⅲ-4対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒色土（10YR2/1）に、黒褐色土（10YR3/2）を極小粒状に30%、明黄褐色土（10YR6/8）を極小～小粒状に3%含む。しまり弱	

表Ⅲ-108　SX-46土層注記（図Ⅲ-29対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒褐色土（10YR2/3）に、明黄褐色砂質土（10YR6/6）を極小～極大粒状に15%、明赤褐色焼土（5YR5/8）を極小～小粒状に3%、にぶい黄橙色パミス（10YR7/3）を小塊状に2%、炭化物を極小粒状に1%含む	

表Ⅲ-109　SX-47土層注記（図Ⅲ-23対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒色土（10YR2/1）に、暗褐色土（10YR3/4）を極小～小粒状に10%、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒～大塊状に15%含む。しまり弱	

表Ⅲ-110　SX-48土層注記（図Ⅲ-23対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	黒色土（10YR2/1）に、暗褐色土（10YR3/4）を極小～小粒状に10%、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒～大塊状に15%含む。しまり弱	

表Ⅲ-111　SX-51土層注記（図Ⅲ-5対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	暗褐色土（10YR3/3）に、黄褐色土（10YR5/6）を中塊～大塊状に30%、明赤褐色焼土（2.5YR5/8）を極小粒～小塊状に5%含む。しまり強い	
2	暗褐色土（10YR3/4）に、黄褐色土（10YR5/6）を小粒～小塊状に3%、明赤褐色焼土（2.5YR5/8）を極小粒～小塊状に20%含む	
3	暗褐色土（7.5YR3/4）に、黄褐色土（10YR5/6）を極小粒状に3%、黒色土（10YR2/1）を小～中塊状に2%含む	

表Ⅲ-112　SX-52土層注記（図Ⅲ-5対応）

No.	土　層　注　記	備考
I	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色土（10YR5/6）を極小～小粒状に2%含む	
1	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色土（10YR5/6）を極小粒状に1%、赤褐色焼土（5YR4/8）を小粒状に1%含む	
2	暗褐色土（10YR4/6）に、黄褐色土（10YR5/6）を極小粒～中塊状に10%、明黄褐色焼土（5YR5/8）を小塊状に1%含む	
3	暗褐色土（7.5YR3/3）に、明赤褐色焼土（2.5YR5/8）を極小粒～中塊状に30%、黄褐色土（10YR5/6）を小塊状に3%含む	

写真Ⅲ-1　吉内遺跡

調査前　北側から

調査前　中央付近

表土除去状況

北側遺構確認（SE-02検出）状況

写真Ⅲ-2　吉内遺跡

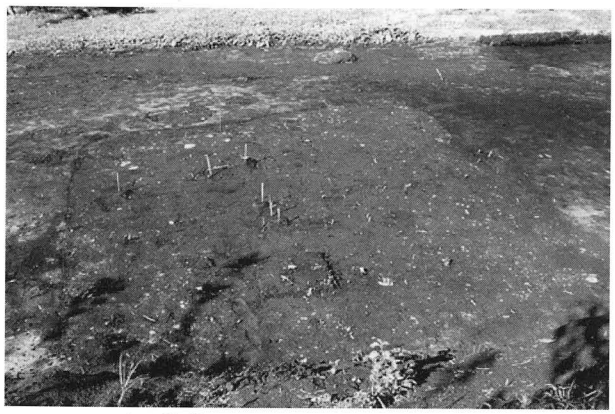
SI-01・02他　確認状況

SI-01
南側掘り方検出状況

SIF-01　ソデ残し

SIF-01　完掘

写真Ⅲ-3　吉内遺跡

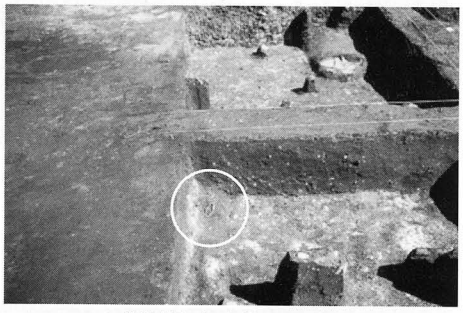


SI-03　確認状態

SI-03　調査状況

SIF-03　ソデ残し

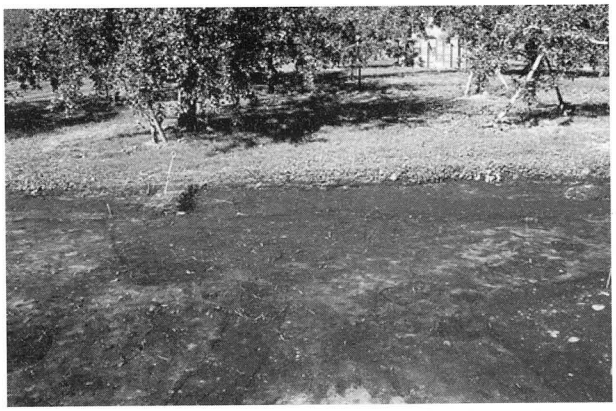
SIF-03　煙道半截



SF-03　銅製品出土状況

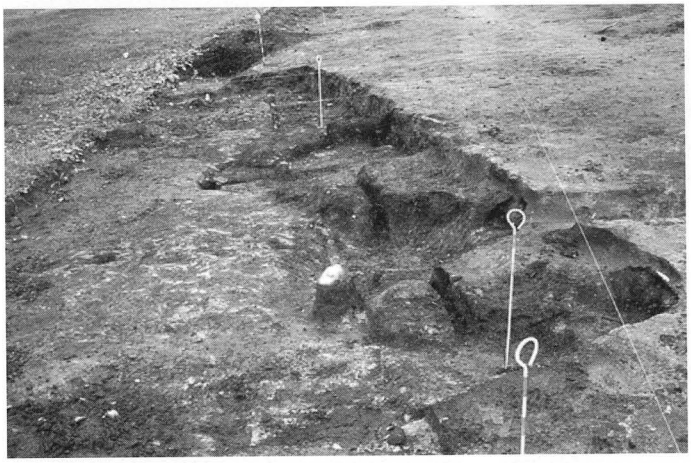
SI-03　完掘

写真Ⅲ-4　吉内遺跡

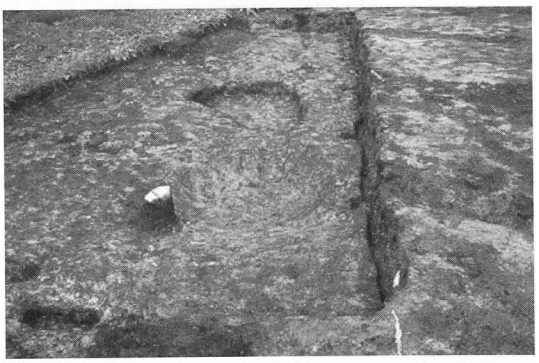


SI-04　確認状況

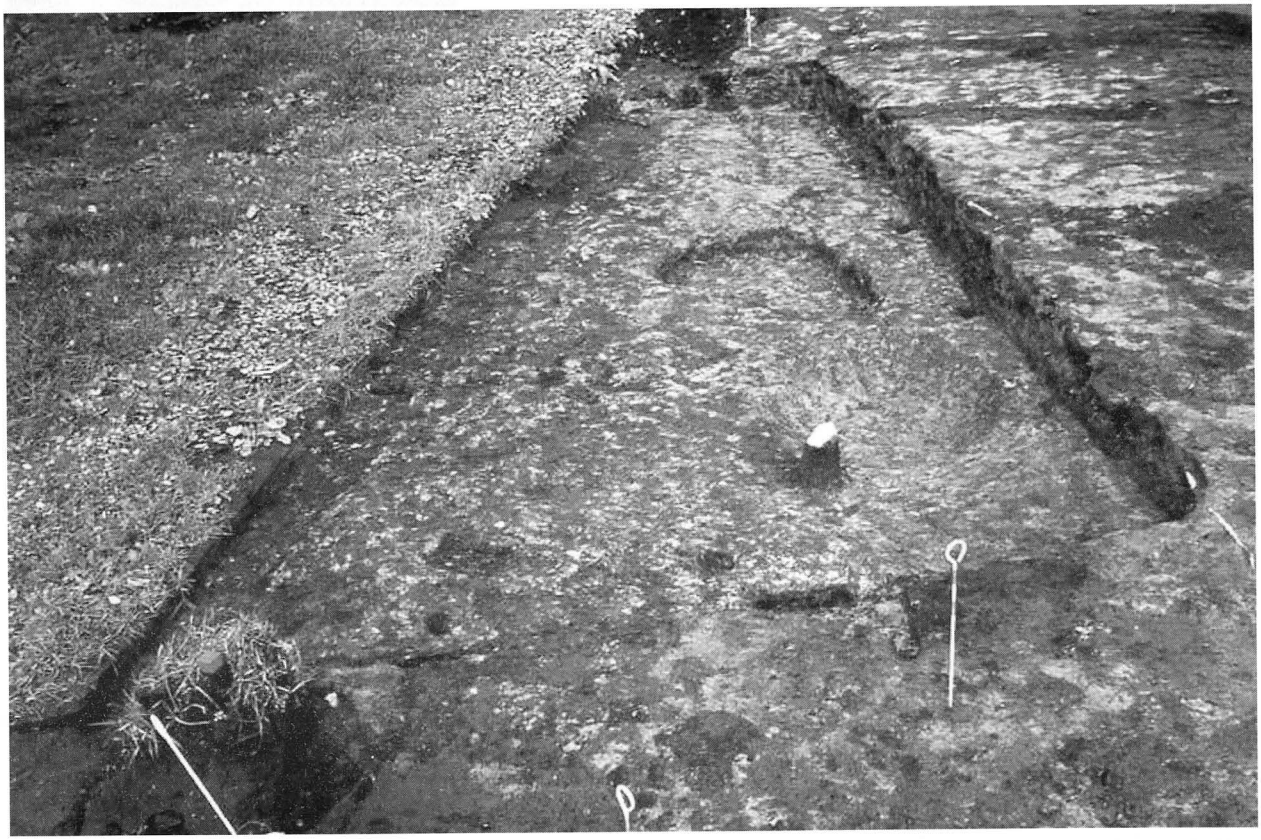
SI-04　床面検出状態



SIF-04　調査状況



SI-04　壁沿いPit　完掘



SI-04　完掘

写真Ⅲ-5　吉内遺跡

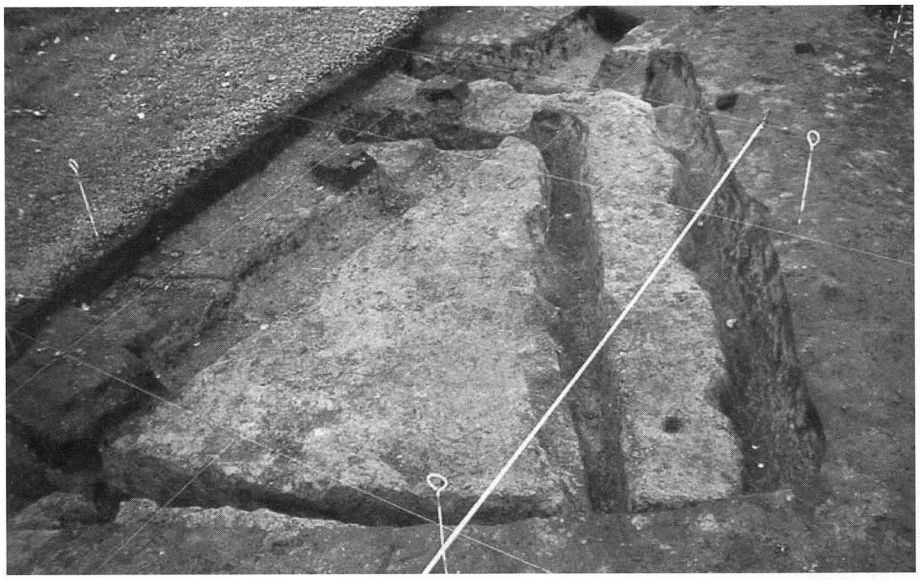
SI-05　確認状況

SI-05　調査状況

SI-05　遺物出土状態

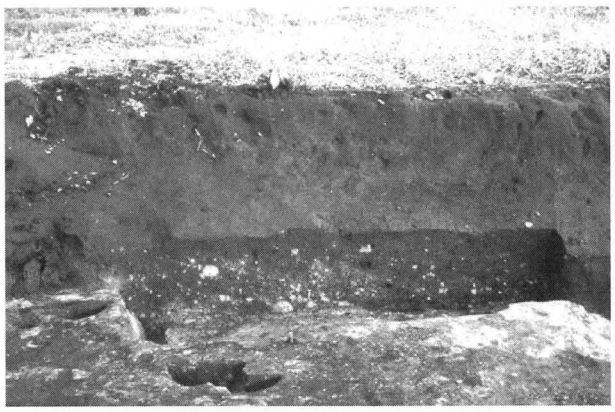
SI-05　完掘(SD-08(新))

写真Ⅲ-6　吉内遺跡



SI-06　確認状況(SI-05と重複)

SI-05・06　完掘(右下SI-03)



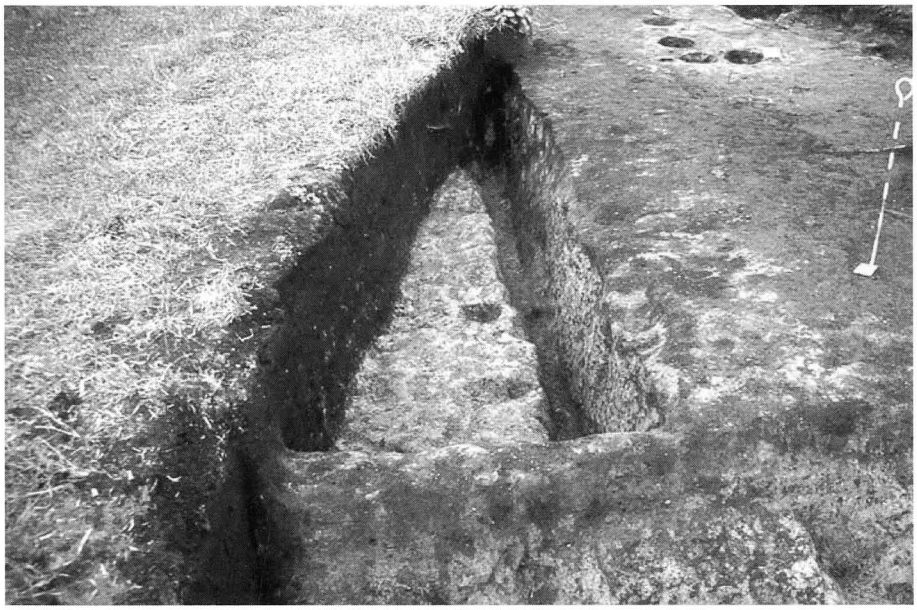
SI-07　埋土層断面

SI-07　完掘

写真Ⅲ-7　吉内遺跡

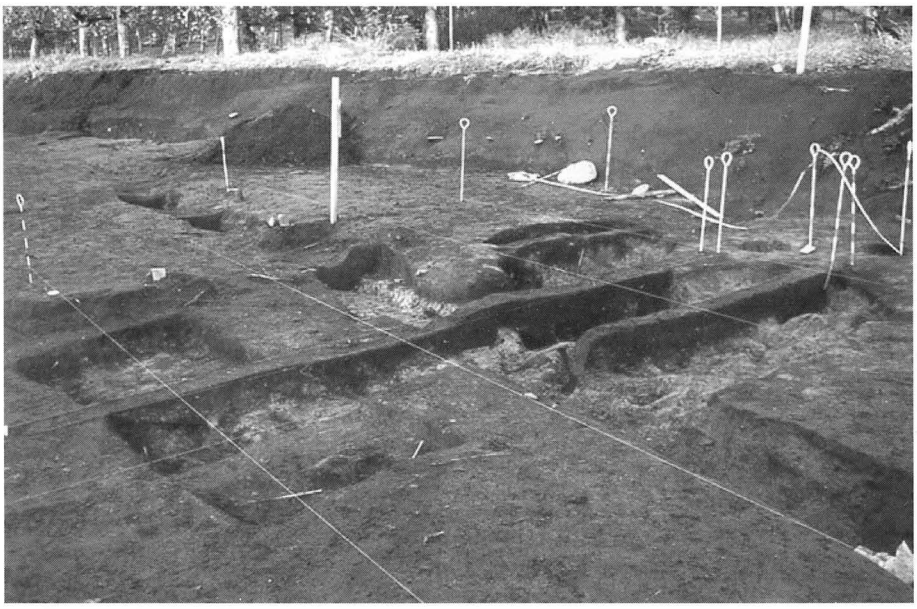
SI-08　壁沿いの板設置痕跡

SI-08　完掘(東から)



SI-08　完掘(南から)

写真Ⅲ-8　吉内遺跡



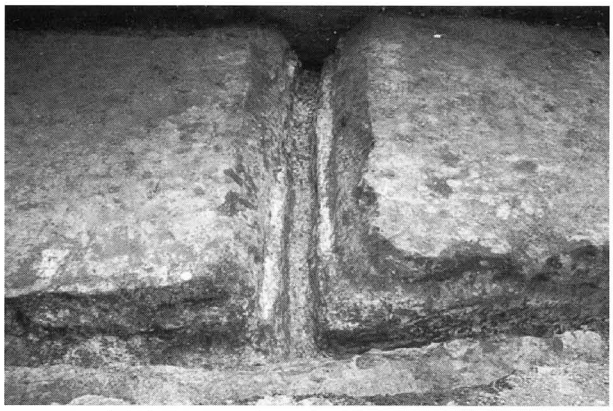
SI-10、SX-21・22　調査状況

SI-10、SX-21・22　完掘

SE-01　完掘

写真Ⅲ-9　吉内遺跡

調査区南端部完掘



SD-02（手前はSD-03）

南側調査区完掘

SD-04・05　完掘

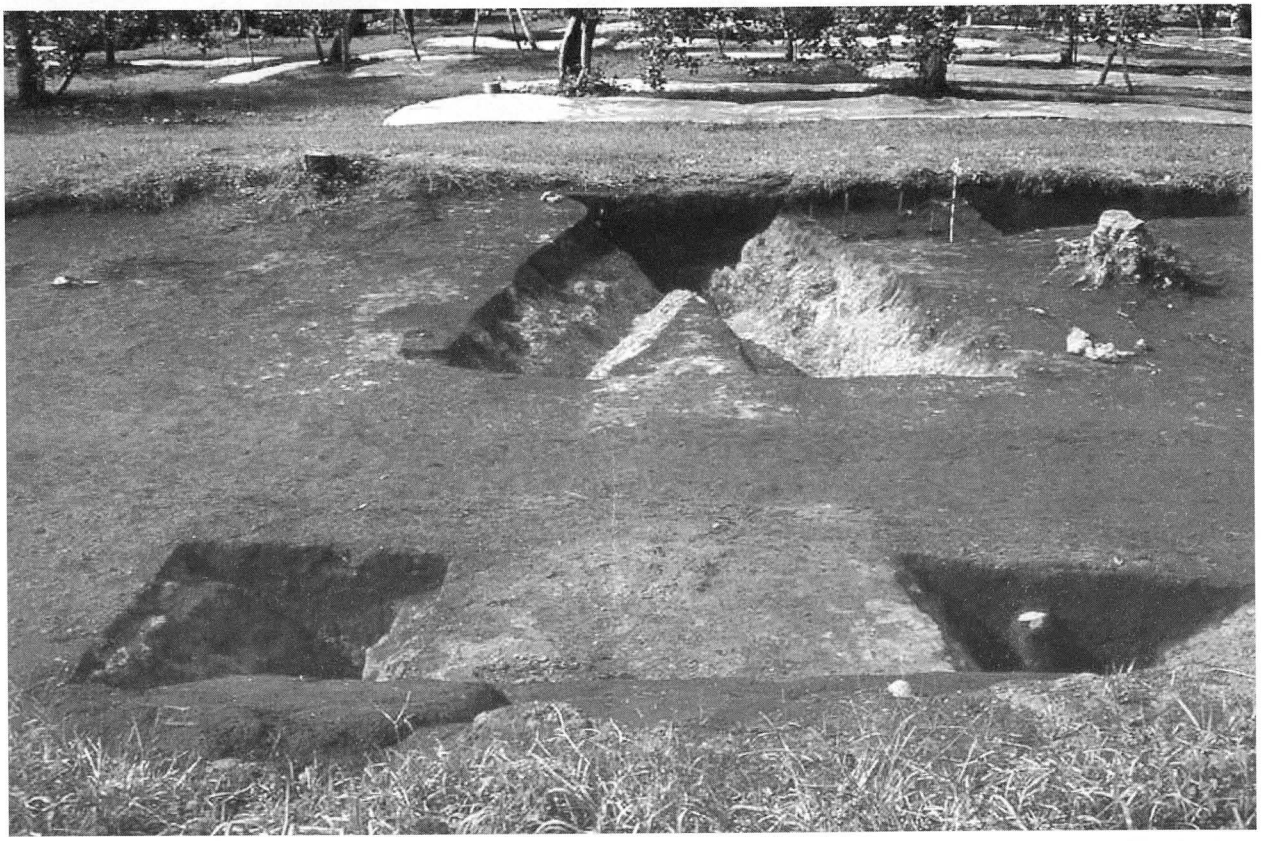
SD-06　完掘

写真Ⅲ-10　吉内遺跡

SD-07　調査状況

SD-08　調査状況

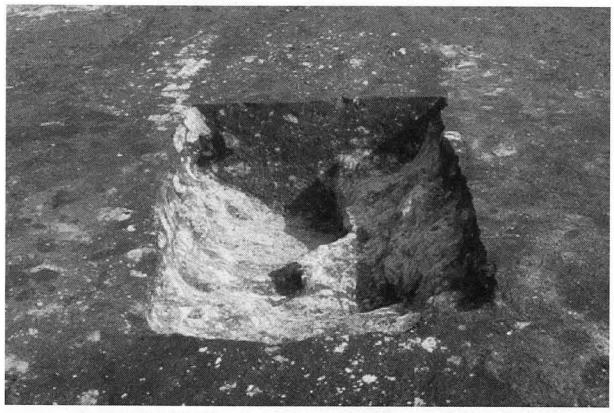
SD-09・10　確認状況



SD-09・10　完掘

写真Ⅲ-11　吉内遺跡

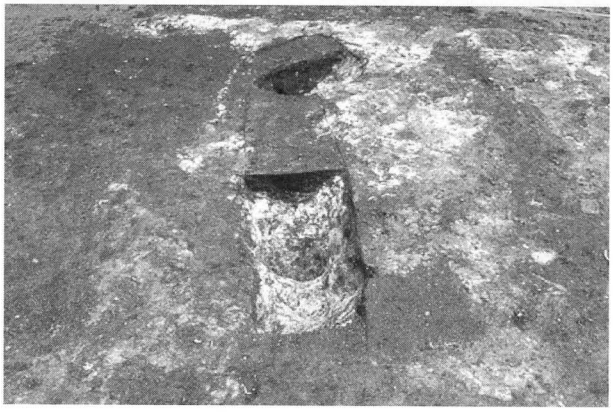
SD-08他　遺構確認状態



SD-12　調査状況

SD-13　調査状況

SD-15、SX-39　調査状況

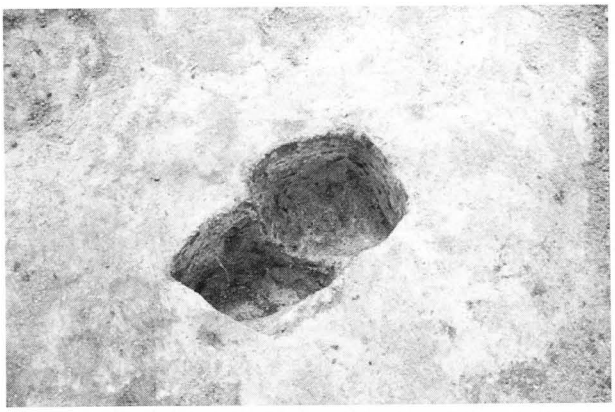


SD-17、Pit-57　調査状況

SD-18・19、SX-32　確認状態

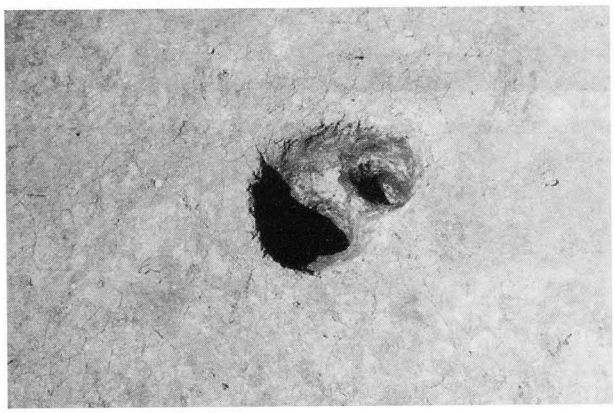
SD-18・19　調査状況

写真Ⅲ-12　吉内遺跡



Pit-01・02

Pit-03



Pit-04

Pit-05

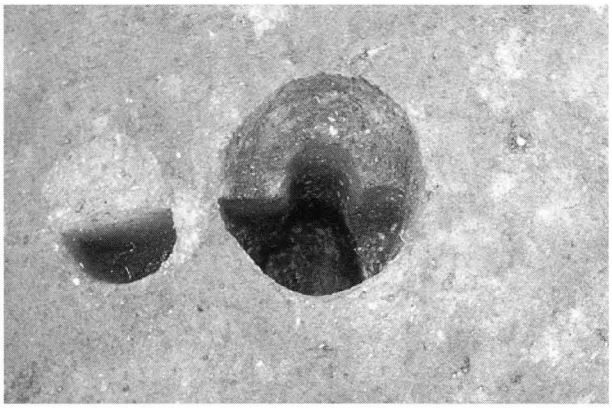
Pit-06

Pit-07

Pit-08

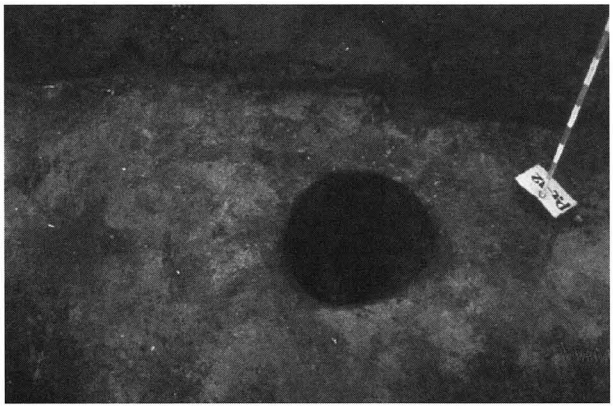
Pit-17

Pit-20・21

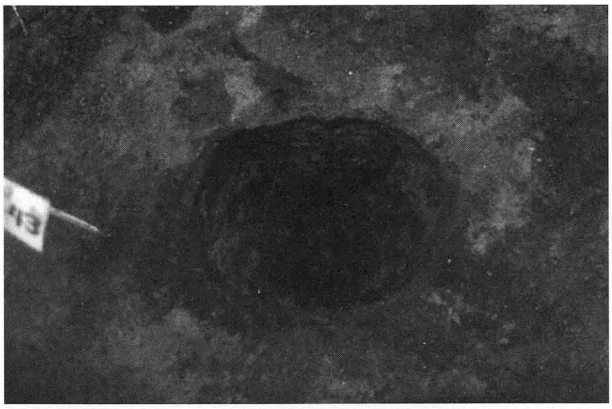


Pit-31　柱痕除去状況

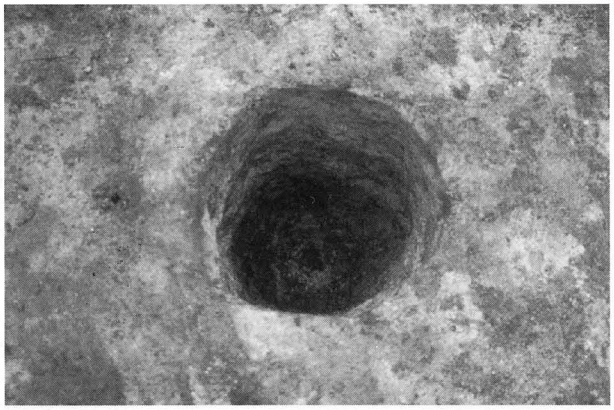
Pit-35　柱痕除去状況



Pit-42

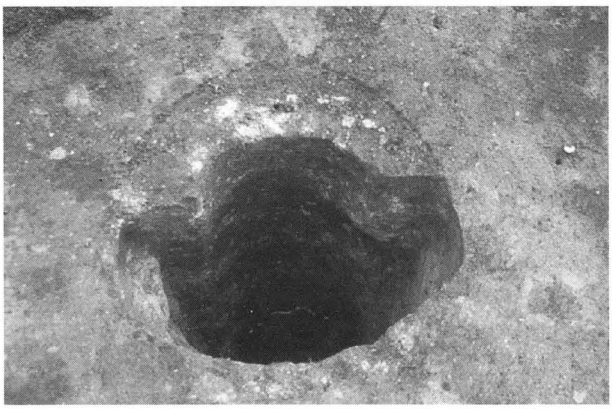


Pit-43

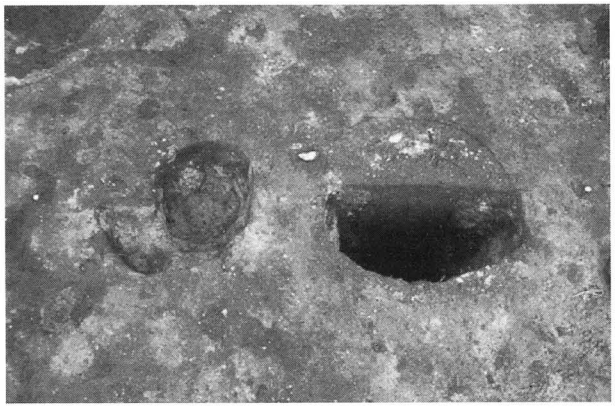


Pit-44

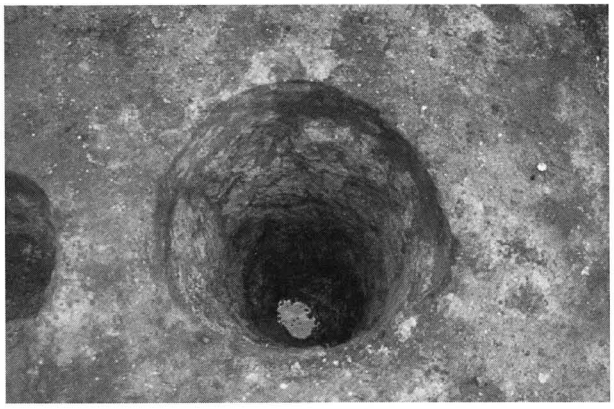
Pit-47・48　半截状況



Pit-52　柱痕除去状況

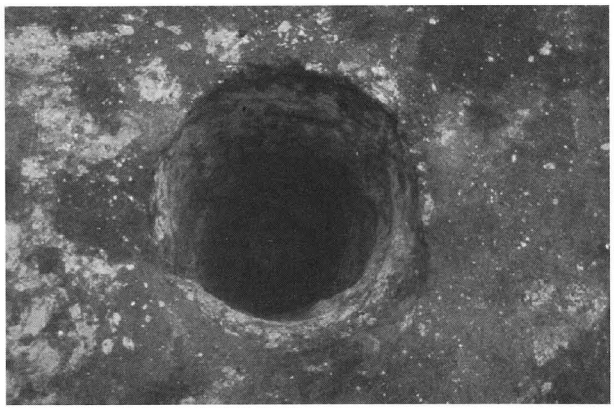


Pit-52・53



Pit-52

Pit-55　柱痕除去状況



Pit-55　完掘

SI-03・05・06　完掘、調査状況

写真Ⅲ-15　吉内遺跡

SX-06　完掘

SX-08　出土石器(118)

SX-08　調査状況

SX-09　調査状況

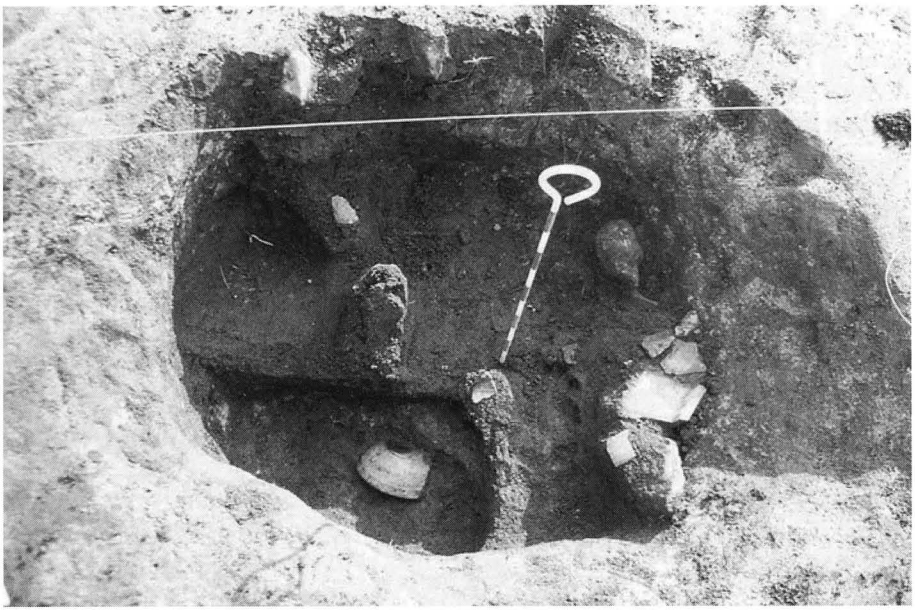
写真Ⅲ-16　吉内遺跡

SX-10　完掘

SX-11　完掘

SX-20　完掘

写真Ⅲ-17　吉内遺跡



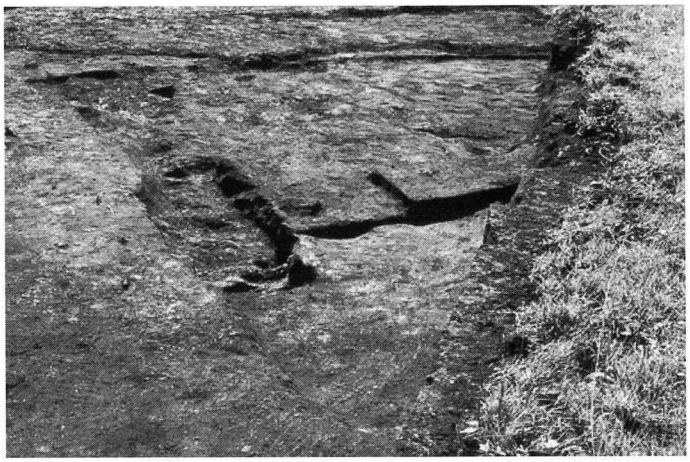
SX-29　遺物出土状態

SX-29　8層上面

SX-29　完掘

写真Ⅲ-18　吉内遺跡

SX-32　完掘



SX-32、SD-18　完掘

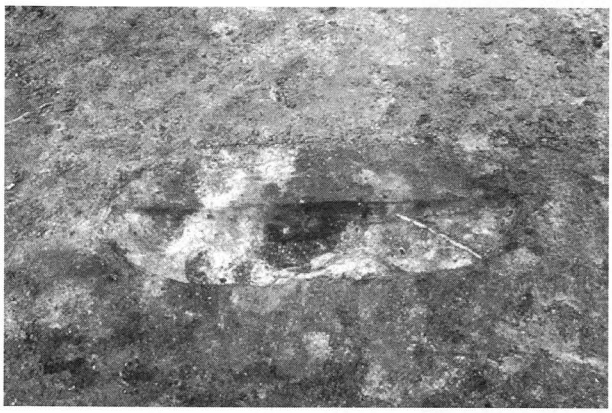
SX-33　玉(205)出土状態

SX-33　調査状況

写真Ⅲ-19　吉内遺跡

SX-37　完掘

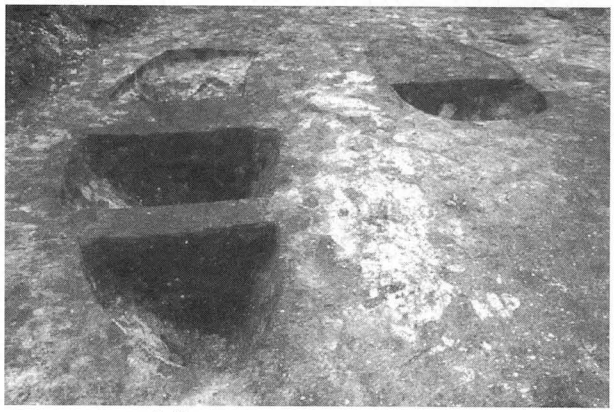
SX-39　調査状況



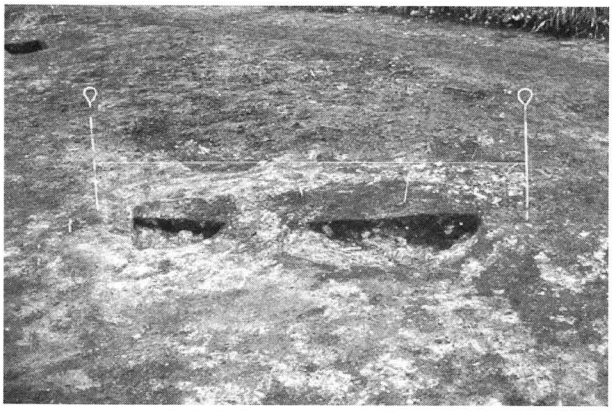
SX-40　半截状態

SX-42　調査状況

SX-43　半截状態



SX-44　調査状況

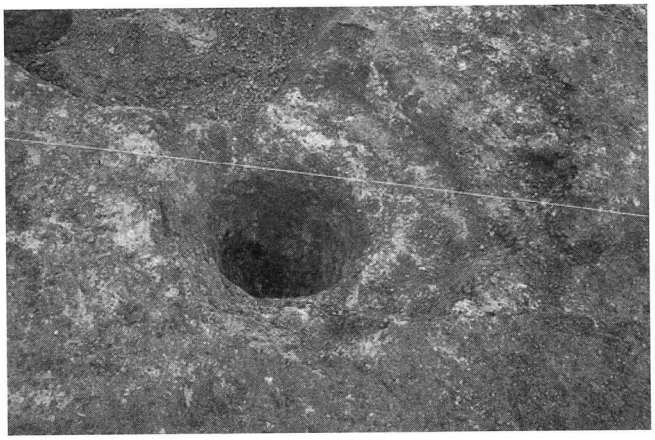


SX-47・48　半截状態

写真Ⅲ-20　吉内遺跡

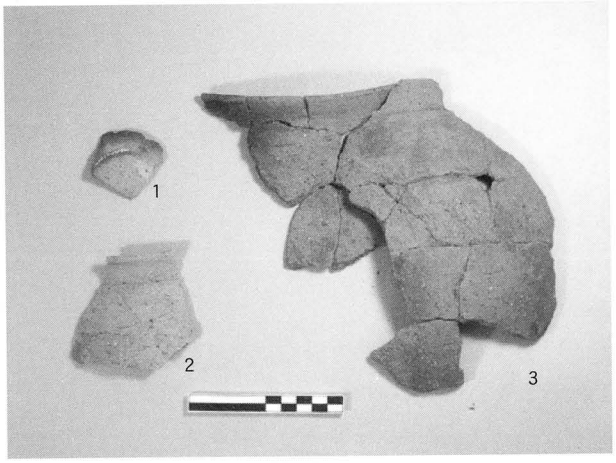
SX-50　遺物出土状態

SX-50　完掘



SX-51　完掘

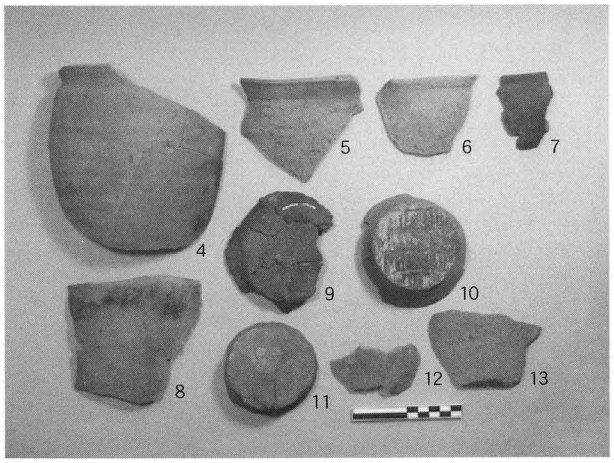
SX-52　完掘(半截)



調査区北側出土遺物　外面

同左　内面

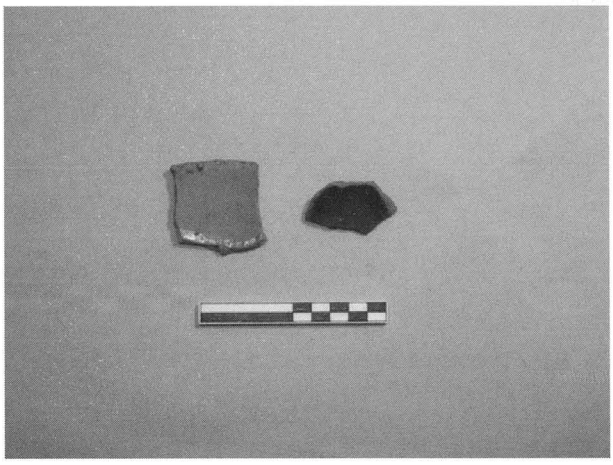
写真Ⅲ-21　吉内遺跡



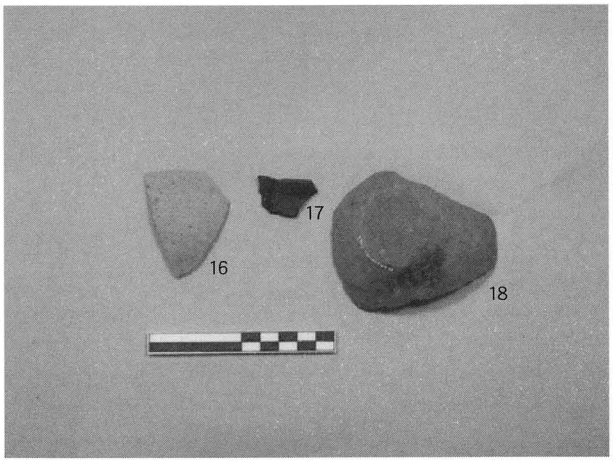
SI-01　出土遺物　外面

同左　内面

SI-02　出土遺物　外面

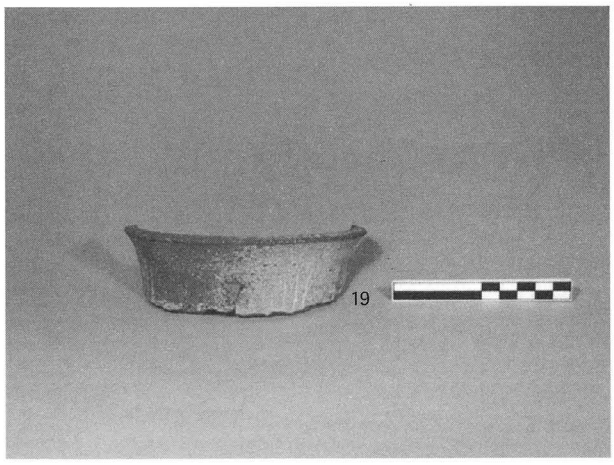


同左　内面

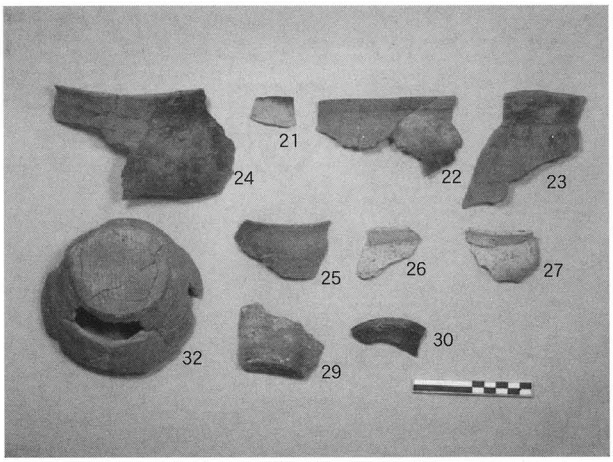


SD-20　出土遺物　外面

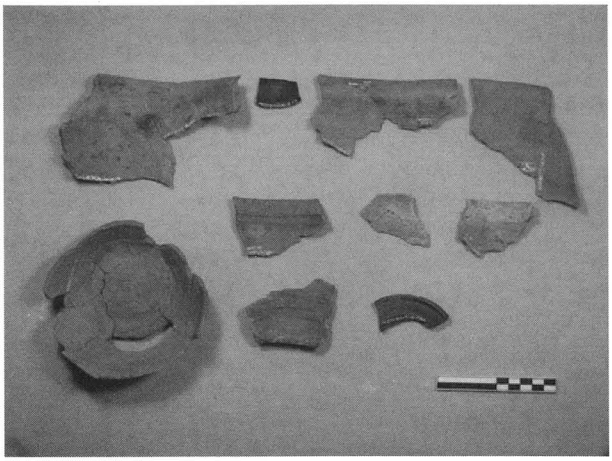
同左　内面



SX-49　出土遺物



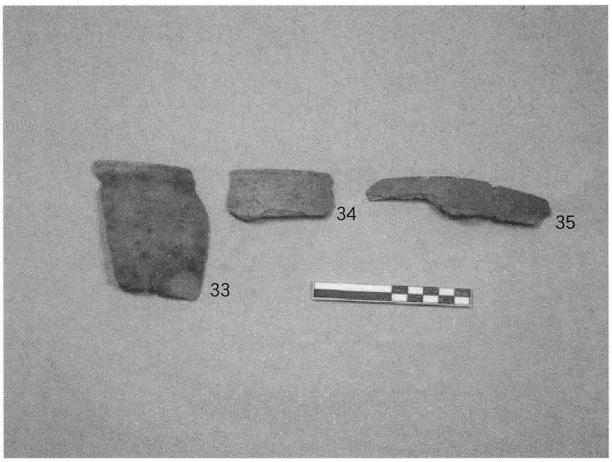
SX-50　出土遺物　外面



同左　内面

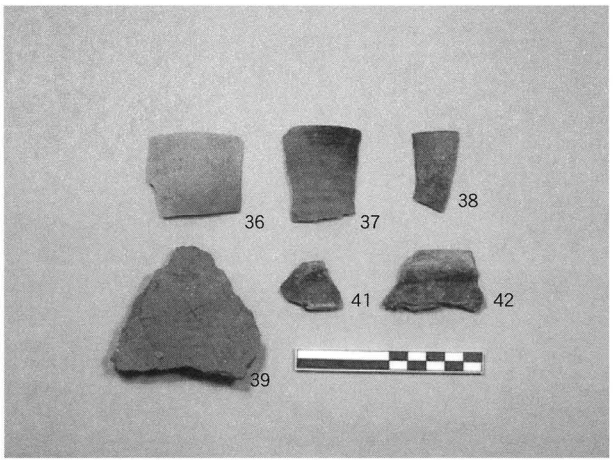
SX-50　出土土師器坏

SX-50　出土鉄製品



SX-51　出土遺物　外面

同左　内面

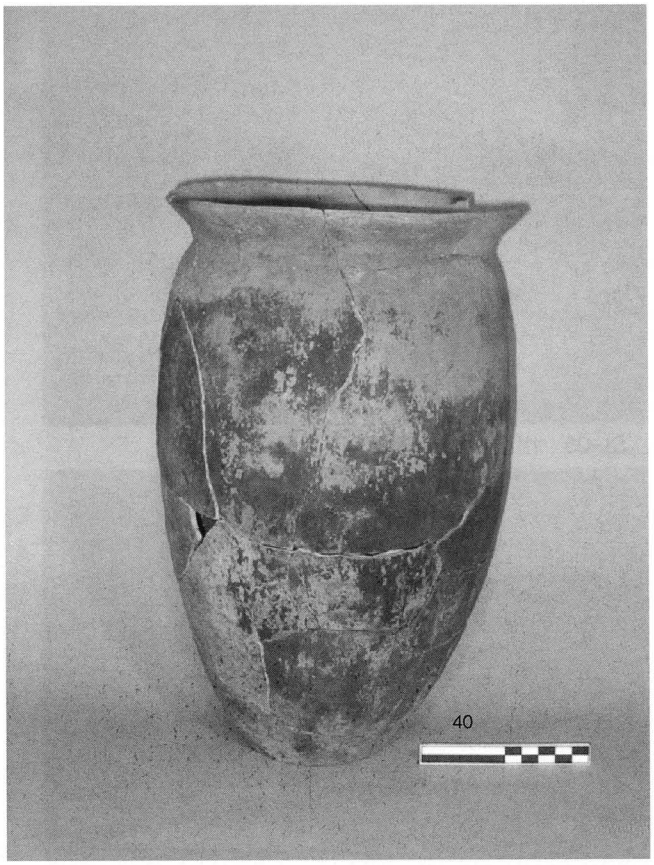


SI-03　出土遺物　外面

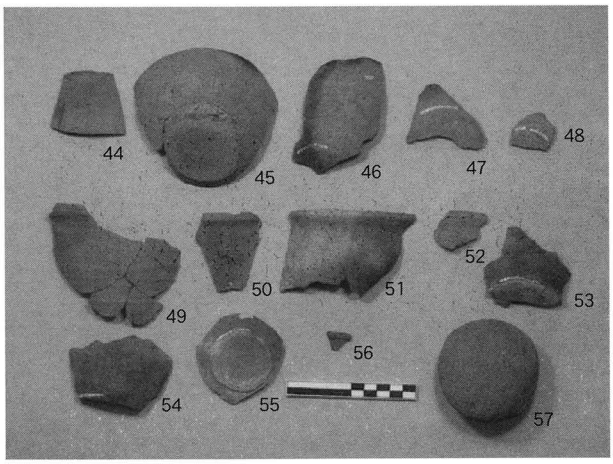
同左　内面

SI-03　出土銅製品

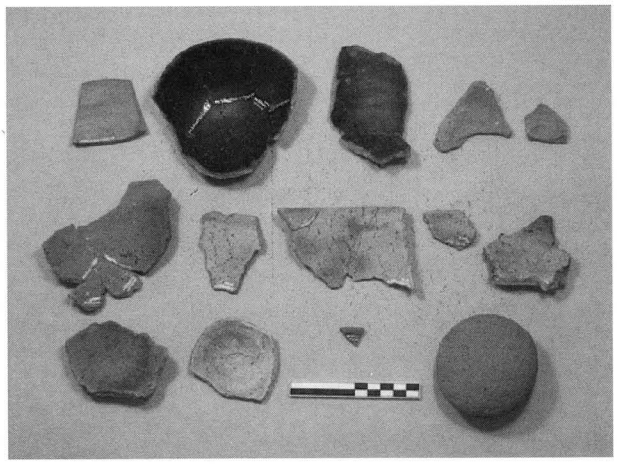
同上　側面



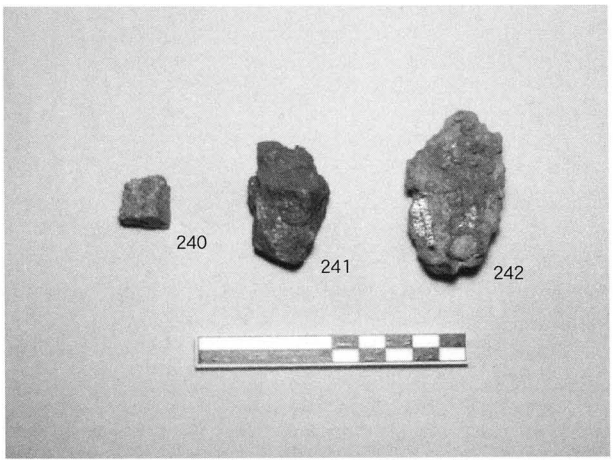
SI-03　出土　土師器甕



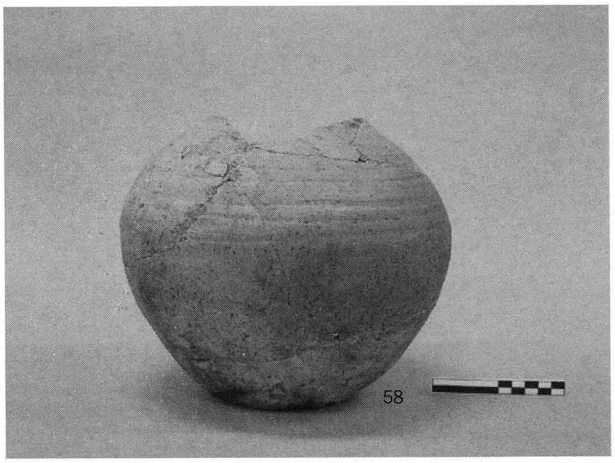
SI-04　出土遺物　外面



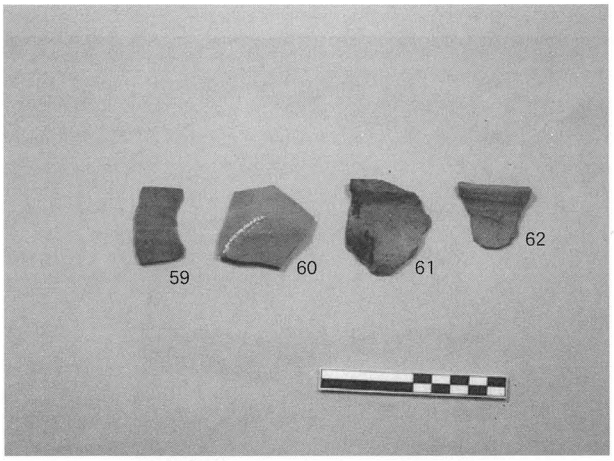
同左　内面



SI-04、SD-04、SX-29　出土鉄滓等

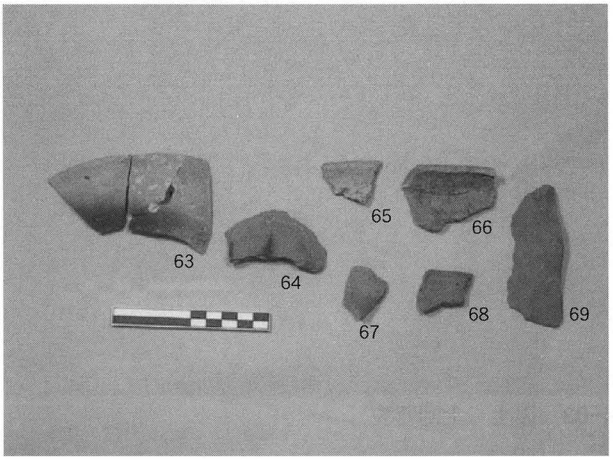


SI-05　出土　土師器壷



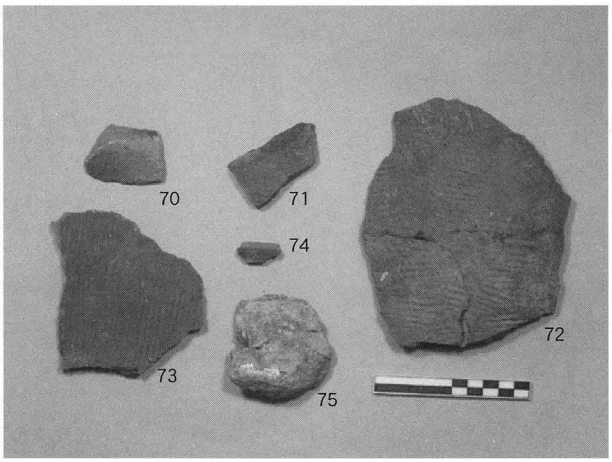
SI-05　出土遺物　外面

同左　内面

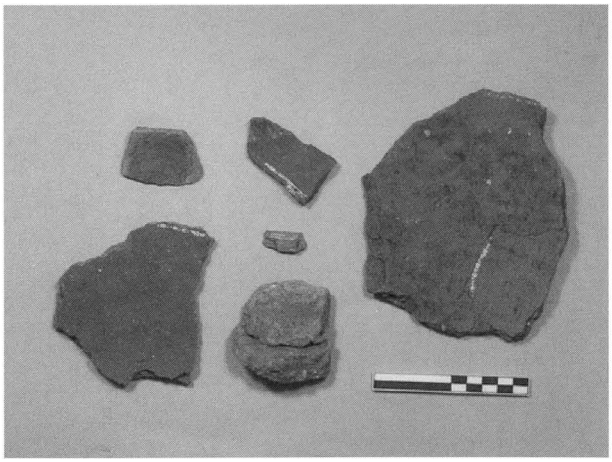


SI-08　出土遺物　外面

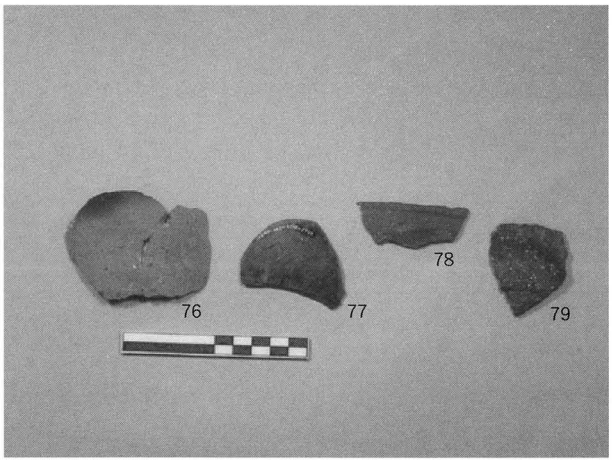
同左　内面



SX-21　出土遺物　外面



同左　内面

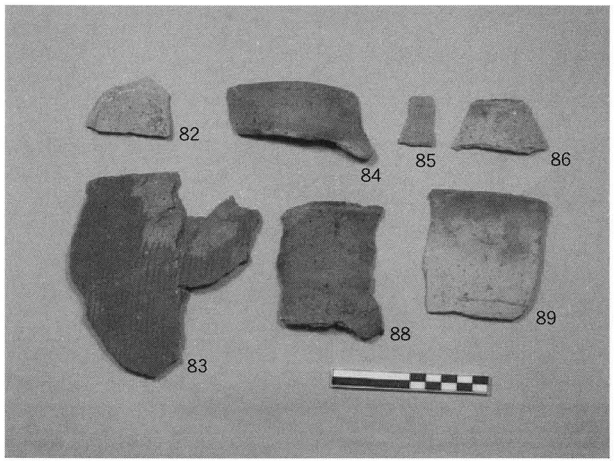


SX-22　出土遺物　外面

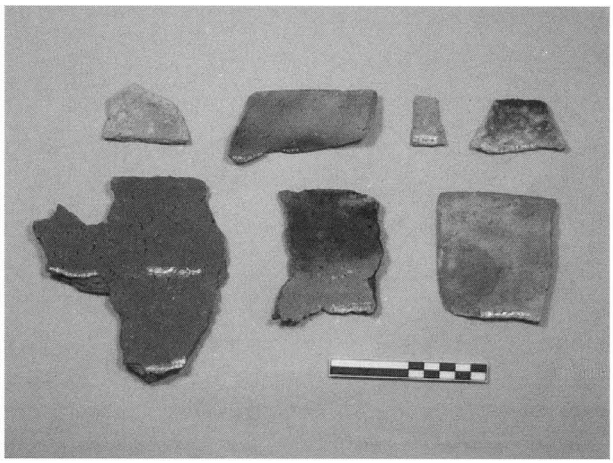
同左　内面

SI-10　出土　土師器坏

SI-10　出土　土師器坏

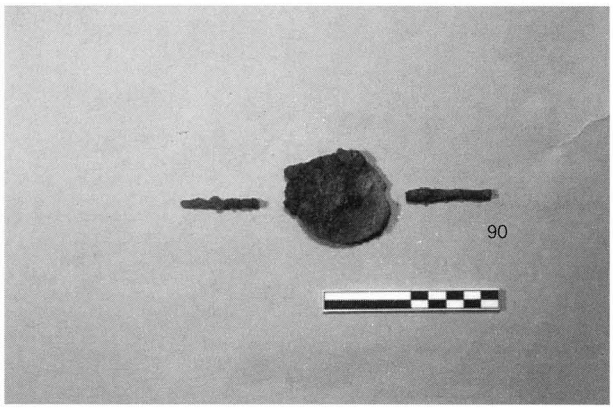


SI-10　出土遺物　外面

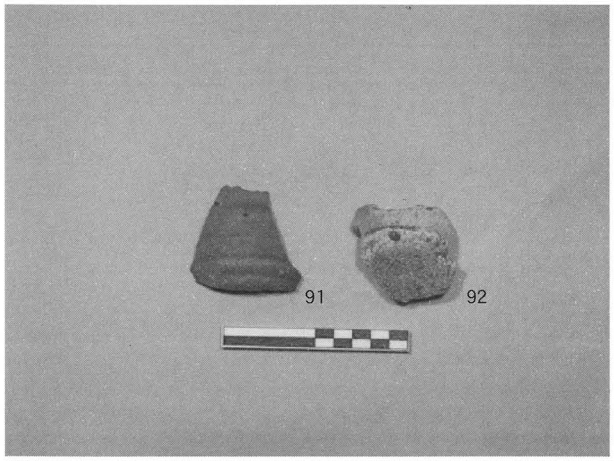


同左　内面

SI-10　出土　土師器堝



SI-10　出土　紡錘車

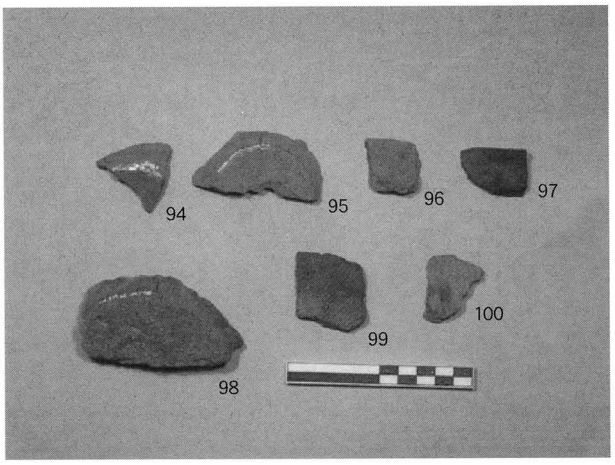


SE-01、SD-03　出土遺物　外面

同左　内面

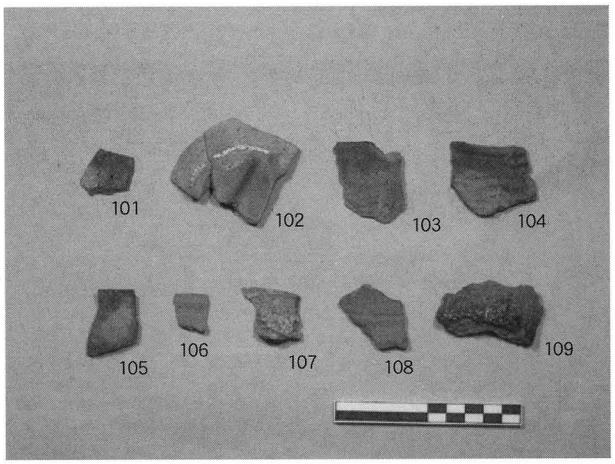
写真Ⅲ-26　吉内遺跡

Pit-03　出土　土師器坏



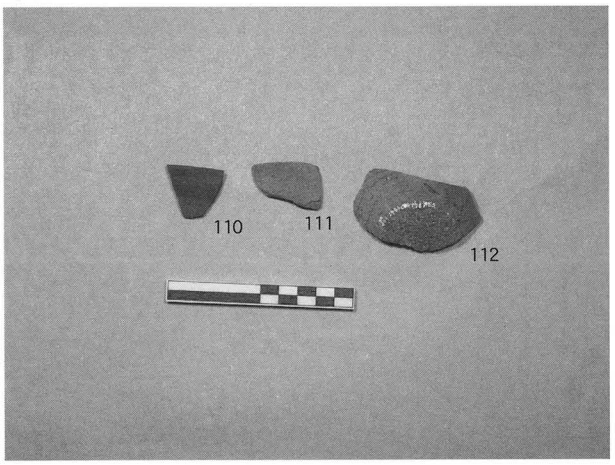
SD-04　出土遺物　外面

同左　内面

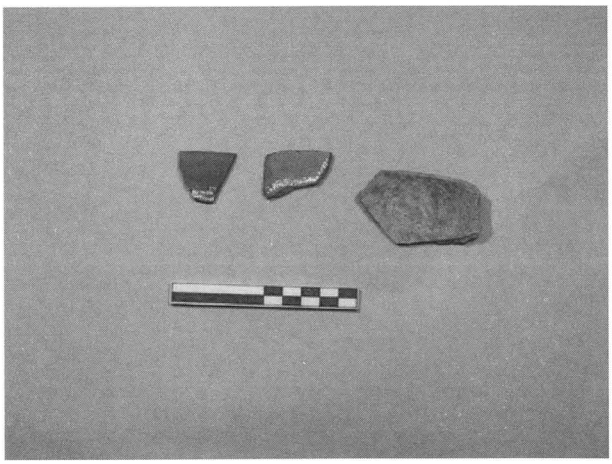


SD-05、Pit-21、SX-04、D-29区、E-31・32区　出土遺物　外面

同左　内面

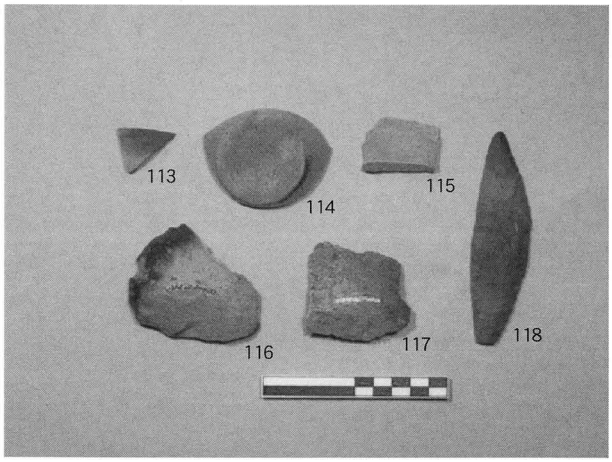


SD-06　出土遺物　外面

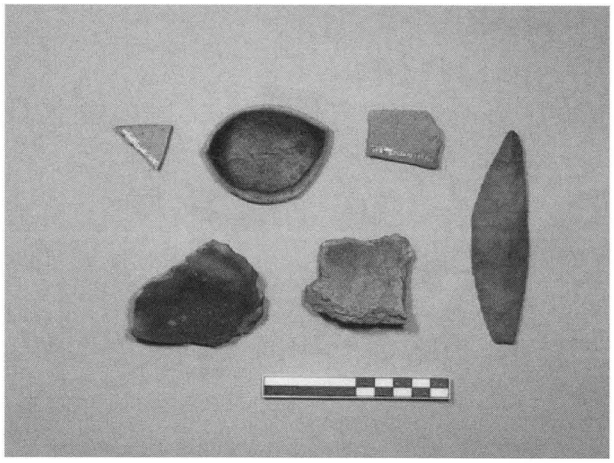


同左　内面

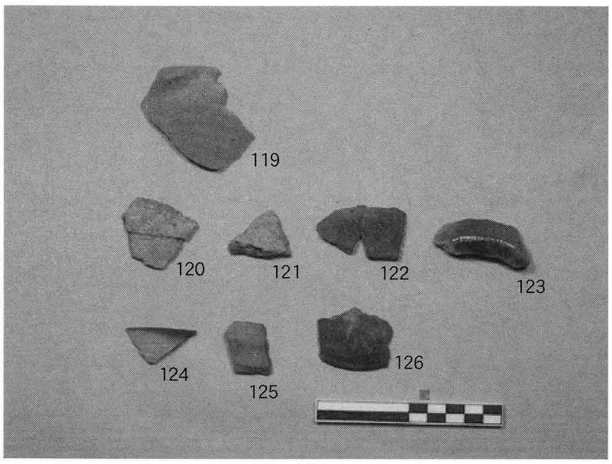
写真Ⅲ-27　吉内遺跡



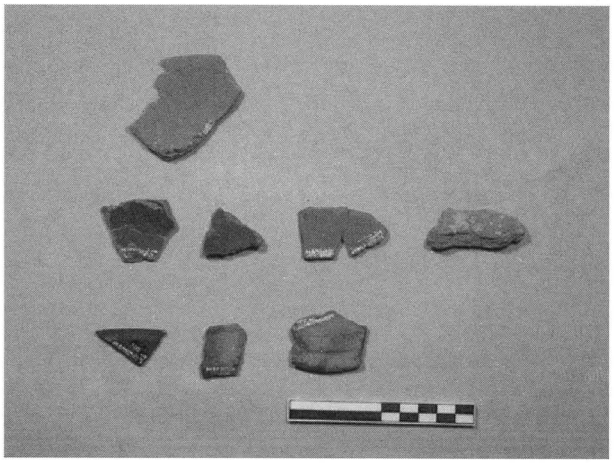
SX-08　出土遺物　外面



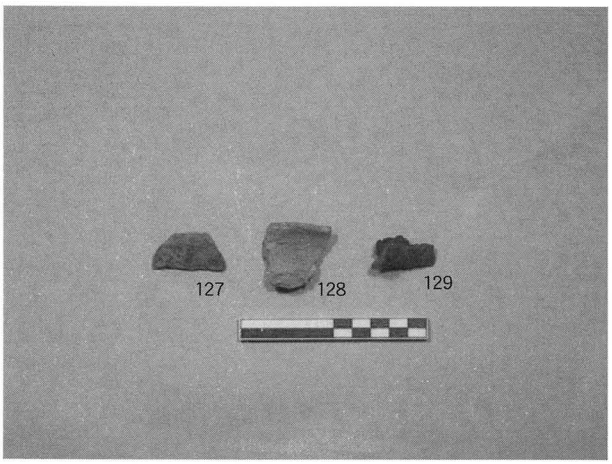
同左　内面



Pit-25、SD-07、SX-20　出土遺物　外面

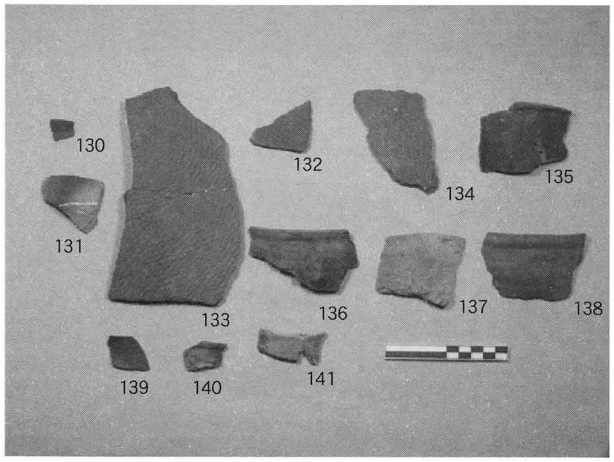


同左　内面



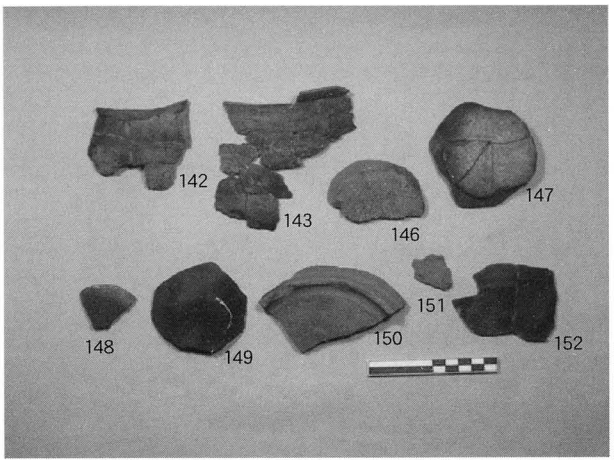
SD-09　出土遺物　外面

同左　内面

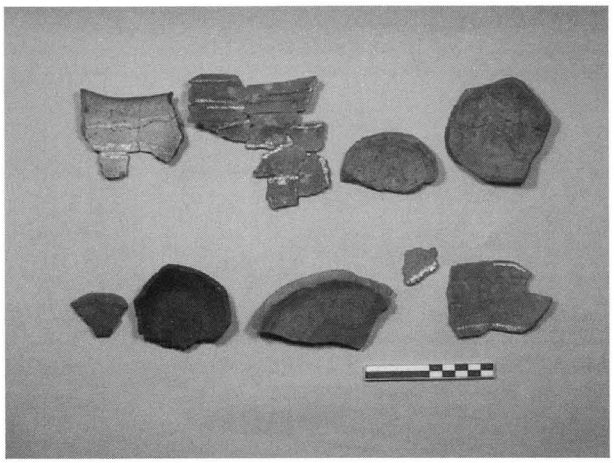


SD-10　出土遺物　外面

同左　内面



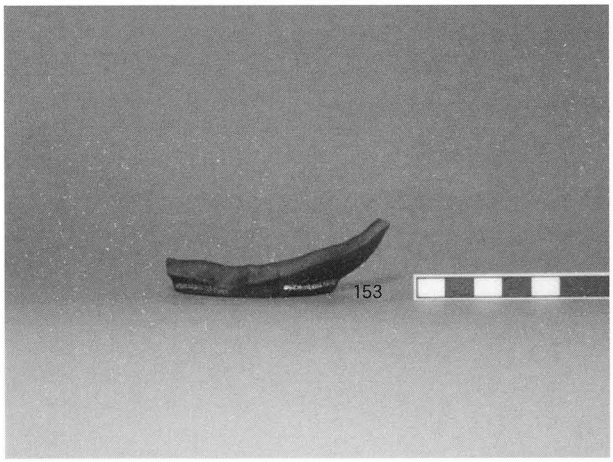
SD-10　出土遺物　外面



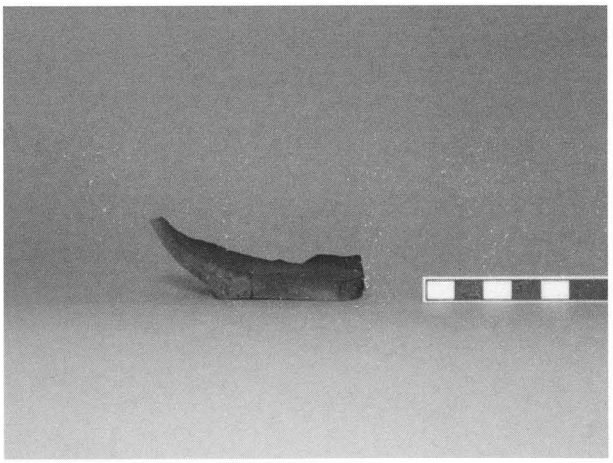
同左　内面

SD-10　出土　土師器甕

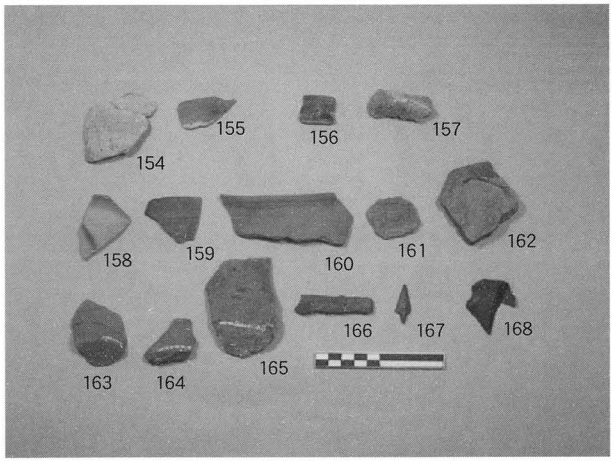
SD-10　出土　土師器甕



SD-12　出土　黒色土器　外面

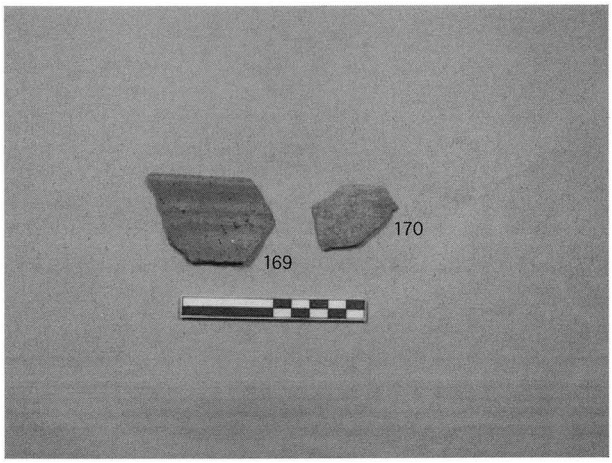


同左　内面

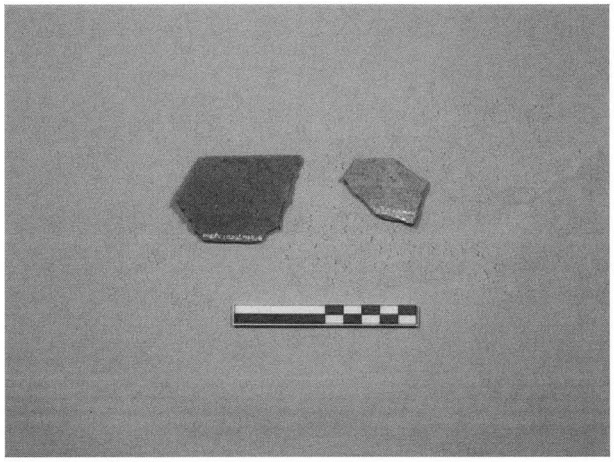


SD-08、SX-32、SD-15・18　出土遺物　外面

同左　内面

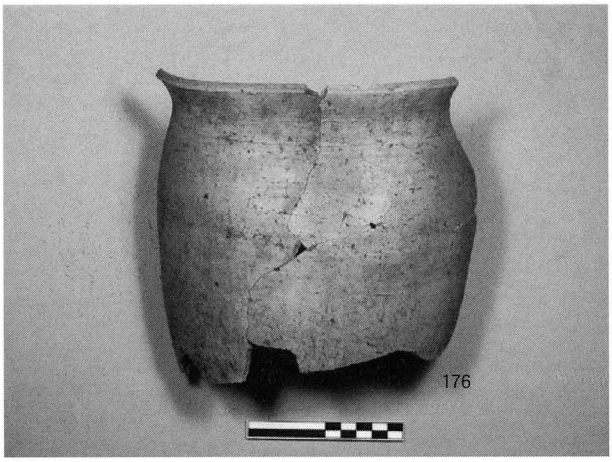


SX-09・36　出土遺物　外面

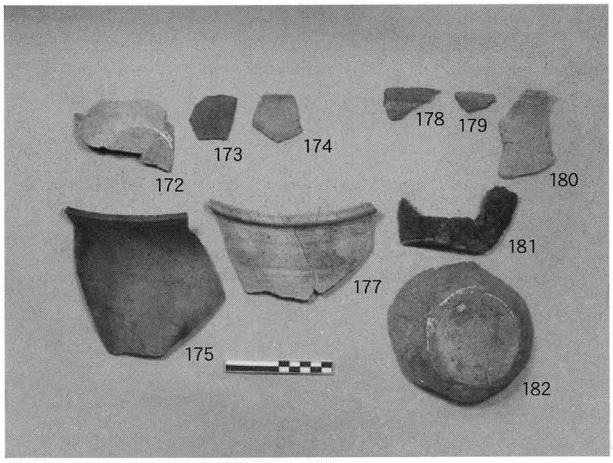


同左　内面

SX-29　出土　土師器坏

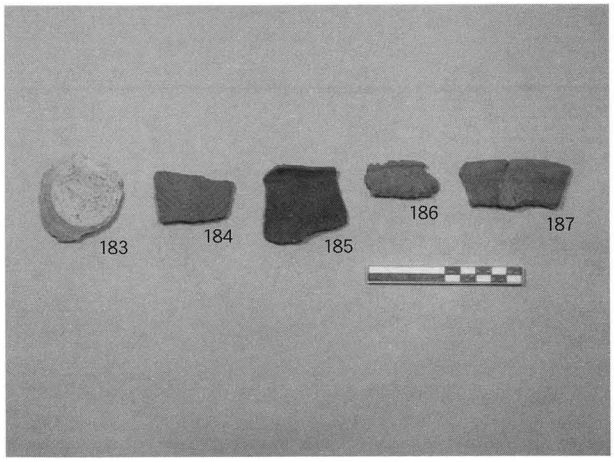


SX-29　出土　土師器甕



SX-29　出土遺物　外面

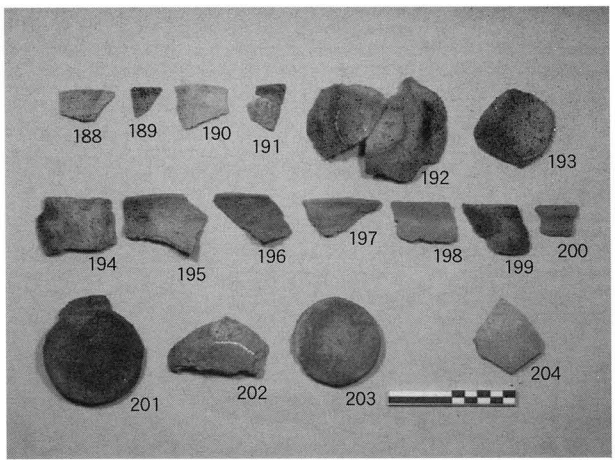
同左　内面



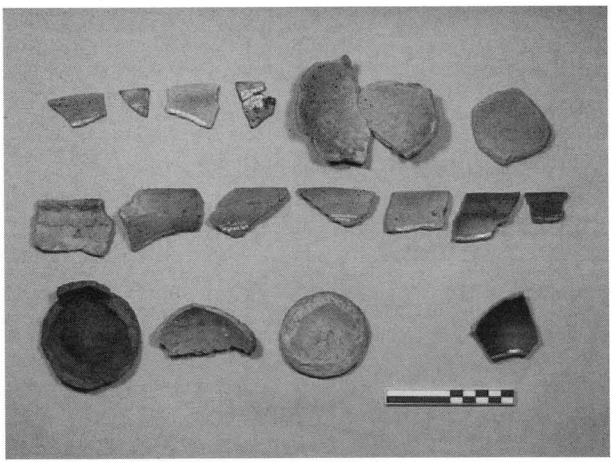
SD-14　出土遺物　外面

同左　内面

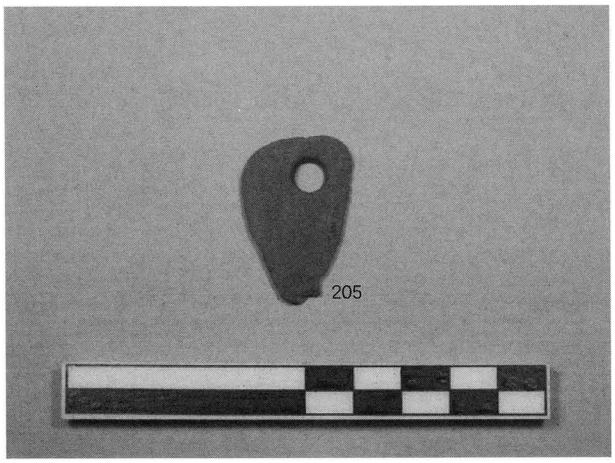
写真Ⅲ-30　吉内遺跡



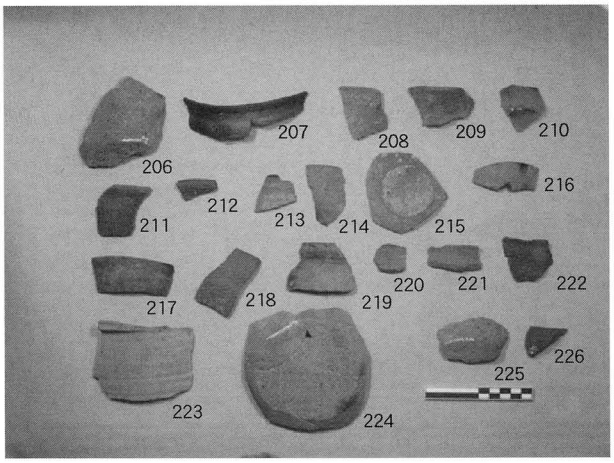
SX-33　出土遺物　外面



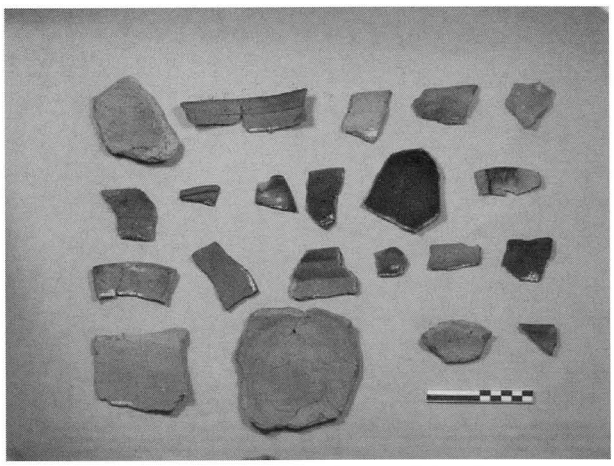
同左　内面



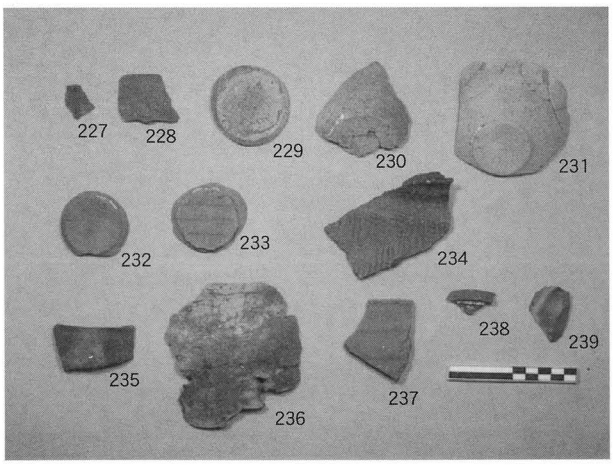
SX-33　出土石製品



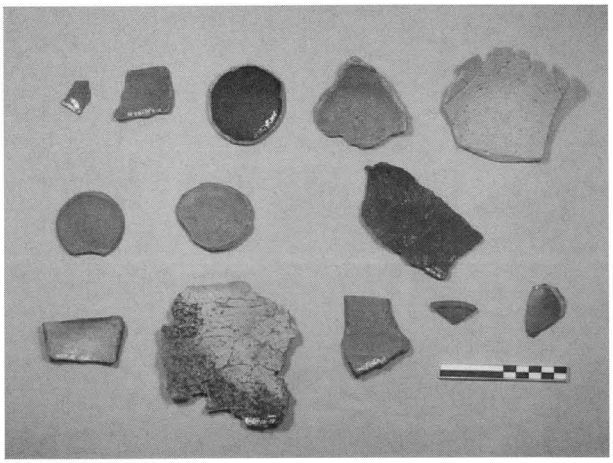
グリッド一括資料　外面



同左　内面



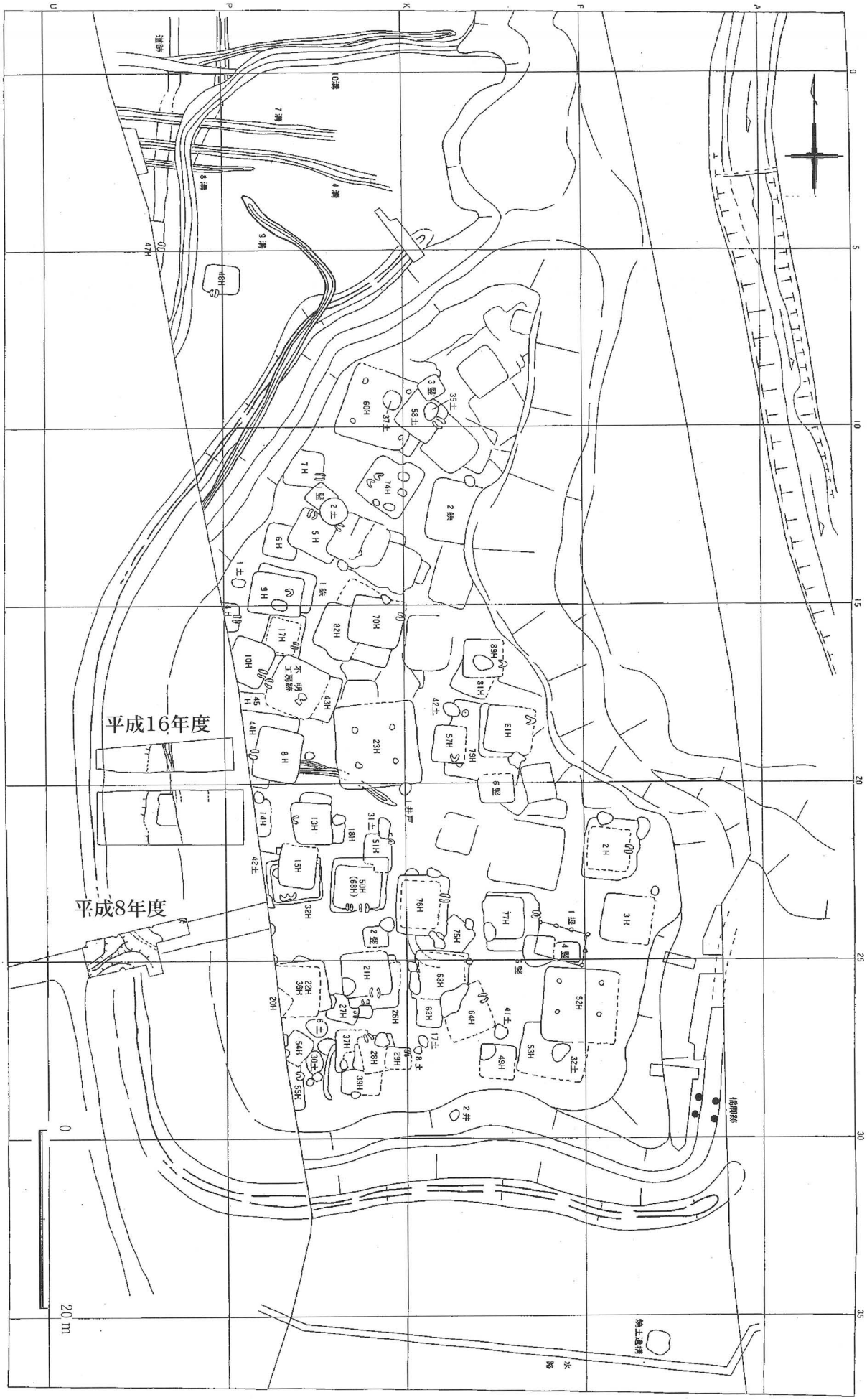
吉内遺跡表採遺物　外面



同左　内面

Ⅳ　国史跡高屋敷館遺跡環境整備に係る発掘調査報告書

図Ⅳ-1　高屋敷館遺跡　調査区平面図



１）平成8年度　調査報告

第1章　調査にいたる経緯

高屋敷館遺跡は、国道7号バイパス（通称『浪岡バイパス』）の建設工事に伴い、平成６・７年度に青森県埋蔵文化財調査センター（以下「県埋文センター」と略す）が発掘調査を行った。この結果、10～12世紀の「平安時代の環壕集落」として全国的な脚光を浴び、平成７年10月に「日本史の中の北の『防御性集落』」と題したシンポジウムが 250人以上の参加者を集め開かれた。シンポジウムでは、古代における中央政権と地元の勢力、北方諸国との交流など、古代史における世界観（青森県にとどまらず日本、ひいては東北アジア）の研究が今後ますます重要度を増すであろうという指摘がなされた。少し大仰な言い方かもしれないが、高屋敷館遺跡はその古代史研究の一つの契機ともなり得る遺跡であると考えている。

今回、浪岡町教育委員会で行った調査は、当初から出入り口施設の可能性が指摘され、その構造について解明が期待された西側中央付近についてのものである。

平成8年度　高屋敷館遺跡発掘調査要項

浪岡町教育委員会生涯学習課

１．調査の目的

今回、浪岡町教育委員会で行った調査は、「平安時代の環壕集落」として注目を集めた高屋敷館遺跡の、当初から出入り口施設の可能性が指摘されていた西側中央付近についてのものである。特に土塁が途切れて食い違いの見られる（当初から出入り口施設の可能性が指摘された）部分と集落内部との間（壕）を重点的に行い、桝形（虎口）や橋の有無、形態について解明することを目的とした。調査方法はトレンチ方式により、遺構・遺物の検出に努めた。

本調査箇所は、道路（国道７号バイパス）の予定地外で、県埋文センターで発掘調査が行えない部分であったため、環壕集落の性格と出入り口の形態を知るうえで必要不可欠な調査であるとの認識をもち、町独自で行ったものである。

２．遺跡の概要について（県埋文センター資料から抜粋）

高屋敷館遺跡は、津軽中山山地の南部から連なる標高40～44mの前田野目台地上にあり、遺跡の東側には、大釈迦川が隣接して南流している。建設省国道７号浪岡バイパス建設事業に伴う県埋文センターによる発掘調査からは、大規模な環壕と土塁で囲まれた平安時代（10世紀後半～12世紀前半）の集落が検出されている。

環壕で囲まれた面積は3,400㎡であるが、東側では河川による崩落と見られる区域もあるため、本来は 4,000㎡前後の面積を有していた可能性がある。これまでに遺構としては、土塁、環壕、橋跡（橋脚４本）、竪穴建物跡（約160軒）、鍛冶工房跡（３棟）、土坑（42基）、井戸跡（２基）、溝（10条）などが検出されている。また、出土遺物は、土師器、須恵器、鉄器（斧・刀子・鎌・紡錘車等）、多量の鉄滓、羽口、銅製品、木製品、土製品等がある。

３．調査対象区域と面積（図Ⅳ－1、写真Ⅳ－1）

調査対象区域　南津軽郡浪岡町高屋敷字野尻38－1

土地所有者　米村　進一氏（調査時）

調査面積　約40㎡

4．調査期間等

調　査　期　間　平成　８年　５月２０日　～　平成　８年6月１０日（20日間）

整　理　作　業　平成　８年　６月１１日　～　平成　９年3月３１日

報告書作成作業　平成１６年１２月２０日　～　平成１７年3月３１日

現場作業にあたっては、土地所有者のご理解とご協力を賜り、農作業の合間の期間の調査をご快諾いただいた。

5．調査員等（調査時）

調査指導員　村　越　　潔　（青森大学考古学研究所長・考古学）

調　査　員　佐　藤　　仁　（浪岡町史編纂室長・文献史学）

三　浦　貞栄治（浪岡町文化財審議会長・民俗学）

三　浦　圭　介（青森県教育委員会文化課総括主幹・考古学）

畠　山　　昇　（青森県埋蔵文化財調査センター主幹・考古学）

6．調査体制（調査時）

浪岡町教育委員会　教育長　　蝦　名　俊　吉

調査担当事務局　浪岡町教育委員会　生涯学習課

課　　長　工　藤　正　志

文化班長　山　内　幸　博

主　　査　木　村　浩　一（発掘調査担当）

主　事　補　高　橋　智佳子（発掘調査担当）

調査補助員　対馬桂子・間山信子・山内明美

調査作業員　小倉やつゑ・間山ミサ・林ソミ・鎌田鈴枝・常田ケイ・成田チサ・工藤愛子・成田せつ
佐藤レヲヱ・長谷川チヨ

7．調査方法・その他

調査はトレンチ方式により、遺構・遺物の検出に努める。報告書は浪岡町教育委員会が作製・刊行する。

調査グリッド及び標高は県埋文センターが設定した成果をそのまま用いることとする。

第２章　調査経過（発掘調査日誌から）

5月20日　調査区設定及び発掘調査用テント等設置。発掘調査区は県埋文センターの設定したグリッドと異なり現在の通路部分を中心に任意で設定する。１グリッドは４m×４mとし、東西３グリッド、南北１グリッドに設定するが、調査にあたっては南北に更に２分割する。なお、グリッド名は、東側からⅠ、Ⅱ、Ⅲとし、北側をa、南側をbとした。

5月21日　Ⅰa区、Ⅱb区の掘り下げ。調査区中央付近で硬化した層を検出したため、土橋状の遺構を想定したが、層中からプラスティック片や現代陶磁器が出土したため、農耕による攪乱であることが判明した。

5月22日　Ⅲa区掘り下げ。前日同様に農耕によると思われる攪乱が著しい。北側の土塁もかなり削平されており、本来の北側土塁と南側土塁の幅はかなり狭まるものと思われる。

5月23日　Ⅰa、Ⅱb、Ⅲb区掘り下げ。

5月24日　Ⅰa、Ⅱb、Ⅲa、Ⅲb区掘り下げ、Ⅰaで内郭部からの落ち込みラインを確認。Ⅱb、Ⅲa区では南・北土塁の落ち込みを確認する。

5月25日　Ⅰa、Ⅱa、Ⅲa、Ⅲb区掘り下げ。

5月26日　Ⅰa、Ⅱa、Ⅲa、Ⅲb区掘り下げ。

5月27日　Ⅲb区を掘り下げたところ、薬研状の掘り方を検出した。中ほどの面は硬化しているが、使用年代は不明である。

5月28日　Ⅰa区地山面まで掘り下げ、精査。Ⅱb、Ⅲa、Ⅲb区掘り下げ、層序図作成。

5月29日　Ⅱa区掘り下げ、北側土塁の壕からの立ち上がりを確認。Ⅱb区とⅢb区間のベルトを除去。南北に分断された土塁の形状が確認できるようになった。

5月30日　Ⅱa、Ⅱb、Ⅲb区の精査。Ⅱb区とⅢb区間のベルト除去。

5月31日　層序図作成。

6月1日　層序図を補正しながら調査区内のベルトを除去。

6月2日　層序図を補正しながら調査区内のベルトを除去。

6月3日　Ⅱa、Ⅲb区掘り下げ、精査作業。

6月4日　Ⅰa区遺構平面実測。Ⅱa、Ⅱb区及びⅢb区さらに掘り下げ。

6月5日　ベルト除去作業及び調査区精査終了。本日で掘り下げを終了する。

6月6日　遺構平面実測。レベリング。

6月7日　埋め戻し開始。

6月10日　埋め戻し終了。

第3章　検出遺構（図Ⅳ－2・3、表Ⅳ－1、写真Ⅳ－1・2・3）

平成8年度の調査では、土塁が食い違い、出入り口とされている部分について、通路及び出入り口施設の有無を調査することを主眼とした。トレンチ調査に近い小さな面積での調査であったが、南北に分断された土塁の状態及び壕の状態を垣間見ることができた。

検出した遺構は、土塁及び壕跡が主体となる。一部柱穴列と思われるものも検出できたが、時代は不明であった。

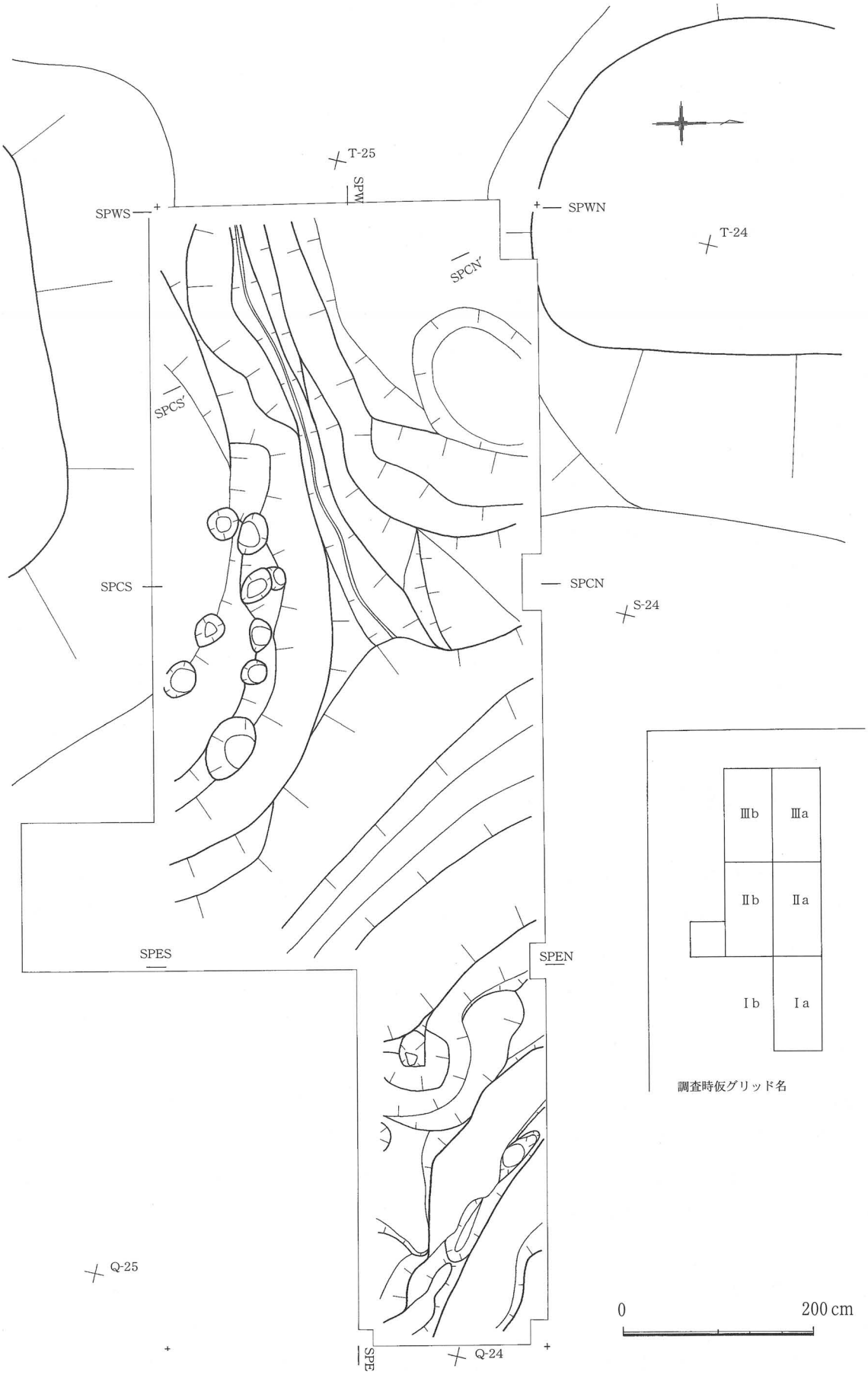
北側土塁　従来の南端部よりもさらに約1.5m以上にわたり南側に伸びることが確認できた。昭和40年代に農業の機械化が進み、車両進入の利便性を図るために土塁を掘削して平坦面を造成したと思われる。

なお、土塁上部もほぼ全面にわたって削平されていると思われるが、土塁外側の調査を行っていないため、掘削された高さ等については不明なままであった。

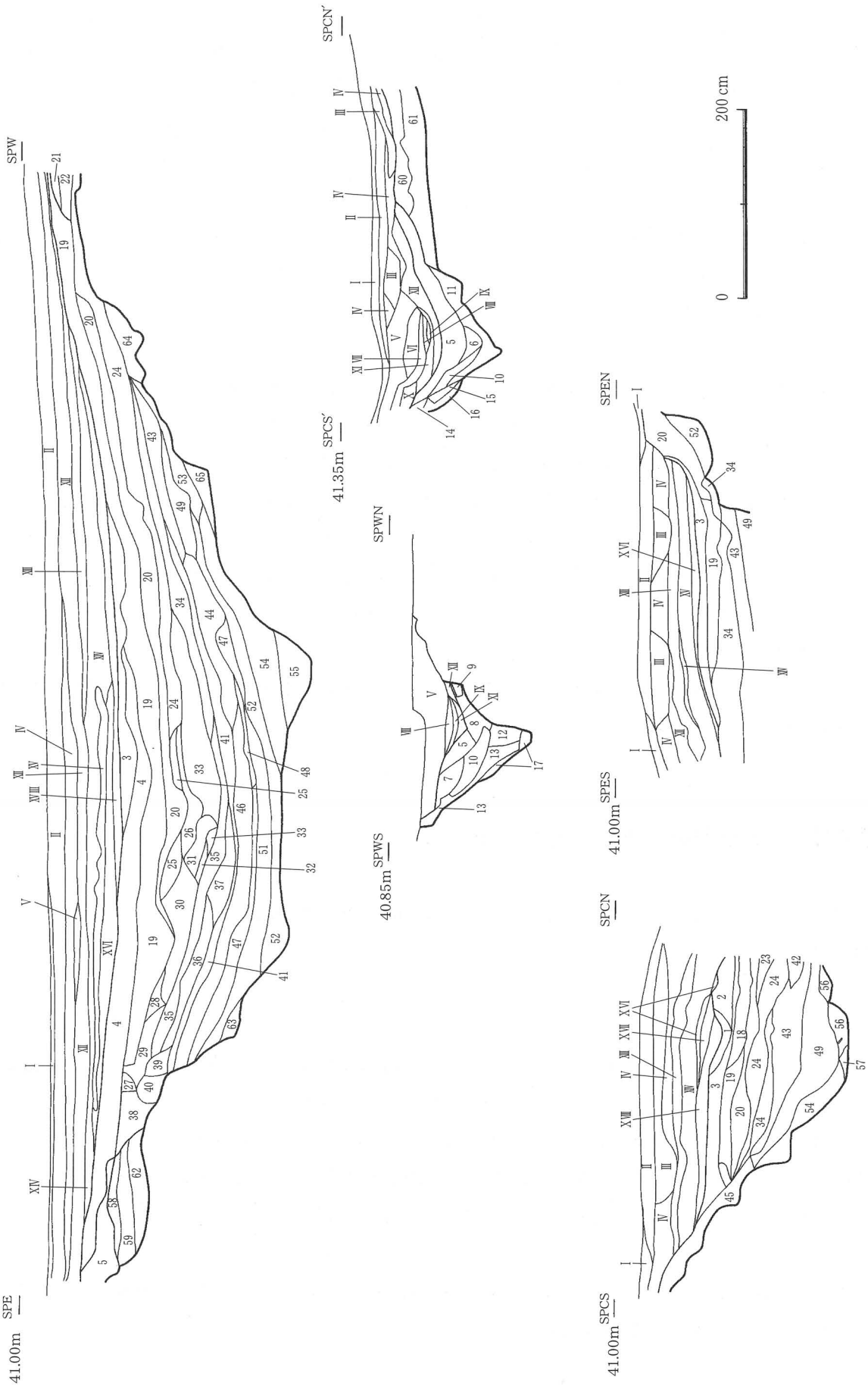
南側土塁　南側土塁については、上部を削平したのみで、位置を含めた規模についてはほぼ原形を留めていたと思われる。

土塁の調査からは新たな盛り土や造作は認められず、高屋敷館遺跡の環壕が成立した当初から土塁は南北でずれていたものと思われる。これは、壕及び内郭部の縁辺形状にも反映されており、本調査区部分で緩や

図Ⅳ-2　平成8年度高屋敷館遺跡　検出遺構平面図



図Ⅳ-3　平成8年度高屋敷館遺跡　調査区層序図



かに蛇行していることが判明した。

溝跡　南北の土塁間にはV字状の溝跡が検出された。これは、西側から壕に向かって傾斜し落ちるもので、若干の水の流れが確認できた。西側の調査を行うことによりさらに溝跡の延長と性格が理解できるものと思われる（平成15年度の県埋文センターによる発掘調査で、この溝跡の延長と思われる遺構を検出している）。

壕跡　壕は、深さ（現況地表面から）3m～3.5mと県埋文センターの発掘調査とほぼ同様の結果が得られた。調査前には、当該箇所が高屋敷館遺跡の出入り口部分と目されており、壕を渡るための施設として橋や土橋等の施設の存在も考慮されていたが、その痕跡は検出できなかった。壕は遺跡の廃絶後、農耕等で利用された時期に数回にわたって埋め戻されており、土塁の食い違い部分は後世に通路として用いられたと思われる。

壕跡の利用については現地表から70cmほど下の層から乳酸菌飲料のプラスティック容器（写真Ⅳ－3右上写真参照）が出土しており、上層については、昭和40年代以降の埋め戻し土であることが判明している。層中に明らかな火山灰層は認められなかった。

柱穴　削平されていない南側の土塁中間斜面からは数基の柱穴が検出された。時期は不明である。遺跡が現代まで果樹園として用いられていることも考慮すると、近・現代の撹乱かもしれない。しかし、同一レベルで、土塁の壕側でのみ、やや密に柱穴列が検出されたことから、高屋敷館遺跡に関する施設である可能性が高いと思われる。施設としては、土塁間の溝跡の東端に位置することから溝跡関連の施設と考えるべきであろうか。

または、柵列等の施設であることも考えられるが、確認できた延長が４ｍほどであったため、判断は今後の調査に委ねる。なお、北側の土塁からは柱穴列が検出できなかった。前述のように南側土塁において検出した柱穴列の位置及びレベルに相当する部分については、北側土塁では削平されていたため検出できなかった可能性が考慮される。

ただし、柱穴の底面も確認できなかったため、北側土塁には相応する遺構（施設）が存在しなかった可能性も考えられる。

第４章　出土遺物（図Ⅳ－4、写真Ⅳ－3）

壕の埋土等から土師器・須恵器など古代の遺物を中心に近・現代まで幅広い時代にわたる遺物が出土した。出土量は多くない。

土師器

坏　口縁部片（1）はⅠａ区から出土したもので、口縁が若干外反する比較的浅めな坏である。石英を含んだ砂粒が目立つが胎土は均質で、焼成は良く硬質な焼き上がりとなっている。

坏底部片（2）はⅡa区の地山直上から出土したもので、内面に縦方向の刻み痕がある。底部回転糸切で内外面ともにロクロ成形痕が残る。同じく底部（4）はⅡb区地山直上で出土したもので、静止糸切、内外面ともにロクロ成形痕が残る。内面黒色処理（内黒）坏底部（3）はⅡa区から出土したもので底部にヘラ削りの痕跡が残る。

甕　口縁部（8）はⅢa区から出土したもので、頸部から外反する口縁部にかけ横位にナデ痕跡がみられ、頸部以下にはヘラナデ調整が施されると思われる。

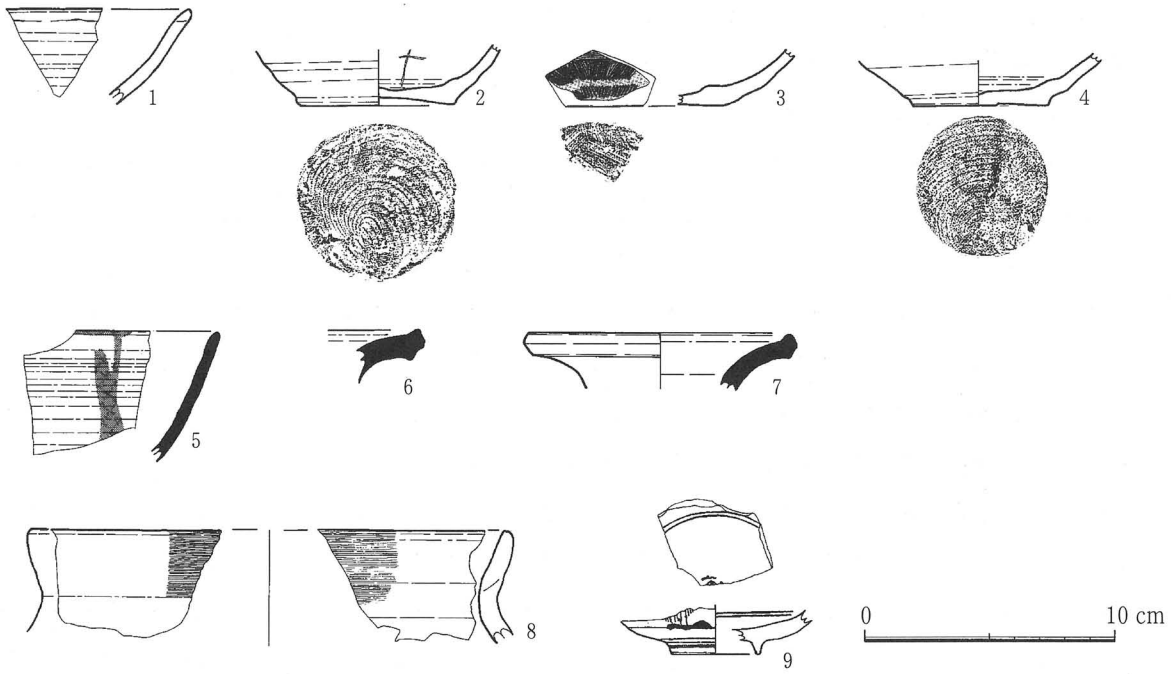
須恵器

坏　口縁部片（5）はⅡa区の地山直上から出土したもので、内面に火襷痕が見られる。壷口縁部片（6・7）はともにⅢa区から出土した。長頸壷の口縁部と思われる。（6）は口唇部外面に段を持つが、（7）では段を持たず稜となってより平面的な印象である。

肥前系陶器

皿の胴部下半～高台部片（9）でⅡb区から出土した。内面見込み外縁に回線2条、外面の高台部付近に回線が2条巡る。見込み及び外面に草花文と思われる文様が描かれている。

図Ⅳ-4　平成8年度高屋敷館遺跡発掘調査出土遺物



第5章　まとめ

平成8年度の調査では、土塁が食い違い、出入り口とされている部分について、通路及び出入り口施設の有無を調査することを主眼とした。土塁のずれが、あたかも中世城館の枡形状に見えることや、明確な出入り口施設が検出されていなかったことから、従来さしたる根拠もないままに西側の土塁の食い違う部分に出入り口施設を比定してきたためである。

しかし、今回の調査結果として土塁の食い違う西側部分と内郭部の間では、壕を渡る施設となる「橋脚」や「土橋」等の痕跡を検出することができなかった。南北の土塁間に西側から入り込む道は存在せず、通路とは逆に溝跡が東西に走っていることから、この場所を通路として用いることが困難であると言わざるを得ない。したがって、土塁の途切れる部分に「出入り口施設」があった可能性も低いと考える。

ただし、調査区が狭い面積であるため断言することは危険であることから、土塁西側の調査及び壕内部の調査を行い、全体を把握することが必要となる。なお、壕の埋土を確認したところ、現代になってから農作業の利便を図る目的で70㎝～1m埋め立てたものと見られるため、現在の景観は、昭和に入ってから作られたといっても過言ではないようである。

壕の深さは東側端部（大釈迦川に面した部分）と西側の当該調査区ではほぼ同じ3～3.5m（現況地表面から）であることや、南北土塁間の溝跡から水が流れ込んでいたことなどから、全体にほぼ同じ規模の壕が巡っていたと考えられる。

壕の利用については、調査時の埋土層の観察からは、水成堆積や水の流れを想定できるような層は確認できなかった（故に、本報告では「濠」ではなく、「壕」の字を充てることとした）ため、水を湛えた濠を造ろうとしたが北東側に隣接する大釈迦川により土塁や濠が決壊してしまい、結果として「空」壕状になったとも考えられよう。壕底には、部分的に堆積したと思われる粘土層があることや、県埋文センターの調査時に「濠跡」から多量の木製品が出土したことからも、水の存在は否定できない。常時満々と水を湛えた「濠」ではなかったとしても、壕が造られた当時は壕の中を時折は水が流れる状態であったことが推定される。

よって、土塁の食い違い部分に掘られた溝跡は、壕に水を供給するための水路跡であった可能性も考えられる。土塁が食い違って見えるのも、高屋敷館遺跡の壕及び土塁に対して斜めに設置された溝跡が先にあり、その溝跡に対して垂直に土塁を造作した可能性を提示しておきたい。

上記の結果から、西側の土塁の食い違い部を「出入り口施設」として捉えることが困難であるため、遺跡の構造を知る上で重要な要素となる出入り口及び内郭部における通路の特定は、今後の調査に委ねることになった。

今後、高屋敷館遺跡について、史跡としての環境整備事業を進めるためには、遺構配置確認調査を行うなど史跡を破壊しない範囲の調査で全体像を把握することが早急に必要となる。

発 掘 調 査 抄 録

ふ り が な	へいせい１６ねんど　　なみおかまちぶんかざいきよう　5
書　　名	平成16年度　浪岡町文化財紀要　V
副 書 名	平成８年度　国史跡高屋敷館遺跡環境整備に係る発掘調査報告書
巻　　次	V
シリーズ名	環境整備に関わる調査報告書
シリーズ番号	
執 筆 者 名	木村浩一
編 集 機 関	浪岡町教育委員会
所　在　地	038-1311　青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稲村101-1　tel.0172－62－3004
発行年月日	2005年3月31日

所収遺跡名	所　在　地	コード		北緯	東経	調査面積	調査期間	調査原因
高屋敷館遺跡	浪岡町大字高屋敷字野尻	市町村	遺跡番号	40°44′10″	140°35′04″	40.85㎡	H8.5.20 ~ H8.6.10	史跡整備
		02364	29003					

所収遺跡	種　　別	主な時代	主な遺構	主　な　遺　物	特記事項
高屋敷館遺跡	集　落	平安時代	壕跡	土師器・須恵器など テンバコ２箱	

表Ⅳ-1　高屋敷館遺跡平成8年度調査土層注記（図Ⅳ-3対応）

No.	土　層　注　記
Ⅰ	明黄褐色砂質土（10YR7/6）の単層
Ⅱ	黒褐色土（5YR2/2）に、褐色粘性土（7.5YR4/4）を小粒状に5%、灰オリーブ色火山灰（5YR6/2）を小粒状に2%含む。しまりあり
Ⅲ	明黄褐色粘性土（10YR6/8）に、灰オリーブ火山灰（5YR6/2）を極大粒状に10%、赤褐色粘性土（5YR4/8）を極大粒状に3%含む。しまり強い
Ⅳ	黒色土（7.5YR2/1）に、暗褐色粘性土（7.5YR3/3）を小～極大粒状に15%含む
Ⅴ	暗褐色粘性土（7.5YR3/3）に、灰オリーブ色火山灰（5YR6/2）を小粒状に7%、明黄褐色粘性土（10YR6/8）を小～大粒状に20%、赤褐色粘性土（5YR4/8）を極小～小粒状に5%含む
Ⅵ	黒色土（7.5YR2/1）の単層
1	暗褐色土（7.5YR3/3）に、赤褐色粘性土（5YR4/8）を極小粒状に2%、明黄褐色粘性土（10YR6/8）を極小粒状に3%含む。しまりあり
2	暗褐色土（10YR3/3）に、明黄褐色粘性土（10YR6/8）を極小～小粒状に10%、灰オリーブ色火山灰（5Y6/2）を極小～小粒状に5%、炭化物粒を1%含む
3	暗褐色土（10YR3/3）の単層
4	黒褐色土（7.5YR3/2）に、明黄褐色粘性土（10YR6/8）を極小粒状に2%、灰オリーブ色火山灰（5YR6/2）を極小～小粒状に2%、赤褐色粘性土（5YR4/8）を極小～小粒状に1%含む。しまりあり
5	暗褐色土（7.5YR3/3）に、褐色砂質土（7.5YR4/6）を極大～大塊状に25%、赤褐色粘性土（5YR4/8）を極小～大粒状に10%、灰オリーブ色火山灰（5Y6/2）を極小～大粒状に7%含む
6	黒褐色粘性土（10YR3/2）に、明黄褐色粘性土（10YR6/8）を極小～大粒状に10%、赤褐色粘性土（5YR4/8）を極小粒状に5%含む
7	暗褐色土（10YR3/3）に、褐色砂質土（7.5YR4/6）を極小～大塊状に30%含む。しまりなし
8	暗褐色土（10YR3/3）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～大粒状に20%、灰オリーブ色火山灰（5Y6/2）を極小粒状に1%含む
9	暗褐色土（10YR3/4）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～小粒状に5%、赤褐色粘性土（5YR4/8）を極小粒状に5%、炭化物を極小粒状に1%含む
10	黒色土（10YR2/1）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒状に1%、炭化材を極小粒状に1%含む
11	黒色土（10YR2/1）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に3%、炭化材を極小～小粒状に１%含む
12	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒状に1%、灰白色パミス（10YR2/1）を極小粒状に1%、にぶい黄橙色粘性土（10YR7/4）を極小粒状に3%含む
13	暗褐色土（10YR3/3）に、にぶい黄橙色砂質土（10YR6/4）を極小～小粒状に7%、褐色土（10YR4/6）を極小粒状に2%、炭化材を極小粒状に1%含む
14	黒褐色土（10YR2/3）に、灰白色パミス（10YR8/2）を極小粒～小塊状に5%、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒状に1%、炭化材を極小粒状に1%含む
15	暗褐色土（10YR3/3）に、にぶい黄橙色粘性土（10YR7/3）を極小～小粒状に5%、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒状に2%含む
16	黒褐色土（10YR3/2）に、黒褐色土（10YR2/2）を極小塊状に3%、灰白色パミス（10YR8/2）を極小粒～小塊状に2%、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒～小塊状に2%、炭化材を極小粒状に1%含む
17	褐色土（10YR4/4）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に2%、灰白色パミス（10YR8/2）を極小粒状に1%含む
18	黒褐色土（10YR3/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～小粒状に1%、炭化材を極小粒状に1%含む
19	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に1%、明赤褐色焼土（5YR4/8）を極小粒状に1%、炭化材を極小粒状に1%含む
20	暗褐色土（10YR3/3）に、褐色土（10YR4/4）を極小塊状に7%、赤褐色焼土（5YR4/6）を極小粒状に1%、炭化材を極小粒状に1%含む
21	暗褐色土（10YR3/3）に、明黄褐色砂質土（10YR6/6）を極小～小粒状に10%、赤褐色焼土（5YR4/6）を極小粒状に3%、炭化材を極小粒状に1%含む
22	にぶい黄褐色土（10YR4/3）に、灰白色粘性土（10YR7/1）を極小粒～中塊状に７%、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に2%、炭化材を極小粒状に1%含む
23	にぶい黄褐色土（10YR4/3）とにぶい黄橙色砂質土（10YR7/3）の1:1の混層
24	黒褐色土（10YR3/2）に、灰白色パミス（10YR7/1）を極小粒状に2%、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒状に1%、赤褐色焼土（5YR4/6）を極小粒状に2%含む
25	暗褐色土（10YR3/3）に、灰白色粘性土（10YR7/1）を極小粒状に2%、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒状に1%含む
26	暗褐色土（10YR3/4）と黄褐色パミス（10YR5/6）、にぶい黄橙色砂質土（10YR7/4）を同率で含む混層
27	暗褐色土（10YR3/3）に、褐色砂質土（10YR4/4）を極小粒～小塊状に3%、灰黄褐色粘性土（10YR6/2）を極小粒～中塊状に3%、にぶい黄橙色パミス（10YR7/3）を極小粒状に2%、炭化材を極小粒状に1%含む
28	黒色土（10YR2/1）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に3%、炭化材を極小～小粒状に１%含む
29	黒褐色土（10YR3/2）に、明褐色土（7.5YR5/8）を極小粒状に2%、灰白色パミス（10YR8/2）を極小粒状に1%、炭化材を極小粒状に1%含む
30	暗褐色土（10YR3/3）に黄褐色土（10YR5/6）を極小粒状に2%、明黄褐色砂質土（10YR7/6）を極小粒状に2%、灰白色パミス（10YR8/2）を極小粒状に1%、炭化材を極小粒状に1%含む
31	黒色土（10YR1.7/1）に、にぶい黄橙色土（10YR6/4）を極小粒状に3%含む
32	にぶい黄褐色土（10YR4/3）に、にぶい黄橙色パミス（10YR7/2）を極小粒～大塊状に35%、黄褐色土（10YR5/6）を極小粒状に5%含む
33	黒褐色土（10YR2/2）に黄褐色土（10YR5/6）を極小粒状に5%、灰白色パミス（10YR5/2）を極小粒状に1%、炭化材を極小粒状に2%含む
34	黒褐色土（10YR2/2）に黄褐色土（10YR5/6）と灰白色パミス（10YR8/2）をそれぞれ0.5mm程度の小粒状に1%ずつ含む
35	黒褐色土（10YR2/2）に黄褐色土（10YR5/6）を極小粒状に2%、灰白色パミス（10YR5/2）を極小粒状に1%、炭化材を極小粒状に1%含む
36	黒褐色土（10YR3/2）に明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒状に3%、灰白色パミス（10YR7/1）を極小粒状に1%含む
37	にぶい黄褐色土（10YR4/3）に明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～大粒状に20%含む
38	暗褐色土（10YR3/4）に明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～大塊状に15%含む
39	黒褐色土（10YR3/2）に明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒～大塊状に40%含む
40	黄橙色土（10YR7/8）の極小粒～大塊を主とし、暗褐色土（10YR3/3）を15%含む
50	暗褐色土（10YR3/3）に明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～小粒状に5%、炭化材を1%含む
51	暗褐色土（10YR3/3）に明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～中粒状に15%含む
52	にぶい黄褐色土（10YR4/3）に、にぶい黄橙色砂質土（10YR7/4）を極小粒～大塊状に30%含む
53	暗褐色土（10YR3/3）に黒褐色砂質土（10YR3/2）を小塊状に5%、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒～中粒状に3%、灰白色粘性土（10YR7/1）を小塊状に1%含む
54	にぶい黄褐色土（10YR4/3）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒～小塊状に10%含む
55	暗褐色土（10YR3/3）に明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒～大塊状に7%、灰白色粘性土（10YR7/1）を極小～小粒状に3%含む
56	黒色土（10YR2/1）に暗褐色土（10YR3/3）を小塊～大塊状に10%、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒～大粒状に3%含む
57	暗褐色土（10YR3/3）に明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～小粒状に15%含む
58	にぶい黄褐色土（10YR4/3）に暗褐色土（10YR3/3）を極小粒～小塊状に10%、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～小粒状に10%含む
59	にぶい黄褐色土（10YR4/3）に暗褐色土（10YR3/3）を小塊状に3%、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～小粒状に5%含む
60	黄褐色砂質土（10YR5/6）に暗褐色土（10YR3/3）を小塊状に25%含む

写真Ⅳ-1　高屋敷館遺跡

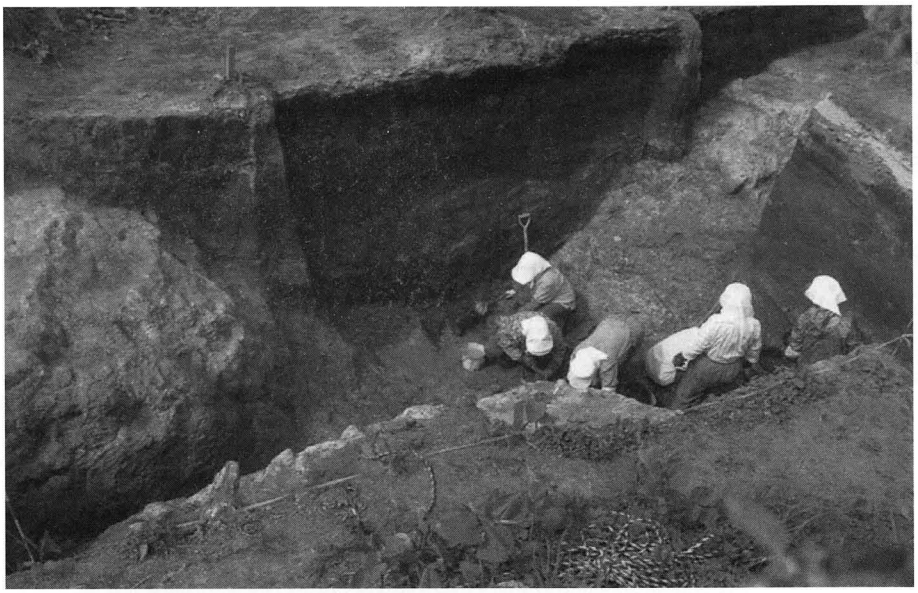
発掘調査前

Ⅲb区調査状況　南土塁部分

Ⅲb区調査状況　壕跡部分

壕跡調査状況　南から

写真Ⅳ-2　高屋敷館遺跡



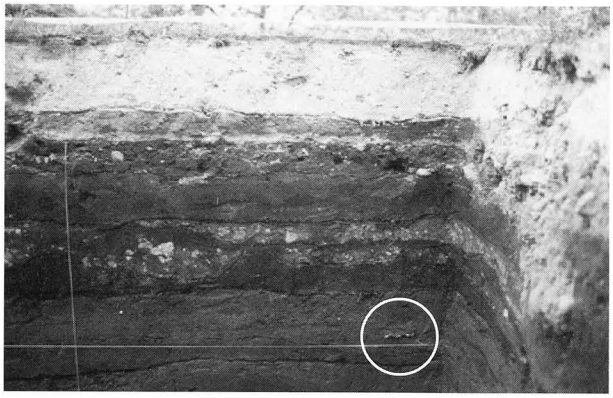
壕跡調査状況

土塁検出状況

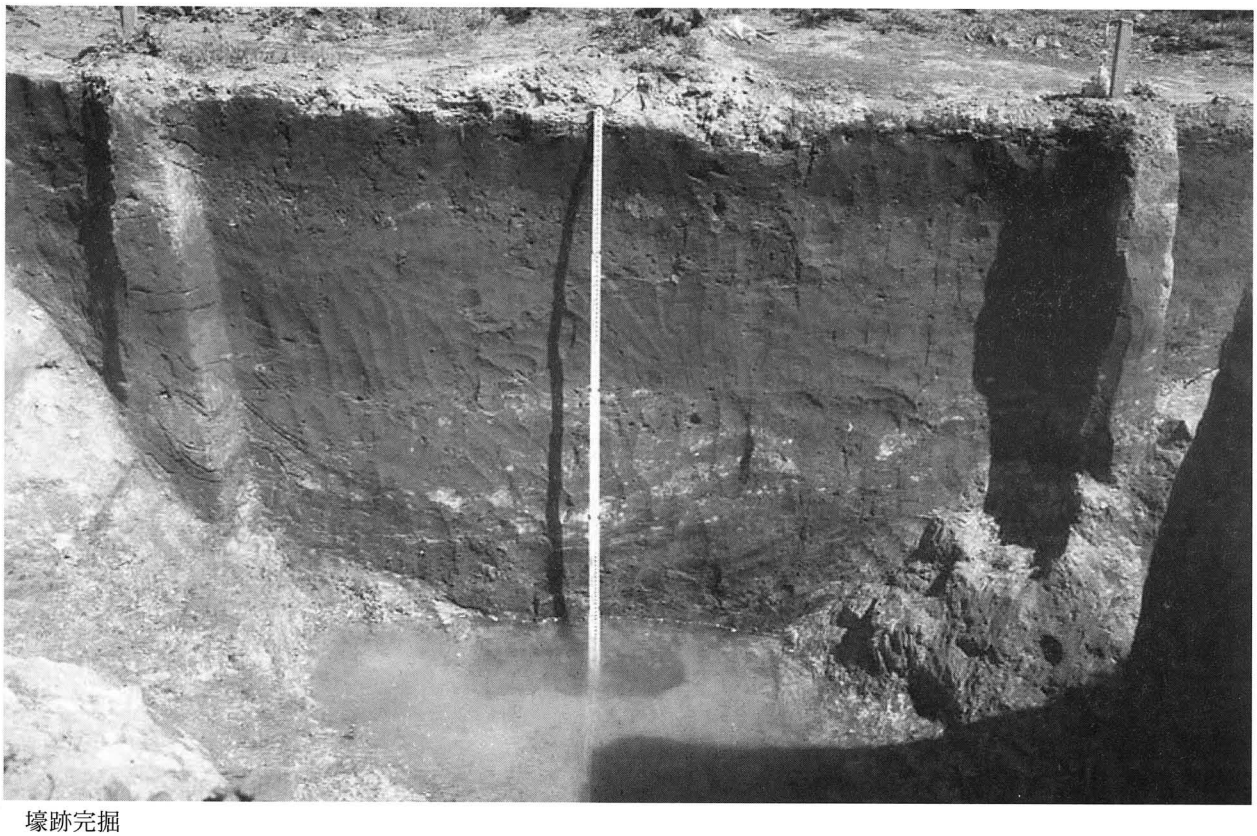
Ⅱb区調査状況

写真Ⅳ-3　高屋敷館遺跡

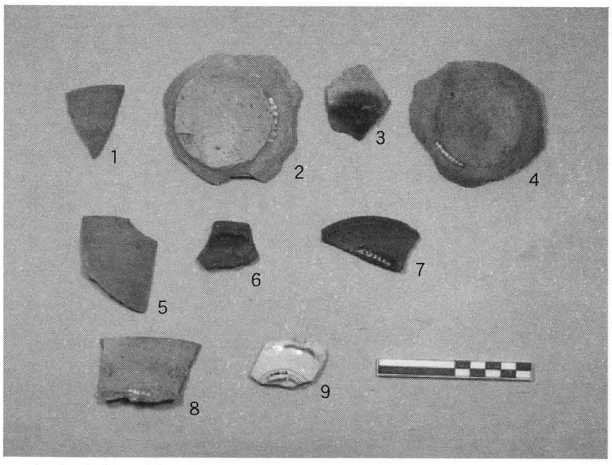
壕跡埋土層序



壕跡埋土層序（プラスティック検出状況）



壕跡完掘



出土遺物　外面

同左　内面

２）平成16年度　調査報告

第1章　調査にいたる経緯

平成12年度の国指定史跡指定を受け、平成14年度までで史跡の公有化事業を終了した高屋敷館遺跡について、史跡環境整備事業を行い保存するとともに活用することとなった。

環境整備事業に際し、平成16年度に高屋敷館遺跡環境整備委員会を組織して、検討作業を行うこととなったが、その中で、指定面積の約50％について県埋文センターが行った国道7号バイパスに係る緊急調査の報告書だけでは、史跡整備に必要な情報が不足している感が否めないとの指摘を受けた。このため、平成16年度は、史跡整備の基礎資料として必要不可欠な「内郭部（土塁内部）」の遺構確認を行うため、発掘調査計画を立てた。

また、緊急調査時に検出した遺構の埋め戻しが不足していることが判明したため、遺構の保護埋め戻しを行うこととした。当初は、壕部分の埋め戻しを予定したが、壕の整備方法が未定であることや国道7号バイパスの工事により埋め戻し土の運搬が困難であることから大規模な埋め戻しは次年度以降に行うこととし、露出している建物跡等の埋め戻しを優先的に行うこととした。

平成１６年度「史跡高屋敷館遺跡環境整備事業」に係る発掘調査要項

浪岡町教育委員会生涯学習課

１．調査の目的

史跡高屋敷館遺跡の環境整備事業に際し、未調査部の遺構配置を確認する。

２．遺跡の概要について

省略（平成8年度調査報告書参照）

３．調査地及び所有者

土地所有者　　浪岡町

調査対象地域は図Ⅳ－１参照。

４．調査面積

約７０㎡

５．調査期間等予定（期間中に所定の日数を行う）

準　備　作　業	平成１６年　４月　１日	～	平成１６年　６月２０日
整備及び調査準備作業	平成１６年　６月２１日	～	平成１６年　７月１２日
調査及び整備作業	平成１６年　７月１３日	～	平成１６年１２月１９日
整理･報告書作成作業	平成１７年１２月２０日	～	平成１７年　３月３１日

6．調査体制

浪岡町教育委員会 生涯学習課　文化班

課　　長	常　田　典　昭
課 長 補 佐	鎌　田　　廣
文 化 班 長	工　藤　清　泰（平成16年6月30日迄）
主 任 主 査	田　澤　哲　郎
主 任 主 査	木　村　浩　一（発掘調査担当）
臨時発掘調査員	竹ヶ原　亜　希（発掘調査担当）
調 査 補 助 員	斎　藤　とも子（発掘調査担当）
調 査 作 業 員	藤本範子・吉川瑠枝・乗田キヨヱ・長谷川輝子・鎌田百合子・長谷川サチヱ 秋元正子・武田秀美・工藤美香・須藤千代

7．調査方法

作業を迅速に行うため、調査対象箇所を全面調査する必要性については、当初の表土除去時に確認する。その上で必要な箇所のみの調査を行い、確認した遺構を中心に記録保存を図る。さらに、遺構の広がり等について検証し、遺構確認と遺物の検出に努める。

1）測量（実測）は、遣り方と平板測量を併用する。

2）遺構略称は、従来までの調査と整合性を持たせるため、独立行政法人奈良文化財研究所方式をとる。

例 掘建柱建物跡・SB、溝跡・SD

3）遺物略称は、従来までの調査と整合性を持たせるため、浪岡城跡発掘調査方式をとる。

例 土器・P、鉄製品・F

遺構については、検出面（確認面）からの掘り下げを行わず、確認した段階で実測及び写真撮影等を行い記録の保存に努めるものとする。確認面に至るまでに除去した表土及び覆土から検出した遺物についてはすべて取り上げるが、遺構に埋没している遺物については取り上げず、現状を維持する。

調査を開始するにあたって、県埋文センターが調査の際に設置した、旧国土座標に対応したグリッドをそのまま採用した。グリッドは4m間隔で、北から南へ算用数字、東から西へアルファベットが付されている。各グリッドは北東隅の杭の記号を呼称した。また、調査に用いた標高原点は、県埋文センターが調査の際設定した成果を用いている。

8．調査報告書の作成

調査結果については、「平成16年度　浪岡町文化財紀要Ⅴ」中に国史跡高屋敷館遺跡環境整備事業に係る発掘調査報告書として刊行することで、成果を公表する。

第2章　調査経過（発掘調査日誌から）

6月21日　高屋敷館遺跡今年度事業開始。テント・トイレを設置しようとしたが、極めて強い台風6号の北上に伴い、テントと発掘用具の移動に留めた。

6月23日　調査予定区及び遺跡中央部付近の草刈りなど実施。元作業小屋付近のゴミや堆肥が多量にある。

6月28日　先週に引き続き草刈り作業。作業風景写真撮影。県設置杭の検討。

6月29日　旧農道箇所南側の草刈実施。周辺部についても草刈を実施。

6月30日　草刈継続。主に内郭縁辺部。平板（S=1/200）にて内郭部分測量。県調査時に設定した杭・グリッドピンの測量を行う。

7月1日　先週刈り取った草を除去。「草剥ぎ」は全面に至ったので、旧農道シラス部分を除去。P-24区プラスティック杭（県埋文センター設置最西端の杭）上の釘にセオドライトを設置して「仮」杭打ち実施。一応、東西24ライン軸、南北Pライン軸が通った。今後西側に軸を通す必要がある。

7月13日　現状変更許可が下りたことから発掘準備に取りかかる。

7月16日　高屋敷館遺跡整備検討委員会開催。午前文化庁記念物課小野主任調査官、午後委員現場視察。

7月26日　県調査時の20ライン付近に、幅2m程度の土層観察用東西ベルトを設置。以前調査済みの部分との境界にあった土嚢を除去したところ、断面にて遺構と思われる土層が観察された。本年度確認調査予定地まで遺構が延びていることと、表土から遺構面までの深さを改めて確認する。

7月28日　ジョレンにて表土と覆土を薄く除去する。南北ベルトとして残していたⅠ層部分を部分的に除去。最北端ベルトと中央ベルトとの間に、地山面が一部露出。尚、ベルト付近では遺構？（溝とピット）も確認される。写真撮影。地山土が一部浮いている箇所があり、ビニル紐等を含んでいるため、現代の攪乱であると認識。東側に一部広がる黒色の強い土は遺構埋土と思われる。

8月3日　昨日までに表土を除去した範囲について、精査し遺構を確認。大まかにレベルを測る。現表土と遺構確認面は5～7㎝程度しかなく、耕作土（表土）・漸移層・確認面（遺構面）が層序から読み取れることを確認。25ライン付近で表土から5㎝程下でよりシラス層検出。H8調査区埋め戻し土か？

8月5日　旧農道上のシラス等ほぼ除去。平成8年度調査区が見え出した。若干軸が異なる印象。N-29区付近の木腐食土等除去するも、攪乱範囲が不明なのでとりあえず平面範囲を確認するに留まる。地山露出部分の標高測量。県埋文センター調査区と概ね70㎝前後の標高差があることを確認。Q-21区内の薬槽を、底板を残したままで埋め戻す。初日設定したP軸杭のチェック。O軸、S軸で１本通す。

8月23日　O・P・Q・R・S-12～21区ジョレンがけ。数箇所で伐採したリンゴの根付近に地山ローム土が散らばっている状況を確認できる。Q-15、R-16区でシラスを斑状に含む黒色土検出。壕？全体写真撮影。少なくとも、この状態で溝1条、ピット1基、遺構プラン少なくとも2基を確認できそうである。

8月27日　ジョレンがけ。耕作土除去後、移殖べらにて精査。G-20区で方形のプランを検出。SX-01と命名。埋土上面から土師器坏底部・玉を検出。遺物遣り方にて取り上げ。センター調査時の地山検出面と相当のレベル差がある模様。20～30㎝程度。それ程削平したのか、当時の地形が高低差を持つのか、要検討。

8月30日　先週検出したSX-01について、遺物取り上げ。P・Q-19～21区について掘り下げ。先週SX-01上面を検出した面から10㎝ほど下げる。SX-01の東側にて、南北に走るプランを検出。範囲確認に努めたい。本日までに取り上げた遺物は、全てⅠ層出土として扱う。

11月1日　ジョレンがけ。耕作土を除去し、ベルト沿いに幅40～50㎝程度でトレンチを入れる。各トレンチにて、地山レベルで壕の落ち込みを確認する。深く攪乱が入っている箇所があり、見極めながらの除去・掘り下げ作業となる。

11月25日　精査・覆土を一段下げて遺構確認面まで（部分的に）至る。南側調査区東側の、東西トレンチにて、南北に走るプラン確認。SX-02と命名。この確認面まで全体を下げることにする。遺物ポイント上げ、調査区範囲遣り方実測。レベリング。写真。南北溝として検出していた遺構を、トレンチ部分で掘り下げたところ、柱列を確認。柱穴2基完掘、1基柱穴プランのみ確認。延長5mほどは確認したが、調査区外にも更に延びる

可能性あり。SD-01（後にSA-01）と命名する。

11月10日　調査前より懸案事項だったＦ-38区付近の井戸（公有化前まで利用されていた）を埋め戻す。

11月30日　県センター調査区において、露出している既調査遺構の埋め戻し。

12月1日　既調査遺構埋め戻し継続。

12月6日　埋め戻した遺構の範囲を測る。写真撮影。I-13・14区にて鉄滓表採。

12月8日　既調査遺構埋め戻し作業と今年度の調査を平行して行う。SX-01他、溝の検出状況を遣り方にて実測・レベリング実施。高屋敷館遺跡環境整備委員会小委員会、関根達人委員、指導来訪。

12月9日　既調査遺構（8H、44H、70H、23H・性格不明工房跡）埋め戻し。埋め戻した遺構の範囲を測る。写真撮影。

12月10日　遺構露出面埋め戻し後の整地実施。今年度の県センター調査区内既調査遺構埋め戻し終了。

12月12日　高屋敷館遺跡環境整備委員会小委員会、村越潔委員長、指導来訪。

12月14日　北側東西層序実測。平面図加筆。高屋敷館遺跡環境整備委員会小委員会、三浦貞栄治副委員長、指導来訪。

12月15日　平面図補正及びレベリング、層序実測及び土層注記実施。

12月16日　層序実測・補正。注記実施。調査終了。

第３章　検出遺構（図Ⅳ－5、表Ⅳ－2・3・4・5、写真Ⅳ－4・5・6）

遺構面までの覆土は、深いところでも20㎝程度、浅い部分では、10㎝弱となり、人力で表土を除去する段階でもスコップによる掘り下げが行えないことが判明したため、ジョレン及び移植べらにて丁寧に覆土をはがすこととした。このため作業効率が非常に悪くなった。史跡の保護と遺構の確認を両立させるため、最小限の調査を行うという目的のためには妥協せざるを得なかった。覆土はほとんどが農耕による攪乱層で、本来の遺構上面及び地山の一部まで削平されていることが判明した。なお、今回命名した遺構については平面で範囲を確認したのみで、掘り下げを行っていないために仮分類とせざるを得なかったことを付記する。

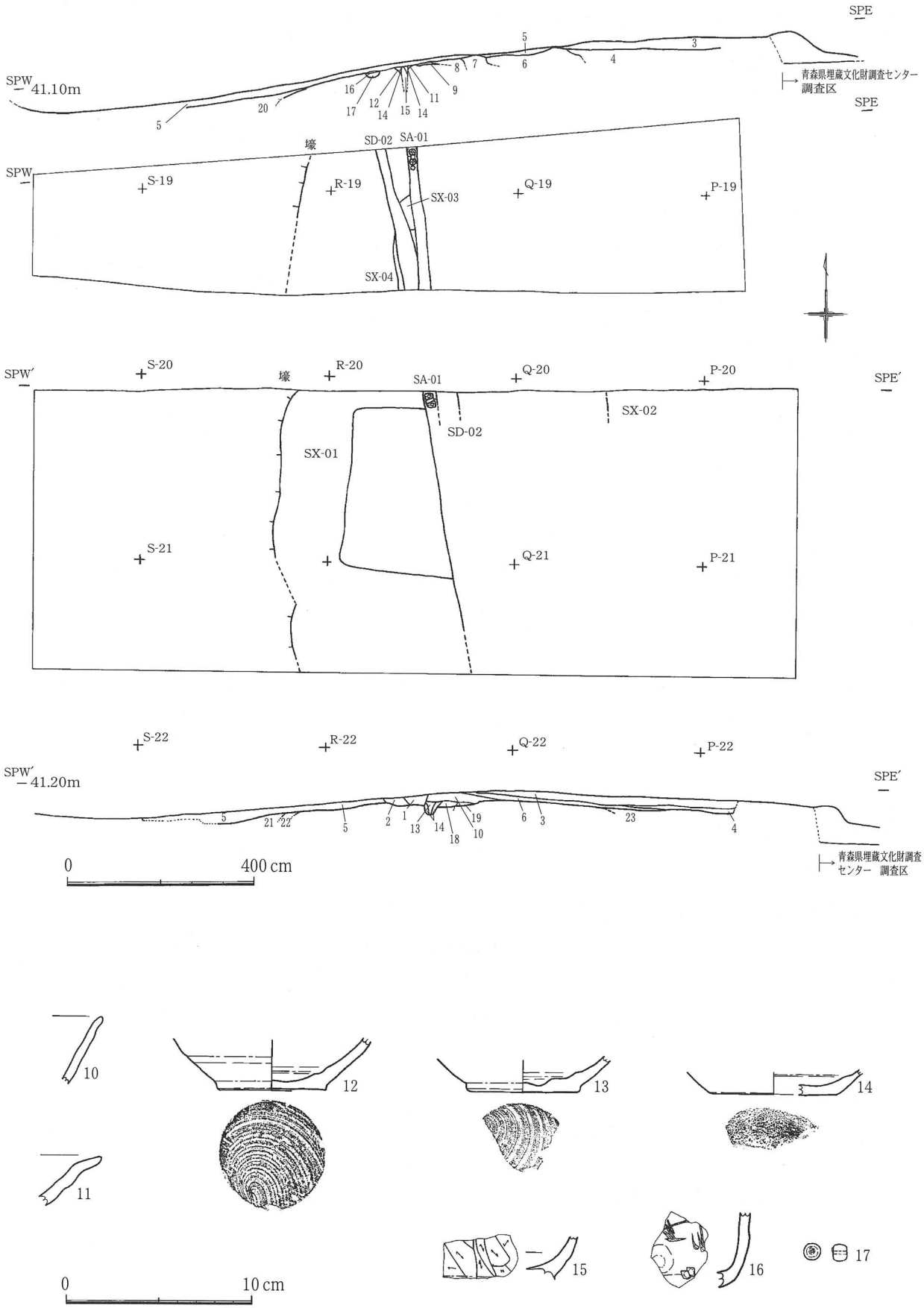
SA-01　Q-18～20区にて検出した柵列（柱穴列）である。延長約6mを確認した。壕・土塁に沿って南北に連なる遺構である。掘り方は幅20㎝ほどで、土層確認面で確認した範囲では、直径10㎝程度の柱を連続して密に打ち込んでいる状態である。壕と本遺構間の地山が硬化しており、通路として用いられていた可能性も考えられる。壕沿いに柵を設置し、壕と柵の間を通路として用いた可能性が想定される。

通路と思われる部分については延長（範囲）も明確ではなく、農耕により掘削を受けたため、遺構名称を付するに至らなかった。SD-02と重複し、SD-02より新しい。

SD-01→SA-01に変更した。

SD-02　Q-18～20区にて検出した。SA-01同様に南北に伸びる溝状を呈する。確認上面の埋土に火山灰の堆積が見られる。分析は行えなかったが、隣接する遺跡における県埋文センターの調査で検出されている白頭山火山灰の可能性が高いと思われる。SA-01と重複し、SA-01より古い。上部をかなり削平されているが、遺構平面の確認だけを行ったため遺構断面形状・構造など不明である。検出は表土上面から18～22㎝ほど

図Ⅳ-5　高屋敷館遺跡　検出遺構及びSX-01出土遺物



と見られる。

壕　R-18～21区にて検出した。東側落ち込み箇所（縁辺部）のみ検出し、掘り下げは行っていない。県埋文センターの調査時に検出している壕跡の延長線上に落ち込みのラインが延びていることを確認した。これは、史跡指定以前の平成8年度に浪岡町教育委員会で調査した壕跡の延長とも整合性を持つ。ただし、南側の土塁が食い違う部分については、土塁同様のラインを描いて湾曲するものかは更なる確認調査が必要である。

SX-01　Q-20・21区にて検出した。南北322㎝、東西240㎝以上の方形を呈し、竪穴建物跡と思われる遺構である。検出面ではカマド等の焼土は確認できなかった。北西隅と西壁・北壁を検出した。東側は他の遺構と重複すると思われ、未確認である。SA-01・SD-02より古い。確認できる深さは60㎝程度と思われる。確認面の直上では土師器坏、ミニチュア土器、土玉を検出している。遺構埋土には土師器坏等が検出されたが、文化庁の指導もあり、取り上げを行わず現状で保存することとした。

SX-02　P・Q-20区にて検出した。西壁の一部を検出したが、その他は未確認である。県埋文センターの調査で検出した第44・45号住居跡に同定又は重複する遺構と思われる。確認面での範囲確認調査で、新旧関係がわかるまでの精査を行っていないため、規模、SX-01との重複関係等については不明である。

SX-03　Q-19区にて検出した。東西20㎝、南北80㎝ほどを確認した。東側をSA-01に、西側SD-02に切られる、方形の土坑状遺構と思われる。

SX-04　Q-19区にて検出した。東西12㎝、南北120㎝ほどを確認した。東側をSD-02に切られ、南側は調査区外に延びる。延長及び構造を含め、遺構の全体形は不明である。

第４章　出土遺物（図Ⅳ－5・6、写真Ⅳ－4・7）

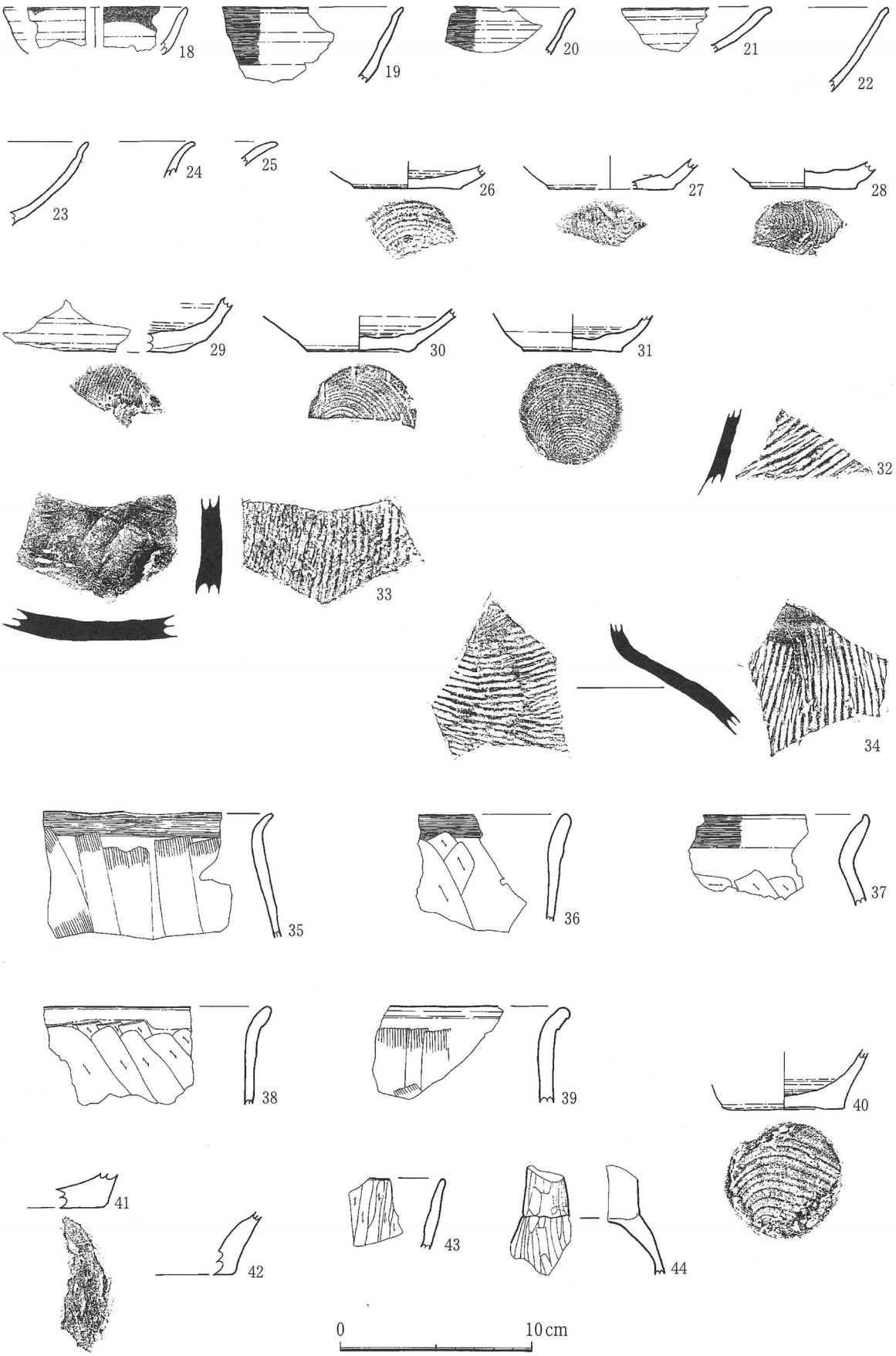
本調査で出土した遺物は、古代の土師器、須恵器、土製品（土鈴・土玉・羽口）などがある。坏や甕の形態からは、県埋文センターでの調査時に出土した11世紀に位置すると思われる破片が多数を占める。しかし、中世を除き、近世・近代・現代の遺物も連続して表採できる状況であり、遺跡の使用年代に時代幅が見られる。ここでは遺跡の中心となる古代の遺物を中心として報告する。

土師器

坏　坏は浅く、皿状に外反する器形が多い。特に口縁部よりもやや下で明瞭な段を持って外反するもの（11・21・24・25）と、口縁のみが小さく外反するもの（18・19・20・22・23）に分類できる。底部は回転糸切（12・28）、静止糸切（13・26・27・29・31）、砂目底（14）など様々な成形が見られる。胎土は均一で軟質、かわらけ状を呈するもの（28・29）もあるが、大きく外反する口縁部片には均質で密な胎土の良好な焼成が見られる個体がある。なお、（18）は内面に筆状工具による漆のしごき痕跡を留める口縁部片である。

甕　口縁部片及び底部片が出土しているが、全体を把握できる資料は出土していない。口縁部片は、明らかに外反する器形が主となり、外反する口縁部に横ナデ調整を施し、頸部以下がヘラナデ・ヘラ削り痕が明瞭に

図Ⅳ-6　高屋敷館遺跡出土遺物



残される（35・37・38・39）。口縁部が直立に近く立ち上がるもの（36）もあるが、調整技法に関しては外反するものと同様の特徴を有する。

須恵器　大甕胴部片（32・33・34）が出土している。肩から頸部にいたる破片（34）は内外面に、方向は異なるが同様の叩き目が見られる。

土製品　土玉（17）はSX-01上面より出土した。直径８㎜、厚さ７㎜の円盤状を呈し、中央部に焼成前穿孔の径１㎜の円孔が施される。県埋文センターが実施した調査の際出土した玉とほぼ同規模・同様の製作技法のようである。土鈴片（44）は表採資料である。
羽口片も表採資料であるが、小片であるため大きさ等は不明である。

その他　ミニチュア土器と思われる破片（16）や、器形不明の遺物（43）が出土している。

第5章　遺構保護・保存整備

遺構の保護及び保存のために埋め戻しを行った遺構及びその数量について、表にして以下に示す。

（単位：m、㎡、立方メートル）

名　称	南北値	東西値	面　積	深　さ	土　量	備　考
第2号住居跡	7.40	5.70	42.18	0.10	4.22	
第3号住居跡	5.00	3.60	18.00	0.10	1.80	
第8号住居跡	4.00	3.80	15.20	0.25	3.80	
第21号住居跡	4.70	5.00	23.50	0.20	4.70	
第23号住居跡	9.00	3.30	29.70	0.10	2.97	
第32号住居跡			1.50	0.30	0.45	周囲のみ
第44号住居跡	2.00	6.00	12.00	0.30	3.60	
第45号住居跡	2.00	5.00	10.00	0.30	3.00	
第49号住居跡	1.60	3.80	6.08	0.10	0.61	
第50号住居跡	5.70	3.10	17.67	0.10	1.77	
第52号住居跡	6.50	4.60	29.90	0.10	2.99	
第53号住居跡	4.70	4.80	22.56	0.10	2.26	
第70号住居跡	2.00	5.00	10.00	0.20	2.00	
第76号住居跡	3.40	3.80	12.92	0.20	2.58	
第77号住居跡	7.00	5.50	38.50	0.10	3.85	
第82号住居跡	4.00	8.00	32.00	0.20	6.40	
2号竪穴遺構	2.70	2.60	7.02	0.20	1.40	
5号竪穴遺構	2.50	2.40	6.00	0.10	0.60	
不明工房跡	5.00	4.00	20.00	0.20	4.00	
1号土坑	1.10	1.10	1.21	0.30	0.36	
第31号土坑	1.10	1.70	1.87	0.20	0.37	
計			357.81		53.73	

第６章　まとめ

今年度の調査では、草根層の除去を含め、ジョレンと移植べらを中心に精査状態で調査の大部分を行った。北側及び南側に露出されたままになっていた過去の県埋文センターの調査面と現在残る表土との高低差が極めて少ないため、緊急発掘調査を含めた通常の発掘調査ではなく、あくまでも遺構保護を前提とした史跡内での遺構確認調査を行うためである。県埋文センターでの緊急調査時は、史跡の調査ではなく期限を限られた中での記録保存調査であったためか、今回の調査とは、遺構の確認面に60～70㎝程度のレベル差が生じている。

遺構の確認数や重複関係、出土遺物に多大な影響も懸念されるが、調査の性格上致し方がなかったのかもしれない。

作業効率を犠牲にしても遺構保護を優先させた結果、浅い部分では表土から10㎝弱で遺構面を確認し、遺構を検出することができた。土層観察のために必要な箇所のみ遺構への影響を最小限に抑えて掘り下げを行ったが、制限の多い確認調査であったため、遺構の正確な規模や時代、性格を把握するまでには至っていない。

そのなかで、柱穴列と思われる遺構や竪穴と思われる遺構複数を確認することができたことは、即ち、整備を行う上での重要な資料を得たことに繋がる。大変意義のある調査であったと言えよう。また、想像以上に覆土が薄いことから、遺構の保存・保護のために、更なる盛り土の必要性を再認識した。

本報告でSX-01と仮称した遺構は掘り下げを行わなかったため、性格を含め全容は判断できない。遺構確認面上面で出土した遺物のみ取り上げを行ったが、それらの遺物から判断すると、過去の調査と同様に10～11世紀の竪穴建物跡であると思われる。カマドの有無については、掘り下げを行っていないため、不明のままである。

柱穴列と思われるSA-01とした遺構は、西側の壕に概ね並行する形で検出した。更に、壕とSA-01　との間に120㎝程度の幅をもった硬化面を確認した。このことは、内郭西側の壕縁辺部に通路状の遺構が存在する可能性を考え得る根拠ともなるものである。従来までの調査結果では、土塁と壕で区画された区域の出入り口について明確にできなかったが、この通路状遺構の延長・位置と、SA-01の延長・配置を確認し、内郭部の建物配置と併せ検討すれば、壕をわたる場所と、内郭部の通路・文字通りの出入り口が理解できる端緒となる可能性が高いものと期待している。これらの遺構配置を表現（復元）することにより、高屋敷館遺跡の立体的な整備が可能になると思われる。

今回、県埋文センターにより調査済みとして報告された遺構について、保護盛り土が極めて薄く、凍上や雑草木の根による二次的遺構破壊が懸念される状況が明らかになった。今年度の埋め戻しは、以前の県埋文センターの調査時に搬出した調査残土を再び遺構に被せた。以前の埋め戻しが砂によるものであり、調査済みの面が理解できるものと判断して、その上に調査時の残土を埋め戻した。後世の調査時には大きな錯誤を起こす可能性は低いと思われる。特に際立って埋め戻し土の薄い第２・３・８・21・23・31・32・44・45・49・50・52・53・70・76・77・82号住居跡・第2・５号竪穴建物跡・不明工房跡・第1号土坑を主体として埋め戻したが、第52・3号住居跡などの内郭部の縁辺（特に東側）の遺構については、過去の調査時に検出した建物の壁の立ち上がりも検出できないほどの状態であった。そのため、既に遺構面自体が崩壊してきている可能性が高いと判断し、より保存の必要性の高い遺構から被覆した。

今後の本格的な保護盛り土と整備盛り土については、早急な対応の必要があるため、（未策定ではあるが）基本設計及び実施設計に先んじての盛土が必要となる。整備による遺構破壊を起こさないように手法の慎重な検討が求められることになろう。

高屋敷館遺跡の中心部の大部分は既に調査済みであるが、今後の史跡整備のために必要な出入り口施設を含

めた導線の問題や土塁内部及び外部の遺構配置、土塁南側に見られる沢目に期待される古環境の復元資料、土塁・壕の継続年代など未調査部分も含め緊急調査では明らかにできなかった課題も数多く残されている。

史跡整備にあたっては、保存を第一義とし、調査を行わずに現状のままに整備を行う方法も考えられている。たしかに、遺跡の性格・内容が類推できるものであれば、それも有効な保存・活用方法であると思われる。しかし、本遺跡のように、古代にあって史料による裏付けが難しく、歴史学の中での位置付けが明確ではない遺跡の場合は、発掘調査成果をもって整備を行わなければならない。調査を伴うことのない整備は都市公園の広場と同じである。公園の広場と化した遺跡は、将来的には史跡として文化財愛護意識の啓発結果とした保護・保存・活用にも良い影響を及ぼすことはない。

また、考古学的な問題だけではなく、事務的な問題もある。例えば遺跡名について言えば、「高屋敷館遺跡」の一部を国史跡としたため、史跡指定地外の「高屋敷館遺跡」が生じてしまっている。その結果、後世の調査や開発に対する指導に対し混乱を生じかねない状態を招いている。史跡名称と周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）名との整合性を図ることは、こと高屋敷館遺跡に限った問題ではないと思われる。一定基準を設け、市町村単位ではなく、国や県規模で調整を図るべきであろう。きわめて事務的な調整事項であることから、史跡指定に伴って最初に徹底すべき事項ではなかったかと考慮している。

史跡高屋敷館遺跡の実態・詳細については、前述のように数多くの課題が残されている。今後、我々に課せられているのは、考古学的調査（学術調査）による資料の収集と、その結果から日本史における古代環壕集落の分析をおこなうこと。そして、研究結果をもって、「史跡としての整備」を進めることである。

発 掘 調 査 抄 録

ふりがな	へいせい１６ねんど　なみおかまちぶんかざいきよう　5
書名	平成16年度　浪岡町文化財紀要　V
副書名	平成16年度　国史跡高屋敷館遺跡環境整備に係る発掘調査報告書
巻次	V
シリーズ名	環境整備に関わる調査報告書
シリーズ番号	
執筆者名	木村浩一・竹ヶ原亜希
編集機関	浪岡町教育委員会
所在地	038-1311　青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稲村101-1　tel.0172－62－3004
発行年月日	2005年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査面積	調査期間	調査原因
高屋敷館遺跡	浪岡町大字高屋敷字野尻	市町村	遺跡番号	40°44′10″	140°35′04″	70㎡	H16.6.21～H16.12.16	史跡整備
		02364	29003					

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高屋敷館遺跡	集落	平安時代	柱穴列跡・溝跡・性格不明遺構	土師器・須恵器・鉄製品などテンバコ３箱	

表Ⅳ-2　高屋敷館遺跡平成16年度調査東西層序図土層注記（図Ⅳ-5対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	暗褐色土（10YR3/3）に、明黄褐色土（10YR6/6）を小粒状に1%、浅黄橙色パミス（10YR8/3）を極小～小粒状に3%含む。全体的にしまり強い	攪乱と思われる
2	黒褐色土（10YR3/2）に、明黄褐色土（10YR6/6）を極小粒状に3%、赤褐色焼土（5YR4/8）を小粒状に1%、灰白色シルト（10YR8/2）を極小～小粒状に2%含む	攪乱と思われる
3	暗褐色土（10YR3/3）に、明黄褐色土（10YR6/6）を極小粒状に10%、にぶい黄褐色土（10YR5/4）を極小粒状に7%、浅黄橙色パミス（10YR8/3）を極小～小粒状に3%、炭化物を極小粒状に1%含む。しまり強い	耕作土
4	黒褐色土（10YR3/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒～大塊状に7%、灰白色粘土（10YR8/2）を極小粒～小塊状に7%、炭化材を極小粒状に2%含む	
5	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒～小塊状に5%、炭化材を極小粒状に1%含む	
6	黒褐色土（10YR3/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒～中塊状に7%含む	
7	暗褐色土（10YR3/4）に、明黄褐色土（10YR6/6）を極小～小粒状に3%含む	
8	暗褐色土（10YR3/3）に、黄褐色土（10YR5/6）を極小粒状に2%、にぶい黄橙色パミス（10YR5/4）を極小～小粒状に1%含む。しまり弱	
9	明黄褐色土（10YR6/6）に、褐色土（10YR4/4）を極小～小塊状に3%含む。しまり弱	
10	暗褐色土（10YR3/3）に、暗褐色土（10YR3/4）を極小塊状に3%、炭化材を極小粒状に1%含む。しまり強い	
11	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒～小塊状に2%含む。しまり中	SA-01
12	にぶい黄橙色パミス（10YR5/4）	SA-01
13	暗褐色土（10YR3/4）に、褐色土（10YR4/6）を極小～小粒状に30%、炭化材を極小粒状に3%含む。しまり強い	SA-01
14	暗褐色土（10YR3/3）に、黄褐色土（10YR5/8）を極小粒～中塊状に3%、炭化材を極小粒状に1%、灰白色パミス（10YR8/2）を極小粒状に1%含む	SA-01
15	黒褐色土（10YR2/2）に、黄褐色土（10YR5/8）を極小粒～小塊状に3%、炭化材を極小粒状に2%含む	SA-01
16	黒褐色土（10YR3/2）に、褐色土（7.5YR4/6）を極小粒～小塊状に40%含む	SD-02
17	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/6）を極小粒～大塊状に7%、炭化材を極小～小粒状に１%、しまり弱	SD-02
18	黒褐色土（10YR3/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒状に10%、炭化材を極小粒状に1%含む。しまり弱	SD-02
19	黒褐色土（10YR2/2）に、黒褐色土（10YR3/2）を小塊状に15%、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～小粒状に2%含む。しまり弱	
20	暗褐色土（10YR3/3）に、にぶい黄橙色砂質土（10YR6/4）を極小粒～大塊状に3%、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒状に3%、炭化材を極小粒状に1%含む	
21	にぶい黄橙色砂質土（10YR6/4）に、黒褐色土（10YR3/2）を小～大塊状に20%、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～小粒状に2%含む	壕崩壊土か
22	黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～小粒状に2%含む	
23	暗褐色土（10YR3/3）に、明黄褐色土（10YR6/6）を極小～小粒状に3%明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小粒～小塊状に2%、炭化物を極小粒状に1%含む。しまりなし	SX-02

表Ⅳ－3　SA-01土層注記（図Ⅳ－5対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	調査区東西層序図11層に対応	
2	調査区東西層序図12層に対応	
3	調査区東西層序図13層に対応	
4	調査区東西層序図14層に対応	
5	調査区東西層序図15層に対応	

表Ⅳ－4　SD-02土層注記（図Ⅳ－5対応）

No.	土　層　注　記	備考
1	調査区東西層序図16層に対応	
2	調査区東西層序図17層に対応	
3	調査区東西層序図18層に対応	

表Ⅳ－5　SX-02土層注記（図Ⅳ－5対応）

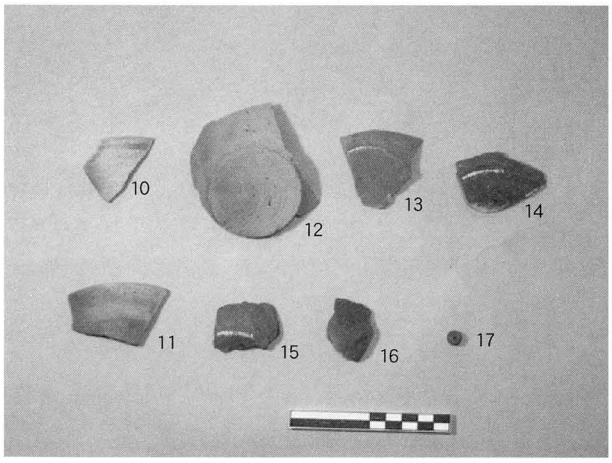
No.	土　層　注　記	備考
1	調査区東西層序図23層に対応	

写真Ⅳ-4　高屋敷館遺跡

調査準備作業状況

調査風景

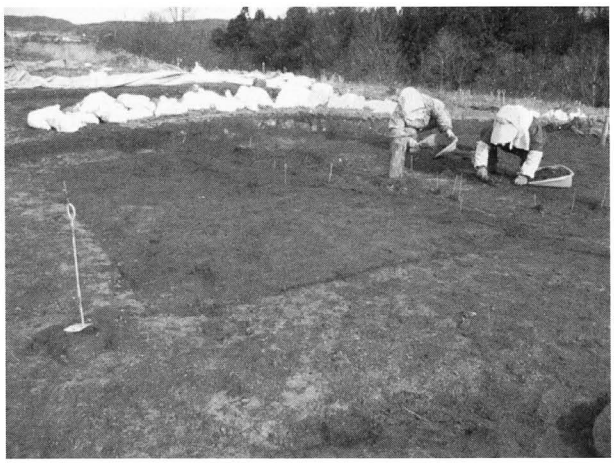
SX-01　検出状況



SX-01　出土遺物　外面

同左　内面

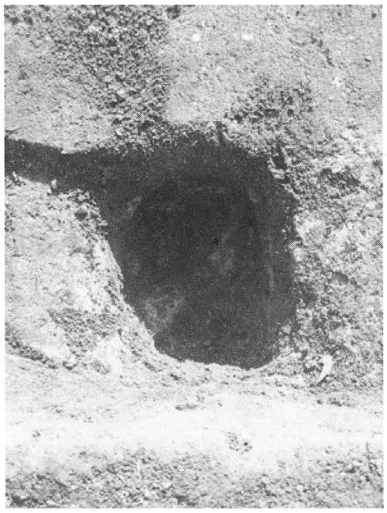
写真Ⅳ-5　高屋敷館遺跡



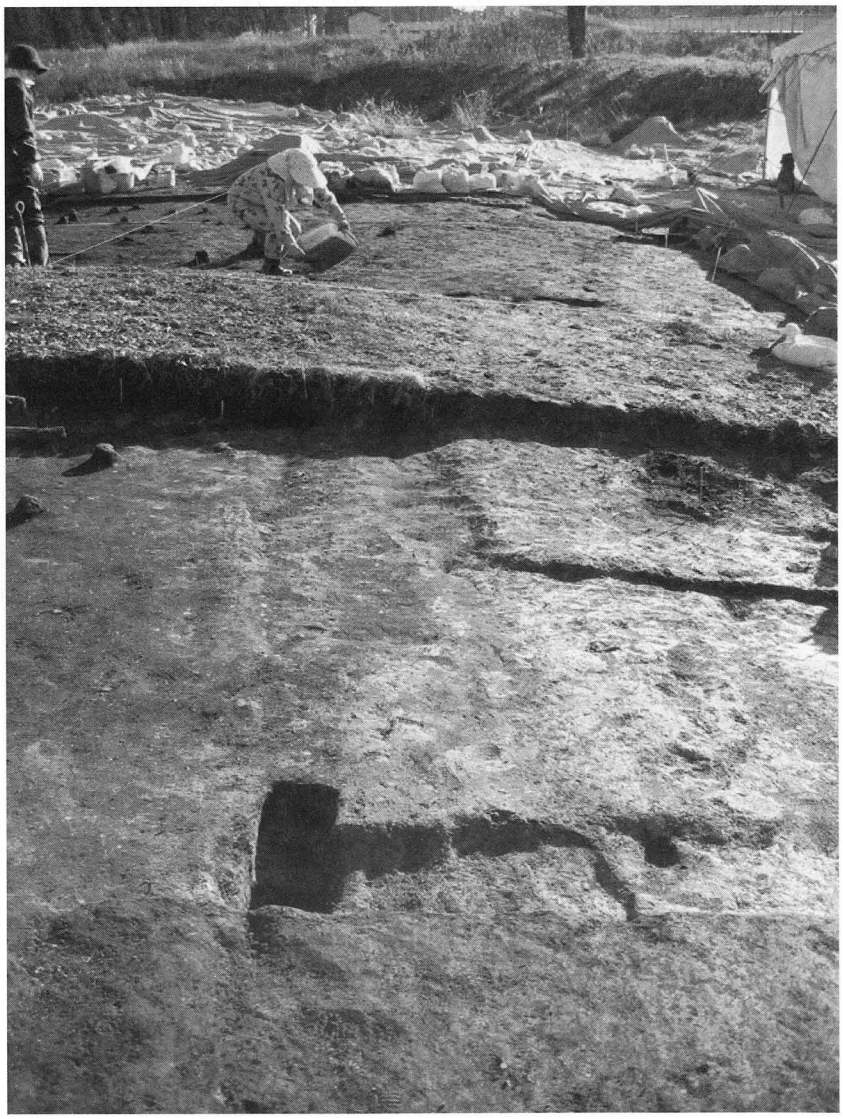
SX-01　検出状況

SD-02　火山灰検出状況

柱穴列検出状況（北側）



同上（南側）



SA-01、SD-02、SX-03・04　検出状況

写真Ⅳ-6　高屋敷館遺跡

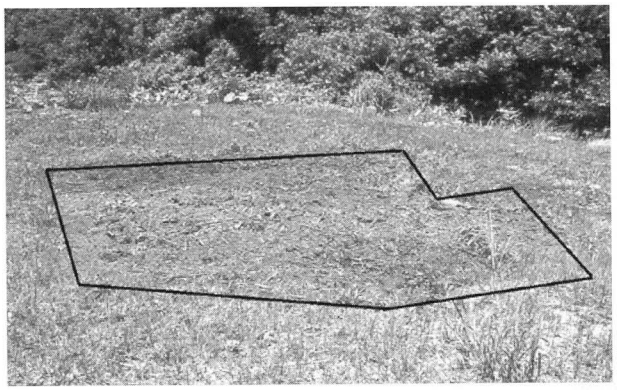
Ⅱ層　掘り下げ状況

調査風景

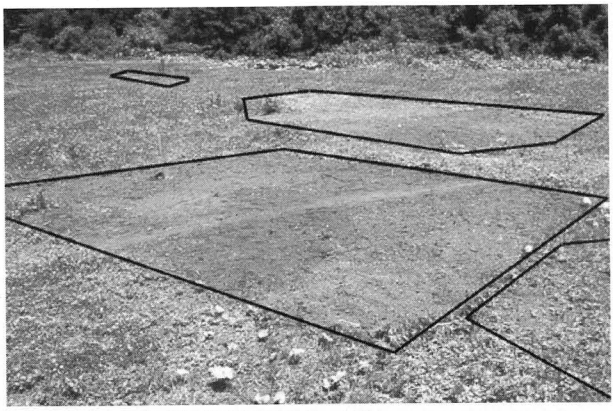
SX-01・02　検出状況

SA-01、SX-01　検出状況

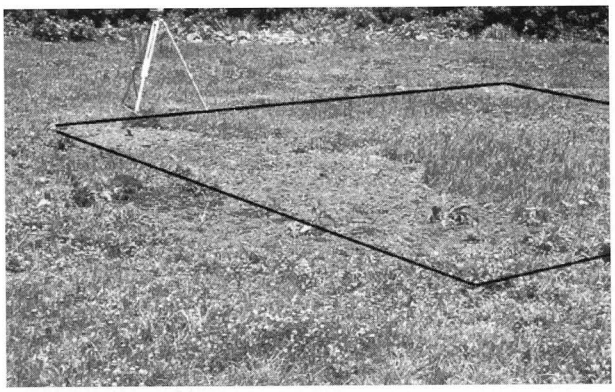
写真Ⅳ-7　高屋敷館遺跡



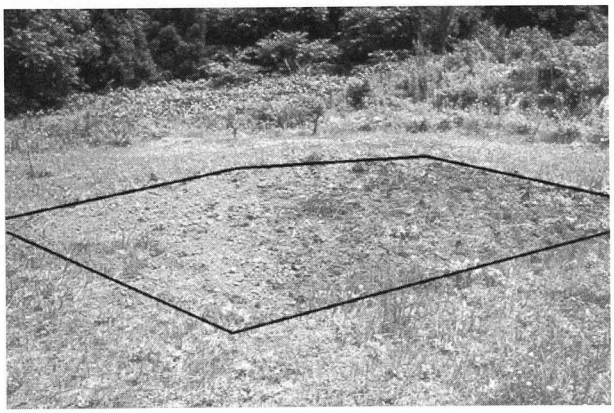
第2号住居跡埋め戻し状況



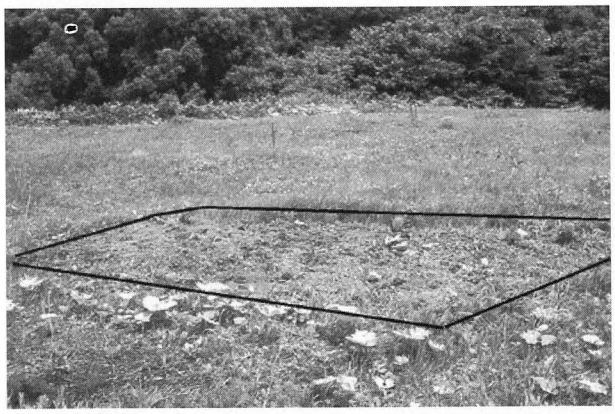
第70・82号住居跡等埋め戻し状況



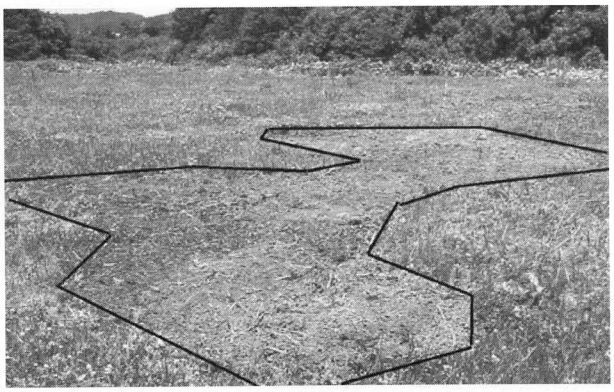
第21号住居跡埋め戻し状況



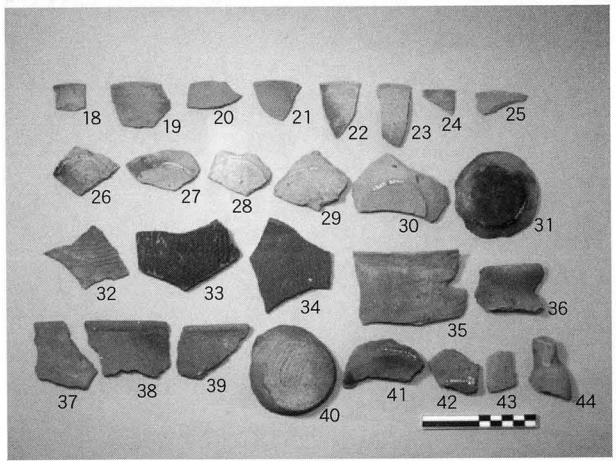
第53号住居跡埋め戻し状況



第50号住居跡埋め戻し状況



第76号住居跡等埋め戻し状況



出土遺物　外面

同左　内面

Ⅴ　平成16年度浪岡町文化財パトロール概報

1） 調査経過

今年度の文化財パトロールは、埋蔵文化財包蔵地29遺跡を対象とし、下記の日程と体制で実施した。

調査の原因	青森県文化財パトロール事業
調査月日	6回　8月2日・23日、9月16日・27日、10月4日・5日
調査員	青森県文化財保護指導員　成田昭美
調査事務担当部局	浪岡町教育委員会
	教育長　成田清一
	生涯学習課長　常田典昭
	課長補佐　鎌田廣
	文化班長　工藤清泰（平成16年6月30日迄）
	文化班主任主査　田澤哲郎（文化財パトロール事務担当）
	文化班主任主査　木村浩一
	臨時発掘調査員　竹ケ原亜希
	臨時発掘調査補助員　斎藤とも子
調査対象遺跡等（位置図参照）	下記29件。パトロール中に得られた遺物については、浪岡町中世の館で保管している。付図に調査遺跡を表記するにあたり、仮番号をつけて整理している。

2） パトロールを行った遺跡（カッコ内は遺跡番号）

①熊沢溜池遺跡（29009）

熊沢溜池に半島状に突き出たところに位置する。現在果樹園として利用され、このまま維持されるものと思われる。土師器片2点、江戸時代の肥前系陶器片1点を表採した。

②永原遺跡（29010）

熊沢溜池土手に沿った県道浪岡・原子線西側の丘陵地に位置する。神社を中心として宅地・果樹園として利用されている。現状は維持されるものと思われる。土師器片2点を表採した。

③上野遺跡（29011）

樽沢宝溜池西側の丘陵地に位置する。宅地・果樹園・野菜畑として利用されている。現状は維持されるものと思われる。土師器片4点、縄文土器片1点を表採した。

④神明宮遺跡（29012）

神社を囲む一帯。宅地・果樹園として利用されている。現状は維持されるものと思われる。縄文土器片2点を表採した。

⑤山神宮遺跡（29013）

樽沢山神社付近から西側に広がる傾斜面に位置する。現状は維持されるものと思われる。土師器片18点を表採した。

⑥長溜池遺跡（29014）

国立青森病院（元の国立いわき病院）を中心とした一帯。長溜池の東西に広がる緩斜面に位置する。宅地・果樹園・墓地として利用されているが、近隣接地域において近年宅地化が進んでいるため、埋蔵文化財の周知を図ると共に、監視を続けていきたい。縄文時代の円筒土器片20点、剥片石器1点、須恵器片1点、土師器片6点を表採した。

⑦**銀館遺跡**（29051）

別名「尾林館」・「杉銀館」とも言われており、銀集落北側の丘陵地に位置する。果樹園・野菜畑・墓地として利用されている。現状は維持されるものと思われる。土師器片・須恵器片・18世紀の伊万里焼片1点を表採した。

⑧**樽沢上野遺跡**（29070）

南西向きのなだらかな低平丘陵地に広がる。果樹園・畑地として利用され、現状は維持されるものと思われる。畑より土師器片10点を表採した。

⑨**郷山前村元遺跡**（29071）

郷山前集落の南側の低平丘陵地に位置し、果樹園・野菜畑として利用されている。現状は維持されるものと思われる。土師器片14点、須恵器片4点を表採した。

⑩**下石川平野遺跡**（29072）

三太溜池の西側に位置する。果樹園として利用され、現状は維持されるものと思われる。

⑪**大沼遺跡**（29016）

旧国道7号線の西側に位置し、十川を挟んだ一帯。田畑として利用される。遺跡の近くに国道7号バイパスが開通したため、今後様々な開発が予想される。埋蔵文化財の周知徹底を図るとともに、監視を強めていきたい。土師器片3点を表採した。

⑫**山元（1）遺跡**（29054）

高屋敷館遺跡に隣接し、国道７号バイパスの南側に広がる一帯。果樹園・雑木林・野菜畑として利用されている。国道７号バイパス開通に伴い周辺の開発が進む可能性があるため、監視を強めたい。

⑬**杉沢山元（4）遺跡**（29064）

山元（3）遺跡の北側に位置し、国道７号バイパスと並行する丘陵地に位置する。果樹園・雑木林・野菜畑として利用されている。国道７号バイパス開通に伴い、周辺の開発が進む可能性があるため、監視を強めたい。

⑭**山元（3）遺跡**（29056）

国道７号バイパス北側の丘陵地に広がる一帯。果樹園・宅地・休耕地として利用されている。バイパス開通に伴い、周辺の開発が進む可能性があるため、監視を強めたい。

⑮**板橋野山遺跡**（29067）

南西向きの丘陵地に位置し、果樹園・野菜畑として利用されている。現状は維持されるものと思われる。須恵器片3点を表採した。

⑯**羽黒平（1）遺跡**（29017）

縄文、平安時代の集落遺跡として知られ、宅地・果樹園・畑地として利用されている。青森空港に至る空港アクセス道に沿って開発が予想されるため、監視を続けていきたい。土師器片9点を表採した。

⑰**羽黒平（3）遺跡**（29019）

美人川伝説のある羽黒神社を中心とする。平成6～7年に発掘調査が行われた後に、美人川公園として整備された一帯も含む。宅地・果樹園・田として利用されている。現状は維持されるものと思われる。

⑱**加茂神社遺跡**（29021）

史跡浪岡城跡・岡本遺跡に隣接し、加茂神社を中心とした一帯。宅地・畑地として利用されている。現状は維持されるものと思われる。畑地から土師器片11点を表採した。

⑲**松山寺遺跡**（29025）

浪岡川右岸の河岸段丘上、松山遺跡の西側に隣接する。宅地・果樹園として利用されている。現状は維持されるものと思われる。

⑳**松山遺跡**（29026）

松山寺遺跡の東側に隣接する。宅地・果樹園・畑として利用され、現状は維持されるものと思われる。畑地から縄文時代後期の土器片数点・突起1点を表採した。

㉑**平野遺跡**（29057）

空港アクセス道路を挟み、松山寺遺跡の北側の丘陵地に位置する。果樹園・野菜畑として利用されている。現状は維持されるものと思われる。

㉒**浪岡崎（１）遺跡**（29023）

正平津川左岸の河岸段丘上に位置し、遺跡の中に金光上人墓や廣峰神社が所在する。現状は維持されるものと思われる。

㉓**浪岡崎（２）遺跡**（29024）

浪岡崎（１）遺跡の東側に隣接し、宅地・果樹園・畑として利用されている。現状は維持されるものと思われる。

㉔**源常平遺跡**（29027）

史跡浪岡城跡新館地区の南側に位置する。古くから城館があったとされている場所で、現在も空壕を確認することができる。現在は果樹園・畑地として利用され、現状は維持されるものと思われる。土師器片11点、須恵器片2点、16世紀の中国白磁片、江戸時代の伊万里片1点を表採した。

㉕**天狗平遺跡**（29028）

縄文時代中・後期の遺跡として登録されている標高174mの天狗平山の頂上に位置する。伝説では長慶天皇陵墓とされ、大正時代には短刀、縄文時代後期の石棺墓、小壷、土器が出土したと報告されている。現在は山頂の雑木林の中に石棺墓と思われる跡が確認できる。現状は維持されるものと思われる。

㉖**春日社遺跡**（29035）

天狗平山の麓、正平津川右岸の河岸段丘上に位置する。現在、遺跡内に春日社の小祠が祀られている。果樹園として利用され、現状は維持されるものと思われる。

㉗**杉ノ沢遺跡**（29038）

今年度、農道新設に際し調査が行われた吉内遺跡の東側に隣接し、東北自動車道高架下周辺の丘陵地に広がる。果樹園として利用され、現状は維持されるものと思われる。縄文時代中期の土器片1点を表採した。（吉内遺跡の調査の折に、地権者から縄文時代後期前半の土器片を含む古代の土師器を主体とする資料を寄贈いただいた）

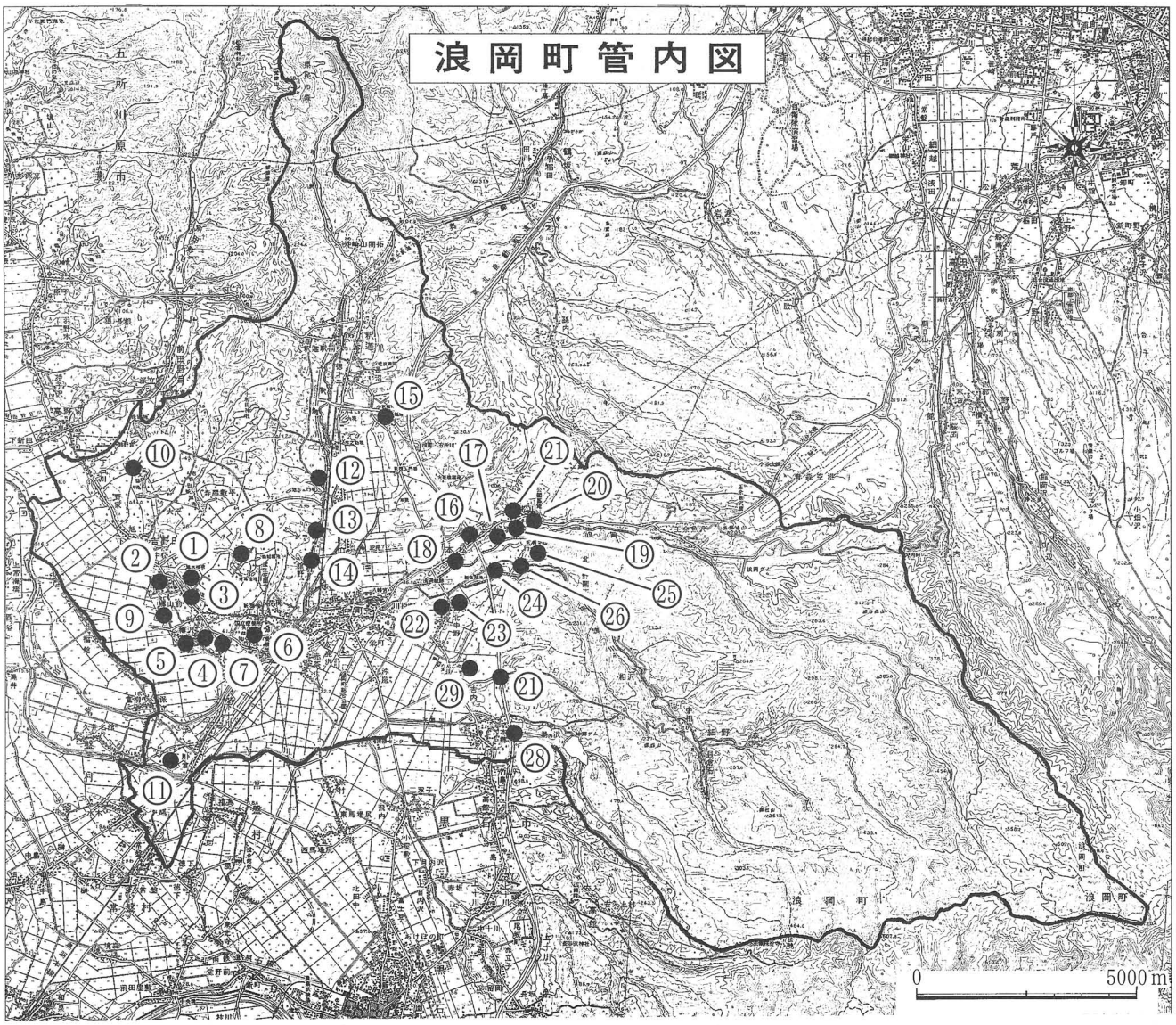
㉘**松元遺跡**（29044）

東北自動車道を挟み、東西に広がる一帯。果樹園として利用されている。現状は維持されるものと思われる。

㉙**北畠館遺跡**（29052）

神社周辺に位置し、果樹園・野菜畑として利用されている。現状は維持されるものと思われる。

浪岡町文化財パトロール対象遺跡位置図



Ⅵ　浪岡町指定文化財／浪岡町埋蔵文化財
緊急発掘調査報告書一覧

1）今年度指定文化財の登録を受けた文化財

①　浪岡八幡宮再興棟札、浪岡八幡宮茸替鳥居新造棟札、浪岡八幡宮新造棟札

この3枚の棟札は、江戸時代前期に製作されたものである。その中でも、浪岡八幡宮再興棟札が浪岡町町内では最も古く、慶長19年（1614）と記されている。

この棟札の大きな特徴は、全面に黒漆が塗られ、文字を陰刻し、白い粉によってはっきりと浮き出させていることにある。この点で一般的な白木に墨書のものとは大きく違っている。

このような棟札は、全国でも山口県須佐町・松崎八幡宮の寛文5年（1665）と元禄5年（1692）の二例の他は、殆どみられない。

慶長19年に行われた浪岡八幡宮の再興事業は「奉再興大檀那津軽大主藤原朝臣信牧建」とあることから、弘前藩が全面的に再興費用を出した工事であることがうかがえる。また、再興に携わった大工「藤原新九郎」鍛冶「平田道貞吉房」の両名は、慶長18年に弘前市・熊野奥照神社本殿（国指定文化財）を建立した、当時最高の大工・鍛冶であった。

浪岡八幡宮茸替鳥居新造棟札、浪岡八幡宮新造棟札は浪岡八幡宮再興棟札と同様尖頭五角形のヒバ材を用いているが、墨書で記される点が異なる。

これらの棟札は、江戸時代前期における浪岡八幡宮の改修の有り様や、神社が村や弘前藩全体でどのような位置にあったかを知る上で、貴重な資料といえる。

②　細野雪田家文書

細野地区の雪田家は、江戸時代に相沢・細野村の庄屋を、明治期には引き続いて戸長役場を勤めた家柄である。雪田家に代々伝わる様々な文書をまとめて「細野雪田家文書」と称する。

文書の概要は『浪岡町史　別巻Ⅱ』に掲載されているが、今回指定に際し文書各々について再度整理・分類を行ったところ、貞享4年（1687）の年号が見られる検地水帳の写し（天保13年／1842作成）等が確認された。

この文書を含め、「細野雪田家文書」を825件とする。

写しを除くと、文書には正徳3年（1713）から昭和18年（1943）までの年号が見られ、江戸期の文書では天明年間から幕末にかけてのものが多い。内容は田畑、仕立山（したてやま）・抱山（かかえやま）に関するものが大部分を占めるが、その他にいくつか「切支丹改帳」「宗門人別帳」があり、天明年間から幕末にかけての村内の様子を知る上で貴重な資料となっている。

特に天明3年（1783）の「浪岡組相沢細野村切支丹改帳」は、天明の飢饉直前における村内の家々の人数を知ることができる文書であるが、寛政3年（1791）の「相沢細野両村絵図」に記載されている「明屋敷」と比較することにより飢饉の被害の実態を明らかにできるものである。明治期の文書には、田畑・山林に関するもの、明治初期の竹鼻村との山論に関するものなどが含まれる。

細野雪田家文書は、江戸時代中期から近代に至る浪岡町の林業・農業及び相沢・細野村の有り様を知る上で、極めて重要な資料である。

③　工芸技術(本郷凧製作技術保持者　津川武七)

本郷凧は、旧五郷村大字本郷（現在の浪岡町本郷）の大工、津川夛平氏（明治11年～昭和31年）によって創作された凧絵及び凧製作技術であり、だるま凧・金鵄勲章凧が有名である。

明治26年頃、旧五郷村本郷在住の日本画家鎌田喜徳氏が津川氏に凧づくりを勧め、凧絵となるだるまの図

案を与えたという。製作当初は夛平氏の親戚である津川松五郎氏がだるま絵を描き、夛平氏が骨づくりと骨組み作業を担当するというように、共同して凧を製作していた。その後、夛平氏は独自に凧の素材や絵の具の濃淡、骨の強弱、糸の太さ、凧の尻尾の長さ、重さといった製作方法や技術に関する研究を積み重ね、現在あるような独特の本郷だるま凧を完成するに至った。大正末期から昭和初期にかけてだるま凧と共に人気を博した金鵄勲章凧も、夛平氏の手により完成された。

２代目となる津川武七氏は、夛平氏の末子で大正12年生まれである。父の指導を受け戦後技術を継承した氏は、だるま絵・金鵄勲章絵を描くことから骨づくり、骨組み、紙張り、完成に至るまで一貫した凧作りを行っている。

現在武七氏は「津軽本郷たこ屋」の号を称し、浪岡町を代表する伝統工芸技術保持者として広く認知されるところである。氏の製作する本郷凧は広く町民に親しまれるとともに、伝統凧として町内はもとより南津軽郡一円、県内外の高い評価を得ている。

参　考　文　献

『青森県の諸職　―青森県諸職民俗調査報告書―　』青森県教育委員会　平成2年刊
『浪岡町史　別巻Ⅰ』　浪岡町　平成14年刊
『浪岡町史　別巻Ⅱ』　浪岡町　平成15年刊

２）浪岡町指定文化財一覧

浪岡町所在　指定文化財一覧（平成17年1月現在）

①　国指定文化財

番号	種別	名　称	員数	指定年月日	所　在　地	所有者・管理者	備　考	管理状況
1	史跡	浪岡城跡	1	昭和15年2月10日 追加：平成元年3月7日	浪岡町大字浪岡字五所・大字浪岡字林本・大字五本松字松本	浪岡町	指定面積 136,300㎡	一部史跡公園として供用
2	史跡	高屋敷館遺跡	1	平成13年1月29日	浪岡町大字高屋敷館字野尻	浪岡町	指定面積 29,762.72㎡	指定地は公有化済

②　県指定文化財

番号	種　別	名　称	員数	指定年月日	所　在　地	所有者・管理者	備　考	管理状況
1	考古資料	亀ヶ岡式壷形彩色土器	1	昭和31年5月14日	浪岡町大字浪岡字細田197－2	平野　良一		青森県立郷土館にて展示中
2	考古資料	亀ヶ岡式壷形羽状縄文土器	1	昭和31年5月14日	浪岡町大字浪岡字細田197－2	平野　良一		
3	考古資料	亀ヶ岡式浅鉢形台付土器	1	昭和31年5月14日	浪岡町大字浪岡字細田197－2	平野　良一		

4	無形民俗文化財	吉野田獅子（鹿）踊	1	昭和36年1月14日	浪岡町大字吉野田	吉野田獅子踊保存会		
5	彫刻	円空作木造観音菩薩坐像	1	平成2年8月3日	浪岡町大字北中野字天王21－2	西光院	昭和61年10月27日町指定文化財	
6	彫刻	円空作木造観音菩薩坐像	1	平成9年5月14日	浪岡町大字大釈迦字山田199－3	元光寺	平成5年4月27日町指定文化財	
7	建造物	旧坪田家住宅	1	平成14年11月18日	浪岡町大字浪岡字岡田43	浪岡町	平成6年12月8日町指定文化財	中世の館で管理

③　町指定文化財

番号	種　別	名　　称	員数	指定年月日	所　在　地	所有者・管理者	備　　考	管理状況
1	天然記念物	源常林の銀杏	1	昭和55年4月28日	浪岡町大字北中野字沢田107	浪岡町	高さ 20.5m 幹囲 6.47m	
2	史跡	伝北畠氏墓所（一）、（二）	2	昭和55年4月28日	浪岡町大字 ①北中野字五倫75の２ ②北中野字村元153の４	浪岡町教育委員会	指定面積 ①230.24㎡ ②330㎡	
3	考古資料	土偶	1	昭和55年4月28日	浪岡町大字浪岡字林本123	阿部　幡彦	高さ8.5㎝	中世の館で展示中
4	考古資料	波状文四耳壷	1	昭和58年11月21日	浪岡町大字北中野字下嶋田2-3	古村　　浩	高さ24.2㎝	
5	絵画	石器土器図絵六曲屏風	1双	昭和58年11月21日	浪岡町大字浪岡字林本123	阿部　幡彦		中世の館で展示中
6	絵画	石器図絵屏風 土器図絵屏風	各半双	昭和58年11月21日	浪岡町大字吉野田字樋田61の１	木村　徳栄		
7	天然記念	楊子杉	1	平成10年8月7日	浪岡町大字五本松字羽黒平１	加茂神社	高さ30m 幹囲4.64m	
8	史料	浪岡八幡宮再興棟札	1	平成16年12月21日	浪岡町大字浪岡字林本123	浪岡八幡宮	全面に黒漆を塗布した尖頭型五角形のヒバ材慶長十九（1614)年六月上旬吉日 長さ125.0㎝ 幅21.0㎝ 厚さ2.3㎝	

9	史料	浪岡八幡宮茸替鳥居新造棟札	1	平成16年12月21日	浪岡町大字浪岡字林本123	浪岡八幡宮	尖頭型五角形のヒバ材に墨書寛永十五（1638）年九月二十七日長さ124.8cm幅20.9cm厚さ2.0cm	
10	史料	浪岡八幡宮新造棟札	1	平成16年12月21日	浪岡町大字浪岡字林本123	浪岡八幡宮	尖頭型五角形のヒバ材に墨書寛文六(1666)年九月上旬吉祥日長さ137.8cm幅17.0cm厚さ1.9cm	
11	古文書	細野雪田家文書	1	平成16年12月21日	浪岡町大字細野字沢井23－1	雪田　良一	825件	自宅にて保管
12	工芸技術(本郷凧製作技術保持者)	津川　武七	1	平成16年12月21日	浪岡町大字吉内字山下212－4			技術保持者の自宅にて製作

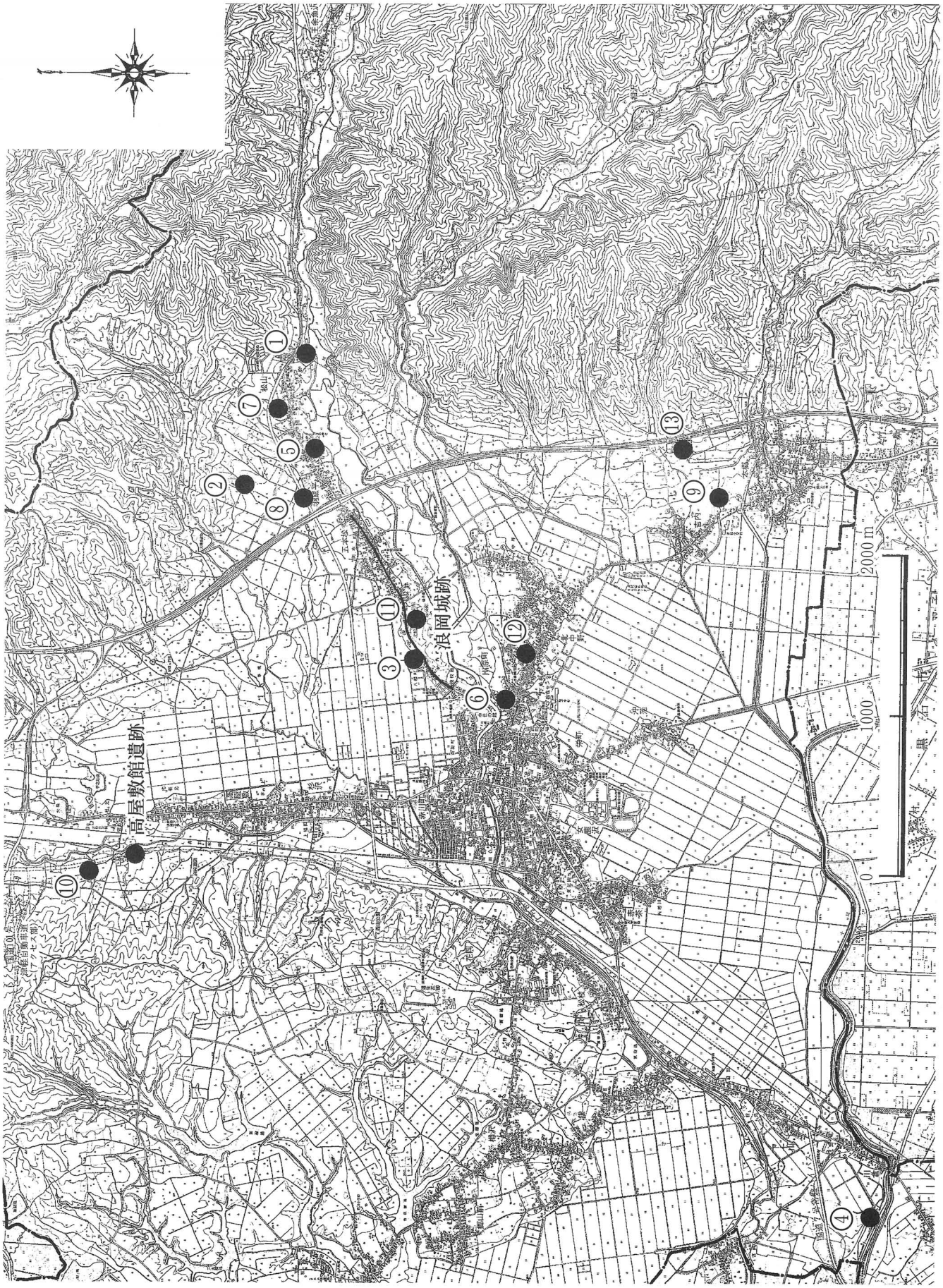
3）史跡調査及び環境整備に関わる報告書一覧（付図参照）

書　　名	発行年	所　　収
浪岡城跡	1979	
浪岡城跡Ⅱ	1980	
浪岡城跡Ⅲ	1981	
浪岡城跡Ⅳ	1982	
浪岡城跡Ⅴ	1983	
浪岡城跡Ⅵ	1984	
浪岡城跡Ⅶ	1985	
浪岡城跡Ⅷ	1986	
浪岡城跡Ⅸ	1988	
浪岡城跡Ⅹ―内館調査の成果とまとめNo.1―	1989	
史跡浪岡城跡環境整備報告書Ⅰ	1989	
史跡浪岡城跡環境整備報告書Ⅱ	1991	
平成12年度浪岡城跡（新館地区）発掘調査報告書ⅩⅠ	2001	『紀要Ⅰ』
平成13年度浪岡城跡（新館地区）発掘調査報告書ⅩⅡ	2002	『紀要Ⅱ』
平成14年度浪岡城跡（新館地区）発掘調査報告書ⅩⅢ	2003	『紀要Ⅲ』
国史跡高屋敷館遺跡環境整備に係る発掘調査報告書	2005	『紀要Ⅴ』

4）浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書一覧（付図参照）

No.	書　　名		発行年	所　　収
①	第１集	松山遺跡	1980	
②	第２集	羽黒平(Ⅰ)遺跡　五本松地区樹園地農道整備事業に係わる緊急発掘調査	1981	
③	第３集	浪岡城跡－主要地方道青森浪岡線特殊改良一種工事に伴う発掘調査－	1986	
④	第４集	大沼遺跡発掘調査報告書－平安時代の低湿地遺跡の調査－	1990	
⑤	第５集	羽黒平（３）遺跡発掘調査［試掘］調査報告書	1995	
⑥	第６集	川原館遺跡試掘調査報告書	2002	『紀要Ⅱ』
⑦	第７集	平野遺跡発掘調査報告書	2002	『紀要Ⅱ』
⑧	第８集	羽黒平（１）遺跡発掘・試掘・立会い調査報告書	2003	『紀要Ⅲ』
⑨	第９集	中屋敷遺跡発掘調査報告書	2003	『紀要Ⅲ』
⑩	第10集	野尻（４）遺跡 大釈迦工業団地開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2004	
⑪	第11集	浪岡町上下水道工事に伴う発掘・立会い調査報告書 （浪岡城遺跡・岡本遺跡・羽黒平（１）遺跡）	2004	『紀要Ⅳ』
⑫	第12集	浪岡町北中野上下水道工事に伴う立ち会い調査報告書	2005	『紀要Ⅴ』
⑥	第13集	川原館遺跡発掘調査報告書	2005	『紀要Ⅴ』
⑬	第14集	吉内遺跡発掘調査報告書 ―県営本郷地区ふるさと農道緊急整備に係る緊急発掘調査－	2005	『紀要Ⅴ』

町内遺跡　発掘調査報告書刊行遺跡位置図



訂正のお願い

『平成15年度浪岡町文化財紀要Ⅳ』の中で、下記の部分を訂正ください。

訂正頁・箇所	行数・項目	誤	訂正内容
30頁・土層注記	Pit11・Pit12	Pit11・：Pit12	Pit11・Pit12
49頁・岡本遺跡出土の天目茶碗と五本松村、大豆坂通りについて	12行	色替り	色変わり

平成16年度
浪岡町文化財紀要Ⅴ

発行日　平成17年3月31日
編　集　浪岡町教育委員会生涯学習課
発　行　浪岡町教育委員会
〒038-1311
青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稲村101-1
ＴＥＬ　0172-62-3004
ＦＡＸ　0172-62-8166
印　刷　(有)アート企画
〒030-0901
青森県青森市港町2丁目10-1
ＴＥＬ　017-741-1631
ＦＡＸ　017-741-1213